サドルソア：
クリスチャン・カウガール・スパンキング・ノヴェラ
（およびその他の短編小説）

著：ユー・メイ

序文 **4**
サドルソア **7**
第I章：カウガールの尻叩き 7
第II章：カウガールの秘密 29
第III章：ジェイミ、再び乗る 50
第IV章：痛みを分かち合って 94
第V章：有罪の証拠 126
第VI章：生涯最高のお尻叩き 167
クリムゾンとクローバーとヴァイオレット **188**
サマー、イン・オータム **214**
第I章：薪小屋でのお尻叩き 214
第II章：就寝前のお尻叩き 257
ベニ・バッククック：ウィロー・クリークを行く、パドルなしで **280**
第I章：砂漠の花 280
第II章：現行犯逮捕 288
第III章：態度修飾語 294
第IV章：タッグチーム・ペアレンティング 319
第V章：告白と赦し 332
ビーカ・ザ・ブラット：お尻叩きの主 **338**
プロローグ：あの場所へ、そしてまた膝の上へ 338
第I章：お尻叩きの仲間たち 341
第II章：二つのお尻叩き 357
第III章：お尻叩き王の帰還 376
いたずらで意地悪なナンシー **387**
大切なものを追いかけて **398**
リリーの学んだ教訓 **408**
フラッパーをぶっ叩く **416**

第I章 : 敬意の教訓	416
第II章 : 慎みの教訓	420
第III章 : 従順の教訓	423
サドルソア : 兄弟姉妹の対決	**437**
第I章 : 姉としての責務	437
第II章 : 私たちの仲直りシャツ	475
お尻が熱くなる春休み	**497**

序文

「……作家というのは、自分のお尻を世界に晒すようなものだ。」
——『FAIRY TAIL』真島ヒロ

これはフィクション作品ですが、著者の実体験から着想を得ています。本書は、劇的かつ物語的な目的のために、複数の体罰のシークエンスを描いています。そこには、親が子供への罰としてお尻叩きを用いる描写も含まれます。このテーマに敏感な方は、読む前にご注意いただくことをお勧めします。本書で表明された言葉や描かれた行動は、著者による是認として解釈されるべきではありません。

私がスパンキング小説の作者になったのは、ほとんど偶然のことでした。

2023年、私はChatGPTなどのAI言語学習モデルを使った実験を始めました。自分の空想や経験に基づいたスパンキング物語を書かせることができるかどうか、興味が湧いたからです。すぐに、AIチャットボットが書くスパンキングシーンは（たとえ書いてくれたとしても）私の想像には及ばないことに気づきました。私はこれらの物語を編集し、自分好みに変え始めました。大抵はスパンキングシーンを拡張することで。

2024年頃、私は自分のAI利用が創造的な松葉杖になりつつあると徐々に結論づけ、スパンキング物語をゼロから自分一人で書き始めました。振り返ると、その経験は作家とし

ての自分の能力に対する自信を深めるのに役立ち、独自の語りの声を見つけることを後押ししてくれました。

完全な開示のために、この巻に収録されている一部の物語は、2023年の古いAIチャットログに端を発していることを認めておくべきでしょう。これらの下書きを再訪した際、私はそれらを編集・改訂し、物語り手としての現在の基準に引き上げるために多大な努力を払いました。要するに、このコレクションは駆け出しの作家としての私の旅路を反映しています。

これらはおそらく私の最も個人的な物語です。その内容においても、書いている間に学んだことにおいても。最初の『サドルソア』の中編小説は、もともと独立した短編小説としてインターネット上で執筆・公開されました。第一章に対して非常に好意的なフィードバックを得たため、私はジェイミ・シュミットというキャラクターを再訪しようと決意しました。そして嬉しいことに、ジェイミが自分自身の物語を語り始めたのです。

この本にはまた、いくつかのボーナス短編小説も収録されています。これらは中編小説の中心プロットに直接関連してはいませんが、全体的なテーマ、すなわちアメリカの田舎のお尻叩きが行われる家庭で育つということに関連しています。

クリーゲ博士は、これらのボーナス短編の一つを私と共著し、さらに『サドルソア』のキャラクターに触発された自身の短編小説を独自に書いたという功績を持っています。彼の許可を得て、その両方の物語がこのコレクションに収録されています。

私はAdam-12に感謝の念を負っています。彼は第IV章の執筆を依頼することで、私に『サドルソア』を書き続けるよう励ましてくれました。

また、このアンソロジーにアートやフィクションを寄稿し、書き続けるよう励ましてくれたすべての人々に感謝したいと思います。そして最後に、スパンク・ユー・フォー・リーディング！

—ユー・メイ

サドルソア

第I章:カウガールの尻叩き

著:ユー・メイ

ママの頼れる木べらが、十六歳のジェイミ・シュミットのほこりまみれのデニムジーンズの尻の上で炸裂するたびに、放蕩娘の耳には、分厚く響き渡る雷鳴のような音が部屋中にこだますのが聞こえた。

ジェイミの薄茶色の髪は、彼女が顔を勢いよく上げるたびに波打ち、その視界の端には揺れる桃の木の枝と、窓から差し込む夜明けの光が一瞬捉えられた。

両脚をママの右膝の両側に垂らしたまま、ジェイミはママの顔もスプーンの姿も見ることができなかった。時折、視野の端で何かが素早く動く気配を感じ取れる程度で、それ以外は、背後で繰り広げられている光景についてのジェイミの印象は、聴覚……そして触覚に限られていた。

「朝ごはんにもなってないのに！ どうしてこんなふうに夏休みを始めることになったんだ？ 神様はなんでこんなことをするんだ？」

二度目のべらの一撃が、ジェイミの神義論に関する個人的な疑問をかき消すには十分だった。

「わかったよ、神様。わかった。俺がしくじったってのはわかってる。」

べらからのさらに二発の固い打撃、両方の尻の半分にそれぞれ一発ずつは、ジェイミに、なぜ教会の友達たちが皆、特に素っ裸のお尻を叩かれることをそんなに怖がるのか疑問に思わせるには十分だった。ジェイミは十六年間というキャリアの間、ロデオの練習と称してママとパパの膝の上を定期的に往復してきて、ありとあらゆる道具で、ありとあらゆる服装の状態で、ありとあらゆる組み合わせで、叩かれるべきお尻叩きをすべて経験してきたと、自分ではかなり確信していた。

「確かに、素っ裸のお尻じゃ保護は少ないけど、親もそれを知らないと思う？ ジーンズを履いてるときは、親からすれば『狩猟解禁』ってわけで……」

さらなる一撃、再びむなしくひねるジェイミの腰。ジーンズのデニムが割れ目に食い込むにつれ、ジェイミは自分のお尻の上で、顔を赤らめた小さな漫画のキャラクターが「出してくれ！ 出してくれ！」と泣き叫んでいる姿を完璧に想像できた。

スタッカートのリズムで素早く三発、続けて爆竹の炸裂のようなスタイルで二発、その後一呼吸の間があり、ジェイミは息を整え、自分の状況を考えることができた。

外では、地元のワビトバトが納屋の上でクークーと鳴いており、まるでジェイミの苦しみを悼んでいるかのようだった。

ジェイミは唇を噛んだ。「レコードのスクラッチ音！ そう、それが私です。あなたはおそらく、どうして私がこんな状況に陥ったのか疑問に思っているでしょうね！」

べらがそっと両方の下側の頬をこする感触を感じながら、ジェイミはママの厳しい声を聞いた。「ジェイミ・イラリオ・シュミット、あなたがこの屋根の下に住んでいる限り、主の御名をみだりに唱えてはなりません。いいですね？」

髪を目からかき上げながら、ジェイミの舌は考えるより先に動いた。「『ギャッ』って言っただけだよ。あれが『みだりに唱える』に入るとは思わなかった。」

ジェイミは自分の言葉に込められた皮肉な調子を聞いて、顔をしかめた。

そしてジェイミは、べらが自分の尻を噛む感触を感じて、再び顔をしかめた。

「ジェイミ、これは討論じゃありません。私がイエスかノーかの質問をしたときには、『はい、ママ』か『いいえ、ママ』のどちらかを聞くものと期待しています。いいですね？」

「はい、ママ！」ジェイミは両手をピカピカのキッチン床についた。ママが説教モードのときは、たいていお尻叩きを一時中断して自分の主張を伝えるのだった。ジェイミはそれを忘れた自分を呪いたくなったが、シュミット家では悪態はお尻叩きの対象になるので、それはできなかった。

ジェイミはママがべらで自分のズボンの尻の部分に小さな円を描くのを感じた。アーミッシュ製のアンティークは、デニムに擦れて優しい擦れる音を立てながら、八の字を描き、通過するたびにジェイミの両方の尻の半分をわずかに持ち上げた。

「それがいいわ、ジェイミ。そもそも、それは間違いなく『入る』のよ。それは『婉曲的な誓い』と呼ばれるもの。冒涜的な言葉にできるだけ近づけるものなの。あなたはそんな言葉が『入る』とは知らなかったと言ったわね。よく考えなさい。あなたのお父さんと私が第三戒について何を教えたか覚えている？」

ジェイミはべらの優しい感触に奇妙なほど安らぎを感じた。「えっと……はい、ママ。そう思います、ママ。」

「出エジプト記20章7節を唱えられる？」

ジェイミは激しくうなずいた。突然、日曜学校モードに戻り、喜ばせたい気持ちでいっぱいだった。「はい、ママ！『あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、その名をみだりに唱える者を、罰しないでは置かれない。』」

「そして第三戒は私たちに何を教えているの？」

「はい！ 子供のカテキズムの通りです！」

自分のお尻が宙に浮いていることが脳への血流を改善しているのではないかと考えながら、ジェイミは見事に暗唱した。「第三戒は、神の御名、御言葉、御業を敬うことを教えています。」

ジェイミの心は誇りで膨らみ始めたが、すぐに自分の恥ずかしい姿勢を思い出した。レッドフィールド第一改革派バプテスト教会の子供で、一度もお尻を叩かれたことがないと

正直に言える者はいなかった。十代の少女たちの間でさえ、もちろん男子がいないときに、日曜学校の討論で最近のお尻叩きの話をくすくす笑いながら交わすのが普通だった。聖書は明らかに、信仰深い親は子供をお尻叩きにしなければならないと教えている……それを隠すことに何の意味があるだろうか？

しかしジェイミは、第一改革派バプテスト教会のいたずら娘たち全員を合わせても、自分ほど頻繁にお尻叩きをされているわけではないのではないか、という密かな疑念を抱いていた。ジェイミがその結論に至ったのは、他の十代の子たちが、ジェイミには毎週必ず新しいお尻叩きの話が少なくとも一つはあることに気づいたときで、そのことに彼女は懊悩した。

ジョン・シュミットとメアリー・シュミットが特に厳しかったり、ジェイミを喜んでお尻叩きにしたりするわけではなかった。実際、彼女が他の女の子たちの叱責の話を聞くといくつかは、ジェイミには自分がむしろ甘やかされていると感じさせるものもあった！

ただ、ジェイミの両親はお尻叩きを最後の手段ではなく最初の手段と見なしていた。「予防の一オンスは治療の一ポンドに値する」というわけだ。

ジェイミのパパとママは、七人の子供たちに、後でより厳しい罰を与えずに済むようにという願いを込めて、お菓子よりも頻繁にちょっとしたお尻叩きを授けていた。

ジェイミの兄と姉にとって、この方法は素晴らしい効果を発揮した！

本気のお尻叩きに発展するようなことを言わなければ、シュミット家の子供たちはたいてい、軽いピンク色の跡を少し残す程度で、小さな非行の戒めとして済んでいた。

残念ながら、ひとたび膝の上に乗せられると、ジェイミの頭脳はオフになる傾向があった。彼女はお尻叩きに陥るようなことを言うのが本当に上手で、そのためママは家中や納屋の戦略的な場所に台所道具のラックを掛けて、ジェイミの定期的なメンテナンスお尻叩きを提供するプロセスを迅速化していたのだった。

「そして、その言葉が神の御名、御言葉、御業に対する適切な敬意を示していると思う？」

「いいえ、ママ！」

「では、なぜそんなことを言ったの？」

ジェイミは、この角度からはママに自分の顔が見えないことを幸いに思い、にやりとした。

「一度でいい……一度でいい！ 本物のお尻叩きを免れるようなことを言ってみせるんだ！」

ジェイミは、自分が何をしてこの罰を受けたのかを考えて、頭をフル回転させていた。厩舎の掃除を手伝っているとき、クライズデール種のサー・ハミルトンがジェイミの金茶色の髪をかじった。ジェイミはそれを払いのけながら、つい悪い言葉を叫んでしまっただけだった。

「ただ不意を突かれただけなんだ。ごめんなさい、ママ」とジェイミは、最も甘く、天使のような声で言った。

「わかってるわ、ジェイミ。それは言い訳にはならないけれど、理解はしてる。あと六回、べらで叩くわ。それを戒めとしなさい！」

「はい、ママ！」ジェイミは、ママが握りを調整し、朝の予定への短い中断を終えようと準備するのを感じながらうなずいた。誕生日ごとに一回が、警告射撃のお尻叩きの基準だった。

「あのバカ野郎！ 全部あいつのせいだ！」ジェイミはつい口に出して考えた。

「……今、何て言ったの、ジェイミ？」

ジェイミは突然目を覚ましたかのようになり、口をぽかんと開けた。その考えは頭の中だけではなかったのか？「えっと、サー・ハミルトンのことです！」

「その言い回しはどこで聞いたの？」

「教会の女の子たちからだと思います。」

「まあいいわ、この屋根の下で二度と聞きたくないわね！立ちなさい、ジェイミ！」

ごくりと唾を飲み込み、ジェイミはよろよろと立ち上がった。

「悪い予感！」

気まずそうに、ジェイミは落ち着きなく動くのを防ぐために両手を後ろのポケットに突っ込み、ママを見下ろした。小柄で、ぽっちゃりとした感じの可愛らしいブルネットで、三十代後半の「ママ」ことメアリー・シュミットは、ジェイミを含む七人の子供のうち四人よりも背が低かった。

しかしシュミット夫人は、体格に欠けるところを、英語の使いこなしと、驚くほど引き締まった筋肉で補っていた。その筋肉は、十九年間ほぼ毎日お尻叩きを執行してきたことに少なからず因るものだった。

ドイツ人とスペイン人の農場労働者の子孫として、家族全員がよく食べ、よく働いた。ジェイミは、自分自身の口の利き方や口答えの傾向が、長年にわたってママの運動にどれほど貢献してきたかを考えた。

「ジェイミ、あなたは話す前に考えることを学ばなければなりません。『口と舌を守る者は、その魂を苦難から守る』のです。あなたの場合なら、お尻を苦難から守る、ですね。ジーンズを脱ぎなさい。そして、もう一度私の膝の上に戻りなさい。」

ジェイミは文字通り耳から湯気が出るのを感じた。「でも……教会の他の女の子たちはみんな言ってるし、お尻叩きなんてされてないよ！」

ジェイミはママの力強い鋭い視線を見てたじろいだ。

「なんでだよ、口よ、なんで？ 俺の……お尻がいつお前に何をしたって言うんだ？」

「もし彼女たちがお尻叩きをされていないのなら、されるべきです！ 箴言29章15節を覚えている？」

ジェイミはデニムジーンズの下から微かな熱気が立ち上るのを感じた。首を垂れ、それでもなおママの固い視線から逃れられず、記憶をたどって唱えた。「『むちと戒めとは知恵を与える。しかし……』えっと……」

「『しかし、放任された子は母を恥じさせる』です！ さあ、ジーンズを脱ぎなさい、お嬢さん。脱がなければ、パパのベルトを使いますからね。それはあまり気持ちのいいものじゃないわよ。言い争うつもり？ それとも従うつもり？」

ジェイミの身体は緊張し、両手は後ろのポケットから飛び出し、自分のベルトを外した。「従います、ママ！」

彼女は人生で三回しかパパのベルトで叩かれたことがなかったが、それで一生分だった。自分のベルトがジーンズのループを抜ける音が、彼女の背筋に戦慄を走らせた。ジェイミは、穴を開けた装飾的な花模様で覆われた自分のベルトを丁寧にママの差し出した手のひらに置いた。ジェイミの指がジーンズのボタンをもぞもぞと弄っている間、ママが手元にベルトとべらの両方を持っていることを、彼女は痛いほど自覚していた。

ゆっくりと、ゆっくりと、ジェイミは前のジッパーを下ろした。ゆっくりと、ゆっくりと、ジェイミはほこりまみれのデニムジーンズを下ろし、ピンクのパンティーが現れた。そこには馬に乗った少女のシルエットが描かれ、背面には「ライド・エム、カウガール！」という文字が投げ縄で形作られた文字で刻

まれていた。ジェイミはそれらが自分の割れ目に高く食い込んでいるのを感じ、ママの膝の上でのたうち回ったおかげで、まだ軽い食い込み状態だった。

ジェイミの背後から、豊かなバリトンの声が響いた。「私のベルトの話をしていたのかい？ おやおや！ 俺の小さな花火玉がお咎めか？ 驚かないけどな？ 手を貸そうか、ママ？」

ジェイミの肩が緊張し、鼻先から耳の先まで顔が真っ赤に染まった。ジーンズが足首のあたりにあり、カウガールのパンティーは、そばかすのある筋肉質な尻の下にある薄い日焼けの跡を隠すのに何の役にも立っていなかった。ジェイミは後ろを振り返り、父親に嘆願した。「パパ？ やめて！ お願い！ いい子になるから！」

「おや？ じゃあ、どうして朝ごはん前にもうお尻叩きされてるんだい？」

ジェイミはママの方を見て、自分の弁護の証人として話してくれるよう無言で懇願したが、ママは面白そうにうなずくばかりだった。「さあ、ジェイミ。自分の罪を告白しなさい。」

ジェイミはジーンズを脱ぎ捨て、背筋を伸ばしてパパの方を向き、両手は後ろのママから隠すか、前のパパから隠すかで迷っていた。

妻とは異なり、パパはそびえ立つような体格で、六フィートのジェイミでさえも小さく見えた。ジェイミはパパにとって「小さな花火玉」であったり、「長身の水飲み」であったりした。前者のあだ名は、六歳のジェイミが独立記念日の花火に

触れるなという厳しい指示に従わず、誤って箱ごと一斉に点火してしまったときに付けられた。ジェイミが救出され、火が消された後、彼女の兄弟姉妹全員と、数人の賛同する隣人たちは、ポーチの階段でママとパパが交互に執行する、ジェイミ初めての素っ裸のお尻叩きという形の二度目の花火ショーを目撃するという贅沢を味わった。

その日以来、ジェイミは愛情を込めて「花火玉」というあだ名で呼ばれ、その話は客が来るたび、特に独立記念日の祝賀の際にはお気に入りの話題だった。

ジェイミは、慎ましやかに両手を前に組むことにした。「俺……うっかり主の御名をみだりに唱えかけたんだ、パパ。事故だったんだ！」

パパはうなずき、ジェイミの足首のあたりに垂れたジーンズに目をやりながら眉を上げ、続きを促すように黙って合図した。「それで……お尻叩きの最中に口答えして、口の利き方をしたんだ。でも、従うつもりだよ！ ベルトを使う必要はない！」

パパは微笑んだ。「それはよかった、花火玉。休みの初日に君を叩かなきゃならなくなるのは嫌だったからね。さあ、振り返って、君が始めたことをママに終わらせてもらいなさい！」

安堵に震えながら、ジェイミは従い、ママの膝の上に休めて前かがみの姿勢をとり、パパの親切に心から感謝した。「はい、パパ！」

もしかしたら、もしかしたら、もし完璧に従順だったら……

「ママ、しばらくかかりそうなら、俺が朝飯を作っておくよ。」

ママは実に優しい声で言った。「あら、あなたって本当に素敵ね！ ジェイミ、これを戻してほしいって言うまで持っていなさい！」ジェイミはべらが自分の視界に下りてくるのを見て、従順にそれを受け取った。

「もちろん、べらでの最上級の六発がまだ残ってるけど……」

ママは数回、平手でうつ伏せになった淡い色の臀部を軽く叩き、ジェイミはべらが残した十個の跡から発せられる温かさを感じた。

「ジェイミ、あなたを愛しているってことを知ってほしいの。今はもっと協力的になってくれて嬉しいわ。でも、それでもあなたをお尻叩きにしなければならないの。」

ジェイミはごくりと唾を飲み込み、丁寧に答えた。「はい、ママ。ごめんなさい。自分が悪かったってわかってます。」

「勇敢に、じっとしていなさい。そうすればパパのベルトは免れるから。」

ジェイミはべらを床に置き、それに焦点を合わせてから、目をしっかりと閉じて運命を受け入れた。「ありがとう、ママ！」

ママは時間を無駄にせず、ジェイミの平手によるお尻叩きを、はっきりとした一定の打撃で始めた。七人の子供を抱

えるシュミット夫人は、お尻叩きの際の過剰な説教や余計な儀式を省かざるを得なかった。彼女は罰を迅速に執行することを信条としていた。

木製のドアがバタンと閉まり、一定の平手の音に重なって、ジェイミには長兄ジョセフのテノール声が聞こえた。「パパ？ 厩舎は全部片付いたよ！ ……あ、悪い、ジェイミ！」

姉のジェシカの同情に満ちた、歌うような声が加わった。「まあ、大変！ 頑張って、ジェイミ！」

もちろん、ジョセフとジェシカはどちらも早起きして、ジェイミの厩舎の手伝いに来ていたのだ。そして今ごろ十四歳のジョアンは、鶏の世話に起きている頃だろう。

「おおっ！ ありがとう、ジョセフ！ ありがとう、ジェシカ！ きゃっ！」

「少なくともママはパンティーは履かせてくれてる！」

プライベートでお尻叩きをされることは、シュミット家では権利ではなく特権だった。特権ですらなく、むしろ贅沢であり、ママのスケジュールが許せばの話だった。

ありがたいことに、ママは何年も前に、慎みのため、素っ裸のお尻叩きはプライベートな寝室か薪小屋でのみ行うと決めていた。

花火事件でのジェイミの公の素っ裸のお尻叩きは、このルールができる前に行われ、間接的にその変更の原因と

なった。ジョアンはそれを見て非常に喜び、容赦なくジェイミをからかい、ついにジェイミが切れて喧嘩を始めたのだ。

両方の言い分を聞いた後、ママとパパはジョアンにジェイミをからかうことを禁じ、そして子供たちの素っ裸のお尻を公衆の面前で叩く習慣を静かに廃止した……ただし、ジェイミとジョアンの素っ裸のお尻を叩いた後、二人に「私たちの仲直りシャツ」と書かれた大きなTシャツを一枚、残りの日一日着用するよう命じた上でのことだった。

背後で、ジェイミは乾いた単調な女性の声を聞いた。「痛そうだな、それは。」

「おお、いいところに来た。ジョアンだ！」

「ジェイミは今回何をやったんだ？ それとも世界記録に挑戦してるのか？『夏の間に最も多くお尻叩きを受けた回数』って？」

パパは料理から目を上げなかった。「やめなさい、ジョアン。『からかう女の子は、膝の上に逆さま』だよ。」

ジョアンは敬礼し、自分の席に着いた。「了解、ウィルコ！」

ジェイミは椅子が引きずられる音を聞き、ジョアンがショーをよりよく見えるように席を調整しているのを確信した。

ジョアンは最近、反抗的なゴス／エモ／パンクの段階を経験していた。しかしジェイミとは異なり、ジョアンは素早い「警告射撃」のお尻叩き以上に値するような線を慎重に越えないことを学んでいた。

激しい喧嘩をしてからの数年で、ジェイミとジョアンは実際にはかなり親しくなっていたが、それでもジョアンが朝ごはん前にお尻叩きをされているジェイミを容赦なくからかうのをやめるという意味ではなかった。

一定の平手の音に重なって、ジェイミは背後で柔らかな焼ける音を聞き取ることができた。「ベーコンとソーセージと卵が数分でできるよ、ママ。もうすぐ終わる？ 料理を焼きすぎて出すのは避けたいんだ。」

「心配しないで、あなた。時間はぴったり合わせるわ。火の通りが足りない娘を出すのは避けたいからね。」

ジェイミは閉じた目の裏に涙が溜まるのを感じ、強さを求めて祈った。遅かれ早かれ泣くだろうことはわかっていたが、少なくとも赤ん坊のようにむせかえる必要はなかった。調理の絶え間ないパチパチという音とシューという音が大きくなり、ジェイミは突然、自分がとてもお腹が空いていることに気づき、それは陶酔的ですらあった。彼女は自分のハムも、朝食と一緒にフライパンでこんがりと焼けてシューシューと音を立てている姿を想像せずにはいられなかった。

ジェイミがまさに取り乱そうとしたとき、ママはお尻叩きを止めた。今や部屋はベーコンを焼く音で満たされ、まだ残る余熱を感じながら、ジェイミがその停止に気づくまでには数秒かかった。

「ジェイミ、もうすぐ終わりよ。木べらをちょうだい。」

ジェイミは「はい、ママ」と言おうとしたが、べらを持ち上げながら彼女にできた精一杯は、すすり泣くような叫びで「んんんはい、ままんー！」と聞こえる程度だった。

べらが自分の手から奪われるのをぼんやりと見ながら、ジェイミは床に肘をつき、涙が頬と前腕の皮膚に溜まるのを感じた。

べらが最初の一撃を加えた瞬間、ジェイミの泣かないという決意はバターのように溶けた。

ストーブからの湯気が心地よい香りで部屋を満たし、ジェイミの途切れ途切れのすすり泣きという甘い音楽が添えられた。

ベーコンのフライパンの中の油の泡が鋭い「パン！」という音を立ててはじけた、まさにその瞬間、木べらがジェイミの尻の中心、下側の頬と太ももが接する場所に、六回目にして最後の一撃を加えた。

すべてが完璧に調理されていた！

ママはジェイミを立ち上がらせ、彼女の濡れた頬にそっとキスをした。ジェイミは感謝の気持ちを込めてそのキスを返した。ジーンズを引き上げるためにかがんだジェイミは、それらがなくなっていることに気づき、どこに置いたのか思い出そうともがいた。それらはママが座っていた木製のスツールの近くにきちんと折りたたまれており、ジェシカかジョアンが彼女のために取りに行ってくれたのだろうと思った。

ジェイミが腫れ上がって真っ赤になった臀部を、きつすぎるジーンズに押し込もうとしていると、双子の十一歳のジャックとジルがキッチンに到着し、ちょうどその損傷を一目見るのに間に合った。

ジャックはあくびをこらえたが、その光景で彼はぼんやりした状態から目覚めた。「あくび！　あらら！　ジェイミ、お尻叩きされたんだ……もう？」

ジルは年上の姉のよく焼けた臀部を見て、礼儀正しい興味を持って首をかしげた。「今度は何をやったの、ジェイミ？」

ママは彼らをテーブルに追いやった。「ジュニパーを起こすまで待ちなさい。そのときにジェイミが全部話してくれるから。」ママは六歳のジュニパーをテーブルに連れて行き、ジェイミは弟妹たちの病的な興味を満たすために、その全ての痛ましい話を語った。

パパが朝食を配膳し、ジェイミの額に素早くキスをし、試練に耐えたことを祝福するささやきを彼女の耳に囁いた。

お尻叩きは、ジェイミの許しと回復を知らせるものだった。ジョアンからの少しの友好的なからかいを除けば、兄弟たちはだれも彼女のお尻叩きをからかわなかった。なぜそうする必要があるだろう？　結局、みんなお尻叩きをされるのだから、そうだろう？

***

その夜、ジェイミはベッドに横たわり、デジタル時計を見た。午後九時。彼女は朝の雑用のために遅くとも午前五時には起きていなければならなかった。

彼女を眠れなくさせているのは、お尻叩きからの残る痛みではなかった……正確には。

焼けるような痛みはほんの数分で和らぎ、残る痛みはその日のほとんどを悩ませた。特にベラが下側の頬に跡を残した場所は。その日、サー・ハミルトンに乗るのは地獄だった。しかし就寝時には、鞍の痛みはほぼ完全に治まっていた。

それでも、ジェイミはそのお尻叩きについて考えている自分に気づき、勢いよく毛布を跳ねのけ、暗闇の中で戸棚の中を手探りで何かを探した。

つま先立ちで忍び寄り、ジェイミはママやパパを起こさないように、すべてのドアを慎重に開け閉めした。玄関でモカシンと薄手のジャケットを履き、懐中電灯を使って納屋を通り過ぎ、彼女のお気に入りのプライベートな場所へと向かった。薪小屋だ。

「やっと来た！ ただ、捕まらないでほしい！ ……もし捕まったら何て言われるんだろう？ 悪いことをしているわけじゃないのに……」

しかしジェイミには確信が持てなかった。確かに、両親はこれをするなと言ったことはなかった。しかしどういうわけか、それでも間違っているように感じられた。しかし、間違って

いることの罰がこれなのに、どうして間違っているはずがあろうか？

震えながら、ジェイミは小屋のぶら下がった電球を灯し、温かい白熱灯の光を浴びた。彼女の周りには、手綱、革ベルト、木製のパドル、反抗的な子供を矯正するために使われるあらゆるものが置かれていた。

ジェイミはバッグから隠し持っていた物を取り出した。木製のヘアブラシと、自分のベルトだ。

ジェイミが、自分の家族全体、教会全体、おそらくは世界中で最もお尻叩きをされている少女であることを知っているのには、十分な理由があった。それは、可能な限りのあらゆる機会に、ジェイミが自分自身をお尻叩きにしていたからだ。

何度か捕まりかけたこともあった。双子たちが就寝後にお尻叩きをされているのは誰かとママやパパに尋ね始めてからは、寝室での自慰的なお尻叩きをやめた。パパはついに、双子たちはキツツキか、ゴミ箱のアライグマか、家の側面に当たる枝の音を聞いたに違いないと結論づけた。

その危うい体験の後、ジェイミは同じ過ちを繰り返さないよう注意していた。薪小屋は完璧だった。誰もそこには行かなかった……ただし、それは本当のお尻叩きの時以外は。

ジェイミの全身が震え、彼女は自分の尻を露出させてそれを観察しながら、官能的な戦慄を感じた。彼女は、ママがジェイミにお尻叩きの番が来たと発表して以来、この瞬間を待ち焦がれていたのだ。

ジェイミは両親にお尻叩きをされるのが楽しいというわけではなかった。実際、そのたびに、二度とお尻叩きをされたくないと確信するのだった。しかし、遅かれ早かれ、お尻叩きをされたいという欲求が倍返しで戻ってくるのだった。

そして、自分自身をお尻叩きにするたびに、自分はどこかおかしいに違いないという罪悪感が何日も彼女を苛んだ。

しかし、罪悪感を強く感じれば感じるほど……彼女はお尻叩きを必要とした。

ジェイミはヘアブラシで試しに自分の尻を軽く叩き、それを高く掲げた。

彼女は記憶からその言葉を唱えた。「愚かさは子供の心に結びついている。しかし、懲らしめるむちはこれを遠ざける。」そしてヘアブラシを自分の尻の真ん中にまっすぐに叩きつけ、その感覚を受け入れ、その痺れを味わい、誰かが今まさにこの瞬間に彼女を見つけて、引き継いでくれることをただ願った。

彼女は一定のリズムで何度も何度もヘアブラシを叩きつけながら、「私は悪い子だ」「いい子になるから！」といった言葉を甘やかすように口にした。

「お願い、お尻叩きしないで！」その後に「罰して！ 私はそれに値する！」と続けた。

ヘアブラシを置き、ジェイミは自分のベルトを手に取り、折りたたんだ。手の中でそれをパチンと鳴らすと、その音に彼女は戦慄し、自己鞭打ちのために体勢を整え直した。

「もしかしたら、いつもお尻叩きをされるのはそんなに悪いことじゃないかも！ だって……俺は学ばなきゃいけないんだ！」

ジェイミは、自分がなぜそのように感じるのかを説明する言葉を持っていなかった。

彼女が知っているのは、この瞬間、彼女は完全に幸せだということだけだった。

第I章 終わり

第II章：カウガールの秘密

装飾的ななめし革のベルトが、彼女の素っ裸の尻の半分を噛みしめるように打つと、ジェイミは息を呑み、目を見開いた。自分で加えたお尻叩きの跡を振り返って見ながら、ジェイミは口をとがらせた。「やっぱり違うな……」

自分自身をお尻叩きにする問題は、それをしているのが自分自身だということを決して完全に忘れられないことだった。彼女はいつも最後の瞬間にためらい、満足のいかない一撃を加えるか、さもなければあまりに強く打ちすぎて白日夢から「目覚めて」しまうのだった。

先ほど、ジェイミが素直に膝の上にうつ伏せになっていたとき、ママは何と言っていただろうか。「勇敢に、じっとしていなさい。そうすればパパのベルトは免れるから」

ジェイミの心の片隅では、ママの虚勢を突いてみたいという気持ちがあった。もぞもぞと動き回り、口答えをして、パパのベルトがループを抜ける特徴的な「スニッ、スニッ、スニッ」という音が聞こえてくるまでやってやろう、と。もしかしたらパパは、ジェイミをからかう皮肉な冗談を言いながら、ママにベルトを手渡すかもしれない。「早くしろよ、ママ。少なくとも今日はズボンを上げたままでいたいんでね」 長年にわたり、ジェイミはお尻叩きのジョークのネタにされることに慣れていた。

しかしその一方で、もしパパが自分の「大事な小さな花火玉」がママの権威に逆らっていると思ったなら、同じくらい簡単にジェイミを自分で薪小屋に連れて行くこともできただ

ろう。それはジェイミの人生で三度しか起きたことがなく、どれほど別の「本物の」薪小屋行きを稼ぎたいという誘惑に駆られても、彼女は結局いつも怖気づいてしまうのだった。

ジェイミは、自分のベルトが残した新しく盛り上がったミミズ腫れの跡を指でなぞりながら、顔をしかめた。それは、自分の木製ヘアブラシが残した楕円形のミミズ腫れの跡を引き立てていた。ママの木べらの跡もまだ感じられたが、あまり前かがみにならなければ、もう痛みはなかった。お尻叩きの後、自分の尻がどれほど早く回復するかにはいつも驚かされた。頑丈な木製ラックに予備の鞍が置いてあるのを見つけ、ジェイミに魅力的な新しいアイデアが浮かんだ。

立ったままでも、ベルトを大きく弧を描くように振って背中に叩きつければ、たいていは両方の頬に当てることができた。ヘアブラシはもっと扱いにくかった。神はこの角度でまともなヘアブラシによるお尻叩きができるように腕を設計してはいなかったのだ。しかしジェイミは、数ヶ月前、自分の部屋でこれを試したとき、完璧に自分をお尻叩きにできたことを思い出した。そのときは自分のベッドにうつ伏せになり、腰を枕で支えて、両方の頬に平手打ちを加えた後、ヘアブラシで追い打ちをかけた。その結果、涙が出そうになり、全身、特に臀部に温かく輝くような感覚が広がったのだった。

不運なことに、古い農場の壁は薄すぎることが判明した。ジャックとジルが奇妙な平手打ちの音を聞きつけ、ジェイミは寝室での自分へのお尻叩きを断念せざるを得なくなった。「パパがあれはアライグマのせいだと信じてくれて神に感謝……」ジェイミはつい口に出して考えた。

ジェイミがベルトとヘアブラシを手に取りやすいところに置き、試しに自分の体を鞍の上に横たえてみると、ラックは彼女の体重を容易に支えられた。「ここは快適だ。そして俺の尻は……」彼女は遊び心でそれを軽く叩いた。「……完璧なお尻叩きの体勢だ！」

深く息を吸い込み、ジェイミは周囲のことを頭から追い払い、お尻叩きをされた数え切れないほどの大切な思い出を振り返ろうとした。

七月四日の前にガレージの花火に触れるなという両親の指示に従わず、爆発的な結果を招いた後に受けた、初めての素っ裸のお尻叩きがあった。

それから、ジョアンと取っ組み合いの喧嘩をして稼いだ数え切れないほどのお尻叩きがあった。ママとパパは非常に公平だった。ジェイミが喧嘩を始めたり、エスカレートさせたりしなければ、決して彼女を叩かなかったが、ただ一度、ジェイミが理由なく喧嘩を始めたときには、パパのベルトでの初めての叱責を受け、同じ過ちを繰り返すことはなかった。

もっと最近では、レッドフィールド・クリスチャン高校の一年生の時、純粋な頑固な怠惰から成績を落としたために、パパのベルトを耐え忍んだ。その重大な場面でのママとパパの言葉を、ジェイミは繰り返した。彼らが彼女をこの同じ薪小屋に連れて行くとき、こう言ったのだ。「完璧を求めているわけじゃない。でも、努力は求めている……」

しかし、ジェイミが自分のピンクのカウガールパンティーが優雅に落ちていくのを目にし、パジャマのズボンと一緒に

膝のあたりに溜まっているのを見ると、何か新しいことが彼女の心に押し寄せてきた。

実際には、ジェイミの両親がそんなに厳しく、あるいは残酷に彼女を叩くことは決してなかった。しかし時々、ジェイミは考えずにはいられなかった……もしそうだったら？

彼女が遊び心で足をバタバタさせると、ママが言う声が聞こえてきそうだった。「じっとしなさい！ ああ、もうたくさんだわ、ジェイミ、素っ裸のお尻を真っ赤に焼くことを自分で選んだわね！」

「あああ、やだ、ママ……素っ裸はやめて！」ジェイミは泣き言を言い、兄弟たちの前で罰せられたことを思い出して頬を火照らせた。彼女は台所に戻っていた。目の前には木べら、背後には家族全員、すべての視線が今や丸裸になった彼女の臀部に注がれている。「お願い、私の部屋に戻ってからにして！ お願い！ もうお尻叩きされる年じゃないよ！」

ジェイミは左手を使って自分の左の尻の半分に、大きく響く固い一発を叩き込み、続けて右手で右の尻の半分に素早く鋭い平手打ちをお見舞いした。本物のように感じられた！「口答えは無用よ、ジェイミ！ お尻叩きに年齢制限はありません！ そしてあなたの兄弟姉妹たちは、十戒を破った悪い子がどうなるかを見る必要があるのよ！」

涙で目を潤ませながら、ジェイミは愛するポッパに懇願するために顔を向けた。「でも……でも……素っ裸のお尻を叩かれるのはプライベートな時だけって言ったじゃない！ そ

れがルールでしょ！ お願い、ポッパ！ ママにやめてって言って！ ごめんなさい！ もっと良くするから！」

しかし父親はただ首を振っただけだった。「良くなるってわかってるよ、花火玉。でも、お前はまだ十分に反省していない。まだな。今日からこの家のルールはこうだ。お前のお尻叩きはすべて、素っ裸で真っ赤になった尻を隅っこで晒して終わりにする。たとえ兄弟たちが部屋にいようが、いまいが関係ない。客がいてもだ！」

「いやあああああ！」とジェイミが泣き叫ぶと、ママはそのかなりの力のすべてを込めて、計算しつくした一撃をくらわせた。次の一撃はすぐには来ず、ジェイミは自分の臀部に手形が浮かび上がり、炎の舌のように焼けるのを感じながら息を切らした。彼女は兄弟たちの心配と面白さが入り混じった表情を見た。兄と姉のジョセフとジェシカは同情しているようだったが、同意するようにうなずいた。

二発目のゆっくりとした一撃が、まったく同じ場所に落ちると、ジェイミは悲鳴をこらえ、背後で繰り広げられている光景に目を凝らし続けた。

十四歳のジョアンは指を弄びながら、歯を見せてにやついていた。そして彼女は、だらりとした黒い髪をさりげなくどけて、アクションをよりよく見えるようにした。

対照的に、双子の十一歳のジャックとジルは、ジェイミのように決して主の御名をみだりに唱えてはいけないと考えながら、緊張して見守っていた。六歳のジュニパーは、親指をしゃぶりながら、目を大きく見開いて見ていた。

部屋にいる全員が、ジェイミが受けている一発一発に値することを知っていた。ジェイミ自身も含めて。

ついに、三度目のゆっくりとした一撃が、まったく同じ場所に落ちると、ジェイミは恥ずかしそうに顔をそらした。「いった！ そ、そんな……同じとととこはやめて、ママ！ ああ、やだ、やだ、やだ！」

しかしママはとにかく四発目をまったく同じ場所に落とし、ペースを上げた。

ジェイミはロデオの未調教の馬のように跳ね上がり、立ち上がったかと思うと、唇からは泣き叫ぶ声が漏れた。

「あら、そう、そう、そうよ、ジェイミ、あなた。実際、この平手打ちの後は、ヘアブラシで仕上げようと思うわ。でも、あなたがじっとすることを覚えるまではね……もしこのお尻叩きが終わることを望んでいるなら、の話だけど？」

五発目が、容赦なく、まったく同じ場所に落ちると、ジェイミの世界は霞んだ。遠くからパパの声が聞こえた。「念入りにやれよ、ママ。終わったらすぐに俺のベルトを味わわせるために薪小屋に連れて行くからな。」

陶酔に近い状態で、ジェイミは両手を使って自己のお尻叩きのテンポを速め、ついには尻の他の場所にも打撃を加え始めた。すぐに、色を均一な桜色に均すことができた。ほとんど完璧だった！ このお尻叩きが現実でないことを、彼女はほとんど忘れかけていた。

ガシャン！

金属的なガチャガチャという音がジェイミを白昼夢から覚ました。鞍から飛び起きて、ジェイミはよろよろとドアの方へ行き、覗いてみた。影のような円筒形のものが家の近くの地面を転がり、その後に二つの光る目が薪小屋を照らす白熱灯の光を受けて輝いた。アライグマがゴミ箱を倒したのだった……今度は本当に！

窓から明かりがついた。ジェイミはそれがマスターベッドルームだとわかった。ママかパパが起きたのだ！

それでもジェイミは悪態をつかないことを思い出した（何しろ、悪い言葉を使うのはお尻叩きの対象になるのだから）。「しまった！」と彼女は息を呑み、鹿のように静かに爪先立ちで歩き、チーターのように素早く走ろうと同時に試みた。その代わりに、ジェイミは柔らかい芝生に向かって飛んでいる自分に気づいた。彼女の脚は、引き上げるのを忘れたパジャマのズボンとパンティーに絡まり、後方に跳ね上がった。パジャマのズボンの片方の脚が、ほとんど足から完全に外れかけてバタバタした。

ジェイミは草のついた泥の塊を吐き出した。「ちくしょー！」

物音に驚いたアライグマは壁に沿って疾走し、両親の寝室の窓のすぐ下を通り過ぎた。片足でぴょんぴょん跳ねながら、彼女はパジャマのズボンを乱暴に引き上げ、パンティーが太ももの間に寄っているのを感じた。ジェイミはそれを無視して、薪小屋の明かりと両親の窓から離れて、玄関に向かって突進した。たとえアライグマが一瞬彼らの注意を引いたとしても、ジェイミはまだ完全に見通せる範囲にいた。

家の中でくぐもった足音が聞こえ、考える間もなく、彼女は玄関から数インチのところにある、ママの受賞歴のあるベゴニアの低木の陰に身を投げた。大柄でがっしりした男が玄関から飛び出してきて、後ろにドアを半開きにしたままにした。

「誰かいるのか？」とパパが叫び、懐中電灯を茂みの周りに向けた。ジェイミはその光が自分の素足のつま先をかすめるのを見た。

「アライグマなの？」とママが異様に甲高い声で鳴き、角のあたりからこだました。ジェイミは、ママが寝室の窓から顔を出しているのだろうと推測した。

光がジェイミのつま先から離れ、パパが家の周りを同じ窓に向かって回り込んだ。「そうだろう！ さもなきゃポッサムか！ おやおや、見てみろ！ 小僧がゴミ箱からバンジーコードを外そうとしたところだ。間違いなくアライグマだな！」

父親が視界から外れたことに気づき、ジェイミは玄関に向かって少しずつ進み始めた。懐中電灯の明かりが薪小屋に向けられ、そのドアがまだ半開きになっているのを見て、彼女は凍りついた。家の角の向こうから父親の声がぼんやりと聞こえ、彼が考え込むように言うのがかすかに聞こえた。「……おや、変だな。小屋の明かりがついてる。」

ママはほとんど悲鳴を上げた。「行かないで、あなた！ 誰かがそこにいるわ！」

パパの豊かな笑い声が前庭に響き渡った。「はっ！ 落ち着けよ、ハニー。たぶん俺がそこで作業してるときに付けっぱなしにしたんだろう……そうだな、先週の日曜日か？」

ジェイミは汗ばんだ手のひらに、冷たい金属製のドアノブの感触を感じた。

「撃たないで！」とママは泣き叫んだ！

「おいおい、大丈夫だ！ 誰も撃たれやしない。ベッドに行けよ、ハニー！」

くそ！ とジェイミは思った。もちろん、パパは自宅警備用の拳銃を所有している！ もし彼が武装していたらどうする？

どうして忘れられた？ かつて、ジェイミが十二歳の時、彼女はパパの銃器庫を開けようとしたことがあった。まだ銃の使い方を学ぶ年齢ではないと言われて激怒したのだ。彼女はパスワードを正しく推測することに成功したが、パパは賢明にも弾丸と薬莢を別々に保管することにしていた。彼が拳銃を手にしているところを現行犯で捕まえた後、ジェイミは薪小屋でパパのベルトによる決定的な「生涯最高のお尻叩き」を受け、その後二週間分の就寝前お尻叩きで銃の安全に関する教訓を強化された。最後の就寝前お尻叩きの翌日、パパは完全に悔い改め、真っ赤な尻をしたジェイミを射撃場に連れて行き、正しい銃の扱い方を学ばせた。ジェイミは、それらの父娘のセッション（お尻叩きも射撃も）を思い出すたびに、今でも胃の中にふわふわとしたゾクゾクする蝶々を感じていた。

現在、ジェイミは胃の中に蝶々を感じていたが、ふわふわとしたゾクゾクする種類ではなかった。もし彼女がうっかりパパを驚かせて、不法侵入者だと思われたらどうする？ しかし、もし自分を名乗れば、なぜ前庭に隠れていたのかを問い詰められることになる。

パパが薪小屋へ向かうにつれ、ジェイミはすぐにまた彼の視界に入ることを悟った。それは、撃たれる可能性と、夜間に秘密で薪小屋に通う理由を暴露する可能性との間の選択だった。ジェイミはゆっくりとドアノブを回した。人生で一番簡単な決断だった！

ドアの蝶番が音楽的なきしみ声を上げたとき、ジェイミは血の気が引くのを感じ、ウェルカムマットの上に立っている誰かにぶつかった！ ジェイミは素足の下のマットに書かれた「求めよ、さらば開かれん。マタイによる福音書7章7節」という文字を読み、そして顔を上げると、ジョアンが立っていた。彼女の乱れた漆黒の髪が片目を覆っていた。彼女はゴシック風の、不気味で可愛らしいドクロや動物の漫画の絵が描かれた黒いパジャマを着ていた。ズボンはフリルがついてふわふわした、まるでパンタロンのようなデザインで、それに合わせた装飾的なスパゲッティストラップのトップスからはジョアンのへそが覗いていた。ジョアンが、レッドフィールド・クリスチャン・スクールの服装規定にも従いながら、両親にゴシック風の服を着る許可を得るために慎重に選んだ数々の戦いの中で、このパジャマは彼女の自慢の戦利品だった。

ジョアンのトップスのストラップの一本が肩からずり落ち、彼女は瞬きをしながら、まだ半ば眠っていた。「……ジェイミ？ どうして私より先にいるの？」

ジェイミは背後からパパの懐中電灯が光っているのを感じた。「誰だ？ ジョアンか、リトル・ミス・サンシャイン？」

ジョアンは首を伸ばしてジェイミの肩越しに覗き込んだ。「うん、パパ。私とジェイミがここにいるよ。」

「花火玉？ 大丈夫か？」とパパが尋ねた。

愚かにも、ジェイミは怒りが込み上げるのを感じた。十四年間の姉妹関係で、ジョアンが何度も告げ口をしてきたことを思い出して。そして、ジェイミはもう何もかもおしまいだと思い出した。彼女の足は裸で、パジャマは草のシミだらけでしわくちゃだった。その下で、彼女は叩かれたばかりの臀部がヒリヒリするのを感じ、お尻の筋肉をぎゅっと締め付けた。パンティーはまだ尻の下で寄れたままで、パジャマのチクチクした内側の裏地が、ジェイミに自分が実質的にノーパン状態であり、パジャマが腰の低い位置までずり下がっていることをからかうように思い出させた。彼女の後ろ姿をひと目見れば、ヘアブラシとベルトによる新鮮で真っ赤な跡がすぐに明らかになるだろう。それらのお尻叩き道具と、行方不明のモカシンは、現在彼女が置き去りにした場所、すなわち薪小屋の鞍ラックの隣に座っていた。

ジェイミがパパの方に向き直ると、彼の顔にある愛情深く心配そうな表情を見て、すべてを白状したくなった。しかし、言葉を強く出すことができなかった。

パパはライトをジョアンに戻した。「二人とも聞こえたのか？ 耳がいいな！」

「……うん。聞いた瞬間にすぐに玄関に走ってきたよ」とジョアンは淡々と答えた。彼女は顔を上げてジェイミの目を捉えた。「そうだろ、ジェイミ？ 」

ジェイミは、まるで自分の唇が脳がその件について言いたいことを気にしていないかのように、自分の声が答えているのを聞いた。「そうだよ、ジョアン。アライグマの音が聞こえて、すぐにベッドから飛び起きたんだ。」その嘘の言葉はジェイミの耳には奇妙に聞こえた。

「小さな嘘つきめ！ それだけでお尻叩きに値するわ！」と彼女は思った。まるで小さな漫画の天使が右肩に座っているかのように。

「……待てよ！ 誰がアライグマの話をした？ なんで嘘をつくのがこんなに下手なんだ？」と彼女は再び思った。まるで小さな漫画の悪魔が左肩に座っているかのように。

ジェイミは、パパが自分の顔に浮かぶ罪悪感の表情を見抜いていると確信した。彼女は目を合わせるのが恥ずかしくてうつむいた。確かに、パパの拳銃は脚のホルスターにしっかりと収まっていた。今はそれを振りかざしてはいなかったが、ずっと携帯していたのだ。「引き金の規律に神に感謝」とジェイミは思った。

パパがジェイミと目を合わせると、安心させるように微笑み、そっとホルスターを軽く叩いた。ジェイミはすぐに、パパが自分の目に浮かんだ警戒した表情を見ており、ジェイミが銃器の姿に緊張しているのだと思ったのだと悟った。「いい推測だ、花火玉！ ただの地元の小さなゴミグマが、またこっそりと忍び込んで厄介を起こしてるだけだ。心配するこ

とは何もない。今夜はゴミ箱をガレージにしまっておくから、あいつはもう俺たちを悩ませないだろう。さあ、君たちはベッドに戻りなさい！」

ジェイミは、二歳の時に厳しい警告を受けてベッドに送られたとき以来の、これまでにないほどの従順さで、自分が振り返り、ロボットのように行進しているのを感じた。その効果は、彼女の尻が現在、しっかりとした自己のお尻叩きによって痛み、ヒリヒリし、ぴりぴりしているという事実によってさらに高められた。

パパが彼女たちの後ろから呼びかけたとき、二人の少女は同時に固まった。「待ってくれ、君たち。もう一つ言いたいことがある。」

ジェイミとジョアンの両方の手が反射的にお尻に飛んだ。もちろん！ 彼女たちは就寝時間を過ぎてベッドから出ている！ それは、彼女たちが最初に「お尻叩きの対象になる行為」として覚えた家のルールの一つだった！

パパはにっこり笑った。「愛してるぞ、花火玉！ 愛してるぞ、サンシャイン！」

「愛してるよ、ポッパ！」と二人の少女は同時に答えた。

ジョアンの寝室に近づくと、妹が踵を返してジェイミに小悪魔のような微笑みを向けたので、ジェイミはもう一度見直した。「大丈夫？ ジェイミ？」

ジェイミは息を継ぐ間もなく答えた。「もちろん大丈夫だよ、ちょっとびっくりしただけで、なんで？」

「だって、歩き方が硬いもんね。何、今朝のお尻叩きがまだ痛むの？」

「からかわずにはいられないの？ 私がお尻叩きされるたびに、ちょっとした嫌味を言わなきゃ気が済まないの？」

ジョアンは大げさに目を回した（ママやパパの前でそんな真似をしようものなら、即座にお尻叩きの対象になるような行為だった）。「そういう意味じゃなくて——」

ジョアンは息を呑み、冷静な態度を取り戻した。「いい？ からかってるわけじゃないよ、ただ今起きたことを考えてるだけ。結構すごいことだったよね？ …ジェイミは前庭まで行くのに、すごく早くベッドから飛び起きたんだね、え？」

ジェイミが廊下の先にある自分の部屋を覗き込むと、すぐに自分の薄っぺらい嘘の穴に気づいた。

ジェイミはシャーロック・ホームズとワトソン博士が自分と一緒に立ち、犯罪現場を検証している姿を想像した。

「しかしホームズ！ ジェイミはどうやってこの廊下をずっと、ジョアンの部屋を通り過ぎて、誰にも気づかれずに走っていけたのでしょう？」

「初歩的なことだよ、親愛なるワトソン。一見無実に見える我らがジェイミ嬢は、自分の部屋にはいなかったのだ！ 彼女は薪小屋にいて、ヘアブラシとベルトで自分自身をお尻叩きにしていたのだ！」

ジェイミは首を振り、無理やり考えようとした。確かに、彼女の話は良くてもありえなくはないが（ジョアンがベッドから出るのにどれだけ時間がかかったかによる）、不可能ではなかった。ジェイミはブラフを仕掛ける準備をしながら、鼻孔を広げた。「そうだよ！ 音が聞こえた瞬間にベッドから飛び出したんだ… なんだよ、何がおかしいの？」

ジョアンは大げさにあくびをしてから、無頓着に自分のドア（装飾が過剰なドア）にもたれかかった。シュミット家の屋根の下では悪魔的、あるいはオカルト的なイメージは一切許されていなかったが、ジョアンは、逆さまの十字架が悪魔の象徴ではなく聖ペテロの殉教の象徴であると両親に納得させることに成功していた。「別に！ 目が覚めたときはちょっとぼんやりしてたんだ… お父さんに外で捕まらなくてラッキーだったね！ 撃たれてたかもしれないよ！」

ジョアンは「捕まらなくて」という言葉を、まるで舌の上で転がすジューシーな禁断の甘味であるかのように言った。ジェイミはジョアンの顔からその自慢げな表情を叩き落としたかった。実際にそうしなかったのは、両親の膝の上に座ったり、その上にうつ伏せになったりしながら学んだ自己抑制の美徳に関する数多くの教訓のおかげだった。

ジェイミは、自分が思う限り最高の「ママの表情」でジョアンをじっと見つめた。「パパがそんなことするわけないでしょ。それに運命なんてものはないよ、ジョアン。それは神の恵みだ。私が撃たれるのが面白いの？」

ついに、ジョアンの無頓着な態度が消えた。「え？ 違うよ！ そんなの面白くない！ …ああ、自分ってこういうの下手だな。いい？ 君がお尻叩きされたのが嬉しいわけじゃないん

だ。私もお尻叩きされる——君ほどじゃないけど——でも、君と同じくらいお尻叩きは嫌いだ。それに、君が撃たれなかったから悲しいわけでもない。ただ……今夜は変な夜だったんだ。」

ジェイミは一瞬間を置いて言葉を失った。彼女は兄弟姉妹全員を愛していたが、ジョアンとの関係が最も複雑だった。ジョアンはお尻叩きのことでジェイミをからかうかもしれないが、ある種のことについては、なぜかジェイミが話しやすい相手でもあった。

ジョアンは「家庭内で最もお尻叩きをされた子供」コンテストで、ジェイミに次ぐ第2位に楽々と位置していた。青いリボンを獲得した場合の賞品は、おそらくまたお尻叩きだろうとジェイミは考えた。

ジェイミの答えを待たずに、ジョアンは肩をすくめて手を差し出した。「だから……休戦？」

ジェイミはジョアンを信じるべきかどうか確信が持てなかったが、それでもそのジェスチャーに奇妙に感動して、握手した。「休戦。」

空気より軽い気分で、ジェイミは自分の寝室へ向かい、両手でズキズキする臀部の残る痛みを揉みながら歩いた。はっとして、ジェイミは振り返り、ジョアンの猫のような目が、装飾過多なドアの後ろに消えていくのを一瞬見た。

日曜学校、教会、私立学校、そして家で、ジェイミは舌を制御することの重要性を学んでいた。明らかに、もしFワードのような悪い言葉を言えば、膝の上に連れて行かれること

を覚悟しなければならない。その重要な側面は、思い、言葉、行いにおいて自分を制御することだった。ジェイミはお尻叩きを避けるためにFワードを言わないようにしたいだけではなかった。彼女はFワードを考えることさえ避けたかった。なぜなら、心の奥底で、ジェイミはFワードを使うことはすべて罪であり、長くて激しい素っ裸のお尻叩きに正当に値すると信じていたからだ。

くそ。くそ！ くぅそ！ とジェイミは息を吐いた。ジョアンは彼女のことを見抜いている！ これはすべて何か悪知恵の一部だ！ なぜ神は自分を憎むのか？ なぜ善き主はこれほど自分を罰することを喜ぶのか？ ジェイミは額を、部屋の前に飾られた素朴な工作の十字架に当てた。彼女は二番目に好きな聖句を思い出した。「箴言17:3:『銀にはるつぼ、金には炉、しかし主は心をためされる。』」とジェイミは記憶から唱え、自分の罪深い考えを即座に悔い改めた。それでも痛む尻を激しくマッサージしながら、ジェイミは額で寝室のドアを押し開け、ベッドに倒れ込んだ。

今日はひどくやらかした。捕まりかけた。父親の面前で嘘をついた。一瞬、臀部から発せられる灼熱の痛みが心地よく感じられた。少なくともお尻叩きはされた。嘘に対してそれが本当にカウントされるべきではないけれど。「あのお尻叩きは全然十分じゃなかった……嘘をついたんだから」とジェイミは息を吐いた。

ジェイミは、絡まったパンティーがパジャマのズボンに対して不快に寄っているのを感じて身をよじった。「だから『パンツがねじれるな』って言うんだな……」と彼女は考え込みながら、ようやくそれを直した。

ジェイミは好奇心から振り返り、自分の素っ裸の尻がルドルフの輝く鼻のように真っ赤に光っているのが見えるかどうか確かめようとした。確かに暗闇の中で光っているように感じられた。「こんなリスクはもう御免だ。捕まりたくない」とジェイミは自分に言い聞かせながら、パジャマのズボンを引き上げた。

暗がりに横たわり、心の中の静かな小さな声が答えた。「なら、捕まるなよ！」

***

ジェイミが眠りに落ちていくにつれ、長く忘れられていた記憶が甦った。彼女は四歳で、長いシャワーを浴びていた。髪からシャンプーを洗い流し、自分の体を見下ろしたとき、遅かれ早かれ、何かしらの理由でお尻叩きが必要になるだろうと気づいた。

小さなジェイミはすぐに、自分自身の、水滴の滴るお尻に固いお尻叩きを加えた。響き渡る一発一発とともに水滴が飛び散った。彼女はさらに、厳しい親の声で説教も追加した。それは、ママやパパが自分や兄弟を叩きながら言っているのを覚えている声だった。涙が目に溜まり、痛みが耐え難いほどに蓄積されるまで、彼女は止めなかった。

体を拭いた後、彼女はタオルを巻いたまま、颯爽と両親を探しに行き、自分の素晴らしいアイデアを説明した。「見て？ お尻が真っ赤だよ。もう二度と私をお尻叩きにしなくていいんだよ！ 代わりに自分でお尻を叩いてあげられるよ！」

彼女はどっと笑い声が起きたのを覚えていた。二度とそんなことをする必要はないという真面目な話をされたのを覚えていた。そして、その面白い「子供の珍発言」の逸話が、まずは兄弟たちに、そして後には客たちに何度も何度も繰り返され、恥ずかしさで顔を赤らめたのを覚えていた。

「自分でお尻を叩いて、それを後で罰としてカウントすることはできないよ、ジェイミ。わかるか？ お尻叩きは正しいことと間違っていることを教えるためのものなんだ。間違ったことをした後にお尻叩きをされるんだよ」とパパは優しく説明した。

しかしジェイミにとっては、あの時も今も、彼女はありとあらゆるお尻叩きを必要としていたのだ。

第II章 終わり

第III章：ジェイミ、再び乗る

三回の優しい愛の一撃がお尻に感じられると、ジェイミは、昨夜の自己お尻叩きの余韻がパジャマのズボンの上で柔らかく蘇るのを感じて、戦慄した。

「ジェーイミー…」とママの声が甘く響いた。

「うーん？ …やだよ、ママ！」とジェイミは枕に顔を押し付けて泣き言を言い、まだお尻叩きの夢を見ていた。

ママの優しいトントンが遊び心のある軽打に変わり、痛くはないがジェイミを完全に目覚めさせるには十分だった。
「ジェイミ、起きる時間よ。」

「あと五分、ママ…」とジェイミは愚図った。

それに答えて、ママは娘の突き出した臀部の真ん中に、固い一発をピシャリと叩き込んだ。すぐにジェイミは飛び起き、手足とシーツをもつれさせながらベッドから飛び降りた。「ひゃっ！ 起きた！ 起きた！」

目覚まし時計をちらりと見て、ジェイミは昨夜セットするのを忘れていたことに気づいた。朝の六時だ！ 朝の雑用に遅れた！

しかしそれはつまり……お尻叩きをされるということだ！

カーペットの上に跪き、ジェイミは、自分に命を与え、それ以来頻繁にお尻叩きを与えてきた小柄な女性を見上げて

震えた。それは、最後の何度かの成長スパートの前、お尻叩きを卒業することなく母親を追い越す前の日々を思い出させた。「ごめんなさい、ママ！ 今すぐ雑用をします！ どうかお尻叩きしないで！」

ママはくすくす笑った。「大丈夫よ、ジェイミ！ パパが今朝はあなたとジョアンを少し寝かせておくようにって言ってたの。アライグマがあなたたちを起こしたからね。でも一時間丸々はやりすぎよ。ジョアンはもう起きて働いてるわ！」

ジェイミは昨夜のズキズキするミミズ腫れを揉んだ。それは朝の目覚ましコールに激しく抗議していた。自分の脚を見下ろして、ジェイミは昨夜の草のシミに気づいて緊張した。それらをママの目から隠しているのは、ベッドの反対側に転がり落ちたために引きはがしたシーツだけだった。

ママは眉を上げた。「あらまあ、随分とお尻を激しく揉んでるわね。昨日のお尻叩きがまだ少し痛むの？」

ジェイミは喉に何かが詰まった感じがした。「え？ 何のお尻叩き？ 昨夜はベッドにいたよ！」

ママは腕を組んだ。「もちろん、昨日の朝ごはん前に私が与えたお尻叩きよ。叩きすぎたかと心配してたけど、もう忘れてしまったのなら、もっと手加減を間違えたのかもね？」

「ああ！ もちろん、あのお尻叩き！ えっと……今はまだ少し痛いです！ でもあのお尻叩きは十分痛かったです、約束します！ 婉曲的な誓いについては教訓を得ました！」

ママは首を振ったが、ついに微笑み、柔らかなため息をついた。「まあ、痛いのは気の毒に思うわ。もっとも、あなたのいたずらなお尻を叩いたことを後悔しているわけじゃないけど、かわいそうな小さなお尻のことは気の毒に思ってるわ。今日の残りの時間、またお尻叩きが必要にならずに済むように祈りましょう。応援してるわ！」

ママがジェイミのベッドを整え始め、ジェイミのパジャマの脚を検査から隠していたシーツを引きはがすと、ジェイミは緊張した。草のシミについて何気ない質問が一つでもあれば、昨夜の不正な逃避行が簡単に露見するかもしれない！ ジェイミは太ももでシーツを挟み込んだ。「ベッドは自分で整えるよ！」

古い賛美歌の調子を鼻歌で歌いながら、ママはシーツを引っ張り出し、ベッドを整えることに注意を向けた。「あら、あなたのベッド整えを手伝うのは大好きよ！ よく言うじゃない、二人でやれば四倍の速さでできるってね！」

ジェイミは太ももをベッドの下に押し込み、巨大で明らかな泥と草のシミを影に隠そうとした。「えっと……パパは今は自分でベッドを整えるべきだって言ってるよ！ 自分を……成長させるために？」

「嘘つき、嘘つき！ ズボンが燃えてるわ！」とジェイミは思い、燃えるような両方の尻の半分をそれぞれ手で包み込んだ。

ママは立ち止まり、疑問そうに娘を見下ろした。ジェイミは汗の玉が背中を伝い、わずかに露出した尻の割れ目に落ちるのを感じた。ママはため息をついた。「ふうん、彼らしい

わね。よろしい、自分でベッドを整えなさい。それからすぐに朝の雑用よ。ぐずぐずしないで、でも手を抜かないで！朝ごはんの後、誕生日の女の子が初めてのレッスンのために厩舎に来るの。あなたのことをお母さんに強く推薦しておいたわ！」

「はい、ママ！」とジェイミはつぶやき、従うために飛んで行った。

ママは寝室のドアの後ろから甘い声で言った。「……ああ、そうだ、ジェイミ？」

ジェイミは雌鹿のように固まった。彼女は突然、パンティーを引き下ろして罪を告白し、一気にすべてを暴露したいという衝動に駆られた。

ママは微笑んだ。「昨夜、ジョアンをちゃんと守ってくれてありがとう！ 誇りに思ってるわ！」

「……ありがとう、ママ。」

「……え？」とジェイミは考えたが、ママはドアを閉めた。落ち着くために息を深く吸い、ジェイミはベッドを整えながら考えをまとめた。「変だったな……よし、パジャマの草のシミを隠さなきゃ。ここに置いておくわけにはいかない、ママが回収して洗濯物に入れるかもしれない。ハンガーにしまっても、シミをチェックされたらダメだ。だから、パジャマを入れて洗濯を始めて、朝ごはんの後に乾燥機にかけるんだ。」

ジェイミはコインを投げてマットレスで跳ねるかどうか試した。うまくは跳ねなかったが、ベッドを不十分に整えたこと

でお尻叩きされるリスクよりも、朝の雑用と朝ごはんに遅れたことでお尻叩きされるリスクの方を取ることにした。ジェイミはリーバイスのジーンズを引き上げながら顔をしかめ、そして自分のベルトがないことを思い出した。

真昼間に薪小屋に戻ってそれを回収するのは危険だった。正気のシュミット家の子供なら、できることならあそこに居座りたいと思う者はいないし、牧場のどこかに行くには、少なくとも一人は好奇心旺盛な六人の兄弟姉妹の誰かに観察されるのは避けられなかった。パパはそこで木工や革細工の趣味の仕事をするのが好きだったが、ベルトとヘアブラシは、たとえ今日パパが薪小屋を使っても、鞍ラックの後ろに隠れて見えないことを願うばかりだった。ジェイミは唯一残っている別のベルトを掴んだ。中学生の頃の安っぽいホットピンクのベルトで、履いていると馬鹿らしくなった。

ジェイミは泥だらけのパジャマを他の衣類の山に隠し、それから誰にも気づかれずに洗濯室に向かって身をかわしながら進んだ。「くそ、草のシミを落とすコツは何だっけ？漂白剤か？」最後の瞬間、彼女はママが草のシミに「酢」と書かれたスプレーボトルを使っているのを思い出し、パジャマにいくらか塗布して洗濯機に押し込んだ。

ジェイミは、数インチ後ろでママの歌うような声が聞こえたとき、驚いて酢のボトルの持ち手を離した。「あら！ ありがとう、ジェイミ。頼んでもいないのにね！ …おっと！」ママは巧みにボトルをキャッチし、洗濯機のドアを閉めた。「おてんばさんね！」

外では、ジェイミは厩舎に向かいながらこっそりと薪小屋を一瞥し、ジョセフとジェシカが最後の馬房に新鮮な干し草を運んでいるのを見つけた。「遅れてごめん！」

ジョセフは肩をすくめ、それからスタイソンのカウボーイハットを一本の指で持ち上げた。「問題ないさ。昨夜の冒険は聞いてるよ。」

ジェシカは鼻をひくつかせた。「パパは短い話しかしてくれなかったわ。全部話してくれれば、恨んだりしないから！」ジェシカはジェイミと同じ薄茶色の髪を共有していたが、妹より数インチ背が低かった。しかし、ジェシカの自然な曲線のおかげで、家族の友人はいつもジェシカが年上だと正しく推測した。

ジェイミは左右を見た。「ジョアンはどこ？」

ジョセフは親指で鶏舎を指した。「見ればよかったのに。自分の馬房を記録的な速さで掃除し終えて、鶏に餌をやるために飛び出していったよ、まるで……ええと、まるで……」

ジェシカはわずかな出っ歯を見せて狡猾な笑みを浮かべた。「首のない鶏みたいに？」

ジェイミは空の干し草のバケツを戻すのを手伝いながら、冗談に加わった。「その比喩は正しくないと思うよ、ジェス。」

ジョセフは頭をかいた。「比喩なのか？ 直喩って言うんじゃないか？」

ジェシカは考え込むように唇に触れた。「洒落だと思ってたわ。」

その後の朝の日課は何事もなく過ぎた。ただ、ジョアンがいて、シュミット兄弟姉妹のコメディ四重奏に彼女のより辛辣で皮肉な機知を貢献することはなかった。

すべてのシュミット家の子供たちが共有する小さな雑用に加えて、四人の年長者（ジョセフ、ジェシカ、ジェイミ自身、ジョアン）は朝ごはん前に鶏の世話と馬房の掃除を担当していた。ジェイミは特に馬の世話に興味を持ち、世界で一番の夏の仕事をしていた。小さな女の子たちに乗馬を教えることだ。

馬牧場には二つの普遍的な収入源があった。誕生日にポニーや馬を撫でたい小さな女の子たちと、ウエスタンかイングリッシュの二つの乗馬スタイルのいずれかで訓練したい年上の女の子たちだ。シュミット家で一番古いジョークは、パパはウエスタン式、ママはイングリッシュ式の乗り手だが、それでも何とか恋に落ちたというものだ。

ジェイミは長年にわたって両方の乗馬スタイルを身につけたが、特に小さな女の子向けのウエスタンクラスを教えることを専門としており、それによってパパはより本格的な仕事、すなわち映画とテレビの黄金時代のために馬と騎手を訓練することに専念できた。

優秀な馬乗りの需要がハリウッドを中西部に連れてきた。パパは、カウボーイ映画のために専門的に訓練された馬を必要としていたのがネットフリックスだったかHBOだった

かは決して覚えていないが、そのコンサルティング料の最初の小切手は確かに覚えていると冗談を言っていた。

朝ごはんのために年上の兄弟たちと家に戻る途中、ジェイミは視界の端に薪小屋が迫っているのを感じた。「変だ？ ドアがまだ半開き？ パパは昨夜閉め忘れたに違いない。もしちょっとドアを閉めに行くと言えば、そんなに怪しくないよな？ ……ああ、バカ、証拠を取りに行って、ランダムなベルトとヘアブラシを持って出てくることになる。それじゃダメだ！」

するとジェイミは誰かの視線が自分の後頭部に注がれているのを感じた。ジェシカが彼女が見ているものに気づいていた。「薪小屋でお尻叩きのことを考えてるの、ジェイミ？ 最後に連れて行かれてから、もう二年になるわね？ 結構頑張ったわね！ 私は三年連れて行かれてないわ。もしジョーが一度くらい失敗してくれれば、彼の六年間の記録を破れるかもしれないのに！」

ジョーはバッグス・バニーの真似をして、泥を室内に持ち込まないように慎重にブーツを脱いだ。「ハーディハーハー！ そんな記録は破らせるつもりはないぜ！」

ジェイミは鳥肌が立った。自分のお尻叩きを心配するだけでも十分なのに、さらに彼女は兄弟たちのほとんどがお尻叩きされるのを目の当たりにしなければならなかった。

ジョセフはもう「警告射撃」のお尻叩きさえ受けることはなかった。それは「お尻叩きに年をとりすぎた」からではなく、十三歳以来、それに値することを何もしていないからだった。ジェシカは時折警告射撃を受け、よりまれに自分の部

屋に連れて行かれて「真剣な話し合い」のお尻叩きを受けた。真剣な話し合いは、正式な「薪小屋行き」に値する前に、悪い行動を改める最後のチャンスだった。

対照的に、ジェイミはたいてい週に一から三回の「警告射撃」を受け、月に一度程度はママかパパと「真剣な話し合い」を必要とした。ジョアンのゴス／エモ／パンクな態度はジェイミと同じくらい多くの「警告射撃」を稼いだが、ジョアンはより深刻な懲罰に値するルールを慎重に破らないようにしていた。

ジョセフはジェイミがカウガールブーツを脱ごうと跳ねているのを見て笑った。「ジェイミ、大丈夫か？ 今朝はずっと落ち着かない様子だぞ！」

ジェイミはピンと背筋を伸ばし、ジョセフとほぼ目線を合わせた。「落ち着いてなんかないよ！」

兄弟たちの解説を振り払い、ジェイミは一直線に洗濯室へ向かった。ちょうどベルが「ピンポーン」と鳴り、最初の洗濯が終わったことを知らせた！ パジャマの草のシミは薄くなっていた……わずかに。ジェイミはさりげなく残りの洗濯物を乾燥機に移し、びしょ濡れのパジャマを取り出してさらに酢を塗り、二回目の洗濯機に滑り込ませ、『ミッション・インポッシブル』のテーマ曲を鼻歌で歌いながら神経を落ち着かせた。

ジェイミはママの声が首の後ろで息を吹きかけるのを感じて、空気の流れを感じた。「まあまあ！ 今日は誰かがポイントを稼ぐのに必死ね！ もう二度とお尻叩きしなくて済むかもしれないわ！」

「ひゃっ！」ジェイミはママがまた背後に忍び寄ったので、靴下から飛び上がりそうになった。実際、ジェイミの靴下の片方が、もう片方の足のつま先に引っかかって文字通り飛んでいった。

ママはくすくす笑った。「あらまあ！ 私、歩くのが静かすぎるみたいね。今朝は二度もあなたを驚かせたわ！」

落ちていた片方の靴下を拾い上げ、ジェイミはそれを洗濯機に放り込み、背後でバタンとドアを閉めた。「さて、この洗濯物はいっぱいみたいだ！ じゃあ――」

ママの手が、ジェイミがボタンを押す前にそっと彼女を機械から追い払った。「ジェイミ、もう片方の靴下よ、バカね！ あら、任せて。本当に、手伝いたいという気持ちは嬉しいけど、私は全部のシミをチェックするのが好きなのよ！」

ジェイミは二本目の靴下を脱ぎながら心臓が止まるのを感じた。ママが洗濯機のドアを開けると、パジャマの脚の部分が垂れ下がり、草のシミが正面に丸見えになった。「でも、手伝いたいの！」

ママは二本目の靴下を受け取り、ジェイミをくるりと回し、遊び心でその靴下をジェイミのズボンの尻の部分に叩きつけた。「でも、はなし！『でも』って言葉を聞くたびに、私は『お尻』を叩く音楽的な音の方をずっと聞きたいと思うのよ！ さあ、行きなさい！」

目尻で、ジェイミはママがパジャマの脚の部分を一本の指で持ち上げ、それを機械に戻し、靴下を優雅にその後に投

げ入れるのを見た。「あら、私が終わる頃には朝ごはんが冷めちゃうわ。きっとあなたはちゃんとやったわね、ジェイミ。あなたはまだママの小さなヘルパーよ！」

ジェイミはようやく息を吐き、背後で洗濯機が回り始めるのを聞いた。「これでパジャマは片付いた！ あとは一日の終わりの静かな時間を待って、薪小屋に忍び込むだけだ。やったるぞ！」と彼女はテーブルの自分の席に座りながら思った。

しかし、木べらか、あるいは自分自身のヘアブラシかベルトによる自己お尻叩きで残った、彼女の座る部分の下の水ぶくれが、硬く背もたれのまっすぐな木製の椅子に体重をかけたとたんに彼女を不意を突いた。「ぐっ！」

ジェイミは両膝を引き上げ、椅子の端を握りしめて椅子を揺らした。朝食のテーブルにいた全員が彼女を見つめた。ジェイミはママの目が自分の魂の奥深くを覗き込んでいるのを感じて震えた。「ああ、しまった！『ぐっ』は婉曲的な誓いか？ またお尻叩きされるのか？ パンティーを下ろしたら、新しい跡が見られるぞ！」

パパが沈黙を破った。「まだ楽に座れないのか、ジェイミ？ よし、子供たちよ、ママが手の届くところにべらを持っているときに、決して主の御名をみだりに唱えるなと思い出させてくれ！ 俺のケツには耐えられないだろうからな！」

ジャックとジルは「ケツ」という言葉を聞いて鼻を鳴らした（「アス」や「バット」といった言葉は禁句だったが、「ブーティー」や「バム」はまだ彼らを笑いの嵐に誘った）。ジョセフとジェシカはママがパパをお尻叩きにするという馬鹿げた

心像に笑った（テーブルにいる全員が、クリスチャンの妻は夫に従うのが務めだと知っていた！ 聖書がそう言っているのだから！）。そのジョークは六歳のジュニパーには理解できなかったが、他のみんなが笑っているので彼女も笑い始めた。ついにママまでもが笑みをこぼした。

ジェイミは椅子に溶け込み、もはやヒリヒリする座る部分など気にしなかった。彼女はただ自分の家族をとても愛していた！ 彼女が彼ら全員から、自分の深く暗く嫌な汚い小さな秘密を隠している間も、彼ら全員が彼女をどれほど愛しているかという思いが、彼女をひどくもあり素晴らしくも感じさせた。

パパが咳払いをした。「さて、ジョアンは朝ごはんに遅れているが、他のみんなを待たせるわけにはいかない。お祈りをしよう。」

ジェイミは隣の席からジョアンがいないことに気づいて、もう一度見直した。

バタン！

重い音とともに玄関が勢いよく開き、ジョアンが黒い髪をなびかせながら突入してきた。彼女は滑るように止まり、モカシンを靴の山に放り投げたが、椅子に飛び込む前に、パパの厳しい視線が彼女を空中で凍りつかせた。「ジョアン、ドアをバタンと閉めるな、靴を投げるな、獲物を狙う虎のように椅子に飛びかかるな。」

ジョアンは背筋を伸ばし、髪の数本が乱れ、長い前髪が再び垂れて顔の半分を隠した。今日は、グスターブ・ドレの古

い版画に基づいた十字架刑のグランジ風の大きなイメージがプリントされただぶだぶの黒いTシャツを着ていた（非常にゴシックだが、キリスト教的で家族向けでもあった！）。シャツの下に黒すぐりのショートパンツと濃い紫色のベルトを履いていたが、特大のシャツはだぶだぶで、まるでズボンを履いていないかのような錯覚を与えた。「ごめんなさい、パパ。お祈りに遅れるかと思って心配だったんです。」

パパは置き時計をちらりと見た。「八時一分だ。一分遅刻だ、ジョアン。次に遅刻しそうだと思ったら、バイキングの狂戦士のように突入してくるな。もしまたそうしたら、朝ごはんに遅れた罰に加えて、二度目のお尻叩きをするからな。わかったか？」

ジョアンはうなずいた。「はい、パパ！ …ということは、遅刻でお尻叩きされるんですか？」

パパはその瞬間を引き延ばした。ジョアンは遅刻した、遅刻は許されない。彼女は先週、朝ごはんの前におよそいしただけで「警告射撃」のお尻叩きを受けたばかりだった。ジョアンはおとなしく立ち、判決を待った。ジョアンはお尻叩きに値することを知っており、議論せずにそれを受け入れるつもりだった。

満足して、パパはうなずいた。「まあ、まだお祈りを始めていない……だからお前に慈悲を示そう。座りなさい、サンシャイン。」

ジョアンは明るくなった。「はい、パパ！」彼女はパパの頬に素早くキスをし、ジェイミの隣の空席に向かって早足で歩いた。

ジェイミは唇を噛んだ。「ついてるな！ あんな真似をしたら、少なくとも『警告射撃』はもらうだろうな。ああ、誰を騙してるんだ？ 俺なら口答えで追加で二、三回お尻叩きを稼ぎ、寝室での真剣な話し合いまでついてくるだろう。」

彼らは全員うつむき、パパが食事の祝福をした。「主なる神よ、宇宙の王よ、あなたは私たちに命を支え、心を喜ばせる食物を与えてくださいます。あなたは祝福されています……」

ジェイミは目を閉じ始めたが、ジョアンがテーブルの下で自分の脚を小突くのを感じた。ジェイミが用心深く片目を開けると、ジョアンは両方の眉を上げて、何かを知っているように見せた。ジェイミはジョアンがこう考えていると推測した。「見た？ そうやるんだよ！」

ジェイミはしかめ面で、ジョアンに自分の心を読ませようと念じた。「やめろ、ジョアン。お前はもう薄氷を踏んでるんだぞ！ 俺をお尻叩きにしようとしてるのか？ それがお前の小さなゲームか？」

パパが祈りを終えた。「……私たちの主イエス・キリストによって。アーメン。」

全員がアーメンと言い、皿と銀器の音が部屋に満ち、それ以上の会話はできなかった。家族全員がよく働いた。家族全員がたくさん食べる必要があった。

祝福されたひととき、ジェイミは昨日のお尻叩きのことをすべて忘れた。

***

乗馬を教え始めるのを待ちきれず、ジェイミは残りのパンケーキをかき込んだ。ママはジェイミに「ママの視線」を送った。「飲み込む前に噛みなさい、ジェイミ。もしあなたがむせて助けなきゃならなくなったら、ハイムリック法を終えたらすぐに私の膝の上よ！」

ジェイミはオレンジジュースをすすって、朝食の残りを流し込んだ。「はい、ママ。で、誕生日の女の子は何歳なの？」

ママは神秘的に微笑んだ。「十歳よ。コネリー・モーディング。コンラッド・モーディングを覚えてる？ 彼の妹よ！」

ジョアンは意地悪な笑みを浮かべた。「コンラッド？ ジェイミのベビーシッターのこと？」

ジェイミはオレンジジュースでむせかかりそうになったが、純粋な意志の力で嘔吐反射を抑えた。「彼は私のベビーシッターじゃない。私たちはあなたの共同ベビーシッターだったんだ！」

ジェイミが十一歳のとき、彼女は九歳のジョアンの夜の世話を任されたが、それは大惨事に終わった。ジョアンが何か小さな家のルールを破った後、ジェイミは自分でジョアンをお尻叩きにしたが、総力戦が勃発し、ジェイミはバスルームに隠れ、ジョアンは外でアルミニウムの野球バットを構えて座っているという結末を迎えた。その大失敗の後、ジェイミはママかパパの明示的な承認なしに弟妹をお尻叩きに

することを禁じられ、十二歳のコンラッドが「共同ベビーシッター」として雇われた。

ジェイミとコンラッドは日曜学校で遊び仲間だったが、コンラッドがジェイミより一年早く高校に入学してからは、ほとんど会っていなかった。

ジョアンはグラスの底に残ったオレンジジュースの跡をぐるぐると回した。「パパが、もし君が彼に迷惑をかけたら、君をお尻叩きにしてもいいって言ってたのを覚えてるよ。」

パパは朝食のソーセージをかじりながら笑った。「そう言えば、確かに言ったな！」

ジェイミは頬が火照るのを感じた。「あれは冗談だよ。君が言ったとき笑ってたし、彼も笑ってた！」

パパは真剣に考え込むふりをした。「うーん、冗談だったかもしれない。でも、君が彼に迷惑をかけたことは一度もないから、効果があったんだろう！」

ジョアンはジェイミにウインクした。「今日は妹をしっかり世話しなよ。しくじったら、コンラッドがパパの申し出を受け入れるかもしれないぜ！」

ジェイミの拳がぴくついたが、ジョアンを殴り倒す衝動を抑えた。「パパ！ からかうのをやめさせてよ！」

ジョアンは目を細めた。「ただの小さなジョークだよ！ そんなに敏感になるなよ！」

パパは銀器を置き、二人の娘を視線で黙らせた。「もう十分だ、二人とも。」

「はい、パパ！」とジェイミとジョアンが同時にきゃっきゃと答えた。

パパはその瞬間を引き延ばし、どちらかが反抗するのを待った。満足して、うなずいた。「ジェイミ、君はいつでもジョアンのからかいを無視できる。反応すればするほど、彼女がからかうのが楽しくなる。冗談を軽く受け流すことを学べ。そしてジョアン、モーディング家がここにいる間は最善の態度をとってほしい。ジェイミの旧友の前で彼女を困らせるんじゃない。『自分にしてもらいたいように、他人にもしなさい』。わかったか？」

「わかった！」と二人の娘が同時に答えた。ママのテーブル片付けと皿洗いを手伝った後、シュミット家の子供たちはテーブルを離れて、夏休みの二日目を楽しむことを許された。

緊張して針のむしろの上にいる気分で、ジェイミは夏の最初のクラスの準備のために厩舎へ向かった。薪小屋を一瞥すると、彼女はその日の行動計画を立てた。「乗馬レッスンを終えたら、鞍袋を薪小屋に持って行く。誰かに聞かれたら、小屋から予備の手綱が必要だと言える。それからヘアブラシとベルトを鞍袋に放り込んで家に持ち帰れば、誰も気づかない！」

パパが今日薪小屋で趣味の仕事をするリスクはあったが、鞍ラックの後ろをあまり詳しく見なければ、決定的な証拠は彼の目を逃れるかもしれない。ジェイミは落ち着くために息

を深く吸った。「すべてうまくいく。クラスを教えることに集中しろ！」

ジェイミは背後で足音が聞こえ、振り返るとジョアンが玄関からよろよろと出てきて、チャコールグレーのオーバーオールの上にカウガールブーツを履いているところだった。「今日は厩舎を手伝うよ！」ジョアンは走って追いつきながら口早に言った。

ジェイミは目を細めた。「パパは今日は君は自由だって言ってたよ。何を企んでるんだ、ジョアン？ もし授業中に野次を飛ばしたら、覚悟しろよ――」

ジョアンはまるで忠誠の誓いを立てるかのように手を挙げた。「はいはい、パパのベルトで叩かれる前に、自分で薪小屋に連れて行って温めてくれるんだろ？ ただ手伝いたいだけだよ！ 本当だ！『自分にしてもらいたいように』とか、いろいろ！」

ジェイミは薪小屋の話を聞いて固まったが、首を振った。「好きにしろ。囲いの準備を手伝ってくれ。女の子たちは基本的な安全講習が必要だ。練習用の予備の鞍が必要だ。」

ジョアンはくるりと踵を返し、薪小屋に向かって歩き出した。「薪小屋に鞍ラックがあるよ。取ってきてあげる！」

「やめて！！！」ジェイミはジョアンのオーバーオールの背中のストラップを掴みながら悲鳴を上げた。近くの鶏たちは物音に驚いて抗議するように鳴き始めた。ジェイミはすぐに

ジョアンを放し、付け加えた。「えっと、もう一つ外に置いてあるんだ！」

ジェイミは、本当に厩舎に予備の鞍ラックがあることを祈った。ジョアンは苛立たしげに彼女を見たが、肩をすくめた。「わかったわかった！ あなたがボスだ、親分！」

ジェイミは厩舎の物置に予備の鞍とラックがあるのを見つけて安堵のため息をつき、二人の姉妹は作業に取り掛かった。次の一時間、ジェイミはほとんど天国にいた。ジョアンは厩舎中を走り回って彼女が頼むことを何でも手伝い、ジェイミはようやく薪小屋のことを忘れた。

二人はサー・ハミルトンの蹄をチェックし、鞍を準備した。ジェイミは「乗馬入門101」のクラスを何度も教えてきたので、眠ったままでもできた。しかし、何度やっても飽きることはなかった。初めて馬に乗る少女たちの顔の表情を見るのは。安全の基本を教えた後は、少女たちに順番にロンジング（馬を囲いの周りを円を描くように歩かせる練習）をさせるつもりだった。

誕生日パーティーが到着し、ジェイミはそれが五人の少女だけの小グループで、年齢は九歳から十二歳まで、鋭い栗色の髪をした頑丈な中年女性、モーディング夫人に率いられているのを見て安心した。「さあ、お嬢さんたち、シュミットさんにしっかり従いなさい！」

「しっかりしろ？」ジェイミは思った。彼女は両親と同じくらいの年齢の人の前にいると、きちんと振る舞う癖があった。幼い頃から「年長者を敬う」ことを学んだからだけではなかった。教会であれ学校であれ、ジェイミは常に、もし不適

切な発言をすれば大人たちがその場で彼女を膝の上に引きずってお尻叩きにするだろうと想像していた。モーディング夫人も例外ではなかった。

ジェイミは、モーディング夫人に少女たちの前で素っ裸のお尻を叩かれるという愚かな妄想を払拭するためにまつげをパチパチさせた。

「はい、モーディング夫人！」とコネリーの誕生日ゲストたちが答えた。

「はい、ママ！」と、母と同じ栗色の髪をしたコネリーが付け加えた。

「何か手伝えることはあるかい、ジェイミ？」と若い男性の声がした。ジェイミが振り返ると、コンラッド・モーディングが囲いの手すりにもたれかかっていた。彼は母親と妹と同じ、独特のさびた赤黒い髪の色をしていた。レッドフィールド第一改革派バプテスト教会の日曜学校の後に一緒に遊んでから数年で、ジェイミは二フィートも伸び、今ではコンラッドより六インチも背が高くなっていた。

コンラッドが元ベビーシッターだというからかいの言葉を思い出し、ジェイミの目はジョアンに向いたが、ジョアンは黙って見ていた。

ジョアンは「見た？ ちゃんとおとなしくしてるよ」と言わんばかりに微笑んだ。

ジェイミはカウボーイハットを調節して緊張を隠し、それから元共同ベビーシッターに注意を向けた。「コンラッド？ 大

丈夫だよ。ただ、妹が安全説明に注意を払うようにしてくれ。」

コンラッドは親指を立てた。「了解、シュミットさん。聞こえたか、コネリー？ 聞く耳を持てよ！」

コネリーの聞く耳は真っ赤に燃え、他の少女たちが後ろでくすくす笑った。「コンラッド、もう子供じゃないんだから！ もう十歳だよ！」

コンラッドはコネリーのピンクのカウボーイハットを持ち上げて彼女の髪をくしゃくしゃにし、彼女の抗議の叫びを無視した。「やめてよ！」

コンラッドはハットをコネリーの目にかぶせ直し、それから手を叩いて他の笑っている誕生日ゲストたちを静めさせた。「よし、やめるよ！ 君はもう大きなお姉さんだね！ おい！ 他のみんなも静かに！」

コネリーの四人の女友達は背筋を伸ばした。「はい、モーディングさん！」

少女たちの反応から、ジェイミはコンラッドがそれぞれを一度はベビーシットしたことがあるのではないかと密かに疑った。彼にお尻叩きの権限が与えられているかどうかも気になった。

モーディング夫人は長男の頬をつまみながら甘えた声を出した。「コンラッドが今日は小さな子たちをまとめるのを手伝ってくれるって。男の人がいて『お父さんの声』で叱ってもらえると、本当に助かるわ！」

今度はコンラッドが慌てた様子だった。ジェイミは彼と目が合い、彼は咳をして帽子を直した。「よし、みんなシュミットさんに注目！」

少女たちがまた笑い始めると、ジェイミは指を口に入れて鋭い口笛を吹き、注意を引いた。

コネリーは目を見開いてジェイミを見上げた。「……わあ、あんなに大きな口笛が吹けるなんて知らなかった！」

「ありがとう、モーディング夫人！ …ありがとう、コンラッド。今日馬に乗りたい人は手を挙げて！」

すべての少女たちの手が上がった。

ジェイミは腕を組んだ。「よし、では鞍の点検の仕方を知っている人は手を挙げて。」少女たちはたじろぎ、手を下ろした。「まあ、鞍の付け方を知らなければ馬には乗せられないから、さあ始めよう！」

少女たちの注意をうまく引きつけ、ジェイミの授業はいつも通り進んだ。彼女は各少女に鞍ラックでの手順を教え、それから馬を紹介した。ジェイミはサー・ハミルトンに乗るのに最も慣れていたので、彼を囲いに連れて行った。

ジェイミは、両親が所有するアンティークの馬鞭や乗馬鞭のラックを注意深く無視した。ハリウッドのビジネスでは、歴史的に正確な小道具は主要な商品だった。彼女は過去にそれらの一つ一つで自分自身をお尻叩きにする空想をしてきたが、ジェイミは目の前の課題に集中するよう強制した。

「自分をお尻叩きにすることを考えるな。集中しろ！ やるべき仕事があるんだ！」

ジョアンは怪しいほどに親切で、ジェイミが必要なものを何でも持ってきて、サー・ハミルトンを鞍の準備のためにブラッシングするのを手伝った。

パパは自らサー・ハミルトンを調教したが、その種馬にはまだ野生の血が流れていた。ジェイミは彼の性格を理解し、バレルレースでの彼の活力を愛していたが、初心者の騎手には少し手強いかもしれなかった。ジェイミの計画は、安全デモンストレーションにサー・ハミルトンを使い、その後、穏やかな牝馬を連れ出して少女たちに鞍を付けさせ、その日の残りの時間乗らせることだった。

彼女は鞍をサー・ハミルトンに取り付けながら少女たちにクイズを出した。「これをどちら向きに付けるか知ってる人は？ …コネリー！」

コネリーは足のつま先でぴょんぴょん跳ねながら、手を上げた。「前の部分が頭の方に来て、その上に……えっと、ポケット？」

「正解！ ここがき甲（きこう）よ。見るより触った方がわかりやすいわ。触ってみたい人は？ …あら、みんな？ よし！」

ジェイミは四人の少女たちを順番に持ち上げて、サー・ハミルトンの肩の後ろのき甲を触らせた後、コンラッドがグループに加わっているのに気づいた。ジェイミは彼に微笑んだ。「持ち上げてあげようか、チビ？」

彼の身長をからかうのを無視して、コンラッドは手を上げてすぐに自分でき甲を見つけた。「すごく滑らかだな、ほとんど見えない。牝馬では違うのか？」

ジェイミは微笑んだ。「馬は人間と同じくらいそれぞれ違うけど、みんなき甲はあるよ。ここのサー・ハミルトンはちょっと筋肉質だから、触りやすいんだ！」

侮辱されたかのように、サー・ハミルトンは振り返ってジェイミを一瞥し、鼻を鳴らした。

コンラッドはサー・ハミルトンの肩甲骨の間を撫でた。「お前は彼のプライドを傷つけたと思うぞ。」

ジェイミはコンラッドを追い払い、サー・ハミルトンに優しく話しかけた。「彼は賢いんだ。褒め言葉だとわかってるよ。君は大きな筋肉質だね、そうだよ！」

コンラッドは妹とその友達を門の後ろに誘導した。

ジェイミはストラップを締めて固定し、その都度少女たちに鞍の各部分の名前を言わせ、リングを再確認することを強調した。何千回もやったように、ジェイミはサー・ハミルトンにまたがろうと準備し、左足をあぶみにしっかりと掛け、右足を跳ね上げて背中に乗せようとした。「さあ、ちょっと怖いけど、一気に滑らかに——」ジェイミが蹴り上げたとき、昨夜ベルトで自分を叩いたときのミミズ腫れが伸びて激しく痛み、「——やるんだよ？」

彼女が顔をしかめると、右足のつま先がサー・ハミルトンの後肢に当たった。ジェイミがこの安全デモンストレーション

を何千回もやってきたという事実は、彼女が何が起こっているかを、それが起こっているときに、スローモーションで理解するのに役立っただけだった。サー・ハミルトンは蹴られて飛び上がり、ジェイミは後ろに地面に向かって転がり、尻の部分に真っ先に落ちた。彼女は何かが左足を引っ張っているのを感じ、反射的に首と顔を守った。彼女は少女たちの悲鳴を聞き、砂が首の後ろを引っかくのを感じ、自分が引きずられていることを知った。少年の声が叫んだ。「おい、そこ！」

素早く足をひねり、ジェイミはあぶみからブーツを抜き、止まった。彼女の最初の考えはサー・ハミルトンのことだった。「ジョアン！ 手綱を！ 彼が自分を傷つける前に！」

ジェイミは起き上がり、そこにいたのはジョアンではなく、コンラッドがサー・ハミルトンを落ち着かせて手綱を取ろうと走っているのを見つけた。「おい！ 落ち着けよ、相棒！」

ジェイミは後ろから誰かに肩を掴まれるのを感じ、ジョアンが自分のそばに駆け寄ってきたのを見た。「どこか折れた感じは？」

ジェイミは深く数回息を吸い込み、自分の体を確認した。肩は痛かったが、折れた感じはなかった。しかし彼女の尻はズキズキし、同時に感覚がなくなり、転倒と引きずりの両方の衝撃を最も受けたに違いないと気づいた。後ろを見ると、彼女は少なくとも二十フィート引きずられてから体を振り解いたようだった。試しに脚を伸ばして立ち上がろうとした。「えっと……ジョアン？ 僕の……ズボンをチェックしてくれる？」

「ズボン？ おい！ 立ち上がろうとするな！ どこか折れてたら——」

ジェイミはコンラッドが自分に手を振り、手綱を持ってサー・ハミルトンを彼らに向かって連れて行こうとしているのを見て緊張した。「何も折れてないよ、ジョアン、ただズボンをチェックしてくれ！ お願い！ 急いで！」

ジョアンは口を開けて反論しようとしたが、コンラッドを見て徐々に理解し、目を見開いた。「ああ！ ズボンね！ うーん、ちょっと……傷んでるように見えるけど？」

ジェイミの手はお尻に飛んだが、その目的はコンラッドの注意をそこに向けないことだったことを思い出した。「傷んでる？ どういう意味？」

「ほら、学校の子たちが履いてる、裂け目のあるジーンズみたいな？」

「くそ！ 穴が開いてるのか？ パンティーが見えるのか？」ジェイミは息を吐いた。モーディング夫人、コネリー、そして他の少女たちが囲いの門を回って彼女の名前を呼んでいた。

ジョアンの頭は上下に動き、彼女はジェイミの後ろ姿を目立たずに検査しようとした。「穴じゃない！ もっとこう……風化した感じ？ 少し薄くなった部分があるけど——」

「ジェイミ？ 大丈夫か？」とコンラッドが確実に近づきながら呼びかけた。

ジェイミは背筋を伸ばし、コンラッドを見下ろした。「よくやってくれた、コンラッド！」

「君が引きずられているのを見てすぐに囲いに飛び込んだんだ。でも、君は自力であぶみから足を抜いた。すごいよ！」

ジェイミはカウボーイハットを手に取り、ズボンの尻の部分を隠すために後ろに持とうとしたが、ハットが二十フィート先に飛んでいったことに気づいた。ジェイミはジョアンが自分の後ろに寄ってくるのを感じ、ジョアンが戦略的に自分の位置を調整して「少し薄くなった部分」を隠そうとしているのではないかと思った。

怖くて振り返れず、ジェイミは咳をしてコンラッドから手綱を受け取った。「違うよ！ 君は素晴らしかった！ 馬が驚いて走り出すと、手綱が何かに引っかかって怪我をすることがあるんだ… 君は僕のヒーローだ！」

コンラッドは瞬きをし、それからジェイミの肩を軽く叩いた。「おや？ 役に立てて嬉しいよ！ たまたま正しい場所に正しい時にいただけだな！」

サー・ハミルトンの周りを横にスライドして自分の後ろ姿を視界から隠そうとしながら、ジェイミはモーディング夫人、コネリー、そして残りの誕生日パーティーの少女たちに向き直った。「さて、誰が私がそこで何を間違えたか言える？」

***

安全講義を終えた後、ジェイミはサー・ハミルトンを自分の馬房に戻すために退席し、自分のズボンの尻の部分を検査する機会を得た。確かに、少し擦り切れているように見えたが、無傷だった。「少し薄くなった部分」を触った後、ジェイミは家に走って新しいジーンズに履き替える価値があるかどうか自分と議論した。「どうでもいい、もう間抜けに見えてるし。もし誰かに気づかれても...注意しなかった自分が悪い。」

最も穏やかで優しい牝馬のピースを連れ出した後、少女たちは彼女をブラッシングし、鞍を付けることができた。ジェイミの忘れがたい安全デモンストレーションの後、乗るのを怖がる者もいたが、コネリーが最初に志願し、全員が何事もなくピースに乗って乗馬することができた。

ジェイミはレッスン全体を通して自分を蹴り飛ばしたい気分だった。しかしコネリーはハグで彼女を驚かせ、「最高の誕生日だった」と感謝し、モーディング夫人は将来、コネリーを定期的な乗馬レッスンに連れてくることを約束した。

ジョアンはコネリーの耳元でささやくふりをしたが、そのささやきがジェイミに聞こえるように大声で言った。「最初の教訓：馬から落ちるな！」

ジェイミはジョアンをクロスラインでタックルして地面に倒すことを想像したが、喧嘩を始めたことで当然のお尻叩きをされる自分を想像した。ジョアンが以前自分を助けてくれたことを思い出し、ジェイミはジョアンの嫌味を無視するよう自分に言い聞かせた。「第二の教訓：ふざけるな！」

コンラッドは振り返って彼女に帽子をチップした。「ありがとう、ジェイミ。ありがとう、ジョアン！ コネリーは楽しかったよ。」

ジェイミは自分の口が自動的に動くのを感じた。「ありがとう、コンラッド、私も楽しかったよ！」

「……私も楽しかったよ？ どういう意味だよ？」とジェイミは思った。ジョアンは横目で彼女を見て、さらに悪化させた。

コンラッドはくすくす笑った。「へへ。じゃあ、三人とも楽しめたってことだな！ 次のレッスンで会おう、ジェイミ！」

***

昼食時、パパはジェイミを偽の厳しさの表情で見つめた。「今日はひどい転び方をしたと聞いたぞ。何があった？ ふざけてたんじゃないだろうな？」

ジェイミは、パパが自分に怒っていると感じたからではなく、自分がまだどれほど愚かに感じているかという理由だけでうつむいた。「いいえ、パパ！ ただ馬への乗り方をしくじっただけです。」

ジョアンが口を挟んだ。「全部見てたよ。ジェイミはふざけてたわけじゃない、誰にでも起きることだよ！」

パパはうなずいた。「妹をかばってくれてありがとう、ジョアン！」

馬牧場では事故は起こるが、「ふざけるな」は鉄則だった。ジェイミが十三歳のとき、ジョアンと競走中に遊び心で自分の後ろを平手打ちし、足を滑らせて馬から後ろ向きに落ちた。その事件は、彼女の寝室での「真剣な話し合い」をもたらした。最初に、彼女はパパの膝の上にうつ伏せになり、ジーンズの上から古くて頼りになる手パドルでお尻叩きを耐えた。それからママはより創造的な道具、馬ブラシを選び、それを手のひらに巻き付けてから、ジェイミにお尻を裸にして膝の上に来るよう命じた。ブラシの硬い毛がひどくチクチクと刺すように痛んだ。一貫して使われる道具もいくつかあったが、ママとパパは必要に応じて「その場にある武器」を手に取ることを躊躇しなかった。

ジェイミは無実の過ちでお尻叩きをされることはないだろうと確信していたが、それでもその記憶は彼女を悩ませた。「もちろん、もし昨日自分をお尻叩きにしていなければ、おそらく乗り方をしくじることもなかっただろうから、ある意味では私のせいだ！」とジェイミは密かに思った。

心の奥底で、彼女はパパが自分にその場で膝の上にうつ伏せになるよう命じ、当然のお尻叩きを与えてくれるよう祈った。その代わりに、パパは支えるように手を彼女の肩に置いた。「まあ、無事でよかったよ、花火玉。」

ジェイミはママのミートローフを味わい、夏の午後を楽しみにした。レッスンを終えたので、ジェイミはその日の残りは自由だった。

ジュニパーはインゲンを食べるのを嫌がり、一つ吐き出した後、無遠慮にママの膝の上に引きずられ、木べらで六回の固いお尻叩きを受けた。

ママはジュニパーをテーブルの自分の席に座らせ、強調して指さした。「さあ、そこに座ってお皿をきれいに食べなさい。吐き出したりしたら、次は部屋に連れて行って『真剣な話し合い』をするからね。」

ジュニパーは泣き叫び、すすり泣いたが、それは痛みというより悲しみからだった。インゲンを食べ終えると、彼女は褒められてデザートを提供された。それでジュニパーは、お尻叩きがなかったかのように、元の自分に戻った。

「よくやった、ジュニパー！ できると思ってたよ！」とジャックが励ました。

「これでアイスクリームが食べられるね。素っ裸のお尻を叩かれるよりずっといいよ！」とジルが観察した。

ジョセフが郵便物を取りに行き、レッドフィールド・クリスチャン・スクールから最終成績通知が届いたと発表した。ジェイミは、この知らせにジョアンの目が大きく見開かれるのを気づいた。少なくとも、だらりとした髪の後ろに隠れていない方の目は。

パパは封筒を受け取り、それぞれに学校の印鑑が押されていた。「完璧だ！ 今年、君たちが何を学んだか見てみよう！」

ジェイミはキッチンの壁にあるお尻叩き道具のラックを一瞥し、一年生の時の薪小屋行きを痛いほど詳細に思い出した。今日、誰も追加の教訓を学ぶ必要がないことを願った。

「ジェイミ… 聖書クラスは予想通りAプラス。優等英語、家庭科、体育、スペイン語はA。化学と歴史はAマイナス… そして代数はBプラス？」

ジェイミは「Bプラス」という言葉を聞いて自分を蹴りたくなった。彼女は期末試験の後でそのクラスをAマイナスまで上げたいと思っていた。「もっと勉強できたはずだ！ パドルで叩かれるに値する！」と思った。

承認のうなずきとともに、パパはジェイミの成績表をママに手渡した。「よくやった、ジェイミ。これで二年連続の安定したA平均だ。」

ママはジュニパーのアルファベットの磁石タイルの一つを使って、ジェイミの成績を冷蔵庫に大きな赤いAの文字で表示した。

「次は… ジョアン！ 聖書がBプラス、英語、歴史、物理科学がB… 美術がAプラス、よくやった！ 幾何学がAマイナス… 自習時間があって… 家庭科がCプラス？」

ジョアンはごくりと飲み込んだ。学年の初め、彼女は家庭科でDを取って「授業での協力的でない態度」というメモを持って家に送り返された。それは彼女の部屋での「真剣な話し合い」をもたらし、もし勤勉さを改善しなければ次は薪小屋行きだと脅された。「本当に上げようと努力したんだけど、期末試験でマフィンを焦がしちゃって… それ以外は全部しっかりできてたって先生は言ってたよ！」

パパは成績を検討した。「まあ、家庭科で一度お尻叩きはしたし… 確かに一年を通してかなり改善した。よくやった、ジョアン。これも冷蔵庫に貼る価値があると思うよ！」

ママは黄色いBの磁石でジョアンの成績表を留めた。

パパはジャックとジルの成績表を読み、温かい称賛を送った。小学校はジュニパーの一年生クラスでは従来の成績評価システムを使っていなかったが、彼女はすべての科目で順調か期待以上であるという通知を受け取った。三つの手紙はすぐに冷蔵庫に誇らしげに貼られた。「ジョセフ、君のカルビン大学の成績表はもう見たよ。お尻叩きはなしだが、冷蔵庫に貼るものもないようだね！」

ジョセフは椅子にもたれかかった。「ああ、残念！」

ジェイミとジョアンは頻繁に「お尻叩きに年齢制限はない」と注意されていたが、ジョセフは最後に薪小屋に行ってから六年間、お尻叩きに値することを何もしていなかったという事実により、お尻叩きを無事に卒業したのではないかと疑っていた。

パパは最後の封筒に手を伸ばした。「残りは… ジェシカだ！」

しかしジェシカは封筒をひったくり、最初に開けた。ジェイミはジェシカが何気ないふりをしようとしてひどく失敗しているという奇妙な感覚を覚えた。「ああ、悪くないわ！ 期末試験の一つが難しかったけど、全体的には——」

「ジェシカ、事前分析は不要だ。見せなさい。」

ジェシカのそばかすは、青白い顔に鮮やかに浮かび上がり、彼女は成績表を手渡した。

パパはそれを黙って読み、各科目に順番にコメントするという自分の習慣を破った。「ジェシカ、どうして聖書クラスでCマイナスを取ったんだ？ 前回の成績表ではBプラスだったぞ。何があった？」

ジェシカはテーブルに肘をつきながら、無理に笑った。「面白い話なんだけど、期末試験がちょっと不意を突かれたの。ほら、持ち帰り試験だと思ってたから、他のクラスの詰め込み勉強を優先したのよ。だから、私が驚いたことに——」

「期末試験を失敗したのか？ ちょっと待て、クラスメートと先輩の映画の夜に行くときには、すべての課題が終わっていると明確に言っていたはずだ。」

ジェシカの唇は震え、彼女はパパからママへ、そしてそれぞれの兄弟姉妹へと順に見渡した。ジェイミはジェシカの目を見て彼女の痛みを感じたが、彼女に何ができただろうか？

ジェシカは自分に強く気丈に振る舞うよう強制し、無意識のうちにカジュアルな話し方から厳格な正式な話し方に切り替えた。「それは嘘ではありません、パパ！ 自分は追いついていると思っていました。なぜなら、持ち帰り試験があると思い込んでいたからです。それが持ち帰り試験ではないと知ったのは前日だけで、一晩中詰め込み勉強しました、覚えていますか？」

「これはジョーンズ先生の聖書クラスか？ どうして持ち帰り試験があると思い込んだんだ？ 彼がそう言って、後で考えを変えたのか？」

ジェシカは固まり、それから深く息を吸った。「いいえ、パパ。彼が持ち帰り試験について何か言っていたとは思いません。マーシーが今年は持ち帰り試験をやるとか何とか言っているのを聞いて、ただ… 思い込んだんだと思います？」

「まあ、思い込みが間違っていたわけだ。それに、期末試験の前日まで勉強を先延ばしにする理由にはならなかった。」

ジェシカの声は甲高くなり、反抗的な口調を抑えるのを忘れた。「だって、ごめんなさい、パパ！ 他の科目の勉強を一生懸命やったから、あの一つのクラスがおろそかになっただけよ！」

シュミット家の子供たちはたいてい父親を「パパ」と呼んでいた。娘たちは可愛らしい赤ちゃん言葉として、あるいはそのジョークが面白くなくなった後も長い間、故意にからかうためにだけ「ダディ」と呼んだ。後者の使用は数回のお尻叩きで止められた。

パパはジェシカの成績表を彼女が見えるように置き、テーブルに手を組んだ。「お前は『シニア症候群』にかかっているんだ、ジェシカ。その『一つのクラス』は聖書クラスであり、カリキュラムの中心だ。そして全体的な平均はBマイナスだ。もし聖書クラスを犠牲にして他のクラスを勉強したの

なら、その成果が見えない。三年生の時はA平均だった。自分について何か言い分はあるか？」

「やめるんだ、ジェシカ！ 彼は逃げ道をくれてるんだ！ ただ謝って、もっと頑張ると約束するんだ！『ジェイミみたいな真似』をして、もっと悪化させるな！」とジェイミは思った。

残念ながら、ジェシカはジェイミの心を読むことができなかった。「何がそんなに大したことなの？ もう卒業したわ！ 大学にも奨学金で合格してるの！ 取り消されるわけないでしょ！」

パパはゆっくりと立ち上がった。「取り消されるかもしれなかったぞ、ジェシカ。もし最後の瞬間に高校卒業を逃すところだったら。そして君はその紙一重のところだったんだ。自分の部屋に行きなさい。すぐに話しに行く。」

ジェシカは怖じ気づいた。「お尻叩きをするつもり？」

「それについては、ここで兄弟たちの前で話す必要はないよ、もし君が望まなければ。」

ジェシカの出っ歯が彼女の牙を剥き出しにした。ジェイミはいつもジェシカはドリー・パートンとかなり怒った豊満なリスを掛け合わせたような印象を持っていた。「ちょっと待って！ それは不公平よ！ ジョアンはCプラスでお尻叩きされてないわ！ 彼女は冷蔵庫に貼られたのに！」

ジョアンは椅子に沈み込み、この議論に巻き込まれたくないと静かに願った。

パパの声は怒っていなかったが、制御された鋭さがあり、ジェシカもそれを認識した。「ジョアンは成績不振で一度お尻叩きをされ、最悪の成績をDマイナスからCプラスに上げる努力をし、すべての成績を全体的に向上させた。お前はお尻叩きを受けていない。なぜなら、学年をA平均で始め、それを高校の最終学期で台無しにしたからだ。問題は成績そのものではなく、お尻叩きに値するのはお前の態度だ。さあ、ジェシカ、選択肢をやろう。お前の態度について部屋で二人きりで話し合うか、それともここキッチンでお尻叩きをしてから薪小屋に連れて行くか。どちらにする？」

ジェイミはジェシカの目に怒りの閃きを見たが、理性が勝った。「私… ごめんなさい、パパ。どうか薪小屋には連れて行かないで。」

パパはジェシカの部屋を指さした。「できるならそうしたくない。まっすぐ自分の部屋に行きなさい、ジェシカ。お母さんと私はすぐに行く。」

ジェシカの顔がすべてを物語っていた。彼女は自分が絶望的なことを知っていたが、ジェイミはジェシカが少なくとも薪小屋行きは免れたという知らせに、恐怖ではなく安堵で震えているように感じた。

シュミット家ではお尻叩きは日常茶飯事だったが、誰も努力せずに薪小屋行きを稼ぐことはなかった。事実上、薪小屋行きを頼まなければならず、その旅行の目的は、すぐにまた頼まないようにさせることだった。

ジェシカの椅子が床を擦るきしみ音が重苦しい沈黙を破り、ジェシカは鼻をすする音を立てながら、頭を高く上げて

自分の部屋に行進しようとした。彼女は十八歳で、これから素っ裸のお尻叩きがあることを知っていた。彼女の口論のおかげで、ジェシカはお尻叩きされようとしているふりをするという尊厳さえ持てなかった。兄弟たちは皆とにかく彼女の運命を容易に推測しただろうが、少なくとも彼女には否認の可能性があったのに。

パパはため息をついた。彼は大切な子供たちを罰しなければならないことを嫌っていた。「ジャック、ジル、ジュニパー、外で遊びなさい。ジェイミ、ジョアン、君たちは部屋から何か必要なものはあるか？」

ジェイミは自分の名前を呼ばれて、突然背筋を伸ばした。「ああ！ 今日は読書をするつもりでした。夏の読書感想文に早めに取り掛かろうと思って。」実際、ジェイミは今日そんな計画は何も立てていなかったが、どういうわけか、もう一分でも宿題を先延ばしにしたいとは思わなかった。

パパはうなずいた。「必要なものを取りに行きなさい。中断されないように外で読む方がいいだろう。」

ジェイミとジョアンはうなずき、丁寧に家の外に出るよう命じられていることを理解した。お尻叩きは国家機密ではなかったが、パパは明らかにジェシカの試練にさらなる屈辱を加えたくなかった。

ジェイミがジェシカの寝室を通り過ぎると、半開きのドアの隙間から、年上の姉がベッドの上で静かに泣いているのがちらりと見えた。ジェイミの頭の奥の小さな意地悪な声が、本を探すふりをしてゆっくりし、お尻叩きの始まりを立ち聞きするよう促したが、ジェイミは悪魔に黙れと言った。

自動操縦で歩きながら、ジェイミはお気に入りの本『赤毛のアン』を手に取ったが、それについての読書感想文はもう書いてしまったことを思い出した。来年度の英語クラスのための素晴らしい本の山を見て、彼女は山の上の方から分厚い一冊を手に取った。それにはママからのおすすめの付箋が貼ってあったが、ジェイミは表紙を確認しなかった。

ジェイミの耳にはジェシカの泣き声が醜いすすり泣きに変わっており、彼女が廊下を飛び出して台所を通り過ぎるとき、ママとパパのささやき合いの一部を聞かずにはいられなかった。

「……彼女にベルトは必要ないと思うわよね、パパ？」

「いや、しかし手パドルは使う。」

「ああ、もちろん、少なくともそれね！ 大学に行く前に、芽のうちに摘んでおく必要があるわ。」

「もしお前がウォームアップをしてやれば、ジェスが落ち着いてパドルのために身構える時間ができるだろう。できるか、ママ？」

ママは袖をまくり上げた。「やりたくはないけど、できるし、やるわ！」

ジェイミはモカシンを履いて外に出て、ポーチの椅子の一つに座り込んで、指定された読書を始めた。

「『罪と罰』フョードル・ドストエフスキー著？」ジェイミは表紙を調べながら読み上げた。「どうして、どういうわけか、この本に共感できる気がするんだろう？」

家の中から、ジェイミは平手打ちのくぐもった音と、ママが確かにウォームアップのお尻叩きをしているときのジェシカの苦痛の叫びを聞き取ることができた。この家の薄い壁を呪え！ ジェイミは十分に遠くに行っていなかった。

彼女の前方に、ジェシカが辛うじて免れた薪小屋が見えた。ジェイミは独り言をつぶやいた。「ええい！ もしパパが彼女を薪小屋に連れて行ったら、あちこち物を動かすはずだ。彼は——」

ジェイミは言葉を止め、ポーチの反対側の手すりにもたれかかるジョアンを目にした。ジェイミの耳には届かない距離だが、おそらくジェシカのお尻叩きの半分くぐもった音は届く距離だった。

ジェイミとジョアンの目が合った。ジョアンの目つきの何かがジェイミを悩ませた。「彼女は私がジェシカのお尻叩きを聞き耳を立てていると思っているのか？ まあ、私は本当にそうしてるわけじゃないし、たとえそうだとしても、彼女もそうしてるんだろ？」

ママの平手打ちが一定のリズムに達し、ジェシカの悲鳴や約束や謝罪がすべて長く続く泣き声に溶けていく中、ジェイミはかかとを上げて本を開いた。

ジェイミは次の数分間、タイトルページをじっと見つめながら、ジェシカのお尻叩きのほとんどを聞いてしまった。つい

に間があり、ジェイミは第一章を開いた。「七月の初めの、とりわけ暑い夕方、一人の若者が、彼が下宿していた屋根裏部屋から出てきた……」

手パドルがB平均の学生の素っ裸の後ろ側に叩きつける重い音が沈黙を破り、ジェシカの叫び声は新たな慈悲の嘆願とともに再開した。ジェイミは経験から、ジェシカがその道具で三十六回の打撃を受けるだろうと推測した。その数は彼女の年齢の二倍に等しく、ジェシカが行儀よく勇敢にお尻叩きに耐えることを前提としていた。

ちょうど三十六回の打撃の後、パドルの音は消えた。壁はちょうど、ジェシカの悔恨の涙、追加の親の説教、あるいは懲罰に続く慰めの言葉の音を隠すのに十分な厚さだった。ジェイミは『罪と罰』の最初の文をさらに数秒間見つめてから、それを投げ捨てた。「くそ、宿題は明日やろう。」

ジェイミが『赤毛のアン』のランダムなページを、どこから始めても構わずに開くと、彼女は薪小屋を見上げた。椅子に座ったまま体をひねると、ジェイミは座る部分の残るミミズ腫れが柔らかくぶるぶると震えているのを感じた。「俺がやられるべきだったのに…」

第III章 終わり

第Ⅳ章：痛みを分かち合って

ジェイミが『赤毛のアン』をぱらぱらとめくりながら、彼女は記憶からお気に入りの言葉をささやいた。レイチェル・リンド夫人のセリフを引用して。「でも、もし私の忠告を聞くなら——聞かないだろうけどね、私は十人の子供を育てて二人を埋葬してきたんだから——あんたが言ってるあの『お説教』ってやつは、適当な大きさの白樺のむちでやることね。ああいうタイプの子供には、それが一番効果的な言葉遣いだと思うわ。あの子の気性は髪の毛に負けず劣らずだろうからね……」

ジェイミはその言葉を初めて読んだ時の電撃的な感覚を覚えており、すぐにその含意を推測した。アン・シャーリーはお尻叩きをされることになるのだ。当時、ジェイミはその箇所に印をつけたかったが、思いとどまった。もし誰かがこの本を読んで、お尻叩きに関する記述がすべてマークされているという奇妙な傾向に気づいたらどうしよう？

ジェイミは今でも、数ページ後でアンの養母マリラがアンをお尻叩きにするのをやめることに決めたときの、安堵と失望が入り混じった奇妙な感覚を覚えている。

水しぶきの音がして、ジェイミが顔を上げると、ジャックとジルが薪小屋の近くの水たまりで交代で飛び跳ねているのが見えた。もし彼らが中に入ってあちこち探検したらどうしよう？ ジェイミは息を整えた。彼女は何も心配していなかった。今夜までに誰も薪小屋行きを稼がなければ、彼女は大丈夫だった。

ぼんやりと、ジェイミは本をめくり、それが自然と同じ数ページ、彼女が何度も何度も読み返したあのページに開くのを見た。「むちの穏やかな提案——レイチェル夫人の子供たち全員が、その効果に痛みを伴う証言をすることができただろう——はマリラには魅力的に映らなかった……」

幼い頃、ジェイミは自分がマリラと議論しているのに気づいた。どうしてマリラは癇癪を起こしたアンをお尻叩きにしないのか？ どうして子供が癇癪を起こしてもお尻叩きをされないことがあり得るのか？

それは小さなジェイミを十分に悩ませ、夕食時に会話がひとしきり盛り上がった。ママとパパは、奇妙なことに、お尻叩きよりもタイムアウトのような他の罰を好む親もいるのだと説明した。そしてさらに奇妙なことに、お尻叩きをまったくしない親もいるのだという。この啓示はシュミット家の幼い子供たちの心を震撼させた。お母さんやお父さんの中には、子供をお尻叩きにしない人もいるのか？

「でも、なんで？ 私が罪を犯したら、愛しているからお尻を叩いてタイムアウトにしなきゃいけないんでしょ。彼らは悪い子をお尻叩きにするほど子供を愛してないの？ お尻叩きなしでどうやって良いことを覚えていられるの？」と小さなジェイミは尋ねた。

当時、ママとパパはジェイミに笑いかけ、「早熟な子だ」と言った。パパはジェイミを膝の上に座らせ、すべてを落ち着いて説明した。「お前を叩かなきゃならないのは嫌だけど、叩くときは、お前がいい女に育ってほしいから叩くんだ。お尻叩きが子供に良いことを教えるために必要なことだと知らない親もいる。それは彼らが子供を愛していないという意

味ではなく、ただ… 間違った考えを持っているだけだ。混乱しているんだ。」

現在、ジェイミは息をもらしてつぶやいた。「混乱している…」

ジェイミは、自分の『赤毛のアン』がお尻叩きへのほのめかしや、逃した機会のすべてに自然に開かれることに気づいて、ごくりと飲み込んだ。

まず、それは無作為に見えるページ、アンが友人のダイアナ・バリーにイチゴのコーディアルの代わりにワインを出し、誤ってダイアナを酔わせてしまった章に開いた。そしてそこにあったのは、マリラがこう宣言する段落だった。「私はあの子にはっきりと言ったのよ。カラントワインは一度に三杯も飲むものじゃないって。もし私が育てている子供がそんなに欲張りなら、きちんとお尻を叩いて正気に戻してやるわってね。」

しかし、それでは意味が通じなかった！ マリラは以前アンをお尻叩きにしなかった。マリラは子供を叩くことができないと思ったからだ。これは、もしアンが誤って三杯のワインを飲んでいたら、マリラもアンを叩いていたという意味だろうか？ しかし、その場合、マリラはダイアナを「正気に戻す」ために叩かなかったのはなぜか？ そしてダイアナは、画面外でバリー夫人にお尻叩きをされたことがあるのだろうか？

確かに『赤毛のアン』はジェイミにとって世界で一番好きな本だったが、まるでL.M.モンゴメリがこの本全体をジェイミをからかうためだけに書いたかのようだった。

ジェイミはページを指でなぞり、案の定、また別の大切な場面に開いた。アンが自分の赤毛をからかったギルバート・ブライスの頭に石板を叩きつけた場面だ。確かに、これはお尻叩きにならなければおかしい。しかし、いや、アンは教室の前に立たされただけで、背後に「アン・シャーリーは気性が荒い。アン・シャーリーは気性を抑えることを学ばねばならない」とチョークで書かれただけだった。

ジェイミはぶつぶつ言った。何年経っても、ジェイミはこの章を読み返すたびにまったく同じ気持ちになるのだった。「『アンはこの罰よりもむち打ちをはるかに望んだであろう。その罰の下で彼女の繊細な精神は鞭打ちのように震えたのだ。』… ほら、アン自身も私に同意して、自分が罰に値するって認めてるじゃないか。この女の子は、思い切りよく、硬く、素っ裸のお尻を叩かれるのを切望している——」

ジョアンがジェイミの肩に現れた。「本はどう？」

ジェイミは驚いて、本が手から飛び出し、窓にぶつかってチンという音を立て、それからパタリと鋭い音を立てて床に落ちた。「もう、忍び寄るのはやめてくれない？」

ジョアンは反射的に身をかがめ、それから笑った。「ごめん、前世は忍者だったのかもね。」

ジェイミの顔が真っ赤に染まった。「ジョアン、そんなの前世なんてないよ。聖書には——いった！」

ジェイミが本を拾おうと手を伸ばすと、今朝、馬から落ちてお尻にぶつけた打撲傷の上で、自分で加えたお尻叩きの水ぶくれが耐え難く伸びるのを感じて身をすくめた。

ジェイミの手がためらっているのに気づくと、ジョアンは本をひったくり、遊び心でめくりながら、ページが毎回同じ数か所に開くのを見せた。「じゃあ、もし私がいたずらな忍者で、神様の裁きで元の殺人鬼で異教の忍者ライフスタイルのカルマ的正義としてお尻叩きを受ける非忍者に生まれ変わることになったらどうする？」

ジェイミはジョアンから本を奪い返し、使い込まれたカバーのほこりを払った。「人生は一度きりだよ…『人は一度死ぬこと、そしてその後に裁きがあることは定まっている。キリストもまた、多くの人の罪を負うために一度だけささげられた…』神の言葉を気にしないの？」

ジョアンは腕を組んだ。「おい、私は聖書が大好きだよ。聖書を信じてる。ただ… 別の理論を考えるのが楽しいんだ。」

「その『別の理論』のいくつかをママとパパに説明してみたらどうだ？ やってみなよ！ もし異端を楽しんでるなら、いいお尻叩きが必要だよ。」

ジョアンは前髪を目の前から払いのけた。「もちろんするよ、でもそれでじゃないよ。ああ、それと、言っておくけど、私はパパに輪廻転生について尋ねたことがあるんだ。聖書のことについてはいつも聞いてるよ。君もやってみるべきだ。彼はいろんなかっこいい話を知ってるんだ。セックス。暴力。裏切り。教会史はメタルだ。」

「静かに本を読ませてくれないか？」

ジョアンは眉を上げた。「ジェシカのお尻叩きの音楽的な伴奏付きで、ただ静かに本を読みたいだけ？」

ジェイミは顔を赤らめ、玄関の方を向いて耳を澄ませた。「しっ！ ジェシカの盗み聞きをしちゃいけないって言われてるだろ。それに、もうとっくに終わったよ。」

「本当？ どうしてわかるの？」

ジェイミは息を呑んだ。「わかったよ。聞き耳を立てようとしたわけじゃない。本を読みに来たんだ。それで… 物音が聞こえたから、本に没頭して遮断しようとしたんだ。満足した？」

ジョアンは降参のポーズで両手を上げた。「わあ、落ち着けよ、イージー・エディ！ 責めてるわけじゃないよ。私も同じだったんだ。十分離れてると思ったけど、でも… この血みたいに薄い壁だよ。お尻叩きのたびに、理論上はプライベートでも、結局はみんなに知られちゃうんだ。」

ジェイミは本に鼻を埋めるふりをして、自分がそれを逆さまに持っていることに気づいた。「そうだな、それが人生だ。セ・ラ・ヴィ。（それが人生さ）」

ジョアンは両手を後ろのポケットに入れた。「… 私たちって、すごく頻繁にお尻叩きされてると思う？ つまり、他の子たちと比べて？」

ジェイミはごくりと飲み込んだ。彼女はここ数年、毎日そのことを考えていた。「教会の女の子たちはみんなまだお尻叩きされてるよ。」

ジョアンはジェイミの椅子の肘掛けに自分の腰を預けた。「… 公立学校の子たちはされてなかったよ。」

これを聞いて、ジェイミの耳がぴくっと動き、彼女はついに本を置いた。「あんたのあの魔女みたいな友達たちには確かに必要だったろうな。公立学校が懐かしいのか？」

ジョアンの鼻の穴が広がるのを見て、ジェイミは彼女の痛いところを突いたことに気づいた。これでジェイミが満足することはなかったが、ジョアンにポイントを入れる時が来たと感じずにはいられなかった。

三年前、ジョアンが中学校に進学する準備をしていたとき、彼女はしつこく絶え間なく議論し、レッドフィールド・クリスチャン・スクールではなく公立学校に入れてもらいたいと主張した。

すべてのシュミット家の子供たちを驚かせて、多くの激しい議論とジョアンへのお尻叩きの末、両親はついに折れた。

ジョアンは公立学校にちょうど一学期間通ったが、高校生たちとのパーティーで… アルコールで捕まるという結末を迎えた。「違う、あの精神病患者たちは私の友達じゃなかった。一度も友達じゃなかった。ただ言ってるのは、ほとんどの子供は十二歳くらいでお尻叩きをされなくなるってことだ。そもそもお尻叩きをされたことがあるとしても。レッドフィールド・クリスチャンの子供たちでさえそうだ。女子更衣

室で戦略的に赤いお尻を隠さなきゃならなかったことはある？ 私たちは少数派なんだよ。」

ジェイミはため息をついた。「わかった、何が言いたいんだ？ 不公平だと思うのか？ 自分のお尻だけは惜しまれず、晒されずに済むべきだと思うのか？ 抗議のプラカードを作ってやろうか、どうなるか見てみよう！」

ジョアンは額を揉んだ。「それが私の言いたいことなんだ。不公平だとは思わない。人生で一度も、ふさわしくない本物のお尻叩きを受けたことはない。念のためのお尻叩きはあまり気にしない。うるさいけど、まあいいや。でも、本当のやつ、自分の部屋でのヘアブラシやパドル、あるいは… 薪小屋でのやつは？ あれの一つ一つは、自分に値するってわかってる。」

ジェイミは鼻を鳴らした。「やっとまともなことを言ったな。」

ジョアンの目が鋭くなり、彼女はかろうじて叫ぶのを抑えた。「君は、とんでもない… 三秒間、からかうのをやめてくれないか？」

ジェイミは自分の本を指さした。「何を言ってるんだ？ からかってるのは君の方だ。」

ジョアンは目を回しかけたが、わざとその動作を止めた。シュミット家の子供たちは皆、目を回したことで「真剣な話し合い」をした記憶を持っていた。「どうでもいいよ。本を楽しんでな。」

ジョアンが背を向けると、ジェイミは突然自分が嫌な奴のように感じた。「イエスならどうするだろう？」と思った。

ジェイミは鹿のように跳ねてジョアンに追いついた。「待って、ジョアン？ ちょっと待って！ … ごめん。君が俺のボタンを押そうとしてると思ったから、俺も君のボタンを押そうとしたんだ、そして… 俺が悪かった。」

ジョアンは怒りをあらわにした。ついに、ジョアンは手を差し出し、ジェイミは握手した。それからジョアンは狐のような笑みを浮かべた。「私が酒盛りパーティーで捕まった時のこと覚えてる？」

握手を終えると、彼らは並んで歩き始めた。ジェイミは笑った。「覚えてるさ？ パパが警官に連れられて帰ってきた君のお尻を薪小屋に連れて行かなかったなんて信じられないよ。」

「見ろ？ これが私が言いたかったことなんだ。自分は終わったと思った。薪小屋行き、たぶん一年分の素っ裸の就寝前お尻叩きで強化だって。それでママとパパは私を部屋に連れて行ったんだ…」

ジェイミは興味の兆しを隠すように顔を注意深く制御し、ただジョアンに話し続けさせるよう自分に言い聞かせた。「… そして彼らは実際に私の言い分を聞いてくれたんだ。アルコールのことを知らなかったって。」

ジェイミは皮肉なことを言いたくなったが、考えを変えた。「そうだな、確かに知らなかったんだろうな… つまり、どうし

て気づかなかったんだ？ アルコールって… 味が強いんじゃないか？」

ジェイミのアルコールに関する唯一の経験は聖餐のワインだけだった。

ジョアンは砂利道の石を蹴った。「パーティーの連中はダイエットコークだって言ったんだ。私はバカだった。ああ、そうだ、彼らがみんな酒を飲んでるのはわかってたけど、ポップに酒を入れるなんて知らなかった。それで変な感じがしたから… パパに電話したんだ。」

ジェイミは感心と懐疑が入り混じった気持ちになった。「本当に？ そんなことしてたなんて知らなかったよ… 待って、警官が君を家に連れて帰ったんじゃなかったのか？」

「私がまだ電話してる間にパーティーは解散させられたんだ。パパは私の叫び声で心臓発作になりかけたって言ってたよ。」

ジェイミはうなずいた。「ああ、そうだ！ わあ、思い出させてくれたね。ママは君が刑務所に行くって泣いてて、みんな君が撃たれたか何かと思ってたよ…」

ジェイミは別の何かを思い出して固まった。同じ週の初め、十四歳のジェイミは一年生の中間成績表がひどかったために薪小屋に連れて行かれた。ジェイミの口の利き方のおかげで、彼女は追加で一週間分の就寝前お尻叩きを強化として稼いだ。ジェイミはまだ傷を癒やし、パジャマ姿で次の就寝前お尻叩きを待っているときに、その大惨事は起きたのだった。

ジェイミはジーンズの後ろポケットに手を突っ込んだ。「じゃあ、アルコールだと知らなかったから、薪小屋行きは免れたってこと？ 何をもらったんだ、ヘアブラシか？」

この質問に、ジョアンは急に気まずそうになった。「... 実は、彼らはお尻叩きなしで許してくれるつもりだったんだ。」

ジェイミは歩くのを止め、聞き間違いだと確信した。「... お尻叩きなしで？」

「そう、俺も信じられなかったよ。パパは、わざと酔ったわけじゃないから、それは故意の不服従ではなく過ちだと言ったんだ。それに、魔女たちがただの普通の勉強会だって言って、私をそこに置き去りにしたって彼は信じてくれた。すぐに電話しなかったのはバカだったけど——いや、彼は『バカ』とは言わなかった。ああ、そうだ！『世間知らず』だって言われたけど、世間知らずは罪じゃないし、自分が酒を飲んでいたとわかった時点で正しい行動をとったから ... だから...」

ジェイミはうなずいた。「だから、お尻叩きはなし。」

ジョアンは足を引きずりながら、薪小屋を一瞥した。「まあね。罪悪感がすごくて、もっと早く電話しなかったことをバカだったと、就寝前のお尻叩きをしてもらうように実際に話し合ったんだ。でも彼らは『優しい念押し』だけをくれた。ほとんど痛くなかったけど、どういうわけか... 心地よかったんだ？」

ジェイミはジョアンの視線を追い、薪小屋を見つけた。「そう言うならね。」

「君は自分が値すると思ったら、ママかパパにお尻叩きを頼んだことはないの？」

ジェイミは首を振った。「自分を『真剣な話し合い』にアップグレードしたのを、頼んだことに入れるなら別だけどね。」

その時、薪小屋の光景が記憶を呼び覚ました。ジョアンを警察が拘束したという興奮のすべてで、ママとパパはその夜ジェイミに就寝前のお尻叩きをするのを忘れていた。ジェイミはその夜、ベッドに横たわり、自分の番を待ちながら、寝室のドアをノックする音を恐れ、自分で両親のドアをノックして、お尻を叩くように思い出させたいと切望した… ただ早く終わらせたいと思いながら… しかしジェイミにはその勇気がなかった。

ジェイミはジョアンがくすくす笑うのを聞いて、回想から我に返った。ジョアンは前髪を払いのけ、モナリザのような微笑みを浮かべた。「へへ、君は確かにそれをよくやるね！ まるでまるで…」

ジェイミはジョアンを振り返った。ジョアンの微笑みの何かが、農場の猫が捕まえたネズミを弄んでいるのを思い出させた。「何？」

ジョアンは踵を返して家に向かってゆっくり歩き出した。「何でもない。もっと君がお尻叩きされることをからかおうと思ったけど、親切にしてあげることにしたんだ。話を聞いてくれてありがとう、ジェイミ。変な話だけど、ママやパパには何で

も話せるんだ、恥ずかしいことでも。でも君に話すと... まあ、この世で私だけがまだお尻叩きされてる子供じゃないってわかって良かったよ。可哀想なジェシカ、彼女はあと少しで薪小屋行きを勝ち取るところだったのに。」

ジェイミはようやくリラックスした。もちろん、ジョアンが薪小屋に興味を持っていたからといって、それが必ずしも何かを意味するわけではなかった。薪小屋はシュミット家の子供たち全員にとって忘れがたい場所だった。ジェイミはただ、馬のレッスンの大惨事の前に、もっと早く薪小屋から自分の荷物を回収しておけばよかったと願っただけだった。

今はあまりにも多くの潜在的目撃者がいた。彼女はジャックとジルがくすくす笑うのを聞き、彼らが今度は交代でホースで水をかけ合っているのを見た。

ジェイミはジョアンに追いついた。「彼女が追加の罰をもらってなければいいけどね。結局、ジェシカは私の一番好きな姉なんだから。」

ジョアンはジェイミにウインクした。「私もだよ。」

気分を害することなく、ジェイミは笑った。それは幼い頃からの彼女とジョアンのお気に入りの共通のジョークだった。入り口で靴を脱ぐと、ジェイミとジョアンはジェシカのお尻叩きに関する自分の推測をささやき合った。角を曲がった瞬間、彼らはジェシカが居間の四本脚のスツールに座り、聖書を読んでいるのに気づいた。それは間違いなく昔ながらのタイムアウトだった。「... 悪い兆候だ」とジェイミはささやいた。

ジェシカは手編みのお下がりのパジャマを着ていたが、ジェイミはすぐにそれを認識した。それはグランマからママへ、ママからジェシカへ、そしてジェシカからジェイミへと受け継がれてきたものだった。二度の成長スパートの後、ジェイミはそのパジャマを完全に着られなくなり、それらはジェシカに戻され、彼女はいつもそれらが非常に快適だと感じていた。それはシンプルな花柄のワンピースタイプで、幼い子供向けのお尻の部分がボタンで開くようになっていた。しかしグランマは「成長するために」たっぷりの余裕を残しており、ジェシカはそれを完全に着られなくなったことは一度もなかった。

ジョアンは想像上のカウボーイハットをチップし、パパの野太い声を真似た。「やあ、シマリスちゃん。調子はどうだい？」

微笑みながら、ジェシカは自分に向き直ってジョアンとジェイミと向き合うために座席で体を動かし、聖書を膝の上に置いた。「こんにちは、サンシャイン。やあ、ファイアクラッカー。」

ジェイミの喉は締め付けられ、自分もまさにその同じパジャマを着て早く寝るように言われた時のことを思い出した。「… 大丈夫か、ジェシカ？」

ジェシカはそわそわした。「かなり熱かったよ。最初はすごく落ち着きがなかったから、ウォームアップとして特別に長い平手打ちを稼いだんだ。でもパパはパドルはよく耐えたって言ってくれたから、余分なパドルの打撃はなかったよ。その後、いい話し合いができた。まだ少し痛むけど、今はだいぶ気分がいいよ。」

ジェイミはうなずいた。「じゃあ、なんでパジャマなんだ？ まだ火の粉が飛んでるのか？」

ジェシカは肩のほこりを払い、奇妙なほど誇らしげだった。「ああ、これは自分で着たんだよ。薪小屋行きにこんなに近かったから、ママとパパは執行猶予中って言ったんだ。前期にざっと流し読みした聖書の章を全部読み直して、この夏にエッセイを書かなきゃいけないけど、それは大したことじゃない。本当に考えるのに役立つんだ、その間…」

ジョアンがジェシカの言葉を引き継いだ。「… タイムアウトに縛られている間に？」

ジェシカは緊張して聖書のページを親指でなぞった。「… うん、それが執行猶予の一部なんだ。罰が公平かどうか話し合ったとき… 今夜、就寝前のお尻叩きをもらうことで同意したんだ。だから、今は楽しみなことがあるんだよ！」

ジョアンは口笛を吹いた。「すごいな、お尻叩きに関しては、ママとパパは中途半端なことをしないんだな！ 君がそんなに落ち着いてるなんて驚きだよ。」

ジェシカはお世辞を言われて嬉しそうだった。「実は、私のアイデアなんだ。薪小屋に行かなかったんだから、就寝前のお尻叩きが最低限値するものだと思ったんだ。」

ジェイミは額に冷や汗が浮かぶのを感じた。「何晩分？」

ジェシカは出っ歯を見せた。「一晩だけ。今夜の後は、社会への借りを返したことになるわ… 聖書のエッセイを先延ばしにしなければね、それは絶対にしないと決めてるから。」

ジョアンは小悪魔のように微笑んだ。「で、今のお尻はどのくらい赤いの？」

ジェイミは膝をロックし、それから血行を止めないようにリラックスすることを強制した。かつて、九歳のジェイミは、板のように長く立ちすぎて気を失ったことがあった。それはまさにママとパパが結婚十五周年を祝って結婚の誓いを更新している最中だった。

ジェシカはジョアンにしかめ面をした。「赤いよ、何だと思ってるの？」

ジョアンの目が輝いた。「そうだけど、どのくらい赤いの？」

ジェシカは壁に向かって鼻をつけるために座席で体をひねった。「あなたに関係ないでしょ！」

ジェシカが体をひねると、ジェイミは古いパジャマがジェシカの広い腰をいっぱいに満たしていることに気づかずにはいられなかった。お尻の部分のボタンの一つは何年も前に外れており、緩んだフラップの角がジェシカの左上の臀部の数平方インチをからかうように露出させていた。露出した肉の細片は明るいピンク色で、ジェシカのパジャマの色と完璧に一致しており、ジェイミはそれに前に気づかなかった。

膝が震え、ジェイミは突然頭がくらくらした。

ジョアンは前に身を乗り出し、ジェシカに最高の子犬のような目を向け、両手を上げた。「お願い？ 大好きな姉さんが輝かしい手本を見せてくれなきゃ、どうやって学べばいいの？」

ジェシカは口をとがらせ、座席で体をひねってジェイミの方を向いた。「ふん！ 君はただからかう機会を狙ってるだけだよ… でもジェイミがちゃんと頼んで、君を抑えると約束してくれたら、考え直してもいいよ。」

ジェイミの喉はからからに渇き、ジョアンとジェシカの両方が彼女を見上げた。彼女は肩の天使が、うつ伏せに肩に倒れ込むのを想像した。「やれよ、ジェイミ！ ジョアンのために！ 彼女は聖書を読まない悪い子に何が起こるかを正確に見る必要があるんだ！」

ジェイミの肩の悪魔は猫のように彼女の背中を爪で登った。「そうだ！ あの燃えるように熱くて真っ赤なケツを見たいんだ！」

肩の天使は突然激怒したように見えた。「この悪魔め！ それはジェイミの大切な姉だ！ よくもそんな下品な言い方を！」

肩の悪魔は二股に分かれた舌を出した。「偽りの信心はやめろ、キラキラケツめ、君が先に頼んだんだぞ！」

ジェシカは偽の厳しさでジェイミを見つめ、指でパジャマの緩んだフラップを弄っていた。「さあ、ジェイミ？ ちょっと見たい？」

ジェイミは突然、耐え難い頭痛が襲ってきた。彼女はちょっと見るだけではるかに遠く及ばないものを望んでいた。「やめろ、ジョアン、それは正しくない。ママとパパはジェシカをプライベートでお尻叩きにしたんだ。彼女の屈辱を増やすべきじゃない。」

ジョアンはクリスマスが中止になったように見えた。

ジェシカは首をかしげた。「あら、君は本当に思いやりがあるのね、ジェイミ…」

ジェイミが何かをする前に、ジェシカは立ち上がり、パジャマのお尻の部分を留めている唯一のボタンを外し、ゆっくりとフラップを下げた。ジェシカは完全に満足しているように見えた。「… でも、君たち二人と一緒に泡風呂に何度も入ったわよ。ここに君たちが見たことのないものなんて何もないよ！」

ジョアンは口笛を吹き、膝に手をついてジェシカが手パドルと対峙した結果を調べた。ジェイミは世界が霧の中で泳いでいるように感じた。彼女は肩の天使と肩の悪魔が議論を中断し、ポラロイドカメラを取り出し、それからきちんとしたオフィスデスクに座って、ジェイミの頭蓋骨の中のファイルキャビネットにある「永久保存版」というラベルのフォルダに写真を整理しているのを想像した。

ジェシカのそばかすのある豊満な臀部の表面全体は、一貫して陽気な明るいピンク色で、平手打ちの残る効果だった。しかし、ジェシカの尻の下の中心は怒ったような赤色で、平らなパドルの打撃が四角い幾何学模様を残してい

た。ジェシカは赤い跡を指さし、人差し指でその領域を容易になぞった。「ウォームアップの後、最初の二十四回のパドルの打撃はここに受けたんだ…」

パドルの跡のまっすぐな角張った模様は、ジェシカの豊満な後部の柔らかな曲線と鋭く対照的で、それは下げられたフラップによって残された開いた窓から溢れ出しているように見えた。

ジェイミは全身が震えているのを感じ、空気を吸おうとした瞬間、ジェシカが前かがみになった。両手を合わせるようにして、ジェシカは自分の下側の臀部を軽く持ち上げ、子犬の脂肪のひだの下に隠れた敏感な部分を露出させた。まるでジェシカの後ろ側が微笑んでいるかのようだった。「… そして最後の十二回は座る部分に、合計三十六回。十八年間で一年につき二回ずつだよ。次の誕生日が待ちきれないよ！」

ジェイミは胃が締め付けられるのを感じた。通常、お尻叩きの最初の耐え難い痛みは驚くほど早く、たいてい数分以内に和らぐ。しかしジェイミは、叩かれたばかりの尻を木製のスツールに座らせることは、特に両親が敏感で繊細な座る部分に何回か打撃を加えるのを忘れなかった場合、その痛みを強く思い出させることを身をもって知っていた。そしてジェイミが「真剣な話し合い」を稼ぐたびに、ママとパパはジェイミの座る部分に適切な注意を払うことを決して忘れなかった。「ひどい目に遭わせてごめんね、ジェシカ。」

ジェシカは首を振り、自分の後ろ姿を面白そうに見下ろした。「気にしないで。私が望んだことだし、当然の報いをきっ

ちり受けたんだ。ママとパパを知ってるでしょ。彼らはいつも… 公平だよ？」

ジェシカの目が見開かれ、ジェイミは自分の後頭部にも目があるように感じた。ジェシカはすぐに木製のスツールに座り直し、ジェイミとジョアンが振り返ると、ママが子猫のように軽やかな足取りで部屋に滑り込んでくるのを見つけた。ママは腕を組み、特許取得済みのママの視線™でジョアンをじっと見つめた。「こんにちは、お嬢さんたち！ … ジェシカ、この二人はからかったりしてる？」

ジェシカは首を振り、今は完璧な姿勢で隅に向かって座っていた。「いいえ、ママ！」

「じゃあ、なんでパジャマのフラップが下がってるの？」

ジェシカは肩越しにちらりと見ようと体をひねったが、隅に鼻をつけるのを思い出した。「フラップ？ 私… ボタンを外したからです、ママ。」

「なぜそんなことをしたの？」

ジェシカはうつむいた。「ジェイミとジョアンが大丈夫かどうか知りたがっていて… 私… 全部私の考えで… 当然の報いとして何をもらったか彼女たちに見せたかったんです。」

ジェイミは仲裁しようと手を挙げたが、ママはジェイミに首を振り、それから足をトントンと叩いた。部屋の中で唯一の音は、ママの革製スリッパがリノリウムの床を叩く音だけだった。「ジェシカ、十分前にお父さんが君をタイムアウトに座らせたばかりだよ。彼の指示を覚えている？」

ジェシカは前後に揺れ、叩かれた裸の尻が今や彼女の有罪を立証する決定的な証拠となっていることを痛感していた。「はい、ママ。隅に座って、聖書を読み、自分のしたことを考えることです。」

「そしてそれをしたの？」

「はい、ママ…」ジェシカの背筋に震えが走り、彼女は言い直した。「つまり、最初はそうしました、ママ。でも彼女たちが調子はどうかと尋ねたので、話し始めて、ちょっと… 忘れてしまいました、ママ。故意の不服従ではありませんでした。」

「立ちなさい、ジェシカ。隅に鼻をつけたまま。」

聖書を胸に抱きしめながら、ジェシカは背筋を伸ばして立ち、フラップは自由に垂れ下がって、焼きたての臀部を露わにした。

ママはジェシカの尻を軽く叩き、三回の素早い愛の一撃を与え、それがジェシカの両方の尻の半分に柔らかな波紋を広げた。「このパジャマのお尻の部分をうっかり落としたの？ それともわざと落としたの？」

ジェシカは臀部を引き締め、子犬の脂肪がまだ震えていた。「はい、ママ… わざとです、ママ。」

「そして、うっかり聖書を置いて立ち上がり、反抗の『当然の報い』を見せびらかそうとしたの？」

「いいえ、ママ… それはわざとやりました、ママ。」

「それなら、故意に従わなかったわけではないと言うとき、それはどういう意味？ 自分の弁護のために何か言い分は？」

ジェシカは震える息を吸い、それから背筋を伸ばして立った。「意図的ではなかったという意味です、ママ。タイムアウトを離れましたが、それは忘れっぽさからであって、従いたくないという気持ちからではありません。」

ママはうなずき、それからジェイミの方に向いた。「あなたは目撃者ね。それが起こったことですか？」

ジェイミはうなずき、それから身を固くした。「はい、ママ。私たちがジェシカに大丈夫かどうか尋ねたんです。彼女はただ、罰が必要だということに同意した経緯を話していただけです。彼女は不敬を示そうとしたわけじゃない、故意じゃありません！」

ママは最も背の高い娘を見上げ、小柄な体格にもかかわらず、絶対的な自信を示すような表情を浮かべた。「あなたに家庭のルールに対する不敬を構成するかどうかを決める権利があるの、お嬢さん？」

ジェイミは首を振った。突然、彼女は一連の奇妙な映像を一度に頭にダウンロードされた。彼女は二本の指で中指を立て、「くたばれ！」と戦いの叫びをあげながら、自分の母親をパイルドライバーで倒す自分を想像した。ジェイミは正面切って戦えばママに勝てると確信した。

それから彼女は、確かに続くであろうパパからのウォームアップのお尻叩き、おそらくシュミット家の三姉妹全員が薪小屋に連れて行かれて三人同時のお尻叩きセッションを受けること、そしてジェイミが第五戒（あなたの父と母を敬え）への恥ずべき反抗の永続的な証として、数十年分の追加の夜ごとの就寝前お尻叩きを稼ぐことを想像した。

ジェイミは自分自身がジェシカのように、子供っぽいお尻の開くパジャマを着てタイムアウトに立っているのを想像し、奇妙なことに、その心象は罰というよりも報酬のように思えた。ジェイミがまばたきするのにかかる時間で、この一連の出来事は彼女の心の目に映画のように流れ、意識的に、彼女は母親に逆らう誘惑に抵抗することを強制した。「いいえ、ママ。それは私の決めることじゃありません… でもあなたは目撃証言を求めました、そして私は真実をすべてお伝えしたかったんです。」

ママはジェイミの付け加えに耳を傾け、それから戦略的に配置された緊急お尻叩き道具のラックの一つから木製のスプーンを手に取った。ジェイミは自分の言ったことが口答えにあたるのではないかと疑ったが、ママは微笑んだ。「とてもよく言えたわ、ジェイミ… ジェシカ？ 振り返って、私の目を見なさい、あなた。」

ジェシカは足を引きずってその場で回転し、ママと向き合った。小柄な母と娘は見つめ合った。ママは木製のスプーンを手のひらでトントンと叩いた。「ジェシカ、この家では、故意の不服従と反抗は常にお尻叩きに等しい。あなたがそれに当たらないと私は納得したわ… でも、あなたの忘れっぽさには驚いたわよ。お父さんがあなたをタイムアウトにしたら、お父さんに従いなさい。」

「はい、ママ！」とジェシカはきゃっきゃと答えた。

ママは木製のスプーンをジェイミとジョアンに向けた。「そしてあなたたち二人は、姉がタイムアウトにいるときは、彼女には聖書を学ぶなど、もっと重要な用事があると思いなさい。くだらない噂話を共有する時じゃないわ。あなたたちはいつでも…」

ママは強調のために木製のスプーンで自分の後ろを三回しっかり叩いた。「… 戦いの傷跡を比べ合うのは… 別の時にしなさい。さて、ジェシカ、あなたが二歳のやんちゃざかりの頃、タイムアウトにじっとしていることを教えるために、よく念押しのお尻叩きをしなければならなかったわね。今のあなたの年齢で、また念押しが必要かしら？」

ジェシカは聖書を胸にしっかりと抱きしめ、まるで安心毛布のように握りしめた。「いいえ、ママ。もし念押しのお尻叩きが必要だとお考えなら、その決定を受け入れます。しかし、どんな決定をされても、必ず覚えていると約束します。」

ママは木製のスプーンを唇に押し当て、それからラックの元の場所に掛け直した。「信じるわ。今夜、パパに就寝前のお尻叩きを頼むという成熟した態度を取ったことを、とても誇りに思うわ。それは人格を示している。だから、幼い頃のあなたならこの小さな出来事で稼いだであろう念押しのお尻叩きは免除してあげるわ。」

ジェシカはうなずき、恐怖は消え去った。「ありがとう、ママ！」

「まだ感謝しないで。念押しのお尻叩きは免除するけど、最終的な決定はまだお父さん次第よ。今夜、あなたに就寝前のお尻叩きをしに行くとき、あなたは彼にこの話し合いを伝え、その件について彼の判断に従いなさい。あなたがタイムアウトにお尻を留めておくことを思い出させるために、追加のお尻叩きが必要かどうかは彼に任せるわ。」

ジェシカの顔は、彼女が頭の中で計算し、今夜追加でお尻叩きされる確率を計算していることをありありと示していた。ジェイミは、まるで漫画の吹き出しのようにジェシカの心を簡単に読めるように感じた。ジェシカはこう考えていた。「大丈夫。パパを信頼できる。彼はいつも公平だ！」

ジェシカはかかとでぴょんぴょん跳ね、嬉しさのあまり飛び跳ねたい衝動を抑えた。「はい、ママ。全てを話します！ ご指導ありがとうございます。」

ママはジェシカの鼻にキスをした。「どういたしまして。さあ、あなたの小さなお尻をタイムアウトに座らせなさい、それが正しい場所よ。」

ジェシカは従うのに必死で、お尻の部分のボタンを留めるのを忘れた。ジェシカは立ち上がって服を直そうとしたが、ママは指を振った。「いやいや。あなたは自分の当然の報いを見せびらかしたい気分だったのね？ 結構。そのフラップは就寝時間まで下げたままにしなさい。それが私たちの小さな話し合いを具体的に思い出させるものになるわ。祈る時間をとり、今夜待っているお尻叩きについて深く考えなさい… 父があなたに二度目のお尻叩きをさせないでくれるように祈るのではなく、彼があなたに公平であるように祈り

なさい。祈りが終わったら、神の言葉を読むことに集中しなさい。」

ジェシカはうなずき、ママが優しくジェシカの頭の上に手を置くと、彼女は黙って祈るために手を組んだ。ジェイミはジョアンがうつむくのを確認し、それに倣った。一分間の沈黙の祈りの後、ジェシカは「アーメン！」と宣言した。

それからジェシカは急いで膝の上の聖書を開き、蛍光ペンを手に取った。彼女は古典的な説教学の異なる重要概念を表すために異なる色で聖句に印をつけていた。これはシュミット家の子供たちが聖書研究フェローシップで学んだ技だった。

ママが厳しい表情でジェイミとジョアンを見つめると、彼女たちは二人とも解放されたことを悟り、自分の部屋へと退却した。ジェイミが角を曲がると、ママは彼女の肘を掴んだ。「ジェイミ…」

ジェイミはすでに痛む尻の半分を引き締めた。これだ！ジェイミは反抗して無傷で逃げ切れるはずがないとわかっていたはずだ。ジェイミは自分の部屋に引きずられる準備をしながら、自分が加えたミミズ腫れが露わになったときに繰り広げられる場面全体を頭の中でリハーサルした。しかし代わりに、ママはジェイミの手を握っただけだった。「妹をかばってくれてありがとう。」

ジェイミの心は膨らみ、彼女はかがんでママに優しく頬にキスをさせ、それから寝室に滑り込んだ。ジェイミはドアにもたれて閉めると、肩から重りが突然落ちたように感じた。両

親は彼女を誇りに思っている！ 彼女は大失敗作じゃない！

見下ろすと、ジェイミは『罪と罰』と『赤毛のアン』のコピーが脇の下に挟まれているのに気づいた。ため息をついて、彼女はそれらをベッドサイドテーブルに置いた。「意味ないな、集中できない。」

ウォークマンが壁とベッドの間の床にあるのを見つけ、ジェイミはそれを引き出した。「ああ、そこにいたのか！ この一ヶ月どこに行ってたのかと思ってたよ！」

ジェイミは透明なプラスチックケースを通してディスクを調べた。「『オデッセイ・アドベンチャー』？ 定番だね。まさに必要なものだ。」

ヘッドフォンをジャックに差し込み、ジェイミはベッドに横たわり、ただリラックスして大好きなクリスチャンラジオドラマ番組を楽しみたかった。CDは彼女が中断したところから再生された。ジェイミのお気に入りのキャラクター、オーブリー・シェパードは、イマジネーション・ステーションの魔法を通して聖書の時代にタイムトラベルしていた。ジェイミは集中して、オーブリーの冒険がどこへ彼女を連れて行ったかを思い出そうとした… ああ、そうだ、ヘロデ・アンティパス王の宮殿だ。そこでオーブリーはサロメ王女その人に会った。サロメが誤って貴重な壺を倒し、粘土が砕ける音がした。

ジェイミの目が見開かれた。彼女はこのラジオドラマのこの部分をあまりにもよく覚えていた。彼女は一時停止ボタンを探してもがき、オーブリーが勇敢に壺を割った責任を負うと

申し出るセリフを無視しようとした。「… ここで壺を割ったら、どんな罰があるの？」

ジェイミはヘッドフォンを引きちぎったが、遅すぎた。彼女はヘッドフォンから柔らかな音をまだ聞き取ることができ、この部分はすでに完璧に暗記していた。「ああ、大したことじゃないわ。棒で十回打つことよ」とサロメ王女が言った…

「えっと… その棒はどのくらい大きいの？」とオーブリー・シェパードが言った。

ジェイミはウォークマンを止めた。もちろん、お尻叩きのシーンだ。あるいはむしろ、画面外のお尻叩きで、明らかにコマーシャルブレイクの間に起こると示唆されていた。一ヶ月前、ジェイミはこのラジオ番組のこの地点に達し、CDの巻き戻しボタンを何度も何度も押し、自分をオーブリー・シェパードとして想像し、自分が「その棒」で痛みを伴う一打一打に耐える姿を思い描いた。そのたびに、ジェイミは自分の尻を揉みながら、オーブリーが言ったのと同じように、「うん… また座れるようになったら、お礼を言うって約束してよ！」と言った。

声優たちの苦痛に満ちたセリフの言い回しは完璧だった。ジェイミはこのエピソードを聴くたびに、自分がオーブリー・シェパードであり、お尻を叩かれたそのすべてであると完全に信じた。

六歳の頃から、ジェイミは古いエピソードのオーディオカセットでも同じことをし、お尻叩きへの短い言及を何度も何度も再生し、テープがついに摩耗するまで繰り返した。

ジェイミは、花火事件の後、初めて素っ裸のお尻を叩かれた夜に、まさにこれと同じことをしてベッドに横たわっていたことを鮮明に覚えている。枕に顔を埋めてすすり泣きながら、彼女は優しく痛む尻を揉み、お気に入りのキャラクターたちが自分たちの生活におけるお尻叩きの重要性、それが怒りではなく愛から行われることについて議論するのを聞いた。それからジェイミは顔を上げ、テープを巻き戻し、枕に再び横たわり、再び罪を犯さないように助けてくださいとイエスに祈り、お尻叩きをしてくれるほど自分を愛してくれる両親を与えてくれた神に感謝した。

現在、ジェイミはうつ伏せに横たわり、自分の尻を優しく抱えていた。昨夜の心地よい温かい感覚はとうに消え去っていたが、自分のベルトが残した筋はまだ柔らかくぴりぴりと感じられた。対照的に、鞍から落ちたときの二つの打撲傷は、まるで冷たい釘の上に座っているように感じられた。

証拠は彼女の周りにすべてあった。遅かれ早かれ、誰かがそれを突き止めるだろう。

ジェイミは… 混乱していた。

しかし、どうして彼女はそんなに混乱してしまったのか？ この感覚は一体何なのか？ ジェイミはお尻叩きが嫌いだ！ どうしてジョアンやジェシカが、わざわざお尻叩きを頼もうと思うのか？ 彼女たちは狂っているのか？

ジェイミは指をズボンの尻の部分に食い込ませ、それから馬鹿げたピンクのベルトのバックルを外し、ジーンズを引き下ろして臀部をマッサージし、打撲傷が残した鈍い痛みを揉み消そうとした。ジェイミは尻をさらに高く突き出して固

まった。彼女はドアに鍵をかけただろうか？ もし今、誰かが入ってきたらどうしよう？

しかし、彼女が爪を臀部に食い込ませ、昨夜の薄れゆくミミズ腫れを再び呼び覚まし、その魅惑的な感覚を味わっているとき、ジェイミは気にしなかった！ 誰かが入って来い。彼女が望むのは、ママかパパが彼女を現行犯で捕まえ、彼女に怒鳴り、髪を引っ張って薪小屋に連れて行くことだけだった…

血の気が引くのを感じ、ジェイミはすぐにズボンを引き上げてベルトを直した。怒りの奥で、彼女はついに自分が逃げてきた真実を見た。ジェイミはこの世の何よりもお尻を叩かれたいと望んでいた。しかし、彼女はお尻叩きが怖すぎて、進んで頼むことはできなかった… 自ら望んで、とは。

第IV章 終わり

第V章：有罪の証拠

ドアをノックする音がジェイミをトランス状態から揺り戻し、ママが予告なく入ってきた。「ジェイミ、もうすぐ夕食よ。ちょっと手伝ってほしいの——」

ジェイミはベッドの上で体をひねり、何気ないふりをしようとしたが、ママの顔に浮かんだ疑問の表情を見た。ジェイミは自分が完全に服を着ていることを静かに思い出させた。部屋には彼女の秘密の罪を証明できるものは何もなかった。

ママはウォークマンに向かってうなずいた。「私の推測が当たってるわね、『オデッセイ・アドベンチャー』？ 本当に素晴らしい番組ね。私はお尻叩きについてジェームズ・ドブソン博士とは意見が合わないけど、あの人は素晴らしいラジオドラマを作る方法を知っているわ。」

ジェイミはあの魔法の、どこにでも存在する言葉「お尻叩き」を聞いて緊張し、ウォークマンを一瞥した。それは現在、彼女のお気に入りのキャラクターが自分の「お尻の痛み」を嘆いているまさにその瞬間で一時停止されていた。もしママがそれを手に取って聞き始めたらどうしよう？ それは奇妙な偶然だと思わないだろうか？ ジェイミはベッドを軽く叩いた。「ドブソン博士は聖書のお尻叩きに同意してるんじゃなかったっけ？『あえて叱れ』で？」

ママは唇をすぼめた。「うーん、あの本の一部はいいわね。お尻叩きそのものを支持する彼の議論は確かよ。でも私に言わせれば、彼はすべてを過度に強調しすぎてるわ。親に

この長い多段階のプロセスを踏ませようとするの。罪の確立、懲罰の必要性についての話し合い、お尻叩きの一つ一つの段階の説明、聖書を読む、祈る、決して怒って叩かない、抱きしめてキス、うんたらかんたら！ …彼が母親でないことは一目瞭然よ。時には、ただ叩いて終わらせなきゃならないの。さもないと、いつの間にか、お尻叩きのたびに一日中かかってしまうわ。あなたが母親になったら、それが自分でわかるわよ。さあ、ジェイミ、冷めた食事を出したくないの。」

ジェイミは母の議論を心の中で検討しながら、長年にわたって受けてきたすべての小さな「念押しのお尻叩き」が突然、はるかに理にかなっているように感じた。彼女はママについて台所に行きながら、お尻叩きのテーマに関する『あえて叱れ』の一節を簡単に思い出した。彼女はそれらを暗記していた。「彼はお尻叩きは十歳くらいでやめるべきだって論じてるんじゃなかった？」

「そう言ってた？ ええ、そうだったわね。もちろん、その考えに聖書的根拠はないわ。聖書は明らかに体罰を承認し、要求しており、年齢に関する留保はないわ。申命記は鞭で四十回を超えてはならないと制限しているわ。」

ママはすぐに夕食の仕上げに取り掛かった。ビーフシチューに野菜とダンプリングが入ったものだ。ジェイミは自動操縦で手伝っている自分に気づいた。「えっと… 私たちが四十回以上叩かれることもあるんじゃない？」

ママはコンロの火をとろ火に落とし、首を振った。「私は鞭では叩かないわよ… あなたが言ってるのは手のお尻叩きのこと？」

ジェイミは後ろで手を組んだ。一体何が彼女にこの話題を持ち出させるんだろうか？「そう、手のお尻叩き… それは鞭とは比較できないよね。」

「わかるでしょ？ すべては第一原理から推論する問題なの。聖書は私たちに明確なルールを与えている。鞭で四十回以上の打撃を与えてはならない。さて、『鞭』とは何か？私はちょうどこのテーマに関するウィルソン博士の魅力的なブログを読んでいたところよ。ミシュナー――それは古代のユダヤ人の口伝の集まりよ――では、三本の柔らかい革の舌を持つ鞭を使っていたの。私たちのタウズ（革の鞭）に似ているけど、もっとひどいわ。それで、素っ裸の胸に十三回、左肩に十三回、右肩に十三回の打撃を与えたの。合計は三十九回で、数え間違いで四十回を超えないようにするためだったわ。これは聖書ではないけど、神の民がその時代にその聖句をどのように適用したかの感覚を与えてくれるわ。」

ジェイミは兄や姉、パパと一緒に『パッション』を見たことを鮮明に覚えていた。それは彼女にとって初めてのR指定映画だった。ジェイミは自分には耐えられる成熟度があると穏やかに議論する長いキャンペーンを通じて、パパの最初のためらいを克服した。しかし、父の提案で、ジェイミは鞭打ちのシーンの間ずっと目を閉じていた。「鞭にはガラス片や貝殻を付けて鞭打ちにするんじゃなかったっけ？ ローマ人がイエスにしたみたいに？」

ママはその映画のまったく同じシーンを思い出して、恐怖で息を呑んだ。「そうよ、ローマ人はそうしたわ。ローマ人は異教の帝国だったから。彼らは自分たちの支配下にある奇

妙な一神教の民の法律を必要以上に気にしなかったの。もしあなたが外国人なら、喜んで鞭打ちで殺すか磔にするだろうし、もしローマ市民なら、斬首や絞首のようなより文明的な方法を好んだわ。私が言いたいのは、聖書は私たちに制限原則を与えているってこと。三本の舌を持つ鞭で最大三十九から四十回。それは約百二十の隆起したミミズ腫れに相当するわ。ペテロやパウロ、初期の使徒たちがキリストの福音のために鞭打たれたという話を読むとき、それは彼らが言っている罰のことなの。さて、論理を適用してみましょう。聖書によれば『不当なお尻叩き』とは何か？」

その瞬間、ジェイミは自分が公衆の鞭打ち台に縛り付けられ、素っ裸の胸と両方の裸の肩に十三回ずつ打撃を受けている自分を鮮明に想像していた。「... ああ！ それは三本の革の舌を持つ鞭で四十回以上打つことだね... だからそれはベルトで百二十回叩かれるようなものだよね？」

「そして私たちはあなたをそのように叩いたことがある？」

彼女が最後に薪小屋に連れて行かれてからほぼ二年が経ち、ジェイミはその重い革ベルトと重い木製パドルが素っ裸の後ろ側に当たった感覚を鮮明に覚えていた。それはその二年前に銃で遊んだために受けたベルト打ちより少しひどかった。しかしジェイミは答えを知っていた。「いいえ、あなたたちは私をそんなふうに叩いたことはありません。」

ママは微笑んだ。「その通りよ。あなたは若いから、私たちは厳しさの度合いを軽くするの。私の手で四十回の平手打ちは確かに聖書の制限を超えないけど、小さな子供に必要なものよりはるかに多いわ。ジュニパーに思い出させるのに二十回以上与える必要は決してないわ。実際、大抵

は十回で十分よ。でも彼女が特に手強い場合は、べらやヘアブラシで六回のしっかりしたお尻叩きが目覚ましの役割を果たすわ。それが、故意の不服従、反抗、または無礼のために彼女を部屋に送らなければならない前にジュニパーが受ける最後の警告射撃よ。それからは素っ裸のお尻に十二回の打撃と、ウォームアップとしての平手打ちよ。でも私はほとんどそれをしなくて済むわ。なぜならジュニパーはルールが何かを知っていて、警告射撃が何を意味するかも知っているから。それがお尻叩きの素晴らしさよ。スケールするの！」

ジェイミはうなずいた。それらの「赤ちゃんのお尻叩き」の記憶にまだ恐怖を感じながらも、十六歳の今ではそれらの罰がどれほど笑えるほど軽いものかを考えていた。「他の子たちみたいに、例えば、外出禁止と違って？ もし一日外出禁止にされても、気にしないだろうな。スケールするなら、一週間、一ヶ月、一年とか？」

ママは両手を上げた。「ハレルヤ！ これでわかるわ、あなたが私の娘だってことが。あなたはパパの見た目と頭脳を受け継いだけど、私の常識も受け継いでいるの。これらの『優しい子育て』タイプは自分たちが素晴らしいと思っているけど、ただお尻叩きでなければ虐待ではないと偽って虐待を隠しているだけよ…」

ママは「NPRリスナー」を真似るために使う、偽の洗練されたアクセントを出した。「おお！ 私を見て！ 私は子供を決して叩かないの！ ただ言葉で虐待するだけ！ ただ感情的に孤立させるだけ！ ただ独房監禁するだけ！ あなたの子供は理屈を理解する年齢ですか？ 理屈を使いなさい！

へえ？ 理屈を聞くことを故意に拒否した場合の結果は何？ 知らないわ！」

ジェイミはくすくす笑い、ステレオタイプなヒッピーの声を真似た。「やあ、君、僕はフリーレンジ・ペアレンティングをやっているんだ。道で遊ぶなって言った後に、子供を叩くわけにはいかないだろ。それはまるで、完全に非文明的だよ。僕はただ子供たちを自由に歩き回らせて、自然な結果を経験させるんだ… 車に轢かれるって自然な結果をね！」

ママは最初の二杯のビーフシチューを盛り付けている途中で、くすくす笑いの発作で二つに折れた。「はは！ ああ、なんてこった！ ヒッピーのアクセントはやめて！ ぜいぜい 熱いスープを自分にかけるところだったわ！」

ジェイミは自分で最初の二杯を盛り終えるために割り込んで、微笑んだ。「もしやったら、お尻叩きされる？」

ママはようやく息を整え、笑いの涙を拭った。「… 試そうとしないで。」

ジェイミは茶碗をしっかりと握りしめた。「じゃあ… 十歳はお尻叩きに年寄りすぎるわけじゃないってわかったけど… いつかお尻叩きに年寄りすぎるってことはあるの？」

ジェイミがテーブルセットを手伝う間、ママは突然真剣になった。「いいえ、ジェイミ、あなたがお尻叩きを必要としている限り、決してお尻叩きに年寄りすぎるってことはないわ。それは誕生日の問題じゃない。それは態度の問題よ。技術的には、ジョセフはお尻叩きに年寄りすぎるわけじゃない。でも彼はもうお尻叩きを必要としなくなっただけよ。彼

は本当に必要なら自分で家を出て行くこともできるけど、私たちは彼がそばにいるのが好きなの。彼はいつも手伝ってくれる。あなたが私の膝の上に乗るには大きすぎる日は、あなたがそのように振る舞い始める日よ... 誰にもわからないわ。もしかしたら今日がその日かもしれない。確かに、あなたは今朝から本当にすごい努力をして手伝ってくれてるわね。絶好調よ！」

ママの鋭い口笛に答えて家族の残りがテーブルに集まると、ジェイミはテーブルから顔を上げ、ジェシカがまだ居間のタイムアウトに座っていて、容易に耳の届く範囲にいるのを見つけた。

確かに、ジェイミはジェシカと同じように高校生の間ずっとお尻叩きをされることを期待していた。しかしそこには彼女の姉、プロムクイーンで高校卒業生が、しっかり叩かれた素っ裸のお尻を乗せて座っていた...

... そしてあと数時間で就寝前のお尻叩きを楽しみにしていた。大学一年生になるのを楽しみにしていて、もし勉強習慣を改善しなければ、成績表の日には少なくともあと四年間のお尻叩きを。

そしてもし態度を改めなければ、ジェシカはさらに何年も、さらに何度もお尻叩きを楽しみにしていることになる。そして二人ともそれを知っていた。

ジェイミはジェシカを見て、自分の未来を見た。ジェイミは決して良いお尻叩きに年寄りすぎることはない。そして最悪の部分は... それがまさに彼女が望んでいることだった。

***

パパが席に着く前に、ママは彼の肩を小突き、ジェシカがまだ居間の隅に座っているのを指さした。パパはうなずいた。「ジェシカ、テーブルに来なさい。」

家族全員が、ジェシカがすぐに振り返って食堂に行進する前に、彼女の素っ裸の後ろ姿をちらりと見た。彼女は聖書をお腹に平らに抱えていた。パパは彼女がいつもの椅子の後ろに立つまで待った。蒸し暑いシチューの茶碗が八つあり、家族の一人一人に一つずつだったが、ジェシカの分は明らかに除外されていた。彼女のランチョンマットは彼女の後ろ側と同じくらい裸だった。

パパはジェシカの目をまっすぐに見た。「みんな、残念ながらジェシカは今日先に、第一に怠惰のため、第二に反抗のためにお尻叩きを稼いだ。ママと私はジェシカと話し合い、ジェシカが今夜、就寝前にもう一度お尻叩きを受けるに値することに全員が同意した。みんなに知っておいてほしいのは、私たちはジェシカに怒っているわけじゃなく、もう彼女を許しているということだ。ジェシカはとても勇敢で、自分からこのお尻叩きを求めた... しかしそれはそれで本物のお尻叩きでなければならない。ジェシカ、この家のルールはわかっているね。就寝前のお尻叩きの一部は、夕食抜きで寝ることを意味する。あなたが退出する前に、兄弟姉妹に何か言いたいことはある？」

ジェシカは聖書を掲げた。「私... 箴言を読んでいました。これを覚えています。『怠惰は深い眠りをもたらし、怠けた魂は飢えに苦しむ』と。それをたくさん考えました。なぜなら... それは私に起きたことだからです。私は怠け者でした。注

意を払いませんでした。まるで眠っているかのようでした。それから、同じ章でこれを読みました。『望みのあるうちに子を懲らしめよ。彼の泣くのを惜しんではならない』と。それは、パパが私を懲らしめなければならないこと… 私が泣くまでお尻を叩かなければならないことを思い出させました。そして、どれほどお尻叩きが終わることを望んでも、ただ泣くだけでは十分ではありません… 私は懲らしめられなければなりません。自分が何を間違えたかを覚えていなければなりません。つまり、お尻叩きは十分長く続かなければならない… 長く記憶に残るように… パパ？ 私はあなたを信じています… そして私はお尻叩きの準備ができています。」ジェシカが最後の言葉を発したとき、彼女の声は完全には確信しているようには聞こえなかった。

パパはうなずいた。「祈ろう。」

パパは娘ジェシカへの感謝の祈りから始め、悔い改める心という賜物を与えてくださった神に感謝した。ママは自分の言葉でその気持ちを繰り返し、神にジェシカを知恵へと導き、彼女が「箴言31章の女性」になるのを助けてくださるよう求めた。パパはジェシカに祈るよう促し、ジェシカは簡単でよどんだ悔い改めの祈りを捧げ、涙をこらえて鼻をすする音を立てた。パパは家族の残りにジェシカのために祈るよう促した。ジュニパーは早熟な祈りを進んで捧げた。「親愛なるイエス様、ママとパパをありがとう。ジェシカがもっとうまくできるように助けて、お尻叩きが痛すぎませんように。アーメン！」

先取りの「アーメン！」は柔らかな笑いを誘った。ジョセフは神にジェシカに勇気を与えるよう祈った。ジョアン、ジャッ

ク、ジルは皆首を振り、何を言いたいのかわからず、最後にジェイミが残された。

ジェイミはためらい、ジェシカのために祈りたいと思ったが、他に何を言うべきか考えた。彼女は両親のようにスムーズに祈りの考えを話すのが得意ではなかったが、両親はいつも心から祈るように勧めてくれた。数秒が経過するにつれ、ジェイミは今がその時か永遠にその時かとわかった。「神様… ジェシカをありがとう。私をこの家族に置いてくださってありがとう。助けて… ジェシカが強くいられるように助けて。私を助けて… もうお尻叩きを必要としなくなりますように。」

ジェイミは自分の秘密を思い出し、最後の文を検閲した。心の中で、彼女はその考えを完成させた。「もうお尻叩きを望まなくなりますように。」

パパは祈りを終えた。「父と子と聖霊の御名によって。アーメン… よし、ジェシカ。退出してもいいよ。洗って、寝る準備をしなさい。」

ジェシカはためらい、それから丁寧に答え、行進して立ち去ろうとした。弟妹たちの目が自分の尻に注がれていることを痛感していた。ジェイミはそれから目を離せなかった。ママ、パパ、ジョセフが皆、礼儀正しくジェシカの後ろ側から目をそらしていることに気づいても。

ジャックが沈黙を破った。「ジェシカはこれからたくさんお尻叩きされるの？」

ママとパパは意味ありげな目を交わした。もちろん、今夜の話題が他に何になるだろうか？ パパはジャックに近づいて言った。「もし『ジェシカが薪小屋行きか、一週間分の就寝前お尻叩きをもらうのか？』という意味なら、違う、今夜で終わりだ。誰かが求めているのでない限り、私たちは決して追加のお尻叩きを加えない。しかし、『ジェシカがまたお尻叩きされることがあるのか？』という意味なら、私はわからない。もし彼女が教訓を学ばなければ、そうだ、ジェシカはもっとお尻叩きを受けるだろう。しかし、もし彼女が態度を改善する努力をすれば、いいえ、ジェシカは自分から求めない限り、もうお尻叩きを受けないだろう。」

ジルは湯気の立つ茶碗を見つめた。「でも、ジェシカが就寝前のお尻叩きを求めたって言ったんじゃなかった？」

パパは自分の言葉の選択によって引き起こされた混乱に気づいてため息をつき、ママに助けを求めた。ママはうなずき、ジルに話しかけた。「悪い意味じゃないわ。ジェシカは今夜のお尻叩きを、丁寧に求めたの。彼女は本当に成熟した責任ある若い女性で、ただ少し余分な指導が必要なだけなの。でも、誰かが…」ママはジェイミを一瞥してから、次の言葉を慎重に選んだ。「まあ、私たちがあなたたち子供の一人が『お尻叩きを求めている』と言うときは、失礼な態度をとっているという意味よ。口答え。目を回すこと。それらはお尻叩きを求める無作法な方法なの。」

ジルはジェイミを一瞥した。「それがジェイミがいつもお尻叩きされる理由？」

ジェイミはシチューをスプーン一杯丸ごと飲み込み、口の中の上をやけどした。家族は彼女がむせていないことを確

認するために一瞬止まった。「そうだよ、ジル、それが私がそんなにお尻叩きされる理由なんだ… でも、それを直すように努力してるんだ。」

ジャックはシチューを冷ますためにスプーンに息を吹きかけた。「丁寧な方法でお尻叩きを頼む勇気はないと思う。うっかり失礼な方法でお尻叩きを頼まなくて済むといいな。」

パパはジャックの背中を軽く叩いた。「それは達成可能な目標だよ、息子よ。すべては考え方次第だ。」

***

今日は『罪と罰』の二段落目を超えるのを諦めたジェイミは、ベッドに横たわっていた。彼女はバスルームのドアが開く音を聞き、ジェシカが二枚のタオルに包まれて自分のドアを通り過ぎていくのを垣間見た。ジェイミは時計を見た。ジェシカは時間を短縮していた。就寝前のお尻叩きを宣告されたシュミット家の子供は、ママとパパが到着する前に「心は完全に整え、お尻は完全に裸にして」自分の部屋で辛抱強く待つことが求められた。

おそらくジェシカは、来る試練から気をそらすために長くリラックスした浸浴を望んだのだろう。ジェイミはその気持ちがわかった。入浴は、ごく自然に、準備の儀式の不可欠な要素とされていた。結局、あなたは清潔にピカピカになって出てきて、新鮮なパジャマに着替える準備ができるのだから。

ジェイミはジェシカがお気に入りのお下がりパジャマを再利用することにしたかどうか疑問に思った。確かに、足付きパジャマは少し子供っぽく感じられるが、特に長い就寝前のお尻叩きの最中にうっかりパジャマのズボンを蹴り飛ばしてしまうよりはましだった。

ジェイミは二つの影が自分のドアを通り過ぎるのを見て、パパの重い足音を認識した。「... ショーの時間だ！」

ジェイミはドアを閉めに行き、両親がジェシカの寝室のドアをノックしているのを一瞥した。彼女はジェシカの音楽的な声が、入ってくるように招くのを聞いた。ジェイミはドアを引き閉めた。その瞬間、自分に注意を向けられたくなかったからだ。

ジェイミの幼少期、六歳まで、彼女は兄弟たち、特にジェシカが素っ裸のお尻を叩かれるのを数多く目撃していた。しかし、ジョアンがジェイミの素っ裸のお尻叩きをからかったことが原因でジェイミとジョアンの素手の喧嘩が起き、その悲惨な結果の後、家族会議が開かれ、それ以来、素っ裸のお尻叩きは寝室か薪小屋のプライベートな場で行われるようになった。

ジェイミは突然、過去十年以上にわたって、ジェシカの素っ裸のお尻がお尻叩きの影響に苦しむのを実際に見ていなかったことに気づいた。彼女はジェシカが服を着た状態でお尻叩きされるのをたくさん見てきた。そして今日初めてジェシカの素っ裸のお尻を見た。しかし両方を同時に見たわけではなかった。

ジェイミはジェシカの部屋のドアがきしみながら閉まるのを聞いた… 完全には閉まっていない。明らかに、ママとパパは覗き見を気にしていなかった。ジェイミはジョアンが兄弟姉妹のプライバシーを侵害しようとして捕まった後、数回お尻叩きをされたのを覚えていた。過去には、ジェイミはその誘惑を理解できなかった。お尻叩きの音を注意深く聞くだけで、多くのことがわかるものだ。平手打ち自体の質が、どこにどのくらいの強さで打撃が加えられているかを教えてくれる。叩くリズムはお尻叩きのペースを明確に示す。説教や懇願の一部は薄い壁の向こうでくぐもってしまうが、ジェイミが目を閉じて集中すれば… まるでそこにいるかのようだった。

息を止めて、ジェイミは廊下に足を踏み出し、パパの声を聞いた。「ジェシカ、時間だ。」

「…はい、パパ。」

ジェイミは決断の瞬間が来たことを知った。ママが説明したように、説教や抱擁や祈りがもはや必要なくなり、残されたのはお尻叩きを終わらせるだけという時が来る。

ジェイミはジェシカのドアに近づき、首を伸ばした。もし彼らが廊下でジェイミを見つけたら、トイレに行くふりができるだろうか？ いや、それはうまくいかない、トイレは反対方向だ。もし捕まったら、現行犯で捕まることになる。

ジェイミはパパがジェシカのベッドの端に座る際の膝を一瞥し、そして… ジェシカの素っ裸のお尻を見た。今朝のパドルの跡は薄いバラ色に薄れていた。案の定、彼女はお気に入りのパジャマを着ており、お尻の部分は下げられてい

た。ママは反対側の隅に立ち、自分がジェシカをお尻叩きにする番を待っていたに違いない。

ジェシカがパパの左太ももの上に前かがみになり、足付きパジャマを履いたつま先が床のすぐ上にぶら下がっているとき、ジェイミはつま先から頭のてっぺんまで震えが走るのを感じた。角度は完璧だった。彼女はジェシカのお尻を見ることができ、パパは横向きに座っていた。ジェイミは完璧な死角を見つけていた。

ジェイミが隠れ場所を見つけたまさにその瞬間、彼女はパパの力強い右手がジェシカの豊満で肉厚な尻の中心をしっかりと叩くのを見た。尻の割れ目の両側の肉を十分に覆っていた。ジェシカは叫び、腰をひねったが、パパの腕は彼女をその場に固定するのに十分以上だった。

ジェイミは自分の就寝前のお尻叩きを思い出した。そうだ、強い第一印象で、これから何が待っているのか疑いの余地を残さない。十回ほどお尻叩きをした後、ジェシカののたうち回りはより顕著になった。ママの声が、ジェイミの耳元に怖いほど近くで吠えた。「ジェシカ、じっとしなさい。もう一度、今朝話したばかりよ。」

ジェシカは両脚を押さえ込み、明らかに体重を足に乗せて蹴ろうとする衝動を抑えようとしていた。「やってるよ！ 痛いんだ！」

パパはジェシカの左の尻の半分に一発叩き込み、すぐに追撃を与えるために手を上げた。「痛くて当然だ、ジェシカ。それはわかっていたはずだ。」

右の尻の半分に一発。ジェシカの泣き叫ぶ声。明らかに、彼女が最初にお尻叩きをしっかり耐えるという誓いは、自分にできると自分を説得する方法だった。しかし今、ジェイミは、鳴り響くお尻叩きのたびに、ジェシカの決意がいかに急速に崩れているかを見ていた。「ゆっくりして！ じっとしたいんだ！ ただゆっくりして！」

動じることなく、パパは同じ力で二発の素早い平手打ちを加え、ジェシカは足を激しくばたつかせた。ジェシカはまるで馬のように悲鳴を上げた。「イーイーイー！ やめて！」

「手伝おうか？」とママが尋ねた。

ベッドのスプリングがきしむ音を聞いて、ジェイミはドアから身を引いた。パパが前に身を乗り出して握りを調整し、ジェシカの脚を自分の脚の間に挟み込んだ。「いや、この馬は自分で扱える。」

ジェイミは前に進むことを自分に言い聞かせ、ジェシカが蹴るのをやめて跳ねるように変わり、パパの膝の上から体を持ち上げようとするのをちょうど見た。「いや、いや、いや！ 強すぎる！」

ジェシカをしっかりと手に収めたことを確認し、パパはゆっくりだが一定のペースでお尻叩きを始めた。ジェシカはそれぞれの合間に悲鳴を上げて鳴くのにちょうど十分な時間があった。パパの声はひどく失望していた。「ジェシカ、お前はこの罰を求めたんだ。何をもらうと思っていた？ 肩をポンと叩かれるだけか？」

「いった！ こんなんじゃない！ ああ！ こんなふうにじゃない！ あああ！」

パパは最高の四発をそれぞれに効かせて加え、それからジェシカが泣き叫ぶのを終えるのを待って止めた。「もう一度やり直そう。なぜお前はこのお尻叩きを求めたのか、ジェシカ？ 何を証明しようとしていたんだ？」

「私は――私は本当に後悔していることを示したかったんだ！ 勇敢になりたかったんだ！」

パパはジェシカのお尻を軽く叩き、さらにお尻叩きが来ることを警告した。「本当に後悔しているのか、ジェシカ？ 今、勇敢に振る舞っているのか？」

「いいえええ…」ジェシカの声は泣き言に変わり、次の一撃で哀願に戻った。「ああ！ 違う！ 本当に後悔してるんだ！ ただ――ただ――イヤーッ！ ああ、パパ！ パパ、お願い！」

さらに二発の平手打ち、そしてパパはジェシカのすでに赤くなりつつある尻に手を置いた。「お前の好きな聖句を覚えているか、ジェシカ？ 箴言19:15。『望みのあるうちに子を懲らしめよ』… そして？」

お尻叩きが止まっている間、ジェシカは震える息を必死に吸った。「… そして彼の泣くのを惜しんではならない…」

「適切なお尻叩きはいつ終わるんだ、ジェシカ？」

「… 私が… しっかりと完全に懲らしめられたとき。」

「よく言えた。それなら、ウォームアップはここまでにしよう。ママ？ あなたの番よ。」

胸を押さえ、ジェイミは壁に押し付けて視界から逃れた。これは愚かだった。これは間違っていた。どんな不用意な動きでも、彼女は見つかるだろう。

ジェイミはジェシカがすすり泣くのを聞いた。「マ…ママ？」

「前に話したことを覚えてる？ あなたがパパに伝えなければならないことがあるのよ。」

「お…お願い、やらせないで… お尻叩きはしていいけど、伝えさせないで——」

「いいえ、ジェシカ。あなたが約束を果たすまで、このお尻叩きは終わらせないわ。罪の告白をすることは、常に真の悔い改めの一部よ。」

「彼は… 彼は私に失望するだろう。」

ジェイミはパパの間違いのない優しい叱責の声を聞き取ることができた。それは彼女が涙を流すたびに必要とする種類のものだ。「しっ… よしよし。真実を話してくれれば、決して失望しないよ。何があった？ 聞かせてごらん。」

ジェイミは衣擦れの音を聞き、ママがジェシカをお尻叩きの体勢に優しく導いていることを知った。明らかに、ジェシカはためらったり真実を誇張したりすれば、十分な追加の励ましとともに告白することになるだろう。「ただ… ただ彼女

たちに見せたかっただけで… 悪意があったわけじゃない！」

ジェイミはママが最初の一発を自分の視界の外で加えるのを聞いた。「言い訳はなし。最初から、全部話しなさい。」

ジェシカが先のタイムアウトを露骨に無視した痛ましい話をどもり始めると、ジェイミは自分の立場を考えた。もし彼らが以前と少し違う角度に座っていたら、どんな動きでも簡単にジェイミを露見させる可能性があった。ママは両利きのお尻叩き手だ。もし今回、ジェシカの顔がドアの方に向いていて、左利きのお尻叩きが行われていたらどうしよう？

ジェイミは決断した。彼女は「画面外」のお尻叩きシーンに飽きていた。本物を見たかった。

ジェイミが前に進むよう自分に言い聞かせると、彼女は半分正しかったことに気づいた。ママはジェシカを左利きのお尻叩きのために回転させていたが、同時にジェシカを自分の膝の上にうつ伏せになるように導き、ベッドにジェシカの豊満な体のほとんどを支えさせていた。パパがジェシカにもっと従順になるよう促した今、ママはあまり力を入れない握り方を使うことができた。これはまた、ジェシカの顔がドアの端にかろうじて隠れていることを意味し、通常なら彼女はジェイミをまっすぐ見ていただろう。しかしジェイミには、ジェシカがパパに焦点を合わせ、彼を見上げて懇願しながら告白を続けているのがわかった。「… それで、お尻の部分を下げて彼女たちに見せたんだ！ ただ——」

ママは、電光石火の平手打ちで来るべき言い訳を遮り、それから腕をすぐに高く掲げる位置に戻した。すべて一つの鋭い動きで。「『ただ』はなし。はっきり話しなさい。」

ジェシカは叫び、息を整えるのに数秒かかった。ジェイミはジェシカの突き出したお尻の曲線をかろうじて見ることができた。以前の満月ショットとは違った。しかし、どういうわけか、ジェイミはこれまで以上にジェシカに近づいたように感じた。ジェシカの顔を一瞥できたことが、ここにいるための暗黙の許可を与えられたように思えたのだ。誰にもわからない。ジェシカは以前、自分の尻を見せびらかすことに熱心だった。もし尋ねられたなら、彼女はジェイミを観客として迎えることを気にしなかったかもしれない。ジェイミは長年にわたってジェシカが示してくれたすべての小さな親切を思い出した。みんなのお気に入りの姉。

ジェシカは息を吐きながら、適切な言葉を探してもがいた。「私… 私は見せびらかしていたんだ。お尻叩きを乗り切れると思わせたかったんだ！」

ママは別の雷鳴のような一撃を加えた。「あなたは私に言ったわ。『当然の報いとして何をもらったか』見せたかったって。まるで彼女たちを啓蒙しようとしているかのように振る舞っていたわね。」

ジェシカはうめき声を上げ、まるで遅れてその平手打ちを感じているかのようだった。「それ… それは嘘じゃなかった！ 本当に彼女たちに私の手本から学んでほしかったんだ… お尻叩きを怖がらなくてもいいってわかってほしかったんだ！」

「もし彼女たちをここに連れてきたら？ それをジェイミとジョアンに繰り返したい？ 彼女たちにこのお尻叩きを見てもらって、あなたの輝かしい手本から学んでもらいたい？ あなたがどれほど大きくて、たくましくて、成熟した若い女性か、そしてお尻叩きにどう服従すべきかを彼女たちに見せることができるわよ。」

ジェシカはマットレスに顔をうつ伏せにし、枕に向かっておとなしくつま先を蹴った。「やだあ、お願い！ 見せないで！ 私が… こんなふうになってるのを見せないで！」

ママが次の平手打ちを加えた後、ジェシカは後ろに跳ね上がり、背中を反らして叫んだ。ジェイミは答えを得た。ジェシカは間違いなく、ジェイミがこれを見ていることを望まない。しかし今や、ジェイミは完全にコミットしていた。自分の部屋への撤退は、留まるのと同じくらい危険だった。ママがまだジェイミを見つけていない唯一の理由は、ジェイミが暗がりに潜んでいたことと、ママがジェシカの尻に厳しく集中していたことの組み合わせだった。「どうして？ なぜ彼女たちにあなたを見られたくないの、ジェス？ 何が怖いの？」

ジェシカは吠え、怒りが高まった。「お尻叩きが怖いんだよ、いいか？ 彼女たちに知られるのが怖いんだ… 耐えられないって！」

ママは三発の素早い平手打ちを加え、それから自分のリズムに落ち着き、続けながら説教した。「耐えられるわよ。今まさに耐えてるじゃない。歯を食いしばって、集中しなさい。お尻叩きが終わることを望むことに集中しないで…」

ママは最後の三つの言葉を強調するためにペースを落とした。「悔い改めることに。集中しなさい。」

ジェシカは怒りをあらわにし、それからマットレスに平らに押し付けて、より良い的を提供するためにお尻を持ち上げた。ママは半分の力で彼女の尻を軽く叩いた。「だいぶ良くなったわ、ジェシカ。さて、ここであなたの重大な過ちはこれよ。傲慢さ。お尻叩きは外側の悪い行動を正すだけではないの。心の態度を正すことなの。あなたは姉妹たちに、お尻叩きを怖がっていないと思わせたかった。まあ、それには正しい方法と間違った方法があるわ。もし罪を犯すことを考えているなら、お尻叩きを怖がるべきよ。私たちはあなたにお尻叩きを避けたいからという理由だけで正しいことをしてほしいわけじゃないけど、もし思い出すのに助けが必要なら… 確かに役立つわ。以前、あなたはすべて間違った理由でお尻叩きを怖がっていないふりをしていた。しかし今、あなたは私の膝の上にうつ伏せになっている。その偽りの虚勢は役に立たないわ。お尻叩きを怖がらないためには、もっと良い理由が必要なのよ…」

ジェシカは震えた。「… どうやって？ どうすればいいの？」

「簡単よ… 祈りとともに。主に導きを求めてください。そうすれば主は導いてくださる…『あなたがたの遭った試練で、人間ならぬものはない…』」

パパは記憶から聖句を続けた。「… しかし神は真実な方です。あなたがたを耐えられないほどの試練に遭わせることはなく、試練と同時に、それに耐えられるように、脱出の道も備えてくださいます…」

ジェシカは目を上げて父親を見つめ、聖書暗記の宿題からその聖句を思い出した。「… あなたがたがそれに耐えられるように… コリントの信徒への手紙一 10:13。」

ママがほとんど遊び心のある一発を加えたとき、ジェシカの目が見開かれた。「まさにその通り！ … そしてもう一つ …」

ママの次の一撃が加わったとき、そこにはまったく遊び心はなかった。ジェシカは叫びながら腕と脚を伸ばし、ママの膝の上でお腹の上でよろめいた。ママは低く身をかがめてジェシカの耳にささやいた。「… ジェイミとジョアンを育てるためにあなたの助けは必要ないわ。あなたは自分のお尻をトラブルから守ることだけを心配しなさい。わかった？」

自分がゴールラインに近づいているのを感じて、ジェシカはうなずいた。「はい、ママ。」

ママはジェシカのお尻を軽く叩いて立ち上がる合図をし、もう一方の手でジェシカの髪をくしゃくしゃと撫でた。「さて、満足したわ。最後にやることは、立ってお父さんと向き合うことよ。彼があなたをどうするのが一番かよくわかっているから！」

ジェシカは口をとがらせて座り直し、膝の上に座り、お尻を揉んでから、はっと思い出してお尻から手を離した。ジェイミはドアから引き離そうとしたが、息もせず、一本の髪の毛もずれないようにした。これは狂気の沙汰だった。いつ終わってもおかしくなかった。ママとパパはジェシカにキスをし、ベッドに寝かせるだろう。それから彼らは廊下でジェイミにつまずき、家中にまたお尻叩きが行われているという特

徴的な音が聞こえるだろう。ジェシカはジェイミが自分のプライバシーを侵害したことを知るだろう。ついに全員がジェイミが本当は何者なのかを知るだろう。

ジェシカがゆっくりと父親の方に向き直ると、彼女はドアから背を向け、自分のお尻全体を再び視界に戻した。その効果は催眠的だった。二度の平手打ちでジェシカの尻は陽気な桜色に戻り、数本の盛り上がった手形がはっきりと見え、柔らかな黄色い光の中で輝いていた。ジェイミはジェシカの肉厚な臀部に鳥肌が立っているのさえ見ることができた。冷たい空気にさらされていたからだ。

ジェシカはすすり泣き、パパは判決を言い渡した。「ジェシカ、お前の不服従は故意の反抗からではなかったと信じている。後でジェイミに、お前を擁護してくれたことに感謝しなさい。しかし、お前がしたことはたとえ意図的でなくても不服従だった。お前は無礼のためにパドルで叩かれ、タイムアウトにされたばかりなのに、指示を無視したということは、前回のお尻叩きをあまり真剣に受け止めていないことを示唆している。ママは念押しの素早いお尻叩きなしでお前を許したが、タイムアウトを無視したことに対する公平で寛大な結果としては、念押しのお尻叩きが適切だと思う…」

パパはため息をつき、その声には傷つきがはっきりと表れていた。「自分について何か言い分はあるか、シマリスちゃん？」

ジェイミは経験から、これは罠の質問ではないことを知っていた。空虚な言い訳をすることと、正当な理由があることの間には違いがある。そしてより深刻なお尻叩きの場合、ジェイミは常に自分の弁護のために話す機会を与えられて

きた（もちろん、七人の喧嘩する兄弟姉妹の間で秩序を維持するためのママの数え切れないほどの迅速な念押しのお尻叩きは明らかな例外だった）。

ジェシカは臀部を引き締め、それからリラックスしてうつむいた。「言い訳はありません… わざとじゃないって言ったけど、振り返ってみると… 自分が軽率だったことはわかっていました。ママは私を簡単に許してくれました… ああ、なんてこった！」

ジェシカの脚が震え始めた。彼女はパパがジェシカを捕まえてベッドに導くのを見た。「おい！ 大丈夫か、シマリスちゃん？」

ジェイミはパパが片腕をジェシカの肩に回しているのを見て緊張した。ママは彼らに駆け寄った。もし彼らが暗い廊下を注意深く見れば、ジェイミは彼らの視界の真っ直ぐ中にいた。ジェシカは両手を顔に当て、青ざめていた。「私… 大丈夫だと思う… すごく緊張して、頭がくらくらして… ふう、冷や汗が出るよ！」

ママは手の甲をジェシカの頭に当てて体温を測った。「熱があるようには思えないわ。水がいる？ トイレに行く？」

ジェイミの闘争か逃走反応が活性化し、彼女は第三の選択肢を選んだ。凍りつき、背後にある寝室のドアに背中を丸めて押し付けた。ママが自分で水を取ろうと立つと、ジェシカはママの手を握って止めた。「いいえ、大丈夫です、ママ。この古いパジャマのせいです。グランマはいつも、冬の夜に暖かくてほっこりするように作ったって言ってました。ど

うか、そばにいてください。お願いしたいことがあるんです…」

ママの騒ぎを無視して、ジェシカは立ち上がり、彼らに向き直った。廊下では、ジェイミはジェシカの素っ裸のお尻と目線の高さにいることに気づき、それはドアの狭い隙間によって完璧に額縁に収められていた。

それから、ジェイミの恐怖に、ジェシカは分厚いニットのパジャマを脱ぎ始めた。「… ママ、パパ、私がこのお尻叩きを頼んだのは、悔い改めることを真剣に考えていることを示したかったからです… でも今までそれをうまくやってこなかった。以前は、心の中ではこれが必要だとわかっていたのに、ただ何とか、どんな方法でも、もう一回お尻叩きを免れる方法を考えていただけでした。私は賢くて敬虔な女性になりたい… でも忘れっぽかった。怠け者だった。無礼だった。不服従だった。反抗的だった… そして不正直でした… 父よ、私は懲らしめが必要です… そして私の泣くのを惜しんではなりません…」

今や完全に裸になったジェシカは、パジャマをきちんと折りたたみ、震えているにもかかわらず、しっかりとした姿勢で背筋を伸ばして立った。ジェシカが子供っぽいパジャマを脱いだ今、彼女の成熟した女性的な曲線が鋭く際立っていた。ジェイミは自分が言いたい言葉を声に出さずに口にし、ジェシカはその同じ言葉を声に出して言った。「お願い、私をお尻叩きにしてください、パパ。」

ママとパパは二人とも立ち上がってジェシカを抱きしめ、彼女の裸の姿がその間に挟まれた。ママはパジャマを受け

取り、大切な思い出のようにしっかりと抱きしめた。「本当に誇りに思うわ、ジェス。」

パパはジェシカの部屋の反対側のクローゼットを指さした。「よし、お嬢さん。お前はちょうどこれから受けるお尻叩きを正確に受けることになる。クローゼットからスリッパを一足取ってきなさい。ママがクリスマスに買ってくれたあの素敵な革のやつだ。」

ママとパパがベッドに座り直すと、ジェシカはジェイミの視界から消え、それから再び現れ、ひざまずいてそれぞれにスリッパを差し出した。彼らがスリッパを受け取った後、ジェシカは体重を落ち着け、ふっくらとして汗ばみ、輝き、しっかり叩かれたお尻を足の上に乗せた。パパは自分の左太ももを軽く叩いた。「ジェシカ、聖書は、あなたの年齢の不服従な子供は、革の舌の鞭で四十回を超えてはならないと教えている。それゆえ、お前は完全な聖書の四十回の鞭打ちを受けるが、革のスリッパだけを使う。これを、怠惰と反抗の両方に対する最終警告だと思いなさい。もし私たちがこの話し合いを繰り返さざるを得なくなったら、薪小屋で行うことになる。」

ジェイミはジェシカが爪先を丸めたり伸ばしたりして期待しているのを見ることができ、それからジェシカは素直に手と膝でパパの膝に向かい、ベッドの上に上がって体勢をとった。ジェイミは何が起こるかを知っていた。ジェシカはまさにパパの膝の上にまたがろうとしているのだ。膝や膝の上に前かがみになるのとは異なり、これはジェシカが脚を広げ、臀部をリラックスさせ、一打一打に完全に身を委ねることを強制することを意味していた。この体勢により、パパは悔い改めた娘を決して解けないように固定し、ママとパパがも

がく脚に邪魔されずに一斉にお尻叩きを浴びせることができるようになる。

ジェシカがうっかり身をさらそうとする直前、ジェイミは視線をそらした。彼女はここまで来て、戻れない地点をはるかに超えていたが、ジェイミにはできなかった。ジェシカにはできなかった。

目を固く閉じて、ジェイミは革が素っ裸の臀部に叩きつける音を聞いた。それぞれに泣き叫ぶ声が伴い、彼女はそのパターンを容易に推測した。パパとママは交代で、その連携は完璧だった。ドアから離れるよう自分に言い聞かせ、ジェイミはあえて目を開ける勇気を出し、今はジェシカの足が無駄にばたついているだけを見た。ジェイミはそのパターンが最初に推測したよりもさらに洗練されていることに気づいた。

明らかに、ママとパパは、もしジェシカが完全な罰を求めるほど大胆であった場合に備えて、事前に戦略を話し合っていた。パパはジェシカの左の尻の半分に一発を狙った… ママはジェシカの左の尻の半分に一発を狙った… パパはジェシカの尻の中心に一発を狙った… ママはジェシカの尻の中心に一発を狙った… パパはジェシカの右の尻の半分に一発を狙った… ママはジェシカの右の尻の半分に一発を狙った… それは六回の一定のセットで延々と続いた。ジェイミは合計が三十に達するまで黙って数え、両親はついに止まった。

ペースの変化に気づき、ジェイミはついに危険を冒してジェシカのお尻を一瞥した。もしジェシカが自分のお尻叩きが本当の涙をもたらすことを期待していたなら、彼女は失望し

なかった。ジェシカはもう大声で泣いていたが、パパが彼女を膝から持ち上げて腰をマットレスに下ろすと、彼女は三回の愛の一撃を感じた。パパは革の底を的に柔らかい円を描くようにこすりながら、ジェシカが泣き叫ぶのをやめて指示を受けられるようになるまで待った。「ジェシカ、最後の十回は座る部分に加える。」

足をこすり合わせながら、ジェシカはまだ終わっていないことに気づいてうめいた。「やあああ…」

パパからのさらに三回の愛の一撃。「そうだ、ジェシカ。従うか？」

ジェシカは床に足を置き、マットレスに体を固定した。「はあああい……」

ママが引き継ぎ、自然にパパの補佐役としての役割を果たした。「では、よく聞きなさい。両手を後ろに回して、自分のお尻を両手で持ちなさい… よし。さあ、お尻を両側から少し持ち上げなさい。」

ジェシカはマットレスの端で正しい角度にお尻を持ち上げるのに苦労した。座る部分の下の隠れた領域は今朝のパドル打ちでまだまだらなピンク色だったが、ジェイミは座る部分とジェシカのネブラスカ・コーンハスカーの赤い臀部の残りの部分との色のコントラストに驚嘆した。だから、これがこの角度から見た座る部分のお尻叩きの様子なのか。ジェイミは受け手としてそれがどのように感じられるかを正確に知っていたが、下側の臀部のひだがそれほど多くの保護を提供するとは知らなかった。

パパはジェシカのお尻を最後に軽く叩いて、始める時が来たことを警告した。「いい子だ、シマリスちゃん。もうすぐゴールだ…」

ジェシカはかすかにうなずいて「はい」と答え、お尻をぴんと張って的を簡単に見せた。「うんうん…」

すべての十回のゆっくりとした耐え難い打撃が、青白く露出した座る部分に加えられる頃には、ジェシカは柔らかな泣き声に溶け、叫ぶには疲れ果てていた。パパはスリッパを置き、ジェシカの裸の肩に柔らかい円を描くようにこすった。「もう終わりだ、シマリスちゃん。やったな。十分に罰せられた。」

ジェシカは、お尻をしっかりと握りしめたまま体を起こそうとして、甘えた声を出した。ジェイミは、ジェシカが爪を深く肉に押し込んで残した十個の小さな跡の明確な影を見分けることができた。明らかに、彼女は命綱のようにお尻を握りしめていたのだ。ジェシカがパパの目を見つめると、彼は優しく彼女のあごを持ち上げた。「さて、その不快な用事を終えたところで、振り返ってみよう。お前は、服従だけ、つまりルールに従うだけでは十分ではないとわかる年齢だ。自分の思い、言葉、行いに注意を払う必要がある。しかし、お前は責任も取ったし、悔い改めた。お前は許された。」

ジェシカはうなずき、それから自分の後ろ側を見た。はっとして、彼女はお尻から手を離し、ベッドの上に置き、ママの方を見るために体をひねった。「揉んじゃだめ？」

ママはくすくす笑った。「ジェス、もう終わりよ。役に立つと思うなら、いくらでも揉んでいいわ。」

安堵の息とともに、ジェシカは両手でお尻を握りしめ、生地のように徹底的に揉みほぐした。「ありがとう… わあ、私は当分薪小屋行きを狙うつもりはないよ！」

ジェイミは、自分が突然、宇宙人に誘拐された後で自分の体に戻ったように感じた。もちろん！ 彼女はまだここにいた！ そしてママが立ち上がっていた！「ローションを取ってくるわ。確かアロエベラが——」

ジェイミが振り返ったまさにその時、彼女には自分の部屋に無駄にダッシュして見つからないことを願う以外の計画はなかった… しかし彼女が寄りかかっていたドアが後ろで開き、彼女の頭蓋骨がそれにぶつかって聞こえるような音を立てた。

パパの声は廃品置き場の番犬の吠え声のようだった。「おい、今の音は何だ？」

ジェイミは自分の部屋に慌てて入り、足音が痛いほど大きく響いた。彼女が振り返って後ろのドアを閉めようとしたとき… 彼女はジョアンが反対方向の廊下を見下ろしているのに気づいた。もちろん、ジェイミは最初からジョアンの寝室のドアに寄りかかっていたのだ。パパがジェシカのドアに現れ、ジョアンと向き合った。ジェイミは彼がジョアンを上下に見るのを見て、彼が考えているに違いないことを興奮とともに悟った。

前提A：私の長女の寝室の外で奇妙なドスンという音がした。私たちが彼女にお尻叩きをしている最中だった。

前提B：兄弟のお尻叩きを覗いたことで何度かお尻叩きをしなければならなかった三番目の娘が、ドアのすぐ外に立っている。

「ジョアン。今、ジェシカの就寝前のお尻叩きを覗いていたのか？」

ジェイミの部屋とは反対の廊下の端を見下ろしていたジョアンは、頭を戻してパパを見た。「何をしたって？！？」

「彼女が何をしたって！？」とジェシカが部屋の中から声を上げ、声が裏返った。

パパは振り返った。「ジェシカ、私に任せなさい。服を着なさい。」

「はい、パパ！」とジェシカは、叩かれたばかりのお尻が決して失敗させない完璧な誠実な従順さで答えた。

パパはジョアンをまっすぐに見た。「ジョアン、イエスかノーか。ジェシカを覗いたのか？」

ジョアンは背筋を伸ばした。「いいえ、パパ。してません。」

「嘘をつくな、この小さなネズミ！」ジェシカが吠えたが、鋭い平手打ちが彼女を遮った。「いった！」

ジェイミはママの声を聞いた。「ジェシカ、お父さんに従いなさい。最後の警告よ。そこで待っていなさい。」

ジェシカの声にはほんの少しの余計な不快感が含まれていた。「…はい、ママ！」

ジェイミはごくりと飲み込んだ。時々、彼女とジョアンはジェシカが「怒ったリスモード」に入ると冗談を言うのが好きだった。通常、ママからの素早い一発でジェシカをそこから叩き出すのに十分だった。ママがパパの後ろでドアに現れた。

ジェイミが何が起こっているかを処理するにつれ、まるで悪魔が契約書を持って背後に忍び寄っているのを感じるかのようだった。彼女は何も言わずに、ジョアンが責任を負うようにするだけでよかった。ジェイミは、悪魔が取引の条件を説明する前に、肘で悪魔の喉を殴る自分を想像した。彼女がジョアンにこの責任を負わせるわけにはいかなかった。ジェイミはドアノブを握りしめ、それを勢いよく開けて「私だ！ 覗き見したのは私だ！ ここに私がいる！ 私をお尻叩きにしろ！」と宣言する準備ができていた。

しかしジェイミが何かかっこいい劇的なことをする前に、パパが口を開いた。「では、なぜお前は自分の部屋を出ようとしていたんだ？」

ジョアンは顔を赤らめた。「私… トイレに行きたかったんです。お尻叩きが終わるのを待っていて… もうすぐ終わりそうな気がしたんです。」

「そして、あの大きなドスンという音は何だ？」

ジョアンはごくりと飲み込んだ。「わかりません…」

「わからない？ 聞こえなかったのか？」

「私… 感じました！ ドアを開けたら、…」ジョアンは自分のドアに膝をぶつけた。「そんな感じでした。アライグマか何かだと思いました。」

「アライグマ？ 家の中で？」

ジョアンは再び廊下を見下ろしたが、アライグマはいなかった。「つまり、そうだと思ったんです。ドアを開けたら、ドアに重りが乗っているようにぶつかってきて、…」

ジョアンは深く息を吸い、父親の目をまっすぐに見た。「ママ、パパ、私はそんなことしていません。私は無実です。」

ジェイミはドアノブに冷や汗を感じた。それから彼女はパパの声を聞いた。「ジェイミ、起きてるか？」

ジェイミは自分のドアから出て行き、まだ壮大な告白のスピーチを頭の中で練習していた。しかし彼女にできたのは、「はい、パパ」だけだった。

「就寝前のお尻叩きのほとんどを聞いてしまったんだろう？」

ジェシカのお尻叩き全体の心像が、最初から最後まで、ジェイミの目の前に閃いた。「ええ、私… 全部が終わるまで眠れませんでした。それでドアのそばで待っていました、もし…」

「ドアのそばで待っていたのか？ なぜ？」

ジェイミの頭はフル回転した。彼女は真実を言う勇気がなかった。しかし、もう一度パパに嘘をつくことに耐えられなかった。「私… ジェシカのお尻叩きを聞きたかったんです…彼女のことをすごく気の毒に思ったんです。」

ジェイミは泣きそうになった。それは真実だった。しかしそれは真実のすべてではなかった。

「それで、この出来事が起きている間ずっと、そこに立っていたのか？ 何か見たり聞いたりしたか？」

ジェイミの胃は絡まり合った。彼女は嘘つきだった。「ジョアンは… ジョアンはジェシカを覗きませんでした。彼女が何かしているのを見たり聞いたりしませんでした！」

「それを言うとき、つまり『ジョアンがそうしているのを見たり聞いたりしなかった』という意味か？ ジョアンが何かしたかどうかを確認も否定もできないのか？ それとも、ここに立ってこれがすべて起こっているのを見ていて、ジョアンは無実だと言っているのか？」

ジェイミがジョアンを見ると、彼女の妹の唇が無言で「お願い！」と形作っているのを見た。

ジェイミはパパの目を見た。「ジョアンがジェシカを覗くことはできませんでした。私は百パーセント確信しています。ジョアンは無実です。」

パパはうなずき、それから肩越しにジョアンを見た。「ちょっと待て、まだトイレに行く必要があるのか？」

ジョアンはどもりながら、震える脚を見下ろした。彼女は無意識にトイレダンスを始めていた。「うん、私… 無実だよね？」

「無実だ！ 用を足しに行け！ さあ、行け、リトル・ミス・サンシャイン！」

ジョアンはジェイミの寝室を通り過ぎてバスルームに到達するために、ぼやけたように疾走した。

パパがジェイミと向き合うと、ママが彼のそばに現れた。ジェイミは自分が『マトロック』の証言台に座り、アンディ・グリフィスに代わって主役を演じているパパに尋問されているのを想像した。彼女の薄っぺらい話には、結局どれだけの穴を開けられるだろうか？ それからパパはジェイミを抱きしめて驚かせた。「真実を話してくれてありがとう、花火玉。」

ジェイミはパパの腕の中でとろけたが、水を流す音がその瞬間を遮った。ジョアンがバスルームからこっそりと顔を出し、タオルで手を拭いていた。パパはジェイミと向き合うために歩み寄り、彼女の上にそびえ立ち、それから彼女の目線に合わせるためにひざまずいた。「愛してるよ、リトル・ミス・サンシャイン。お前はいい子だ… 怖がらせてしまったならすまない。」

ジョアンは間抜けな笑みを浮かべた。「… ああ、ありがとう！ 一瞬ちょっと緊張してたけど。でもパパを怖がってたわけじゃないよ… 聞いてくれるってわかってたから。愛してるよ、パパ！」

ジェシカが再び古いパジャマを着て、寝室のドアから顔を出した。「じゃあ、待って？ 誰か私のお尻叩きを覗いたの？」

パパは両手を上げた。「いや。多分みんな聞こえたろうけど… 誰も見てはいない。安心していいぞ、シマリスちゃん。」

ジェシカは大きな笑顔で出っ歯を見せてから、ママの方に向き直った。「それは安心した！ …じゃあ、ジョアンに噛みついたことで、もう一回お尻叩きが必要か、それとも――」

ママは両手を上げた。「いいえ！ あなたはもうお尻叩きされた！ 許されたの！」

双子は両方とも廊下の反対側の自分のドアから顔を出した。ジャックは手を上げた。「じゃあ、ジョアンはお尻叩きされるの？」

ジルは首を振った。「違うよ、違う、就寝前のお尻叩きをされたのはジェシカの方だよ。」

ママは手を叩いた。「もうお尻叩きはおしまい！ もし今夜もう一人お尻叩きをしなければならなくなったら、私にお尻叩きをさせることでさらに一回お尻叩きをすることにするから！ さあ、ジュニパーを起こす前に、ベッドに行きなさい！」

双子は姿を消した。ママは安堵のため息をついた。「年上の娘たちもね。」

彼女はジェシカ、ジョアン、そして最後にジェイミにおやすみのキスをし、それぞれの後ろを優しく軽く叩いてドアの方に追いやった。次の二時間、ジェイミはベッドに横たわり、何度も何度も転がった。彼女は自分自身が、目撃したばかりのお尻叩きのすべての段階を歩み、あらゆる瞬間を味わうことを想像しながら、ジェイミは夢の世界で何が待っているのかを恐れた。

第V章 終わり

第VI章：生涯最高のお尻叩き

どういうわけか、ジェイミ・シュミットは馬に乗っていた。下着とお尻のないチャップスだけを身につけて。彼女はTバックを履いており、そこには漫画のキャラクターが馬から落ちている絵と、「スタントは自分でやります」というスローガンが描かれていた。

みんなが彼女を見ていた。家族、レッドフィールド・バプテスト教会と学校の女の子たち… そしてコンラッド・モーディング。ジェイミが振り返って観客全員を見ると、頬が火照るのを感じ、それから鞍から後ろ向きに落ち、転がりながら滑って細かい砂の上で止まった。お尻が衝撃の大部分を受け止めると、彼女は両方の頬が真っ赤に熱くなるのを感じた。

コンラッドは柵を飛び越え、ジェイミを腕に抱き上げた。なぜか彼は約三フィートの身長で、ランキン・バスの1970年代のアニメに出てくるホビットに似ていた。「恐れるな、ジェイミ！ 私が救ってやる！」

それから彼は一跳びで柵を飛び越え、ジェイミを地面に降ろした。

ママが叫んだ。「ジェイミ！ 何を考えてるの？ 怪我をするところだったわ！」

パパは群衆の中からゆっくりと歩み寄り、首を振った。「それに、いったい何を着ているんだ、お嬢さん？ クリスチャンの女性として適切な服装じゃないぞ。」

群衆のすべての視線が自分に注がれる中、ジェイミは突然自分が何を着ているかに気づき、できる限り自分を隠した。すぐにパパは彼女の手首を掴み、両手を頭の後ろに置かせた。「どうやらお前を叩かなければならないようだ、花火玉。お前のような悪い子にはそれが唯一ふさわしい罰だ。」

ジェイミはパパがパンティーに手を伸ばすのを見て、胃がねじれるのを感じた。「でも…」

一つの滑らかな動作で、パパは彼女のパンティーを引き下ろし、集まった群衆は一斉に息を呑み、それから大笑いした。

パパは彼女を乱暴に前かがみにし、片腕で腰に押さえつけ、しっかりとした平手打ちを加え始めた。「お前は恥じるべきだ。お前にはとても失望している。約束するぞ、お嬢さん、これはお前の人生で決定的なお尻叩きになる。」

あまりにもおなじみの焼けるような痛みが再び後ろに戻ってくると、ジェイミはネズミのようにきゅうきゅう鳴き、足をばたつかせた。「ごめんなさい！ このお尻叩きに値することはわかっています！ 自分が悪い子だってわかっています！」

ジェイミは目尻で、ママがコンラッド・モーディングにおむつバッグを手渡すのを見た。「コンラッド、どうやらジェイミは自立させるにはあまりに無責任すぎるわ。もう一度あなたにベビーシッターを頼まなければならないわね。さあ、私た

ちがこのいたずらなお尻を叩き終えたら、このいたずらなお尻におむつを当ててちょうだい。」

「いやああああ！」とジェイミは泣き叫んだが、特に激しい一発によって遮られた。それから、彼女が再び地面に立たされると、見慣れた音が聞こえた。ベルトのバックルがカチッと鳴る音、続いてなめし革がデニムジーンズのループを引き抜かれるスニッという音。

パパはジェイミの拘束を解き、両手でベルトをパチンと鳴らした。「そうだ、ジェイミ、私が終わったら、お前はモーディングさんに自分からお尻叩きを頼むんだ。新しいベビーシッターに従順になることを教えるためだ。柵に行って、お尻を突き出しなさい。」

ジェイミはすすり泣き始めたが、うなずいて従うことを強制した。柵に近づくと、サー・ハミルトンが蹄にリンゴを持ち、考え込むように噛んでいるのが見えた。それからサー・ハミルトンは、驚くべきミスター・エッドそっくりの声で話した。「待ってくれ、ジェイミさん。私はいつもあなたを、良家の馬が求めることのできる最も責任感があり寛大な主人だと思ってきました。あなたは全然悪い子じゃない。なぜこんな虐待に耐えるんだ？」

ジェイミは首を振り、涙が自由に流れた。「違う！ 私は悪い罪深い女の子だ！ これは虐待じゃない！ このお尻叩きに値するんだ！ 受けられる罰の一撃一撃に値するんだ！」

サー・ハミルトンは肩をすくめ、それからパイプを口にくわえた。「まあ、それがお前の好みなら、私が何を判断できるっていうんだ？」

完璧なタイミングで、パパは折りたたんだベルトをジェイミの素っ裸のお尻に叩きつけ、それから本格的に打ち始めた。一打一打が専門的な照準と猛烈な力で加えられた。ジェイミは悲鳴を上げ、柵にしっかりとしがみついた。

突然、ママが視野の端に現れ、聖書をめくっていた。「聖書にこうあるとおり、『子をその行くべき道に従って育てよ。そうすれば、年老いてもそれから離れない』… でも、あなたを一からおむつからやり直して育て直さなければならないのだから、ジェイミの人生におけるこの重要な日を記念すべきだと思うわ。何か… 象徴が必要ね。罪と恥の永遠の染みを表す消えない印を。」

ジェイミは柔らかなシューという音を聞き、振り返るとコンラッド・モーディングが真っ赤に焼けた焼き印を火から引き抜いているところだった。立ち上る湯気を通して、ジェイミはシュミット家の馬牧場の印を認識した。ラテン十字架に巻き付いた「S」の文字だ。

ジェイミは激しく首を振った。立ち上がろうとしたが、手足が超強力接着剤で固定されているように感じられた。彼女は閉じ込められていた！「やめて！ それだけは！ それ以外なら何でも！ いい子になるから！」

しかしコンラッド・モーディングはただ首を振った。「すまない、ジェイミ… でもお前のケツはもう俺のものだ。」

ジェイミが叫ぶと、彼女は焼けつくような焼き印がお尻に押し付けられるのを感じ、シューッという音とともに、人生で初

めて、彼女は本当に、心から叫んだ。しかし、どれほど身をよじってもがいても、彼女は逃げ出せなかった。

***

まだ叫びながら、ジェイミは枕から頭を起こし、自分のベッドにいることに気づいた。彼女はひどく汗をかいており、胸が上下しているのを感じた。反射的にお尻を握りしめ、焼き印が残した焼け跡がまだ感じられると確信した。しかし彼女のお尻は触ると冷たかった。

震える息をしながら、ジェイミは顔を両手で覆った。「私の何がおかしいんだ？ 神様… なぜ私をこんなふうに造ったのですか？」

ジェイミは指の間からデジタル目覚まし時計を覗いた。午前二時だった。自動的に、ジェイミは両親が寝室に飛び込んで、騒音は何かと尋ね、それから家中を起こしたことで生涯最高のお尻叩きのために薪小屋に連れて行く自分を想像した。

ジェイミはうめいた。「どうしてこんなふうに考えるんだ？ 彼らはそんなことは絶対にしない！ そんなことで薪小屋に連れて行ったりしない——」

ジェイミは薪小屋のことを考えて言葉を止めた。そして、ついに思い出した。「ヘアブラシ… なめし革のベルト… 取りに行くのを忘れた！」

瞬時に、ジェイミは冷や汗を感じた。自分の秘密を隠すために行ったすべての努力にもかかわらず、最も重要な細部を忘れていた。どうしてこんなに愚かだったのか？

髪に指を食い込ませながら、ジェイミは選択肢を考えた。あと数時間で、彼女は朝の雑用のために起きなければならない。その後で薪小屋に忍び込めるだろうか？

それからジェイミは時計を考えた。パパでさえこんなに早くは起きないだろう。彼は通常午前五時には起きて働いている。

これが彼女の最善のチャンスだった。しかしそれはまた、万が一捕まった場合、就寝時間を過ぎて起きている理由について合理的な説明ができないことを意味した。彼女は結局、本物の薪小屋行きを手に入れるかもしれない。

ジェイミが冷や汗をかくのを感じながら、彼女は決断した。これは花火を点火したときや、パパの銃器庫のロックを破ったときと同じだった。くそくらえ！ 捕まるなら、最も壮観な方法で捕まってやる。

ジェイミは毛布を跳ねのけ、ドアに向かって忍び寄った。多分みんな彼女の叫び声を聞いただろう。多分彼女は一瞬で捕まり、すべてを告白するまでお尻を叩かれ、悪夢がついに終わるだろう！

しかしジェイミが慎重にドアを開けると、何も見えなかった。妹の寝室の一つから柔らかなうめき声が聞こえた。ジェイミはそれがジェシカかどうか考えた。叩かれたばかりの真っ赤な後ろ側で眠れずにいるのだろう。

数秒待った後、ジェイミはジェシカが再び眠りに落ちたと判断し、廊下を忍び足で進んだ。玄関でモカシンを見つけ、それを履いた。

しかしジェイミがドアを出ると、奇妙な考えが浮かんだ。彼女は薪小屋に戻ろうとしている。パパが起きるまでほぼ二時間あった。パジャマの中で震えながら、ジェイミは大殿筋を締めたり緩めたりした。

結局のところ… 彼女はお尻叩きに値するんじゃないか？

瞬時に、彼女の理性的な心はそれを愚かな考えとして却下した。つい昨夜、彼女は撃たれるか、もっと悪いことに捕まるというところまで来ていたのだ。

それから、ジェイミは奇妙な静けさを感じ、内臓がもがくのを止めた。「でも捕まらなかった…」

十六年間、彼女はこの秘密を隠してきた。あまりにも明白で、何度も、様々な方法で、長い間そうしてきたのに、それでも… 彼女はここにいる。そして、奇妙な考えがジェイミに浮かんだ。もし神がこの秘密を守るのを助けているのなら？ もし両親が決して見つけなかったのは、見つけるべきではなかったからなのでは？

ジェイミは聖書の授業で学んだことすべて、現在の苦境に関連しそうなことを思い出そうとした。彼女は神学201のコースで何かを思い出した。神の性質は全能、全知、遍在であること。すなわち、全能で、すべてを知り、常にそこに

おられるということだ。確かに、もしジェイミが捕まる運命なら、彼女は単に捕まるだけだろう、そうだろう？

だから、神の意志を変えられるものが何もないのなら、一か八かやってみてはどうか？

しかし彼女の論理の何かがおかしいように思えた。ジェイミはささやいた。「あなたの罪は必ずあなたを見つけるだろう…」

ジェイミは自分の尻を一瞥した。「でもお尻叩きは罪じゃない。お尻叩きは良いことだ。公平だ。まったく理にかなっている。悪い子はお尻を叩かれる。私は罪を犯していない、本当は…」

良心の中で、ジェイミは二歳の頃、自分自身をお尻叩きにした最も初期の記憶を思い出した。彼女は両親が、お尻叩きをするのは彼らの役割であって自分の役割ではないと言ったのを覚えていた。それで決着がついた。これは不服従だ。これは罪だ。

しかしジェイミは自制心の重要性について考えた。彼女はヘブル人への手紙の暗記聖句を思い出した。「すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、むしろ悲しいもののように思われる。しかし後には、それによって鍛えられた人々に、義という平和の実を結ばせるのである。」

それがお尻叩きというものではなかったか？ それは行われている間は決して楽しいものではなく、自分自身をお尻叩きにするときでさえも、その後は… 彼女はいつもとても平和を感じた。だから多分それが問題なのだ！ 彼女はた

だもっとお尻叩きを必要としているだけで、そうすれば気分が良くなるのだ！

「それならなぜママとパパに助けを求めない？ 彼らのところに行き、助けを求める。何が間違っているかを話す。もっと懲らしめをくれるよう頼む…」

努力して、ジェイミは玄関を開けることを自分に強制し、ポーチに足を踏み出した。彼女は青い月明かりの下の薪小屋を、その美しさに息を呑みながら見つめた。それはとても美しかった。

ジェイミは会話がどうなるかを想像しようとした。「ママ、パパ？ 私は就寝時間を過ぎてこっそり出かけて、薪小屋で自分自身をお尻叩きにしていました。そう、お尻叩きに夢中なんです。言いました。薪小屋に行って、お尻叩きに来るのを待っていてほしいですか？」

ジェイミは首を振った。そんなことを言えるはずがなかった。おそらくその前に恥ずかしさで死んでしまうだろう。自分には何かがおかしいのだ。多分彼女は内側から悪い人間で、世界のどの子供よりもはるかに多くのお尻叩きを必要としていて、両親が与えるお尻叩きでは十分ではないのだろう。

あるいは、いつか両親のところに行って、すべてを告白するべきかもしれない。あるいは、間接的にお尻叩きについて尋ねることもできる。例えば、大学を卒業した後もお尻叩きが必要かどうかとか。もしかしたら、他の誰よりもお尻叩きを必要として生まれてくる子供がいるのか、絶え間ない

お尻叩きを必要とする子供がいるのかを尋ねるかもしれない。

それは両方の世界の最良の解決策かもしれない！ なぜ尋ねるのかを認めずに、自分の質問の答えを見つけられるかもしれない。

しかし答えが何であれ、ジェイミは今夜お尻叩きが必要であり、この時間に両親を起こして頼む勇気がないことを知っていた。ジェイミは深く息を吸った。「どちらにしても、これが最後だ。最後の自分へのお尻叩きをして、それから彼らに話すんだ。」

それで彼女は決心した。しかしジェイミはまっすぐ薪小屋には向かわなかった。彼女は馬小屋に向かい、中に忍び込んだ。

いいや、もしこれが自分自身をお尻叩きにする最後なら、しっかりやり遂げなければならない。彼女は昔の西部劇のように、自分に本物の馬鞭打ちを加えるつもりだった。

ジェイミは馬が鼻を鳴らすのを聞いて固まり、息を止めようとした。馬が運動するメインアリーナで、ジェイミは父親のアンティークの馬鞭と牛鞭のコレクションを見つけた。特に一つの鞭が彼女の目を引いた。短い柄に、何十本もの細い革の舌が付いていた。彼女はそれがどんな感触かずっと気になっていた。かつて、彼女はそれを自分のラングラージーンズの尻の部分に、意図したより少し強く叩きつける勇気さえ持った。

鞭を手に持ち、ジェイミは試しにそれを鳴らした。隣の馬房から馬が鼻を鳴らし、それからいななきを上げた。ジェイミは飛び上がり、馬鞭を落としそうになった。彼女はそれをしまおうとしたが、意味がないことを思い出してやめた。「バカ、バカ、バカな私！」

苛立ちでジェイミは馬小屋から出て行き、入り口で両親が待っているかどうか考えながら歩いた。彼女はそれを押し開け、完全な告白をする心の準備をし、それから丁寧にすぐに薪小屋に連れて行ってくれるよう頼もうとした。しかしそこには誰もいなかった。

西部の牧場はすべて静かだった。

ジェイミが薪小屋を目にすると、彼女の足はまるで自分の意志で動いているかのように感じられた。ためらいはもうなかった。彼女はここまで来た、そして最後までやり遂げる決意だった。ジェイミは馬鞭を胸にしっかりと抱きしめ、叱る口調で声に出してつぶやいた。「ジェイミ・イラリオ・シュミット、お前のお尻叩きの時間だ！ さあ、お尻を薪小屋に持っていきなさい。」

彼女は全身が震えているのを感じ、それが恐怖からであることを十分に承知していたが、それでもそれを愉快で陶酔的に感じた。

ジェイミは薪小屋のドアを押し開け、後ろで閉めることを気にしなかった。結局、良いお尻叩きを切実に必要としている悪い子がいるのだから、無駄にする時間は一秒もなかった。ジェイミは白熱灯をつけ、鞍ラックを壁際に押しのけて床の中央を開けながら、自分自身に説教する遊びを続け

た。馬鞭を正しく振るには立っている必要があった。「泣き言は無用だ、お嬢さん。自分にこれがふさわしいことはよくわかっているだろう。これはお前の人生で最高のお尻叩きになる。約束する、決して忘れられないだろう！ そうだ…素っ裸でやる。」

それで、ジェイミは腰から下を裸にし、パジャマのシャツを左手で胸にしっかりと押さえ、背中を反らせて立ったままでお尻をできるだけ突き出した。試しに、ジェイミは馬鞭を優しく振り、自分の望む場所に正確に当たることを喜んで確認した。それは彼女の右の尻の半分の大部分を覆い、鞭のような舌の先端は左の尻の半分の中心に当たるだろう。ジェイミは落ち着くために息を吸い、以前の薪小屋行きを鮮明に思い出した。「聖書は、犯罪者はその罪に対する当然の罰として四十回の鞭打ちから一回を引いたものを受けるべきだと教えている。あなたの不服従に対して、あなたは完全な三十九回の鞭打ちに値する。それぞれを数え、私がお尻叩きをしてくれたことに感謝しなさい。」

ジェイミは巧みに馬鞭を自分の尻に全力で叩きつけた。衝撃を感じて息を呑み、一瞬、彼女は自分を偽りの世界から引き戻した。「ああ… 痛い…」

歯を食いしばり、ジェイミはすぐに二回目の馬鞭を加えた。それは一回目が当たった場所のすぐ下に当たった。「違う！ 数えろ！ 私の後に続け。一回、先生！ ありがとうございます、先生！」

しかしジェイミが数えるふりをする前に、彼女は何十本もの細長いミミズ腫れがお尻の上で燃え上がる炎のように広がるのを感じた。それは現実のように感じられただけではな

かった。それは現実だった。あまりにも現実で、彼女は実際に平静を保ち、叩かれる側の役割を続けるのに苦労していた。

しかし叩く側のジェイミは、叩かれる側のジェイミの反抗を一切許さなかった。ジェイミは正確な手首のスナップで三回目の鞭打ちを加え、鳴り響くパチンという音を達成した。ジェイミはむせ、それから何とかうめいた。「一回、先生！ありがとうございます、先生！」

ジェイミは声を低くし、冷たい威厳をもって話した。「まあまあだ。しかし最初の二回はカウントしない。お前は間違ったことをした、ジェイミ。自分を哀れむな。自分が何をしたかを考え、数えなさい。それから神に悔い改めと、じっとしていることを助けてくれるよう祈りなさい。二回を数えろ。」

ジェイミが四回目の鞭打ちを加えると、最初の三組のミミズ腫れが抗議の叫びをあげ、彼女は悲鳴を上げた。「痛い！二回、先生！ ありがとうございます、先生！」

いつ家族を目覚めさせるかもしれないという考えに、ジェイミは悲鳴を抑えようとしたが、次の一撃を加えると、薪小屋の外の世界についての考えはゆっくりと溶け去った。薪小屋が今や彼女の全世界だった。「ああ！ 三回、先生！ ありがとうございます、先生！」

着実に次の一連の打撃を加えた。痛みは耐えられないほどで、鋭い刺すような痛みを感じ、止めたいと思ったが、それでもお尻叩きを続けられるほど耐えられた。彼女はリズムを見つけていた。しかし十二回の後、ジェイミは苦しみ始め、リズムを失った。ジェイミが唇が震えるのを感じると、彼

女は厳しい叩く側の役割に切り替えた。「数えろ、ジェイミ。」

左手でお尻を覆いながら、ジェイミは首を振り、本当にお尻叩きの痛みが終わることを望んだ。「嫌だ！ もうやめて！ お願い、もうやめて！」

ジェイミは左手を上げ、まるで自分のお尻から引き離すように、馬鞭の握りを切り替えて右手を自由にした。「警告はもうない。最初からやり直しだ。」

シャツの裾を結んだ右拳に引き上げ、ジェイミは左手で鞭を高く掲げた。彼女は右腕の下からお尻を横切るように鞭を狙い、次の一撃で左の尻の半分を覆い、細いミミズ腫れが前のセットと対称になるようにした。もはやこらえられず、ジェイミは叫び、それから息を整えた。「もう一度一から数え始めろ。」

馬鹿げていると感じながら、ジェイミは顔をしかめた。不公平だ！ 彼女はお尻叩きに年を取りすぎている！「一回、先生！ ありがとうございます、先生！」

彼女は今や以前は無傷だった領域を覆っているため、新鮮なミミズ腫れをより一層強く感じた。努力して、彼女は同じ猛烈なエネルギーで二回目の打撃を加え、むせた。「二回、先生… あ、ありがとうございます、先生！」

しかし三回目の打撃を狙おうとしたとき、それは予想より低く当たり、彼女の上腿にパチンと当たり、お尻にはほとんど当たらなかった。ジェイミはひるみ、数え始めたが、幻想は壊れていた。「三… 違う！ これは馬鹿げてる！」

やる気なく、ジェイミは四回目の打撃を狙ったが、ほとんど痛くなかった。少し顔をしかめながら、ジェイミは目を開け、周囲の部屋をはっきりと見た。彼女は一滴の涙も流していなかった。普段、ジェイミは少なくとも耐えられる限り、泣き虫にならずにお尻叩きに耐えられることを誇りに思っていた。

冷たい空気が露出した後ろ側をくすぐるのを感じながら、ジェイミはこの瞬間に自分がどれほど信じられないほど愚かに見えていたかを考えた。ジェイミは震える息を吸った。傲慢さ。それが彼女の問題だった。どれほどお尻叩きに値することに同意しても、ジェイミはいつも自分の大きな口を開けて事態を悪化させる方法を見つけた。「どうした、それだけがお前の実力か？」

腕を高く上げ、ジェイミは馬鞭を振った。今回はより慎重に、そしてはるかに良い結果（彼女のお尻にとってははるかに悪い結果）をもたらした。

黙って背筋を伸ばして立ち、ジェイミは痛みと、父親に反抗するふりのスリルの両方を味わった。

ついに彼女はパパの声の物真似で話した。「ジェイミ、私はお前を叩きたいわけではない。叩かなければならないことを嫌っている。しかし、お前が従うことを学ぶまで、必要なだけ叩くつもりだ。このお尻叩きはお前が従うことを学ぶまで終わらない。もう一度一から数え始めろ。」

ジェイミは口をとがらせ、いつもそうしたいと思っていたように目を回した。「嫌だ。あなたには私を強制できない。」

パチンという音とともに、ジェイミは馬鞭を置いた。自分自身でさえ驚いた。それからジェイミは鞍ラックを掴み、それを乱暴に自分の方へ引き寄せ、優雅に前かがみになった。まるで見えない手によって強制的にその上に曲げられているかのように。「ウォームアップのお尻叩きでお前の態度が直るかどうか見てみよう。もし今夜お前が数え始めなければ、明日の朝に続ける。」

両手を使って、ジェイミはそれぞれの尻の半分に二発の素早く固い平手打ちを加えた。彼女は温かいミミズ腫れが手のひらに当たる感触を味わい、この状態では単純な平手打ちでさえ苦痛であることに気づいた。

ジェイミはふんと鼻を鳴らすふりをし、自分で加える平手打ちを実行しながらうめいた。十回の打撃をゆっくりと全力で加えた後、彼女は着実にペースを速めて軽快なテンポにした。乗馬用語で言えば、彼女は歩行から速歩、そして駈歩へと進み、全速力の直前まで行った。

幻想はようやく再び現実的に感じられ始めた。しかし何かがまだ欠けていた… エスカレーションだ。

ジェイミは止まり、今やお尻全体を覆っている均一なチクチクする痺れを熟考した。目を強制して開けると、ジェイミは自分のなめし革ベルトと木製ヘアブラシを見つけた。彼女が置き去りにしたまさにその場所に。

浮かれた気分で、ジェイミはそれらを掴み、笑いをこらえた。「そう… それがまさにお前が必要なものだ、悪い子よ。

まずはママのヘアブラシをたっぷり… そしてパパのベルト… それから…」

ジェイミはベルトを置き、腕をひねって木製ヘアブラシの裏を突き出したお尻に当て、それをヒリヒリするミミズ腫れの上で優しくこすり、冷たく滑らかな表面に押し付けられるのを感じた。「… お前の馬鞭打ちを最初からやり直す。」

ジェイミはヘアブラシを高く掲げ、目を閉じた。心の目には、彼女は背の高い、厳しい、物静かなカウガールであり、懲罰を与える準備ができていた。同時に、彼女は臆病でか弱い小さな女の子であり、膝の上に無力に横たわっていた。来るべきお尻叩きの現実が、他のすべてのものを彼女の心から追い払った。

「ジェイミ？ 何てこった！」と甲高い女性の声がきゃあきゃあと叫んだ。

悲鳴を上げて、ジェイミは飛び上がり、声の主を見つけようとして足を滑らせた。彼女は鞍ラックに自分を支えようとしたが、それは倒れ、彼女も一緒に倒れた。最後の悲鳴とともに、ジェイミは転倒を防ぎ、裸を隠すための必死の最後の試みとして足をばたつかせた。

それから彼女は平らに尻の上に着地し、お尻が粗い木製の床に平らに押し付けられると、ジェイミは敏感なミミズ腫れが自分が叫ぶよりも大きく彼女の注意を求めて叫ぶのを感じた。

ジェイミは懐中電灯が自分の顔に向けられると、目を覆った。「私は… ただ…」

それから、ジョアンが薪小屋に足を踏み入れ、ライトを消した。ジェイミがまばたきすると、ジョアンが片手にピンクのプラスチック製デジタルカメラを持っているのが見えた。前面の小さな赤いランプが邪悪な目のように光っていた。

ジョアンが耳から耳まで笑みを浮かべると、その目は輝いていた。「… 知ってたんだ！」

***

数十本のミミズ腫れの上に体重を完全に乗せて座る苦痛を無視して、ジェイミは数秒間ジョアンを見つめた。あるいは数分間かもしれなかった。

どれだけの時間であれ、ジェイミはついに、いいや、これは夢ではない、そしてそう、これは確かに起こっていると認識した。自動的に、ジェイミは降伏のジェスチャーとしてゆっくりと両手を上げた。「わかった、ジョアン。お前は俺を捕まえた、この小さなネズミめ。それで、何が欲しいんだ？」

ジョアンは一拍置き、まるで自分もこれが夢かどうか確信が持てないかのようだった。「え？ 何も欲しくないよ。ただ君が薪小屋で何をしているのか知りたかっただけで… そして俺の推測は当たった！」

ついに、ジェイミは涙が目に浮かぶのを感じた。彼女は恐怖、絶望、そして深い感謝の奇妙な入り混じりを感じた。彼女の罪は露見した。もうこの秘密を抱える必要はない。ついに終わった！「さあ、ジョアン。俺は… 薪小屋で自分自身をお尻叩きにしていたんだ。お前は自分の目で見た。た

だママとパパに言いに行け。それとも朝食まで待って、みんながそこにいて聞けるようにするか？」

ジェイミは奇妙な平和を感じた。ここ数年、彼女は頭の中で「あの変な会話」を何度も何度も再生していた。自分が間違ったことをしたという最終的な宣言と、罰として薪小屋行きが必要だということは、当然の結論だった。それから彼女はついに許され、恩寵に回復されるだろう。もしかしたら今日の後、彼女の家族での生活は二度と同じではなくなるかもしれない。しかし少なくとも、彼女はもう自分だけが知っているわけではない。

それから、ジョアンは手を差し出した。パジャマのズボンを見下ろして、ジェイミは片手でそれをぎこちなく引き上げながら、ジョアンの差し出した手を受け入れ、引き上げられるままにした。絡まったパンティーが食い込んでいるのを感じて、ジェイミは気まずそうにズボンの中に手を入れて下着を直し、それからジョアンの小柄な姿を見下ろした。ジェイミは自分がジョアンを簡単に制圧して逃げ出せることに気づいた。それは結局何も変わらないだろうが、避けられないことをあと数分間、貴重な時間だけ遅らせることができる。

ついに、ジェイミは目を細め、しかめ面をした。「それで？行こう。お前が俺のことを告げ口するときに、俺もそこにいたい。」

しかしジョアンはゆっくりと首を振っただけだった。「いや、ジェイミ… 俺は誰にも言わないよ。だって…」

ウインクして、ジョアンはデジタルカメラを掲げた。「… 誰も告げ口する奴は好きじゃないからな！」

第VI章 終わり

第II巻に続く

クリムゾンとクローバーとヴァイオレット

むかしむかし、ヴァイオレットという名の、元気で好奇心旺盛な六歳の女の子がいました。彼女は黒い髪をしていて、好きな色は青と紫で、特に外で遊ぶときはオーバーオールとヘアバンドを身につけるのが好きでした。彼女は周りのすべてを探検し発見したいという飽くなき欲求を持っていました。ある晴れた午後、彼女は裏庭で遊びながら、魔法の庭園の王女のふりをしていると、母親の大切な花壇に気づきました。鮮やかな色彩と繊細な花びらが彼女の幼い目を魅了しました。

魅了されたヴァイオレットは、誘惑に抵抗できませんでした。「花びらの王女は、城を悪者から守るために、これらの魔法の花を必要としているのだ」とヴァイオレットは語りました。

いたずらっぽい笑みを浮かべて、彼女は数本の花を摘みました。自分の部屋に飾ったらきれいだろうと思ったのです。その部屋は花びらの王女の部屋も兼ねていました。彼女の知らないうちに、母親は台所の窓から見ていました。

ヴァイオレットが摘んだ花を抱えて家の中にスキップして入ると、母親が玄関で彼女を待ち受け、心配そうな表情を浮かべていました。捕まったことに気づいて、ヴァイオレットの心臓はドキッとしました。

「ヴァイオレット、よく聞きなさい」と母親は、冗談抜きの口調で言いました。「たとえママの庭の花でも、許可なく花を摘んではいけません。他の人の持ち物を尊重することは大切なことです。怒ってはいませんが、これからはルールを決めます。ママの花を許可なく摘んだら、お尻を叩きます。わかったわね、ヴァイオレット？」

ヴァイオレットの心は沈みました。あまり理解できませんでしたが、母親の声に失望が混ざっているのは感じ取れました。「でもママ、すごくきれいだったし、ただ取っておきたかっただけなんだ」と彼女はわざと無邪気に訴えました。

母親はため息をつき、ヴァイオレットの目線の高さにしゃがみ込みました。「きれいだと思ったのはわかってるよ、可愛い子。でも、許可なく何かを取るのはやっぱり許されないことなんだ。それは盗むって言って、他人を傷つけることになるんだよ。さあ、ルールを理解したか確認するために、私の後に続いて言ってみて。これ以上許可なく花を摘んだら、お尻を叩きます。」

ヴァイオレットの目が見開かれ、一瞬、心配そうな表情が浮かびました。それから彼女は、王女というのはきれいなドレスを着て、何でも好きなことをしていいんだと考えました。不機嫌になり、本物の王女だったらいいのにと思いながら、ヴァイオレットは単調な声で繰り返しました。「これいじょー、ゆるしなくおはなをちぎったら、おしりをたたかれます。」

「いい子だね、ヴァイオレット。許すよ、おとがめなしだ。明日、公園に連れて行って、野の花を探そう。あれなら摘んでもいいよ。」ヴァイオレットはもう花を摘んでしまっていた

ので、ママはそれらを花瓶に入れてヴァイオレットの部屋に飾りました。

ヴァイオレットは窓辺にそれらを見つめて座っていましたが、もう好きではなくなっていました。なぜ自分が欲しいきれいな花を全部摘んではいけないのか？ 王女はみんなのボスなんだ！ もしヴァイオレットが王女だったら、衛兵に毎日ママのお尻を叩かせて、世界中の花を全部一度に自分の寝室に置かせるだろうに。

ヴァイオレットはお尻叩きが何かを知っていました。アニメで見たことがあり、ナーサリーライムの本にもお尻叩きが出てくる話がいくつかあったからです。でもヴァイオレットはお尻を叩かれたことがありませんでした。「それは私が本物の王女だからだ」とヴァイオレットは考えました。本物の王女は決してお尻を叩かれません！ 彼女たちは王様のような存在で、ただもっと美しいだけなのです。

ヴァイオレットは窓から花壇を見つけ、決心しました。窓辺の花は寂しがっていて、世界中の花を全部王女の部屋に一緒に集めなければならないのです！

角から注意深く観察して、ママが洗濯で忙しいことに気づきました。ヴァイオレットはこっそりと抜け出し、計画を考えました。もし一、二本だけ取れば、ママは絶対に気づかない。毎日これを続けて全部の花を手に入れて、それから全部の花が一緒に集まってママも喜ぶだろう！

ヴァイオレットは花壇に駆け寄り、どの花が一番好きか自分と議論した末、紫色とピンクの花、蘭に決めました。それからマリーゴールドを摘みました、これで二本。でもスミレ

は自分の名前の花だから我慢できず、スミレはとても小さいので五本摘まなければなりませんでした。

玄関に駆け込むと、ヴァイオレットは花を目の前に掲げて狂ったように笑い、一瞬たりとも目を離したくありませんでした。

「それ、何を持ってるんだい、パンプキン？」と低い声が響きました。ヴァイオレットは飛び上がって花を背後に隠しました。パパが早く帰ってきたのです。

ヴァイオレットは唇をすぼめ、うつむきました。「なんでもない。」

「それはママの庭の花のようだけど。摘んでもいいって許可をもらったのかい？」

「うん。もらったよ。」

「それはママが優しかったね。ママはあの花を大事にしているんだ。しっかりキスしてありがとうって言うんだよ。」

ヴァイオレットは足をこすり合わせました。自分の話が通っている？「うん、そうする。」

パパはママが花の瓶をしまっている戸棚を開けました。「花瓶に入れてあげようか？」

ヴァイオレットは前後に揺れました。「ぼく、花瓶もってる。」

パパは眉を上げて戸棚のドアを閉めました。「おや！ ママがもう君に買ってくれたのかい？」

「うん。今、部屋に持って行くんだ！」ヴァイオレットは走り去りました。花が部屋に入れば、すべてうまくいくのです！

彼女は花を他の花と一緒に花瓶に入れ、またそれらを見つめて座りました。数を数えようとして、一、二本ずつ集め続けて全部を手に入れようと決めました！

寝室のドアを叩く鋭い音が、ヴァイオレットを白昼夢から覚ましました。

ママが乱暴にドアを開け、長い黒髪が顔を縁取っていました。ヴァイオレットが一言でしか表現できない表情でした。「あー、やばい。」

「ヴァイオレット、パパがあなたが庭からまた花を摘んだと言ってるわ。本当？」

「ううん。してないよ。」

「私に嘘をつかないで、ヴァイオレット。あそこに蘭が見えてるわよ。」

パパが廊下から現れ、明らかに妻を心配していました。「大丈夫か、クローバー？」

ママは両指で鼻筋を押さえ、鋭く息を吐きました。「大丈夫よ、ハニー。ただ… ちょっとね。」

パパはママの肩の後ろに手を置きました。「わかってる。俺がついてる。座って休んだらどうだ？ 俺がこの件を調べるよ。今日は長い一日だったろう。」

ママはその抱擁に身を寄せました。「ありがとう、ヘンリー。今日はあなたが私のヒーローよ。そうするわ。」ママはヴァイオレットのマイリトルポニーのベッドに腰掛け、こめかみを揉みました。

そうしてパパはヴァイオレットに近づき、片膝をついて、彼女の目をまっすぐに見ました。

「ヴァイオレット。ママが言うには、俺が帰ってくる前に、君はママの庭から許可なく花を摘んだそうだ。本当か？」

「私は花びら王女だったんだ」とヴァイオレットは説明しました。これで問題が解決すると思ったのです。

「それから、ママが君に新しいルールを説明した。ママの庭から許可なく花を摘んではいけない。そうだな？ それで、俺が帰ってきたら、君はまた花をたくさん摘んでいた。ママはそれを摘んでもいいって許可したのか？」

ヴァイオレットは良い話を考えるために頭をフル回転させました。一、二本だけなら誰も気づかないと思ったことを思い出しました。「一本か二本だけだよ。」

「違うよ、ヴァイ。二本以上だった。だから、君がそれらの花を摘んだとき、それはママがダメと言った後だった。そしてその蘭や他の花を摘む許可は得ていなかった。そうだな？」

ヴァイオレットの注意は花のアレンジメントに向けられました。ここで彼らは花が自分の部屋でどれだけきれいかを見て、自分のことを喜んでくれるはずの場面でした。「大丈夫だよ。こっちの方がきれいだもん。」

「だから『はい』だな。君はママの許可なくそれらの花を取った。それから俺に、ママがそれらの花を摘んでもいいって許可したと言った。君は俺に嘘をついたのか、ヴァイオレット？」

ヴァイオレットは顔をしかめ、目が潤みました。「うん。うそをついた。」

「ママはルールはこうだと言っていた。もし花を摘んだら、お尻を叩く。覚えているか？」

突然、ヴァイオレットがアニメや本で見たお尻叩きのすべてが一度に記憶に溢れました。「うん。これいじょー、ゆるしなくおはなをちぎったら、おしりをたたかれます。」彼女は記憶から暗唱しました。

ママは息を吐きました。「ほらね？ 彼女はちゃんと覚えてるわ。鉄の記憶力ね！」

誘導するように、パパはヴァイオレットを寝室の隅に導きました。「さて、これまでこんなことをする必要はなかったが、この状況では完全に公平だと思う。ヴァイオレット、隅に立って壁の方を向きなさい。タイムアウトだ。君のお母さんと私はこれについて話し合う必要がある。」

ヴァイオレットはうつむきました。彼女は何度もタイムアウトを経験してきました。両親が話し合っていることのすべてが聞こえ、その多くを理解していました。

ヴァイオレットが壁のクリーム色のペンキの質感を研究していると、最初に聞こえたのはパパの落ち着いた声でした。「俺がやれるよ、クローバー。君は——」

「ダメよ、ヘンリー。私が最初に彼女をやらせて。クリスマスツリーみたいに輝かせてやるわ。」

「クローバー、子どものしつけについて何を話し合ったっけ？」

「そうよ、『怒ったまま子どもを叩いてはいけない』。その台詞はわかってる。ええ、怒ってるわ、ヘンリー。でも私は自分をコントロールしてる。彼女の魂を叩き出すくらい叩き終われば気分も——」

「その状態で娘を叩かせるわけにはいかない、クローバー。君は自分をコントロールできていない。」

「じゃあ怒ってはいけないっていうの？ 彼女が従わなかったのは私よ！ 彼女を叩きたいの、ヘンリー。彼女が生きてるのが不思議なくらい叩きのめしたいの。それが私のパパのやり方で、私はちゃんと育ったわ。」

「それは正しくないよ、クローバー。君のパパのやり方は間違ってた。怒ってもいいんだ。俺も怒ってる。彼女は俺の前で嘘をついた。でも私たちは大人で、これについて協力しなければならない。」

「… あなたの言う通りよ、ヘンリー、あなたの言う通り… ごめんなさい。ふぅ！」

ヴァイオレットはママがベッドに座るときにきしむ音を聞きました。

パパはその瞬間を置きました。ヴァイオレットはパパが座るときに再びベッドがきしむ音を聞きました。「よし。それなら、俺が主導権を取るべきだと思う。他に話し合いたいことはあるか？」

「ええ。ええ。ごめんなさい、ヘンリー。でも、私もそれを学ばなきゃいけないわよね？ つまり、もし私がかんしゃくを起こして、あなたがそれを抑えるためにここにいなかったらどうする？ これをコントロールしなきゃ。彼女は今までとてもいい子だったから、これが問題になるなんて思わなかったわ。」

「わかった。じゃあ練習してみるといい。こうしよう。最初に俺がヴァイオレットを叩く。それから君に引き継ぐ。俺がどうやってやるか見ていられるし、もし君が厳しすぎると思ったら止めるように言う。」

「いいわ！ あなたを信じてる、ヘンリー。でももう大丈夫だと思う。コントロールできてる気がする。私が先にやらせてくれる？」

「本当か？ かなり頭にきてたけどな。」

「はっ！ そうね、そうだったわね！ でも、もし私が強く叩きすぎたら、二度お尻を叩かれないように先にやった方がいいんじゃない？ それって理にかなってる？ それに、あなたがいてくれて今は落ち着いてるわ。これを乗り越えたいの。」

「同意する。じゃあ君が先陣を切れ、クローバー。俺はすぐここにいる。」

「わかったわ。私は彼女を愛してるし、傷つけたくない。もし行き過ぎだと思ったら止めて。もし私がひどいやり方をしたら、必要なら私を叩いていいからね。」

パパは笑いました。「そんな必要はないと思うよ、クローバー。君は素晴らしい母親だ。」

「その申し出は有効よ。よし、ヴァイオレット！ 始めようか。」

ヴァイオレットは聞き耳を立てたことに少し戸惑いましたが、ママは怒っていて、パパは落ち着いていて、ママは自分を落ち着かせていると理解しました。ヴァイオレットは大したことのない擦り傷を負ったときに自分を落ち着かせることを学んでいました。

ヴァイオレットは両親の方を向きました。ママは数秒間ぎこちなく座っていましたが、パパが始めるよう合図すると、彼女は咳払いをして始めました。「ヴァイオレット、あなたのしたことは間違っていて、この経験から学ぶ必要があるわ。ママは今まであなたをお尻叩きにしたことがないから、どうやってやるか学ばなきゃね。お尻叩きは痛いけど、パパが

あなたが安全であることと、私がちゃんとやることを確認してくれるわ。えっと、お尻叩きはあなたのお尻にするのよね？」

ママはまるで「これで合ってる？」と尋ねるようにパパを見ました。

パパは笑いをこらえ、励ますようにうなずきました。「ごめん！ これは笑い事じゃない！ 続けて。」

安心して、ママは断固として続けました。「これからは、この家のルールは、許可なく花を摘んだらお尻を叩くことよ。それに、あなたはパパに嘘をついた。それもお尻叩きに値するわ。私たちはあなたを愛しているし、お尻を叩きたいわけじゃないけど、従わなかったことと嘘をついたことの結果を確実に理解させる必要があるの。まずウォームアップのお尻叩きをするわ。それからパパのところに行って、お仕置きを終わらせてもらいなさい。権威を尊重することと… 両親に従うことを学ぶのは大切なことなのよ？」

母親の言葉が心に響くにつれ、恐怖と不安がヴァイオレットを包みました。彼女は今までお尻を叩かれたことがなく、そのことを考えると震えました。しかし心の奥底では、自分が間違ったことをしたとわかっており、実際のお尻叩きがアニメのようかどうか好奇心を持っている自分も少しだけいました。

パパはベッドの上により多くのスペースを確保するために立ち上がりました。ママは、ヴァイオレットのベッドが地面に対してどれだけ低いかに気づいたようです。デニムジーンズの折り目を整えながら、彼女は床にひざまずき、ベッドの

すぐ前に立ち、自分の膝を軽く叩きました。「おいで、ヴァイオレット、ママの膝の上にうつ伏せになりなさい。」

「はい、ママ。」ヴァイオレットはためらいながら母親の膝の上に体を置き、小さな手のひらをカーペットの床に置きました。母親の手が優しく彼女の背中を撫で、少しでも慰めを与えようとしているかのようでした。

「覚えておいて、ヴァイオレット、このお尻叩きはあなたを傷つけるためじゃなくて、あなたの行動がどれほど深刻かを理解させるためのものよ」と母親は悲しみを帯びた声で優しく説明しました。「あなたは愛されているし、私たちはあなたが責任感のある正直な人間に育ってほしいと思っているの。」

深く息を吸い、ヴァイオレットは身構えました。最初の一発が服を着たお尻に柔らかいパチンという音を立てて当たり、わずかな刺痛を引き起こしました。それは痛みよりもはるかにヴァイオレットを驚かせ、彼女は母親の脚にしがみつき、自分の状況の現実が押し寄せてきました。彼女の心は後悔と病的な好奇心が入り混じって駆け巡りました。「それほどひどくない！ なんでアニメのキャラクターはすぐに泣いちゃうんだろう？」

母親の手が繰り返し彼女のお尻に当たると、ヴァイオレットの思考は平手打ちの合間に不快感と内省の間を行き来しました。彼女は「結果」という言葉の意味を知りませんでした。しかし、もしこのお尻叩きが「自分の行動の結果」なら、それは自分のせいで、行動する前に考えるようにという警告だと理解しました。ヴァイオレットは花を摘むことが間違っているとわかっていました。

ママが寝る前に読み聞かせてくれる『赤毛のアン』の本を思い出し、ヴァイオレットはもう二度と想像力を暴走させないと心に誓いました。

ママは止まりました。「あの、ヘンリー、私、これで合ってると思う？ 彼女を傷つけるのが怖くて…」

「君の言いたいことはわかるよ、クローバー。ヴァイオレット、君はすごく静かだね。これが初めてのお尻叩きだ。何を考えてる？」

ヴァイオレットはお尻をくねらせ、わずかな刺痛しか感じませんでした。「自分が悪いことをしたと思ってる。これが自分の行動の結果だって。」

「それはとてもいいね、ヴァイオレット。痛いか？」

「おしりたたきは、思ってたほど痛くないよ。」

パパはうなずきました。「真実を話してくれてありがとう、ヴァイオレット。」

パパは横を向き、誰にともなく話してから、妻に戻りました。「今になって彼女は容赦なく正直になることを選んだ。いいね。後で覚えておこう… クローバー、彼女のオーバーオールを脱がせてみな。もう少し強い第一印象を与えるべきだ。」

ママはヴァイオレットを立たせ、オーバーオールのストラップのボタンを外しました。「本当に？ やりすぎたくないんだけど。」

パパは親指を立てました。「うまくやってるよ！『常に段階を踏んでお尻叩きをしろ』って、おばあちゃんが言ってたよ！」

この会話にヴァイオレットは立ち止まりました。オーバーオールがずり落ちて、ドーラ・ジ・エクスプローラーのパンツが現れると、ヴァイオレットは突然、アニメのキャラクターはいつもすぐに泣き始めるけど、アニメのキャラクターは決してオーバーオールを着ていないことを思い出しました。「あ、ちょっと待って？ ドーラを叩かないで。彼女は何も悪いことしてないよ。」

「でも君は悪いことをしたんだよ、ヴァイオレット。ドーラは大丈夫。」ママは優しくヴァイオレットを再び膝の上に導き、パパの承認を求めてから、中断したところからお尻叩きを始めました。

一発の平手打ちで、ヴァイオレットは明確な違いに気づきました。オーバーオールの上からの最初のパチンという打撃は、ベッドで跳ねるときにお尻をちょっと強くぶつけるような感じでした。楽しくはないけど、泣くほどではありませんでした。今度のパチンという音は明らかに大きく、お尻が衝撃で揺れるのを感じました。

… そして刺痛！ それはまさに、痛くてママのところに泣きながら走っていくような、スズメバチに刺されたような感覚でした。でも今回はママのところに泣きに行って治してもら

うわけにはいきません！ そしてアニメのキャラクターたちと同じように、ヴァイオレットはすぐに泣き始めました。二回目の鋭い平手打ちの後、ヴァイオレットはパンツが不快に食い込むのを感じました。それを直したいと思って止めてほしかったのですが、止まらなかったので、彼女は涙を流しました。

永遠のように感じられた、実際には十回だけの平手打ちの後、母親はついに止まりました。彼女はヴァイオレットを立たせて温かく抱きしめ、優しく涙を拭いました。ヴァイオレットはお尻を押さえ、それが終わったことに気づいていませんでした。

「愛してるよ、ヴァイオレット」とママは、思いやりに満ちた声でささやきました。それからママの顔はより決意に満ちたものになりました。「さあ、パパのところに行って、ちゃんとお尻叩きを終わらせてもらいなさい。」

震えながら、ヴァイオレットはパパの方を向きました。足がふらついていました。彼女は彼の方へよろよろと歩き、オーバーオールが足首のあたりにたまっていました。ヴァイオレットは立ち止まってオーバーオールを脱ぎ、食い込んだパンツを直しました。おずおずと彼を見上げ、かすかな声で言いました。「パパ、ママがパパとおしりたたきを終わらせなきゃって言ったよ。」

パパの表情はユーモアと悲しみが入り混じった奇妙なものでした。ため息をつき、彼はヴァイオレットの髪を撫で、それから彼女を抱き上げて自分の隣のベッドに座らせました。「ヴァイオレット、君には責任感のある、敬意を払う人間に育ってほしいと思っている。ママが君を叩いたのは、君

がわざと彼女に従わずに花を摘んだからだ。今度は俺が、君が俺に嘘をついたことでお尻を叩く。俺の膝の上にうつ伏せになりなさい。お仕置きを終わらせよう。」

ヴァイオレットは従い、再び体勢を整えるとき心臓がドキドキしていました。今度は彼女はパパの左足の上にうつ伏せになり、手と顔をベッドの上に置きました。彼女はマイリトルポニーのキャストを間近に見てから、何かが自分の足を固定するのを感じました。パパの右足です。

ヴァイオレットは自分が逃げられないと認識するのにちょうど十分な時間があり、父親の手がすでにピンク色になったお尻に落ちました。止まっていた涙がすぐに再び流れ始めました。

ヴァイオレットには比較対象がありませんでしたが、ママは異常に注意深く強く叩かないようにしていました。平手打ちの音は大きくて怖かったですが、ヴァイオレットは最初、痛みそのものよりも刺痛の驚きで泣いていました。しかし父親がしっかりとした平手打ちを彼女の小さな後ろに響かせると、すべてが変わりました。

涙をこらえて、ヴァイオレットは勇敢な王女はこうするべきだと思って歯を食いしばり、両親に教訓を学んだことを示そうと決意しました。しかし今度は、刺痛がクレッシェンドに達しました。それはヴァイオレットにとって初めての真に長引く痛みの経験でした。確かに、これまでに数多くの打撲や擦り傷は経験してきました。しかしああいった痛みの涙はもっと注目を集めるためのものでした。「大きな女の子」になるということは、小さな擦り傷ごとに泣く必要はないということです。しかし今は、どれだけ大きな女の子になりたくても、

ヴァイオレットは泣かざるを得ませんでした。「うわあん！
わあああん！」

もしヴァイオレットが自分自身を見ることができたら、自分がアニメのキャラクターたちとまったく同じに見えると思ったでしょう。

お尻叩きはすぐに終わり、再び十回だけの平手打ちの後、父親は彼女をしっかりと抱きしめました。彼女は彼の胸に頭を埋め、彼の肩に指を食い込ませました。「よしよし。お尻叩きは終わったよ。覚えておいて、ヴァイオレット、私たちが君をしつけるのは君のことを気にかけていて、最高の自分に成長してほしいからだよ。」

ヴァイオレットはうなずき、パパの肩から顔を離して彼の目をまっすぐ見ました。彼女は彼の目、抱擁、そして声に愛を感じました。「さて、俺が君の年齢の頃、俺は母親、つまり君のおばあちゃんに嘘をついたんだ。彼女が何をしたか
知ってるか？」

ヴァイオレットは首を振りました。「ううん。」

「まあ、彼女は俺の素っ裸のお尻を叩いたんだ。おばあちゃんはいつもそうやってやったんだよ。さっき君が言ったことは？『ドーラを叩かないで、彼女は何も悪いことしてない』だろ？ その通りだ。ドーラはママに従わないし、パパに嘘をつかない。君が今日したことには、素っ裸のお尻をお尻叩きにするのが当然だったんだ。」

ヴァイオレットはパパがドーラ・ジ・エクスプローラーのパンツの上を軽く叩くのを見て、目を見開きました。お尻叩きは

もう終わったんじゃないの？ 唇を震わせ、手が反射的にお尻に動きました。「もう一度おしりたたきするの？ パンツを下ろさないで！」

「今日はやらないよ。おばあちゃんがやってたように、就寝前にまたお尻を叩くつもりだったけど、さっき質問したときに君が真実を話すという良いことをした。だから今日は素っ裸のお尻を叩かないことにしよう。君はとてもいい子だ、ヴァイオレット。今まで君を叩く必要はなかった。でもこれからは、わざとの不服従と嘘は素っ裸のお尻へのお尻叩きと、就寝前の追加のお尻叩きを意味する。ルールを繰り返して、理解したか確認させてくれ。」

ヴァイオレットはうなずき、父親の言葉を繰り返しました。

「質問はある？ わざとの不服従がどういう意味かわかってる？」

ヴァイオレットは「はい」と首を振りましたが、「いいえ」と言いました！ それから「いいえ」と首を振りましたが、「はい！ わざとの不服従の意味はわかってる。わざと従わないってことだよね。それに嘘をつくのは話を作ることじゃなくて、真実じゃないことを言うことだよね。質問があるんだけど、これからたくさんおしりたたきされるの？」

ママが口を挟みました。「そうでないことを願うわ！ 私には耐えられない！」

パパとママは笑いましたが、冗談はヴァイオレットには理解できませんでした。パパはヴァイオレットの頭を安心させるように軽く叩きました。「もしその二つのルールを覚えて、そ

れに従えば、もう二度と君を叩く必要はなくなる。お尻叩きは君が成長して、もうお尻叩きを必要としない大きな女の子になるためのものなんだ。」

安堵して、ヴァイオレットはもう一度パパを抱きしめ、それからママを抱きしめました。

ママは硬直し、それから抱きしめ返し、ヴァイオレットの額にキスをしました。「あなたは私の一番好きな花よ、ヴァイオレット。」

肉体的にも精神的にも疲れ果てて、ヴァイオレットはベッドに倒れ込み、ママに毛布をかけてもらい昼寝をしました。慈悲深く就寝前のお尻叩きは免れましたが、技術的には夕食抜きでベッドに送られました。（幸い、ママは翌日みんなに特大の朝食を作ってその分を補いました。）

ヴァイオレットは最初の昼寝の後に目覚め、布団の中で横たわっていました。彼女の心は思考と感情の渦の中を漂っていました。彼女は自分が何を間違えたかを考え、心は後悔で重くなりました。彼女は受けた二度の初めてのお尻叩きについて振り返りました。

温かく、わずかに痺れるような感覚を除けば、彼女のお尻はもう元通りに感じられました。終わってみれば、お尻叩きはそれほど悪いものには思えませんでした。ヴァイオレットはそれらを両親からの愛と導きの行為として認識しました。彼女は両親が責任と敬意についての重要な教訓を教えていることを理解しました。「彼らは私が良い王女に育つのを助けてくれているんだ！」と彼女は心の中で思いました。

新たな決意とともに、ヴァイオレットは心の中で静かに誓いました。もっと人の話をよく聞き、行動する前に考え、両親が定めた境界を常に尊重するように努力しよう、と。

そして素っ裸のお尻を叩かれる可能性を考えると、彼女はドーラ・ジ・エクスプローラーのパンツに手を当て、決して二度とパパに嘘をつかないと誓いました。

目を閉じると、彼女は心からの謝罪の祈りをささやきました。「神様？ ママに従わなかったことをごめんなさい。パパに嘘をついたことをごめんなさい。それを忘れないように助けてください。ママとパパをありがとう。王女の本をありがとう。それからママとパパにおしりたたきをしてくれてありがとうって伝えてください。そして教訓を学べるように助けてください。もう一つもらわないように。」

そうして彼女は深い眠りに落ち、自分が良い王女に成長した未来の夢を見ました。

***

ヘンリーとクローバーは、ヴァイオレットが寝ついたことを確認した後、そっと彼女の寝室のドアを閉めました。

「あんな小さな悪魔なのに、眠っているときは確かに天使みたいだね」とヘンリーはささやきました。彼はクローバーが自分の親父ギャグをからかうのを待ちましたが、クローバーはうつむいて不機嫌そうでした。「大丈夫か、クローバー？」

「私、上手くできたと思う？ 彼女をお尻叩きにしたってことよ。」

「もちろん。君は完璧にコントロールできていたよ。天性のものだ。」

クローバーはまぶたを下げ、ふくれるふりをしました。「あら？ じゃあ… 今日は私へのお尻叩きはなし？」

ヘンリーは気づかないふりをしました。「ないよ！ 君へのお尻叩きはない、クローバー。」

「あら！ 私が欲しいって言っても？」

ヘンリーは笑う妻を抱き上げました。「それはジレンマだね、そうだろう？ もし君が悪いことをしたら、悪いことをしたことでお尻を叩いてほしい。もし君が良いことをしたら、良いことをしたことでお尻を叩いてほしい。男はどうすればいいんだ？」

クローバーは笑いの発作の合間に息を吸い、指を彼の胸に押し付けました。「ねえ、きちんとお尻を叩いてくれなかったら、どうやってちゃんとお礼を言えばいいの？」

しかし彼が彼女をマスターベッドルームに向かって運ぶと、ヘンリーはクローバーの笑い声が消えていくのを見ました。「… 辛かったわ。あなたも知ってるでしょ、私のパパはよく私をテーブルの上に引きずっては叩きのめしたものよ。何でも。ただ気分でそうしたかっただけの時もあった。だから自分の子供を叩くのがいつも怖かったの。自分があんなに怒っていたなんて信じられない。私… 彼みたいだった。」

クローバーが遊びの気分ではないと感じて、ヘンリーは優しく妻を下ろし、マスターベッドルームのドアを彼女のために開けました。「君は彼みたいじゃないよ、クローバー。君は自分を保った、それが大事なことだ。」

クローバーはベッドに座り、顔を両手で覆いました。「あなたの視点が今はもっとよくわかるわ。あなたがずっとクローバーを膝の上に乗せていた間、私が考えていたのはあなたのことだけだったってわかる？」

「どういう意味？」

「あなたが本当に良い父親になることを気にかけているってこと。あなたには… 自制心があるって。高校生の頃の私に我慢していただけの自制心があるのはわかってたけどね。」

ヘンリーは彼女の隣に座り、彼女の顔を持ち上げて目を見ようとしました。「自分を責めるなよ、クローバー。君は人間として本当に成長した。」

クローバーは背を向け、膝を胎児のような姿勢に引き寄せました。「聞いてほしいの。あなたがいてくれて本当に幸運だわ、ヘンリー。私… あなたと結婚できて本当によかった。」

ヘンリーは彼女の首の後ろにキスをしました。クローバーの虐待的な育ちの記憶は長い闘病生活、うつ病をもたらし、ヘンリーは高校時代の友人だった頃からそれを目の当たりにしてきました。彼女を元気づけたり、そこから引き戻

すための簡単な言葉はありませんでした。時には、ただ彼女のそばに座って話を聞くだけでした。彼らはそれを「嵐を乗り切る」と呼んでいました。

「引き金になったんだね？ お尻叩きの件全部が？」

クローバーは胎児のような姿勢から体を起こしました。彼女は長年にわたって多くの進歩を遂げていました。セラピー、悔い改めない虐待的な父親との一切の接触断絶。しかしヘンリーはそのすべてを通して彼女の岩でした。「そうね、そうだったみたい。でも、大丈夫だと思うの。何年もこの状況でどうするか心配していたけど、実際にはちゃんとやれるってわかったわ。それは… 肩透かしだけど、良い意味で。」

「あんなに心配したのは無駄だった？」

クローバーは鼻を鳴らし、それから体重をヘンリーの肩に預けました。彼女は彼のシャツにそっと唇を擦りながら、記憶から引用しました。「明日のことを思い煩うな。明日は明日自身が思い煩うであろう…

「… 一日の苦労はその一日だけで十分である。」とヘンリーが締めくくりました。

「まさにその通り… だから言ったでしょ、あなたと結婚できて本当によかったって。」

「愛してるよ、クローバー。」彼らは重い瞬間、額を合わせました。

クローバーはその瞬間が終わることを決して望みませんでしたが、ついに彼女は後ろに下がり、ヘンリーの目を見つめました。それから彼女はジーンズのボタンを外し、彼の膝の上に滑り込むように乗りました。「さあ。ちゃんとお礼を言いたいの。」

一緒に、彼らは優雅にクローバーのジーンズを彼女の脚から滑り落とし、ほとんど透けるようなレースの黒いヴィクトリアズ・シークレットのパンティーを現しました。

ヘンリーは妻のお尻を位置決めしながら肩をすくめました。クローバーの深く感じるお尻叩きの必要性が長年にわたって彼を驚かせ続けてきたが、彼が文句を言うはずがありませんでした。「それで… きちんとお尻を叩かないといけないんだな？」

クローバーはうなずき、お尻を持ち上げました。「お尻を叩いて、パパ。」

ヘンリーは手を上げ、最初の一発をまっすぐに…

終わり

サマー、イン・オータム

第I章：薪小屋でのお尻叩き

カリーナ・サマーズは、父親のナイフで切り取った太い小枝を調べながら、鋭く口笛を吹き、湯気でメガネが曇るのを感じた。

カリーナは自分が叱られることを確信していた。

冷たい空気が彼女の湿った額の汗を冷やし、指は小枝から余分な小枝や節を削り落とすときに手間取った。彼女はその重みが指なし手袋の柔らかい布地に押し付けられるのを感じ、その質感がむき出しの指先に擦れた。

そう、パパは彼女の行動に不満を感じているのと同じくらい、この白樺の小枝に満足するだろう。

その瞬間、彼女の温かみのある茶色の肌は赤みを帯び、ふっくらとした唇は震え、金茶色の瞳はこれから起こることを考えて潤んでいた。カーキ色の冬用コートで目を拭うと、黒い縮れた髪の一筋が冬用帽子から落ちた。

学校で喫煙！ 何を考えていたんだろう？

たとえ捕まらなかったとしても、良心の呵責だけで十分な罰だっただろう。今はもちろん、薪小屋でパパと会い、お尻を叩かれるという余計な恐怖を考えなければならない。

カリーナはサマー家の農場の裏手の土地の中央にある古い白樺の木から、てきぱきと歩き去った。彼女が三歳で新しい養子の家に連れてこられて以来、この森の隅々まで覚えた。遊ぶときは最高の木登り用の木を知っていたが、学ぶときに小枝を切るための丈夫な枝を見つける場所も知っていた。ママとパパのオクラホマ方言では、「学び」とはもちろん、しっかりとした痛いお尻叩きを意味した。

少し鼻をすすると、カリーナは凸凹した地面でぎこちなく足を踏み外し、かろうじて体勢を立て直した。十字架のネックレスがコートの下から飛び出し、危うくぶら下がりそうになったが、彼女はそれを捕まえて体勢を整えた。

「バカ！」カリーナは心の中で自分を呪った。あれが… まあ、あれが待っていると思うと、自己批判から気がそらされるものだと思うだろう。しかしカリーナの場合、自分を哀れむこと、捕まったことを残念がること、そして自分がしたことを心から後悔することは、互いに排他的な感情ではなかった。彼女は鞭打ちを恐れると同時に望み、現行犯で捕まったことに怒りと感謝の両方を感じていた。

パパが苦悩に満ちた目と声の失望を隠そうとしながら、無言でナイフを彼女の手に握らせ、自分で小枝を切りに行かせなくて済むように。

彼女は袖で激しく鼻を拭いてから、十字架のネックレスをシャツの下にしまい、それが胸に押し付けられるのを感じた。

「主よ、なぜ私を捕まらせたのですか？」と彼女は祈った。

彼女は激しく薪小屋に向かって足を踏み鳴らしながら歩き、ブーツの下で霜のついた露が砕ける音を感じ、黒いウールのレギンスが一歩ごとに擦れ合う摩擦を感じた。

どういうわけか、彼女はお尻叩きの前の最後の瞬間に、その部分の体をより意識するようになることに気づいた。

何年も前、ママはかつてカリーナに「叩かれていないお尻」という特権を感謝することを学ぶべきだと警告したことがある。その時、カリーナは自分が今感じている感覚に特別な名前が必要だと確信した。「もうすぐ叩かれるお尻」のチクチクする感覚だ。

カリーナは自分の心が足とともにさまよう場所に思わず笑ってしまった。薪小屋が彼女の前に大きくそびえ立ち、頑丈で古く、荘厳だった。「悔い改めよ、罪人よ！」と深く響く声で言っているようだった。

彼女は鞭打ちが早く終わることを望み、同時に決して来ないでほしいと願った。同時に、彼女はただ当然の報いを望んでいた。

カリーナはコートの前を神経質に指でなぞり、下にある十字架のネックレスが残した跡を感じた。「どうか痛くしてください、主よ。本当に痛くて、ついに学び、二度と彼らを傷つけませんように！」

カリーナが冷たいドアノブに手を置くと、彼女は唇に押し当てたタバコの熱、煙の吐き気を催すような匂いを思い出した。クロエ・キムとチェルシー・デル・レイは、教師たちが古

いジャーナリズムクラブの部屋をわざわざチェックしに来ることはないと確信していた。

「ちょっとやってみなよ！」とチェルシーが甘えた声で言った。

「捕まらないよ！」とクロエが笑った。

それが罪であることを知りながら、そしてそれをしている間でさえ許しを祈りながら、カリーナはあの呪われたタバコを噛みしめ、吸い込み、刺すような涙で目を潤ませながらむせた。それはまるで神が彼女に悪戯をしているかのようだった。彼女がむせ始めてすぐ、「パパはこのことで俺の尻を叩くべきだ！」と考えた瞬間に、ドアが開き、ジョン・ノックス・プレスビテリアンの校長自身が、入学希望者の保護者たちを連れて見学に来ていたのだ。

その時点から、すべてはカリーナにとってぼんやりとしたものだった。「パパはこのことで俺の尻を叩く！」という言葉が頭の奥で繰り返し再生された。

説教、校長室での座っていること、停学の約束、母親への電話、さらなる説教、車での帰り道、「お父さんがこれを聞くまで待ちなさい！ 彼が君をへとへとにさせてくれることを願うよ！」

カリーナはママに謝ったことを覚えており、ママは説教を止めた。「まあ、お父さんに言わせてもらいなさい。」

それがママの良いところの一つだった。彼女は叱るが、一度心から謝ると、説教をやめてパパが判決を下すのを待

つ。それはいつもお尻叩きとは限らなかった。しかしママはカリーナと同じように、今回は何が待っているかを知っていた。

平和なため息をついて、カリーナはドアノブを回し、薪小屋に入った。

パパが彼女を待っていて、自分用の小枝を削っていた。カリーナはごくりと飲み込んだ。良い兆候ではなかった。

五十代の白人男性であるパパはこめかみに白髪が混じり始めていたが、彼女が三歳で初めて家に連れて帰られたときに覚えているのと同じ強さをまだ持っていた。偶然にも、カリーナは祖母と同じ名前だった。この「神の小さな業」が孤児院で最初に彼らの注意を引いたものだった。カリーナがママとパパに会って以来、彼女が黒人で彼らが白人であることはほとんど彼らの誰にも気にならなかった。彼女は兄や姉たちと同じくらい家族の一員になった。

カリーナが後ろのドアを閉めると、ドアの内側に掛けられた物が不気味にガタつくのを感じた。厚いオーク材のパドル、かみそりのストラップ、アンティークの籐の杖が薪小屋の内側のフックに掛かっていた。二度の別の機会に、カリーナはパドルとストラップを経験したことがあった。彼女は杖を経験したことはなかったが、文字通りそこには彼女の名前が刻まれていた。それはパパに祖母カリーナから受け継がれたものだった。その小さな詳細は幼いカリーナの注意を逃れたことはなかったが、どうやらパパは通常の非行には杖はあまりにも厳しい罰だと考えているようだった。

パパはうなずき、小枝を削り続けた。「こんにちは、カリーナ。」

「こんにちは、パパ。」

パパは自分の小枝を最終点検し、近くの瓶にそれを入れた。カリーナはそれが塩水だと知っていた。小枝をしなやかで丈夫に保つためだ。無言のジェスチャーで、パパはカリーナに自分で切った小枝を渡すよう合図した。それを調べて、パパは承認のうなずきをした。「よくできた、カリーナ。これで十分だ。」

パパは小枝を瓶に滑り込ませ、他のものと一緒にした。六人の活発な兄弟姉妹と、ママとパパからのお尻叩きに年齢制限はないという家訓で、サマー家は常に小枝を十分に供給できるようにしていた。

「カリーナ、今日のお前の選択には失望しているよ。友達と喫煙するのは許される行為ではない。」

カリーナは足元を見下ろし、恥ずかしさと苛立ちが入り混じった気持ちで、声は震えていた。「わかってるよ、パパ。でも仲間外れにされたくなかったんだ。クロエとチェルシーが…」彼女は言葉を止めた。自分の言い訳が弱いことを知っていたからだ。

父親はため息をついた。「カリーナ、他人がやっているからといってそれが正しいことになるわけではない。お前にはもっと分別があると育ててきたつもりだ。」

カリーナは口をとがらせた。「ごめんなさい、パパ」と彼女は声を潜めて言った。「もう二度としません。」

父親は慰めるように彼女の肩に手を置いた。「後悔しているのはわかってる、ハニー。しかしそれでも代償は払わなければならない。自分の過ちから学ばなければならない。そしてこのお尻叩きはお前にとって学びの経験になるだろう。」

カリーナはうなずき、涙をこらえた。自分が罰に値することを知っていたが、自分を哀れまずにはいられず、何とか話を切り抜けられないかと願った。

彼女は肩を緊張させ、目はもう潤んでいた。「一口だけだったんだ！ しかもそれをした瞬間にひどい気分になった！」

彼女はごくりと飲み込み、自分が墓穴を掘ったのではないかと思ったが、パパは優しい忍耐で彼女を見た。「ひどい気分になったと言うのか。だからやったときにそれが間違いだとわかっていたのか？」

「ちくしょう！」カリーナはブーツを見つめながら憤慨した。パパは尋問の達人だった。

「はい… パパ！」と彼女は付け加えた。

カリーナは自分がつま先をそわそわさせていることに気づき、パパの目に自分がどう映っているかを想像した。無力な、罪悪感に満ちた顔をした小さな女の子が、自分の手が実はクッキーの瓶に入っていないふりをしているように。

心の奥底で、カリーナは自分が何を言っても結果が変わらないことを知っていた。こっそりと、彼女はもう一度パパの目を見上げようとした。

彼は厳しく彼女の視線に応えたが、怒りの気配は微塵もなかった。「そして捕まったらお尻叩きを受けることを知っていたな？」

「はい、パパ。言い訳をしたいわけじゃありません。ただあなたに知ってほしかったんです… 私は… 捕まりたいと思っていました… お尻叩きの準備はできています、パパ。」

パパはうなずき、木製の作業台に腰掛け、自分の左腿を軽く叩いた。「ではウォームアップのお尻叩きから始めよう。お尻を裸にして、私の膝の上にうつ伏せになりなさい。」

カリーナはお尻の半分を引き締めるのを感じた。「ウォームアップのお尻叩き」ということは、これは始まりに過ぎないということだった。すぐにお尻を裸にしろということは、パパが本気であることを意味した。

重い心で、カリーナは黒い冬用レギンスに親指を引っかけた。それが腰の下に滑り落ちると、カリーナは冷たい空気が豊満な黒い臀部に当たるのを痛感した。今やレギンスのきつい抱擁から解放されていた。パパは礼儀正しく目をそらした。カリーナはその仕草を、結局は無意味であるにもかかわらず、いつも心強く感じた。

カリーナは人差し指を、オールドネイビーのシンプルな黄色いパンティーのゴムバンドに引っかけた。そこにはサングラスをかけた陽気な太陽の絵が描かれていた。これが彼女

の最後のわずかな防御線だった。ためらいながら、彼女はバンドが腰にパチンと当たるのを感じたが、パパの咳一声で遅延が無意味であることを思い出させられた。

せめて冬用コートが前を覆っていることに感謝しながら、カリーナは陽気な下着を引き下ろし、よちよちと前に進んでパパの左腿の上にうつ伏せになった。上半身は平らなオーク材のベンチに支えられ、足は無力に床に垂れ下がった。コートがお尻を覆っていることに気づいて、カリーナは体勢を整えるときに優雅な動きでコートの裾を持ち上げた。

彼女はパパが下で体重を調整するのを感じ、右足を彼女の下腿の上に乗せて下半身を固定し、左腕を彼女の腰に回して上半身を固定した。

彼女はこれ以上ないほど安全だと感じた。逃げ場はないとわかっていた。

最初の轟音のような一発が、彼女の無防備なお尻にこれほどの力で当たり、その力が両方の尻の半分に波打つように広がるにつれ、カリーナは時間がスローモーションで流れるのを経験した。カリーナの「子育て用の腰」は、慎み深く装う最善の努力にもかかわらず、ジョン・ノックス・プレスビテリアンの男子たちの間で有名だった。

しかしパパの手は、古い国の農夫の大きくて荒れた手だった。

もしママがカリーナを「赤く痛くなるまで」叩くという脅しを実行したいなら、彼女はその繊細な手で努力しなければならなかった。それは単純な計算だった。カリーナのお尻は兄

弟姉妹の誰よりも保護的な脂肪が多く、表面積も広かった。しかしパパは同じ問題を抱えたことはなかった。

その手からの最初のお尻叩きの衝撃がカリーナのお尻に刻まれると、それと同じくらいの力で心象が彼女の心に刻まれた。想像の中で、カリーナはいつもパパの巨大なグリズリーベアの手の怒りの下で幼児のように感じた。

パパがゆっくりと一定のペースで叩くにつれ、カリーナは泣き言を言い、のたうち回りたい衝動を抑えた。彼女は実際にパパの手のタコを感じることができた。彼と一緒に踊るときに彼の手を握ったときに感じるのと同じタコ、または彼女が子猫のふりをしてゴロゴロと鳴くと彼が遊び心で彼女の顔を包んだときに感じるのと同じタコ。彼女は今、その手に同じ愛を感じていた。

バシッ！

特に狙いの定まった一発が彼女の右の座る部分に当たった。冷たい空気が彼女の肌にチクチクと感じられ、ウォームアップのお尻叩きの感覚とは対照的に、文字通り彼女を温めた。小枝ではどれほどひどくなるだろうと考えたちょうどその時、別の一発が左の座る部分に当たった。

カリーナはお尻叩きが始まる前から涙が出そうだった。今、二つの涙がそれぞれの頬を自由に流れ落ちたが、数回の悲鳴ときゅうきゅう鳴く声にもかかわらず、カリーナは泣き言を言ったり大声で泣いたりするのを避けた。無駄に、彼女は足を少しばたつかせたが、上半身の脚ははさみでしっかりと固定されたままだった。

お尻叩きを耐え抜こうとしても追加の罰はなかった。鰐の涙や懇願に報酬はなかった。

それでも、お尻叩きはいつも涙で終わった。カリーナは遅かれ早かれ赤ん坊のように大声で泣き崩れることを知っていたが、パパに自分がいくらか尊厳を持って「学び」を受け入れられることを示したいと思った。

さらに三十回の平手打ちの後、カリーナのお尻全体が軽く焼かれたように、ほとんど心地よく温かく感じられた。

ついに父親は励ますように彼女の後ろ側を軽く叩き、立ち上がる合図をした。

「よくやった、カリーナ。ウォームアップはこれで十分だ。起きなさい！」

「はい、パパ。」

カリーナはパパの膝から体を起こすと、コートが後ろに軽く当たるのを感じた。

「コートを脱ぎなさい。邪魔になるだけだ。それからベンチに手を置いて、お尻叩きの体勢をとりなさい。」

カリーナは従い、マホガニー色のコートを壁際にきちんと置いた。上半身は青みがかったグレーのVネックシャツだけになり、下は黄色いパンティーと黒いレギンスがブーツの上に危うく垂れ下がっていた。

彼女が作業台に手を押し付け、膝と肘を伸ばして筋肉を目覚めさせると、目尻で背後をこっそり覗く勇気を出した。

彼が巧みに小枝を取り出し、腕を温めるために空中でシュッと振るのを見て、すぐに後悔した。そして彼女が出口に目をやると、パドル、ストラップ、祖母の杖がすべてドアに威嚇的に揺れていた。まるで沈黙の守護者のように。「私たちを通り越さない限り、出口はない！」と言わんばかりに。

すべては愚かなタバコ一本のためだ！ おそらく彼女はこの試練の半分も終わっていないのに、もうそれは価値がないとわかっていた。

カリーナは自分がしたことへの新たな罪悪感と、自分のかわいそうなかわいそうなお尻にこれから起こることへの悲しみを感じた。

パドルとストラップを感じてからどれくらい経っただろうか？

彼女のカールの一つがまた冬用帽子から落ち、カリーナはそれを無言で元に戻し、唇を噛んだ。「じっとしてろ、くそ！落ち着きを保ちたいんだ！」

カリーナは初めてパドルを感じた時のことを思い出した。彼女はちょうど十歳になったばかりで、まだお尻を叩かれなければならないこと、それも素っ裸で、ということについてママと揉めていた。

カリーナがじっと横たわれという警告を故意に無視したとき、ママはヘアブラシのお尻叩きを止め、カリーナを薪小屋

に連れて行き、恐ろしいパドルを紹介した。パドルでのお尻叩きが終わるまでに、カリーナは命令されたらためらわずに反抗せずに素直にお尻を裸にすることを永遠に学んだ。

その日、二つの重要な教訓が学ばれた。「お尻叩きに年齢制限はない」と「お尻叩きの最中の不服従はさらなるお尻叩きを意味する」だ。

突然、カリーナの全身が緊張した。しなやかな小枝が彼女の後ろの子犬の脂肪に優しくトントンと触れるのを感じたからだ。パドルとストラップの考えはすべて頭から追い払われ、カリーナは目の前の木製フレームの絵に目を固定した。白樺の即時の脅威に怖がりすぎて、振り返って見る勇気はなかった。

木製フレームには、祖母カリーナが描いた、子供たちがイエスを取り囲む優雅な水彩画が収められていた。

ビシッ！

カリーナの全身が前方に揺れた。鞭打ち自体の衝撃からではなく、両方の頬を切り裂くナイフのような感覚と、それに続く二度目の反響する痛みの波が彼女を襲ったからだ。

彼女は息を呑み、必死の努力で腕と脚を伸ばし、体勢を保ち、パパの目には「大きな女の子」に見えようという希望を思い出した。

この体勢になるといつも、カリーナはキリストの絵に目を固定し、自分を彼の膝の上に座る明るい目の黒人少女として想像した。「赤と黄色、黒と白、彼の目にはすべて尊い！」

バシッ！

二回目の打撃が当たると、カリーナは今度はしっかりと体勢を保ち、目の前にあるものに目と心を集中させた。

祖母の絵の下には、幅広で短い木製のパネルが一連に掛けられ、それぞれに箴言からの聖句が優雅に彫られていた。カリーナは黙って自分自身に読み聞かせた。「箴言1:7。主を畏れることは知識の始まりである。愚か者は知恵と訓戒を軽んじる。」

ピシッ！

カリーナは唇をすぼめ、目を見開いた。髪の束が再び落ち、彼女の厚いメガネの前面に当たり、右目を覆った。彼女は無駄にそれに息を吹きかけたが、手を上げて元に戻す勇気はなかった。

バシッ！

髪の毛の邪魔で、四回目の打撃は彼女の不意を突いた。彼女は頭を胸に向けて突き出し、空気を吸い込むときに十字架のネックレスが締まるのを感じた。からかうかのように、その髪の束は重力に屈し、再びメガネの前面に当たり、今度は左目を覆った。

彼女は両手をしっかりと固定して体重のバランスを保たなければ崩れ落ちると信じていた。彼女は自分が作り出すであろう馬鹿げた光景を想像した。ベンチにつまずいて、土曜の朝のアニメのキャラクターのように漫画の効果音を伴

いながら木製の床に顔を打ち付け、それから自分の間抜けな素っ裸のお尻を持ち上げて再び体勢を整えなければならない。

カリーナはその考えを払拭するために首を振り、はみ出た髪が彼女の前で揺れた。彼女は一度だけ横目でちらりと見て、五回目の打撃が来るのかどうか考えてから、再び彫刻された聖句に心を集中した。

「箴言13:24。むちを惜しむ者は子を憎む者である。子を愛する者は、こまめにこれを懲らしめる。」

カリーナはその言葉を考えながら身構えた。「むち。まさにそれを感じようとしている… 今だ！」

一瞬が過ぎた。彼女は何も感じなかった。

もし自分の顔の表情が見えれば、カリーナは笑っただろう。「変だ？」彼女は二度瞬きし、背後を見て、パパがたった四回で彼女を許すのかどうか考えた。

カリーナは猛烈なぼやけたものを見つけた。五回目の打撃が正確に命中し、彼女の不意を突いた。

バシッ！

驚きの悲鳴とともに、彼女の左手がお尻に飛んだ。手のひらのクリーム色の面が外側を向き、手首は繊細な角度で、まるで「お願い、パパ、お尻叩きしないで！」と無言で言っているかのようだった。

それに答えて、パパは小枝でカリーナの露出した手のひらをしっかりと叩いた。「手を下ろしなさい、お嬢さん。それが一度目の警告だ。」

カリーナの手はお尻から離れた。「はい、パパ！」

「少し落ち着く時間を取りなさい。息を整え、悔い改めに心を集中させなさい。しかしもし再びお尻を覆ったら、最初からやり直しだ。もう一度ウォームアップのお尻叩きから始める！」

これが空威張りではないことを知って、彼女はうなずき、震える息を吸った。「はい、パパ… ありがとうございます！」

もう一束の髪が帽子から落ち、それを元に戻す代わりに、カリーナは諦めて帽子を脱ぎ、厚いカールが自由に落ちるのを感じた。

彼女は膝と肘を曲げ伸ばしし、リラックスさせておくことを思い出した。「脚を硬直させすぎると、血が流れずに倒れるわよ」とママがかつて、カリーナがまさにこの苦境にあるときに教えてくれた。

小枝の特徴的な「トントントントン！」という音が、休息が終わりに近づいていることを彼女に知らせた。

カリーナが振り返ると、パパがうなずくのが見えた。「じっとしていられるか、カリーナ？」

彼の後ろでは、パドル、ストラップ、杖がまだ死刑囚のようにぶら下がっていた。カリーナは自分がおそらく試練の半

分も終わっていないという考えに、頬を締めたり緩めたりした。

「はい、パパ、準備はできています… ありがとうございます。」

パパは小枝を掲げて微笑んだ。「どういたしまして。」

六回目の刺すような打撃が当たると、カリーナは準備ができていることに気づいた。リラックスはしていなかったが、少なくとも準備はできていた。パパは一定のリズムに乗り、各打撃の間に箴言を読み集中する時間を与え、徐々にテンポを上げていった。

実際、カリーナは準備ができすぎていることに気づいた。リズムを見つけると、個々の打撃の痛みが混ざり合い、彼女の野生の想像が展開し始めた。過去には、小枝だけでは不十分と判断された場合、追加の罰としてパドルかストラップのどちらかを受けたことがあった。今回は両方もらったらどうしよう？ 杖も？ 三つ全部？

初めてパドルを経験した後、カリーナは十二歳になるまで薪小屋行きを避けることに成功した。その時はパパとだった。カリーナは、ジョン・ノックス・プレスビテリアンから赤い通知を持って帰されたことを恥ずかしく思い出した。彼女とクロエは、チェルシーのニキビを理由に彼女をいじめて泣かせていたところを捕まったのだ。

その夜、パパはカリーナにいじめっ子の娘は要らないと長い話をし、それに続く長い小枝でのお尻叩き、さらに長いかみそりのストラップでの叱責があった。

彼女が養子であるという事実は決して秘密ではなかったが、そのストラップによるお尻叩きは、カリーナが養子であること、つまり彼の本当の娘ではないということを真に感じた最初の経験だった。彼女は一打ごとにパパの失望を感じ、それらを歓迎するようになった。

彼女は、パパが十分に彼女を叩けば、彼女を気の毒に思い、再び彼女を自分の娘にしてくれることを願った。

それがようやく終わった後、彼女はこれらの恐怖と心配のすべてを、彼の肩に泣きながら激しくすすり泣きながら告白した。彼女はその日彼が言ったことを決して忘れなかった。「お前はいつまでも私の本当の娘だ。たとえ罪を犯しても、お前は私の大切な真珠だ。」

皮肉なことに、しっかり叩かれ、完全に懲らしめられたクロエとカリーナがチェルシーの家に謝罪に連れて行かれたとき、彼女たちは全員永遠の親友になった。実際、喫煙事件はすべてチェルシーのアイデアだった！

それは四年前のことだった。時折の軽い非行でママかパパの膝の上に行くことはあったが、十六歳のカリーナは最後の薪小屋行きはもう終わったと思い始めていた。今、彼女はその打ち砕くような罪悪感が戻ってくるのを感じた。自分はこの善良な人々にとって何の役にも立たない厄介者に過ぎないと。

シュッパン！

小枝がカリーナの洋ナシ型の腰にパチンと当たった。今や十一本のきれいなミミズ腫れが彼女の丸いお尻を飾り、十二本目が最後の衝撃の正確な地点でゆっくりと浮き上がった。

罰が止むと、カリーナは突然自分の新しい跡のコレクションに気づき、それぞれにぴりぴりとした感覚が踊った。

ミミズ腫れを考えながら、これからの長い時間の刺痛、パドル、ストラップ、杖、またはそのすべてが一打ごとにそれらに押し付けられること、明日の一日座るたびにそれらがどれほど身近になるかを考えると、彼女はそれらを歓迎していることに気づいた。

ついに彼女は当然の報いを受けていた。「私は悪い子だ」と彼女は思った。涙が自由に頬を流れると、彼女はパパの目に自分がどう映っているか考えた。彼は自分を恥じているに違いない、自分の恥ずかしさと同じくらいの恥を。彼女は悲しみと悔い改めを叫びたいと思い、涙でむせた。

それから、彼女は背後でパパの声がひび割れるのを聞いた。「お前はいつまでも私の本当の娘だ。」

自分の記憶が彼女にいたずらをしているのかと思い、カリーナは振り返って背後を見た。涙に濡れた顔は困惑の表情を浮かべ、素っ裸のお尻は完璧なお尻叩きの体勢のまま突き出ていた。

パパは同情的に彼女の目を見つめた。「たとえ罪を犯しても、お前は私の大切な真珠だ。」

カリーナは心臓が飛び跳ねるのを感じた。彼女は彼のところに駆け寄り、パパの胸に顔を埋め、永遠に彼の可愛い小さな娘でありたいと思った。しかし彼女はその場に留まることにした。パパが反抗で彼女を罰するとは思わなかったが、勇敢でありたいという彼女の一部はその場に留まる必要があった。彼女はいつまでも彼の小さな娘であることを知っていたが、その瞬間、彼女は自分がただの小さな娘ではないことを彼に見せたかった。

「愛してるよ、パパ！」と彼女は答え、新しい涙が冷たい空気の中で頬にチクチクするのを感じた。涙と露出した後ろ側のことを考えて激しく赤面しながら、彼女はメガネを鼻の上で調整し、すすり泣きながら壁の方を向いた。

パパが二本目の小枝を試しに彼女の後ろにトントンと当てるのを感じると、カリーナは舌が自分の意志で動くのを感じた。「祖母の杖を使うつもりですか？」と彼女は口走った。

完全に困惑して、パパは止まった。「うーん、カリーナ、お前の母親と私は、学校での喫煙という件について真剣に懸念している。私がお前の姉たちに似たような非行で杖を使ったことがあるのは知っているだろう。」

カリーナはうなずいた。薪小屋行きは親と子の間の私事と考えられていた。しかしカリーナは、何年も前に長姉カシルダがカリーナのお尻叩きを覗いたことで杖を食らったと確信していた。そして反抗的な十九歳のコロンバは、ママが彼女の財布に隠された酒を見つけてから一週間は快適に座っていられなかった。

小枝がカリーナの震える臀部に当てられたまま、彼女は自分の運命を決定づけるであろう言葉を発した。「私にはこれに値すると思います、パパ… 小枝でのお尻叩きに加えて。」

「お前は小枝でのお尻叩きが終わったらそうは思わなくなるかもしれない。お前の母親は、私が終わらせたら自分で彼女を叩きたいと言っている。私は彼女にそうさせるつもりだ。」

「つまり… 就寝前のお尻叩きですか？」ママはサマー家の子供が薪小屋行きを稼いだ後、補強として行う傾向があった。就寝前にお尻叩きをされるということは、カシルダ、コロンバ、クリス、コニー、キャリーのすべての兄弟姉妹が、隣の部屋でカリーナに何が起こっているかを完全に知っていることを意味した。お尻叩きがプライベートで行われたとしても、それが秘密であることを意味しなかった。

「そうだ、カリーナ。一週間毎晩というのが彼女の提案だ。それについて何か言い分はあるか？」

カリーナの、自分が手に負えない以上のものを引き受けたのではないかという恐怖が、ようやく彼女の虚勢を上回り始めた。「それは… それはたくさんのお尻叩きですね！」

「同意する、カリーナ。しかしコニーとキャリーは君を見上げている。もし彼女たちが君の喫煙の例に従ったら、何が待っているかを知っておくべきだ。」

カリーナはお尻叩きのことを考えてではなく、コニーとキャリーを誘惑に導くという考えに萎縮した。むしろ首に石臼を括り付けられるほうがましだ…

しっかりとお尻叩きの体勢を保ったまま、カリーナは神経を奮い立たせて口を開いた。「私… あなたとママが与えることに決めた罰なら何でも受け入れます。」

パパはうなずき、ついに微笑みを浮かべた。「よく言った、カリーナ。それなら、私はもともと君の小枝でのお尻叩きを、白樺の小枝で六回、それからパドルで六回、ストラップで六回、そして杖で九回で終わらせるつもりだったと知っておくべきだ。」

カリーナは頭の中で打撃を合計しながら、総毛立った。頭の奥で、オタクっぽい声が思った。「ああ、それは三十九回の鞭打ちだ！」

彼女は聖書の授業で、申命記では革の舌の鞭で四十回の鞭打ちが犯罪者の罰として許される最大数であると学んでいた。ほとんど陽気に、カリーナは自分のオタクっぽい内なる独白でその含意を考えた。「すごい、パパはこれを全部考え抜いてたんだ！ 私は大変なことになってる！」

お尻の痛みの一刺しが、彼女を突然自分の状況の現実に引き戻した。馬鹿げた考えを払拭するために首を振り、彼女は急いでパパを見上げ、自分のお尻が社会への借りを完全に返済したときにはどのような状態になるのかと思った。

「えっと… そのすべてに加えて、ウォームアップのお尻叩き… それに毎晩一週間の就寝前のお尻叩き？」カリーナはそれを言いながら笑い出しそうになった。もし自分のお尻が危険にさらされていなければ、笑える話だった。

パパは彼女を厳しく見るふりをして、それからほとんど励ますように手で彼女のお尻を叩いた。小さな「ひゃっ！」という声とともに、カリーナはウサギのようにその場で一度跳ね、パパの笑い声を聞いて、実際に自分もくすくす笑い始めた。

カリーナの小さな笑い声を聞いて、パパは大笑いし、それがカリーナをさらに笑わせて鼻を鳴らすまでになった。父親と娘はお互いの笑い声にさらに笑い、二人とも笑い転げた。

カリーナがパパを振り返ると、彼女は突然、自分に宣告されようとしているどんな運命も怖くなくなった。彼が自分に公平であることを知っていた。

パパは小枝を巧みに指の間で回し、考え込むようにあごを手に乗せた。「そうだな、今声に出して聞いてみると、確かに少し厳しすぎるように聞こえる。私は一週間毎晩就寝前のお尻叩きを考えていると言った。決めたわけではなかった。また、もしお前がお尻叩きの最中に抵抗したり口答えしたりしなければ、杖を免じてやろうとも考えていた。そして、手を少し外した以外は、お前は従順の模範だったと言わざるを得ない。」

カリーナは敬意を込めて沈黙を守り、その小さな失敗を考えながら最終判決を待った。

父親の目を見て、彼女は彼がうなずくのを見た。決断を下すと、パパは小枝をしっかりと握った。「しかし、少なくとも今夜は母親を怒らせたことで就寝前のお尻叩きに値する。彼女が家の中でアルコールやタバコをどう思っているかはわかっているだろう。薪小屋でのお尻叩きが終わったら、まっすぐ家に戻って母親に謝ることを期待する。そして、もし彼女が値すると思うなら、丁寧にお尻叩きをしてくれるように頼みなさい。」

カリーナはうなずいた。「はい、パパ、そうします！」

優雅に、パパは小枝をカリーナの臀部に再びトントンと当て、二人の父娘の絆の時間が終わりに近づいていることを示した。学びを再開する時だった。カリーナは姿勢を整えた。

「カリーナ、今日は小枝でさらに六回、そしてお前の祖母の杖で九回の打撃を与える。もしそれをうまく受け入れ、抵抗しなければ、パドルとストラップは今回は免除する。」

「ありがとうございます、パパ。」

「まだ感謝するなよ。この薪小屋行きを警告だと思え。もしお前から煙の匂いが少しでもしたら、聖書の完全な四十回の鞭打ちから一回引いたものを与える。わかったか？」

「はい、パパ。ご心配なく。がっかりさせません。」

「信じているよ。さあ、この小さな学びの経験を終わらせよう。」

カリーナは深く息を吸い、その場に留まる最善を尽くした。努力で体は震えていた。白樺の小枝からの最後の六回はゆっくりと加えられ、カリーナは指一本も動かさなかった。

それは痛みが少ないという意味ではなかった。それどころか、それぞれが両方の頬に完璧に当たり、パパは水平のミミズ腫れを覆うように斜めの線を交差させて側を切り替えた。カリーナは自分の柔らかくて生地のような臀部の重みを全部、熱いワッフルアイロンに押し付ける自分を想像し、それは燃えるような刺すミミズ腫れのきれいな模様とそれほど変わらないと確信した。

ついに、小枝の最後の一撃の後、父親はそれを置き、彼女に木製のベンチに座るように言った。

カリーナはためらった。お尻はズキズキし、脚は試練で弱っていた。しかし彼女は従わなければならないことを知っていた。そして、シャツを慎み深く前に引き下ろしながら、彼女は慎重にベンチに腰を下ろし、敏感な肌が硬い表面に触れると顔をしかめた。

「ブーツとレギンスを脱ぎなさい。これには脚が引っかからないほうがいい。」

これが何を意味するのか考えながら、カリーナはカウボーイブーツを調整した。片方の靴下がブーツと一緒に右足から脱げ、片方の足は裸で、もう片方は靴下を履いたままになったが、彼女は無視した。彼女は自分のレギンスが足首まで完全に落ちているのを見て、パンティーのゴムが伸びてしまったのではないかと心配した。

それらを脱ぐと、彼女は手で試しに伸ばし、ゴムがまだ大丈夫であることを確認して安心した。下着にプリントされたサンシャイン君の絵が、サングラスを粋に決めたまま、冷静に彼女を見返していた。

彼女がそれらをきちんと折りたたんで脇に置くと、部屋の冷たさが新たにお尻に感じられた。今や陽気な黄色い下着の温かさによって完全に保護されていなかった。

ガチャンという音がして、彼女は顔を上げると、パパがドアのフックから杖を取り出し、彼女が調べられるように掲げているのが見えた。

「パドルを覚えているか？ その重みがお前を前に揺らし、体勢を保つために自分を支えなければならないだろう？ まあ、杖でのお尻叩きはパドルと小枝の中間のようなものだ。体をリラックスさせることに集中しなければならない。『打撃を受け流せ』。しかし、小枝のようにミミズ腫れを残すが、より太く、より深い。もしお尻を引き締めると、あざができやすくなる。」

カリーナは、ざらついた木にしっかりと押し付けられた素っ裸の後ろに戦慄が走るのを感じた。ママとパパはお尻叩きに厳しかったが、彼女は一度も切り傷やあざができたことはなかった。パパは彼女の緊張を感じ取ったようだった。

「心配するな。お前の二人の姉と兄で練習してきた。これはお前を教えることが目的で、拷問ではない。しかしリラックスすれば楽になる。適切に杖でのお尻叩きを受け入れる方法を学ぶことは、人生の素晴らしい経験になる！」

彼女が直径がほぼ半インチもあると推測した籐を見て、カリーナは安心しなかった。

「脚を休めるために座る機会があった。少し伸びをして、体勢を戻しなさい… 重心を低くする必要がある。脚を広げ、肘と前腕に体重をかけなさい。よし！」

パパが杖で彼女の太ももの内側を優しくトントンと叩くのを感じると、カリーナは激しく赤面し、足を広げた。彼女はパパが準備の儀式の間、礼儀正しく目をそらすことを知っていた。彼女はパパもママも幼児の頃にお尻を拭き、学びの経験の時に数え切れないほど素っ裸にしたことを知っていた。しかしその瞬間、こんなに… 裸でいることは決して簡単ではなかった。

美術の授業で、彼女はヌードとネイキッドの違いについてのエッセイを読んだことがあった。ぼんやりと、ヌードは欲望の対象としてポーズを取ること、フランドル派の絵画の肉感的なニンフのように、と記憶している。一方、ネイキッドは露出し、無防備であること、絶望で胸を押さえながらエデンの園から追われるイヴのように。

カリーナは自分が今どちらなのか考えた。ヌードか、ネイキッドか？ 幅広でぴんと張ったお尻を空中に突き出して、彼女は確かにルーベンスの絵画のぽっちゃりした少女のようにポーズを取っていたが、彼女はその考えを退けた。クロエとチェルシーはかつてからかうように、学校の可愛い男の子の一人、例えばチェスクラブのポール・ディアンジェロなどにお尻を叩かれたことがあるかと尋ねたことがあり、カリーナは個人的に誰がお尻叩きを楽しいと思うのか理解

できなかった。彼女はママやパパの前でその考えに触れることさえ怖かった。

いいや、これはむしろネイキッドに近かった。イヴのように、彼女は自分の罪のために裁きを受けていた。しかしもしそうなら、なぜ彼女はこんなに落ち着いているのだろう？ カリーナは聖書の中で、神が単にアダムとイヴを裸で恐れながらエデンの園から追放したのではなく、彼女が見たいくつかの絵画のように、彼らに動物の毛皮を衣服として提供したことを思い出した。正義だが、慈悲が添えられていた。

それがカリーナが感じていたことだと気づいた。ヌードでもネイキッドでもなく、「覆われていない」。父親の愛と権威の前で裸にされた。しかし同時に、彼の愛と安心感によって「覆われている」。彼女は彼の正義に直面しなければならない。彼の慈悲を信頼しなければならない。

パパは杖を彼女の後ろに滑らせて「目覚めさせ」、彼女の頬を少し持ち上げた。彼女はお尻の産毛が逆立つのを感じ、剃った脚は冷や汗で濡れていた。その冷たさはふくらはぎを伝ってつま先まで広がった。彼女は突然、忘れた靴下を裸の右足に履き忘れたことを思い出した。

彼女はパパの声に本当の心配を感じた。「準備はいいか、カリーナ？」

「準備はできてます、パパ」と彼女は嘘をついた。

カリーナは杖が当たる前に背後で空気の動きを感じ取った。パパは長年の練習を誇張して言っていたわけではな

かった。腕の振りは制御された力を加え、手首のひねりが追加の刺激を加えた。

カリーナは息を呑み、小枝でのお尻叩きのミミズ腫れが抗議の叫びをあげた。彼女の目は閉じられ、彼女の世界は踊る星の光に縮小した。彼女は、その刺痛が小枝ほど悪くないと考えるのにちょうど十分な時間があり、それから鈍い痛みの感覚が彼女の心の最前線に押し寄せた。それは小枝が残す跡の二倍の幅があり、彼女の臀部の奥深くにあった。

本能的に、彼女は頬をしっかりと引き締めた。不運にも、パパは振りを間に合わずに止められず、カリーナは彼が先ほど言ったことを発見した。

彼女は実際に杖が大殿筋の硬い筋肉にドスンと沈むのを感じ、二度目の痛みの波が続いたとき、それはあまり認識されなかった。彼女の鋭い悲鳴の後には、ゆっくりとした驚きのうめき声が続いた。「いった！ … うううううっ！ ！」

パパは心配そうに止まったが、肌が破れていないのを見て安心した。彼は叱ることも「だから言っただろう」と言うこともしなかった。彼はカリーナに十分説教したし、彼女が自分と同じくらい罰を終わらせたいと思っていることを知っていた。

「これは私が君より痛い」というのは多くの親が子供に言う嘘かもしれないが、パパは一度も言ったことがなかった。彼の場合はあまりにも真実だからだ。言う必要はなかった。

彼はカリーナが反射的にお尻を引き締めたり緩めたりするのを見て、彼女が手のお尻叩きのために彼の膝の上に前かがみになったときに同じ光景を何度も見たことを思い出した。彼は突然、引き締めることは諸刃の剣だとずっと前に彼女に警告しておけばよかったと思った。彼は慈悲深く、彼女が頬を緩める正確な瞬間を狙って三回目の杖の打撃を加えた。

カリーナの視点からは、その打撃は彼女が引き締めるなと覚えた直後、精神的に準備を始めたまさにその時に加えられた。彼女は前方に揺れたとき体勢を保った。苦痛の半分は次の打撃がいつ来るかわからないことだった！

彼女は立派にその場を保ち、四回目の打撃の後、泣き言を言ったり大声で泣いたりすることなく杖でのお尻叩きに耐えられるかもしれないと期待する勇気を持った。

しかし五回目の打撃で、その希望は消えた。それは彼女のお尻のすぐ下に当たり、彼女の上腿に新鮮で光り輝く新しい線を残した。

カリーナは杖の力が体全体に伝わるにつれて優雅に前方に揺れ、体重を再び足の上に戻すと、お尻叩きの累積的な痛みがついに彼女に追いついた。彼女はベンチに頭を下げ、涙がより大きな力で戻ってくるのを感じた。彼女は咳き込み、すすり泣き、かわいそうなお尻をできるだけ杖から遠ざけたいだけだったので、床に崩れ落ちた。

パパは失望しつつも理解して止まった。「カリーナ、もうすぐ終わりだ。体勢を戻しなさい。」

カリーナは狂ったように首を振り、ベンチに泣き叫びながら両手でお尻を包み込んだ。

彼女は腰の両側に二つの支える手を感じ、優しく彼女を導き上げた。「できるよ、バタカップ。深く息を吸って…」

「嫌だ！」カリーナは吐き捨て、力を込めてお尻を座らせ、敏感な肉に指を食い込ませて鈍い痛みから気をそらした。

パパの手が再び彼女の腰の両側を持ち上げたが、今回はしっかりとした強制で。三歳の時と同じくらい簡単に、パパは彼女を持ち上げて左膝の上に乗せた。

彼女は愚かに慌て、手は簡単にお尻から離され、足はパパの膝の両側に無力に垂れ下がり、膝が彼女の下の体重を支えた。彼女は自分の胸がベンチの固い木に押し付けられるのを感じ、パパの左手が彼女の腰を左前腕の下でしっかりと包み込み、それから彼は空いた右手で本格的に彼女を叩き始めた。

この突然の基本への回帰に、カリーナは新たな反抗の叫びをあげ、精神的に自分のひどい二歳児時代に戻った。「え？ 何をしてるの？ 痛い！ 痛いよ！」

パパは抗議する娘を一定のドラムのリズムで叩き続け、それからペースを落として彼女に確実に聞こえるようにした。「もちろん、お前のウォームアップのお尻叩きをしてるんだ！」

「え？ ウォームアップのお尻叩き？ で、でも… 痛い！ やめて、パパ！ お願い！ イヤーッ！！」

「『でも』はなしだ。二度も従うように警告した。この家のルールはわかっているだろう。不正直、無礼、故意の不服従はすべてお尻叩きに等しい！」

三回の素早い平手打ちを続けて加えた後、パパは止まった。巨大な右手が標的の上に威嚇的に空中に浮かんだまま。カリーナはその光景の下で固まった。

「お尻叩きの最中に反抗を示した場合の罰は何だ、カリーナ？」

カリーナの頭は、鋭い一言、言い訳、議論、呪いの言葉、懇願で駆け巡った。彼女は答えを知っていたが、今や悪魔が叩き出された今、彼女の状況の現実が彼女に押し寄せた。

まさか… まさか！ パパはお尻叩きを最初からやり直すなんてことはしないだろう？

唇を震わせながら、カリーナは自分が失敗したことに気づいた。しっかりと強くあろうとするすべての努力が崩れ去った。彼女はいつものいたずらな小さな女の子だった。彼女は、「わざとじゃなかった！ 事故だった！ ただ怖かったんだ！」と考えたが、言わなかった。

その代わりに、彼女はパパの目を見て、真実を話した。「ああ… もう一度お尻叩きです、パパ。」

「その通り、もう一度お尻叩きだ。」パパは警告としてカリーナの両方の頬を叩き、それからゆっくりと一定のペースで

叩き始めた。彼女が彼の言う一言一言に集中できる程度に、彼は強調のために平手打ちで言葉を区切った。

「これが終わったら！」

ビン！

「まだ四回の杖の打撃が残っている。」

ビン！ ビン！

「最初からやり直しはしない。」

パパは「しない」という言葉で素早い平手打ちを加え、その文を三回の素早いスタッカートで締めくくった。ビン、ビン、ビン！

「お前を叩かなければならないのは好きじゃない、カリーナ。」

ビン！ ビンビンビン！ ビン！

「しかしお前が自制心を学ぶまで、お前を叩き続ける、カリーナ。」

そう言って、彼は標的の中心に轟音の最後の一発を加え、両方の頬のかなりの面積を覆った。力強く響き渡る:

バシーン！

カリーナは静かに泣いていたが、取り乱す衝動を抑えた。彼女は哀れな「ごめんなさい」という懇願と、「いい子になります」という哀れな約束を口にしている自分に気づいた。

彼女は父親の太ももの上に休み、自分の運命に完全に身を委ねていた。もし彼がウォームアップのお尻叩きをあと一時間続けると宣言し、それから小枝でのお尻叩きを最初からやり直すと宣言しても、彼女には運命を受け入れる以外にできることはないとわかっていた。

パパは自分の成果を調べた。カリーナの普段はチョコレート色の臀部は、濃厚なさび色の均一な色合いに赤みを帯び、小枝と杖からの明るく輝く跡と鋭く対照的だった。

彼女が癇癪を起こすのを終えた今、パパはできるだけ早くこれを終わらせたいと思ったが、約束を果たさなければならないとわかっていた。「まだ五回の杖の打撃が残っている。それで終わりだ。準備はいいか？」

「… はい、パパ。従います！」

「よし。」パパの頭は回転した。彼はカリーナが以前のように体勢を保つのは不可能だとわかっていたので、少し慈悲を与えることに決めた。「ベンチに頭と腕を置き、膝を地面につけなさい。今回は体勢を保つのが簡単だろう… よし！さあ、お尻を上げなさい。」

それは彼女の先の反抗のほとんど鏡像だったが、逆だった。ベンチに腕に顔を埋めた後、彼女は痛むお尻を地面に座らせたが、それから衝撃で持ち上げ、薪小屋の凍えるような木製の床の上に浮かせた。ついに、パパの命令で、カ

リーナは優雅に腰を天に掲げ、完全な従順で標的を提示した。「… 準備できました…」と彼女はおとなしくつぶやいた。

パパは警告のトントンや説教で時間を無駄にしなかった。彼は最後の四回をゆっくりと正確に加えた。カリーナはそれぞれにシューッと息を吐き、泣き叫び、大声で泣き叫び、ついにうめき声をあげ、それから祈るように両手を組んで、絶え間ないすすり泣きに戻った。

彼女が慰められないのを見て、パパは彼女のコート、レギンス、パンティーを彼女の頭の横のベンチに優しく置き、それから祖母の杖を元の場所に掛けようと振り返った。

道具がドアにガチャンと当たる音を聞いて、カリーナは再びベンチに這い上がった。「どういう体勢にすればいいですか、パパ？」

「うん？」混乱して、老農夫は振り返り、養女が再びお尻を出すためにベンチに体を持ち上げているのを見つけた。

彼女はすすり泣いたが、彼を見ようとはしなかった。「ぱ… パドルのために？ 杖でのお尻叩きをうまく受け入れられなかったら… パドルをもらうって… それからかみそりのストラップも！」

「カリーナ、お前はもう十分焼かれた。教訓を学んだ。お尻叩きは終わりだ。」

「で、でも… でも言ったじゃないですか？」

パパは振り返ってパドルとストラップを調べ、ようやく先の脅しを思い出した。彼はパドルに手を伸ばし、それを考えた。「私は確かに、杖でのお尻叩きをうまく受け入れられたらパドルとストラップを免じてやると言った。お前は一度体勢を離れたが、それで私はもうお前を叩いた。全体的に見て、お前は勇敢に耐えたと言える。そして、私にすべてを忘れさせることができたのに、パドルとストラップのことを思い出させるということは、人格の強さを示している。私はお前をとても誇りに思っている。」

「で、でも——」

パパは警告の手を上げ、パドルを元の場所に戻した。「違う！ もう『でも』はなしだ、カリーナ。さもなければ考えを変えるかもしれない！」

彼が振り返ると、養女がほとんど彼の腕の中に飛び込んでくるのを見つけた。まだ尻は丸出しで、Tシャツだけを着ていた。彼女が腕と脚を彼にしっかりと巻き付けて抱きしめると、彼女が地面に転がり落ちるのを防ぐために、彼は驚いて彼女の両方の尻の半分をしっかりと掴まなければならなかった。

彼は彼女がその接触にひるむのを感じ、それから彼女は彼の胸に顔を埋め、メガネは鼻から額の方へ押し上げられ、曲がって戻った。

「ずっと愛してるよ、パパ！」

「ずっと愛してるよ、バタカップ！」

***

後は歴史が語る通りだ。服を着るのを忘れたことに気づくとすぐに、カリーナは気まずそうにパパの肩を叩いて下ろしてもらった。家に戻ると、彼女はママに謝り、今夜就寝前のお尻叩きをしてくれるように丁寧に頼んだ。カリーナは「もし値すると思ったら」とは付け加えなかった。実際、カリーナの薪小屋行きの詳細を聞いた後、ママは就寝前のお尻叩きなしで彼女を許そうとしたが、カリーナは主張した。

「必要なんです、ママ。私のためだけじゃなくて。コニーとキャリーはタバコを吸う女の子に何が起こるかを学ばなければなりません… 一週間毎晩って、パパが言ってました。」

ママはパパと目を合わせ、誇らしげにカリーナにうなずいた。

その夜の夕食時に、家族はその件について話し合った。コニーは妹たちから質問攻めにあった。

そばかすのある赤毛のコニーは畏敬の念を込めて彼女を見た。「学校で喫煙？ 勇気あるね！」コニーは首を伸ばしてカリーナの後ろを調べ、レギンスを通して真っ赤に輝いているのを見るかのようだった。コニーはいつもお尻叩きを野球と変わらない大きな個人的挑戦として見ているようだった。

「勇気じゃないよ、コニー。愚かだったんだ。そして今日、その代償をたっぷり払った。」

「パドルをもらったの… それともストラップ？」とキャリーが口を挟んだ。彼女は甘いイチゴブロンドの頭を慎ましやかに傾けた。キャリーは「お尻叩き」という言葉さえ怖がっていた。しかしカリーナは、その内気さの裏で、キャリーが兄弟姉妹のお尻叩きの詳細に対して病的な好奇心を密かに隠していると推測した。

カリーナは退屈そうなふりをした。「違うよ！ どちらも！」カリーナはキャリーの失望した表情を味わってから付け加えた。「手のお尻叩きを二回、小枝、そして杖をもらったんだ！」

キャリーの恐怖と賞賛が混ざった表情を見て、カリーナは胸を張った。

カリーナは兄と姉たちの物知りな視線に耐えた。コニーはカシルダの左手の薬指にある婚約指輪を感じながら、励ますように彼女の背中を叩いた。

二十一歳のイチゴブロンドのカシルダは、いつも単なる田舎の娘に変装した秘密の妖精の王女のような印象を与えた。彼女はサマー家の兄弟の中で最も成熟しており、長年にわたってコニーを何度か自分でお尻叩きにしたこともあった。彼女は弟妹の痛みを決して喜ばなかった。

カシルダがこの夏の結婚式の後に家を出ることを考えて、コニーはほろ苦い気持ちになった。「お尻叩きに年齢制限はない」はカシルダにも他のサマー家の子供たちと同じように当てはまったが、あの「覗き見」事件の後、カシルダが再びママやパパにお尻叩きされることはおそらくないだろう。その考えはコニーに希望を与えた。

一方、先週の未成年飲酒についての「真剣な話し合い」の余韻をまだ感じているコロンバは、不機嫌そうに沈黙を守っていた。カリーナは、カラスのような黒い髪の下で、コロンバがカリーナの罰を詳細に思い描いているのではないかと疑った。

カリーナはコロンバを愛しており、普段は仲が良かったが、コロンバがお尻叩きを受けると少なくとも一週間は「お尻が痛い」と振る舞うのは周知の事実だった。コロンバは自分がサマー家でまだお尻叩きをされている唯一の人間ではないということを知って、大きな慰めを得ていた。

クリスは、姉たち全員が考えている質問を口にすることでその瞬間を遮った。「つまり… 君はお咎めなしってこと？」

パパはママにうなずき、ママは厳かにカリーナの今夜の就寝前お尻叩きという予想通りの知らせを発表した。コニーとキャリーの驚いた表情に、カリーナは少し虚勢を張って付け加えるのを抑えられなかった。「それに就寝前のお尻叩きが、毎晩、一週間分！」

最初の就寝前お尻叩きは短いものだった。彼女のドアは開け放たれ、ママは長くゆっくりとした手のお尻叩きを行った。ヘアブラシも木のスプーンもなかった。カリーナはママが彼女に手加減しているのを感じ、手をカップ状にして大きな反響音を立て、本当にカリーナを罰するよりもコニーとキャリーのために大きな音を立てていた。それでも、薪小屋行きの後では、彼女の敏感な後ろ側に対する最も優しい愛の一撃でさえ、新たなお尻叩きのように感じられた。

ママはカリーナをベッドに寝かせつけた。カリーナが小さかった頃、お尻叩きの後にしたのと同じように。「今夜は手加減したわ。休んでおきなさい。明日からはちゃんとしたお尻叩きよ。」カリーナはうなずき、ママのおやすみのキスを返し、それから横向きに寝るように注意しながら眠りについた。

第1章 終わり

第11章：就寝前のお尻叩き

カリーナのお尻は、朝までにはほぼ回復していた。小枝でのお尻叩きが残したかすかな跡がまだ見え、押すとわずかに刺すだけで済んだ。しかし杖の跡は、その日一日中ずっと痛みが続いた。

カリーナはその週はずっと最善の態度で過ごし、農場の周りの朝の雑用を口笛を吹きながら行った。土曜日と日曜日には、「本物の」就寝前お尻叩きに耐えた。ママは土曜の夜には古くて頼りになるヘアブラシを持ってきて、日曜の夜には木のスプーンを持ってきた。カリーナは、毎晩違う罰が待っているだろうと推測し、金曜の夜の最後の就寝前お尻叩きは、おそらく先の薪小屋行きに匹敵するだろうと予想した。

月曜日の学校で、カリーナはわずかな他人の不幸の喜びを感じながら、クロエ・キムの両親が予想通り彼女の尻を叩いたことを知った。それだけでなく、チェルシー・デル・レイの母親も喫煙事件を受けて体罰を恒久的に復活させることを決めた。三人の友達全員が机に不快そうに座っているという事実は、どういうわけか彼らが許し合い、忘れるのを容易にした。

女子更衣室で、彼らは戦傷を比較し合い、カリーナは杖の跡を見たときのチェルシーの顔の恐怖の表情に喜びを感じた。「ああ、なんてこった！ 私の母があなたの両親にお尻叩きのアドバイスを求めているの！ もし杖を提案したらどうする？」

「どうやらこれからはタバコには『ノー！』と言わなきゃいけないみたいだね！」とクロエはからかいながら、赤紫色のまだら模様で覆われた小柄な臀部を指さした。厳格なアジア系の家庭で育ったクロエは、母親のスリッパの怒りには慣れていた。

三人の間での見解は、クロエがカリーナに次ぐ二位で、
チェルシーが三位で、彼女の日焼けしたぷっくりしたお尻には手形だけがついているというものだった。

もしカリーナが座ることができれば、山の上に座って賢明な助言を授ける大師のように感じられただろう。「心配しないで、チェルシー。もし両親が私のママとパパにお尻叩きのことを相談しているなら、良いアドバイスがもらえるよ。それは人生の一部なんだ！ 受け入れることを学べば、楽になるよ！」

「あのクソタバコなんて見なければよかった！」とチェルシーは口をとがらせた。

その夜、パパが月曜日のカリーナの就寝前お尻叩きを担当した。ママはキャリーに成績表を隠したことで就寝前お尻叩きを与えるのに忙しかった。カリーナがキャリーのすすり泣きの声が甲高いものから哀願的なものに変わるのを聞くと、妹の試練が終わったことを知った。

隣の部屋の音に動じず、パパは安定した手のお尻叩きを続けた。ママが彼女の部屋に現れ、パパの進捗状況を確認した。「手伝おうか、パパ？」

カチッという音とともに、パパはベルトのバックルを外した。
「いや、ママ。今日は長かっただろう。先に寝ていなさい。すぐに行くよ。」

カリーナがパパが特徴的な「スニッ」という音を立ててベルトをループに通すのを聞くと、彼女はベッドの枕をしっかりと握りしめた。

「わかったわ、愛しい人。明日は私がカリーナの担当に戻るわ。明日の夜はキャリーを任せられる？」

「彼女はお尻叩きの最中に反抗したのか？」とパパはベルトを折りたたんでパチンと鳴らしながら尋ねた。

ママは悲しそうにうなずき、カリーナの無防備なお尻を指さした。「そうなのよ。キャリーはカリーナから、お尻叩きの受け方を学ぶべきね。」

「そうだな、カリーナは確かに教訓をよく学んでいる。とても誇りに思っているよ。」

「ありがとう、パパ」とカリーナはつぶやき、喜びと緊張をかろうじて抑えた。ママはカリーナのベルトでのお尻叩きの音が家中に響くようにドアを開け放した。

翌晩、カリーナはパパがキャリーに今週二度目で最後となる就寝前お尻叩きを施すのを聞き、その間ママはカリーナの毎晩のメンテナンスお尻叩きの任務を再開し、火曜の夜には革のスリッパ、水曜の夜にはカーペットビーターを使用した。

木曜日、コロンバが門限を破ってトラブルになり、その件について尋ねられても態度で口答えした。これによりカリーナの就寝前お尻叩きは保留となった。

パパが隣の部屋でコロンバの罰を始めると、ママはカリーナを驚かせて、すぐにお尻叩きを始める代わりに風呂に入るように送り、終わったらタオルを巻いて風呂用ブラシを持って部屋に来るように指示した。

壁越しにコロンバの叫び声が響く中、カリーナは母親の意図を理解するのに時間はかからず、熱い湯に浸かりながら長柄の風呂用ブラシについて考える十分な時間があった。

長く浸かった後、カリーナはコロンバのお尻叩きがすぐには終わりそうにないことに気づき、自分の部屋に向かい、髪と上半身を二枚のきちんとしたタオルで包んだ。

パパがまだコロンバを叩いているとき、ママがコロンバの部屋から出てきて、ちょうど風呂上がりのカリーナと出会い、風呂用ブラシを要求した。カリーナは素直にそれを差し出し、寝室のプライバシーの中でタオルを脱ぎ、ママに後ろをさらした。まだ熱い風呂で濡れて湯気が立っていた。

ブラシは彼女の濡れた肉に激しく刺すように当たり、彼女は自分を哀れむ十分な時間を持った。

罰が終わったとき、カリーナは自分をあまり哀れに感じなくなった。それでも隣の部屋でパパがコロンバにベルトを加える音がまだ聞こえた。ママがおやすみのキスをした後、コロンバのお尻叩きの音はさらに数分続き、新鮮な泣き声

と、間違いなく風呂用ブラシでのお尻叩きと思われる音が加わった。

カリーナは密かに、自分の就寝前お尻叩きが終わった後も、サマー家の兄弟たちは少なくともあと一週間はコロンバの就寝前お尻叩きの音を耳にしながら眠りにつくのではないかと疑った。

コロンバの異様に長い就寝前お尻叩きがついに終わると、彼女のすすり泣きの最後の音は次第に収まった。

カリーナがようやく眠れると願ったちょうどその時、彼女の寝室のドアの取っ手がゆっくりと回った。カリーナは顔を上げた。ママは今夜もうカリーナを叩いたのを忘れたのだろうか？

カリーナの安堵に、長姉のカシルダが顔を出し、カリーナに親指を立てた。「もうすぐ終わりだよ、喫煙者！」と彼女はからかうように言ったが、それは決してカリーナを怒らせない言い方だった。

「応援ありがとう、カシルダ。」

「ねえ、お尻の調子はどう？」

「結構熱いよ！」

「... 熱々って感じ？」

カリーナは枕を投げつけ、それは柔らかく「ぽふっ」とカシルダの顔に当たった。二人はくすくす笑ったが、コロンバの哀

れな叫び声が聞こえると、カシルダは自分のベッドに急いだ。今夜、ママとパパが明らかに調子に乗っているときに、これ以上就寝前お尻叩きを招くわけにはいかない！

ついに金曜日が来た。「神に感謝、今日は金曜日だ！」とカリーナはその日一日中祈り、本気でそう願った。

チェルシーは「お尻叩きに年齢制限はない！」という世界での新しい生活に適応しつつあり、クロエは昼食時の不快感に耐えるためのアドバイスを次々と挙げていた。

背後で男性の声が聞こえて、彼らは驚いた。「みんなお尻叩きされたんだって？ ジャーナリズムクラブの部屋を喫煙所にした罰だな！」チェスクラブの友達、ポール・ディアンジェロが彼らのテーブルに立ち寄っていた。

クロエは口に手を当て、チェルシーは赤面を隠すために耳を覆い、カリーナは手で目を覆い、それから恥ずかしそうに手を下ろしてポールの青い目と目を合わせた。

三人の少女は一緒になって完璧な絵を描いた。悪を聞かず、悪を見ず、悪を語らず。

ポールはチェスクラブの典型的なメンバーではなかった。元は陸上のスポーツマンで、カリーナは彼が主に自分と話す口実としてチェスクラブに入ったのではないかと密かに疑っており、彼女は彼と話すのが好きだった。「やあ、ポール！ 学校中が喫煙事件のことを知ってるんだね？」

「そうだよ！ でもお尻叩きのことを知ってるのは多分俺だけだと思う。ここではそのことは伏せておいたほうがいいよ！」

「ありがとう、ポール。その部分は秘密にしてくれるって信じてるよ？」

「もちろん！ でも、もし君の相談役になるなら、全部話してもらうのが公平だと思わないか？」

チェルシーとクロエは、自分たちのお尻叩きが知られたことにまだ恥ずかしがりながらも、カリーナの赤面した顔を見て女子らしい笑いをこらえながらカリーナを見た。学校中の誰もがポールとカリーナがカップルだと思っていたが、どうやらポールとカリーナ自身は別のようだった。

カリーナは手を下ろし、きちんと膝の上に置いて背筋を伸ばした。「放課後に一緒にチュロスを食べない？ 全部話すよ！」

「よし！ おごるよ。微積分の授業で会おう。あ、予鈴だ！ お嬢さんたちに痛みを分かち合ってもらおう。」

ポールのしなやかな体格が歩き去るのを見つめながら、カリーナは突然、奇妙な心象に襲われた。まず、彼女はポールの引き締まったお尻が自分の膝の上でお尻叩きのために前かがみになっているところを想像した。彼女は自分が露見したことにただイライラしているだけなのかと思った。

しかしその後、自分がポールの膝の上で全裸で前かがみになっているところを想像すると、彼女はどちらの心象も選

べないことに気づいた。どちらも同様に興味深かった。「これがクロエの言ってたことなのか？ 魅力がわかった気がする！」とカリーナはつい口に出して考え込んだ。

ポールがチュロスを払い、思いやりのある聞き手であることがわかった。パパが何か「公式な」ことが起こる前に祝福を与えたいだろうことを思い出し、カリーナは慎ましく夕食を提案した。

「今夜？ 料理できるんだよ！ まあ、ほとんど炒め物だけど、でも炒め物は得意なんだ！」

「今夜は… えっと…」

ポールはうなずいた。「まだ家でお咎め中？」カリーナは彼が「お尻叩き」という言葉を避けたことに感謝した。

「うん、でも今夜で終わりなんだ。えっと… ここ！ ママにテキストして。私が誘ったって伝えて… それと、これが私の番号でもあるんだ。私へのテキストは全部彼女の電話に行くから… ちゃんとした態度でね！」

「信じて、そうするよ。君のママは、あまり関わりたくないタイプの人のように聞こえるよ！」

ポールは彼女を家まで短い道のりを送った。途中、カリーナは彼の手のことを考え続けた。彼女は彼の手を握りたかったが、その手でお尻を叩かれるという禁断の考えは後回しにしなければならないとわかっていた。彼女の嬉しい驚きに、角を曲がったところでポールは自ら彼女の手を

握った。彼女はサマー家の敷地の外で彼が彼女を降ろすとき、自分が思う限り最も可愛い手を振った。

ポールの存在はママの目にも留まり、ポールへの土曜日の夕食の招待は正式なものとなった。

カリーナは、ポールへの想いと今夜の自分の運命の間を心がさまよっているのを感じた。その晩、サマー家の話題の中心は昨夜のコロンバのお尻叩きだった。コロンバは恥ずかしそうにうつむき、自分の非行が話し合われる間、パパが明日薪小屋行きを約束したときには飛び上がった。

「明日？」とコロンバはたっぷりの自己憐憫を込めて尋ねた。「今すぐ終わらせられないの？」

「お前のママと私は今夜カリーナを担当している。彼女の就寝前お尻叩きの最終夜で、一晩中彼女をやきもきさせたくない。今夜、カリーナの後にお前にも就寝前お尻叩きをする。そして明日の薪小屋行きを考える時間がある。もしおとなしくしていれば、ポールが来る前に終わらせてやる。」

コロンバは口をとがらせて食事を弄んだが、反論はしなかった。彼女は「もしおとなしくしていれば」という言葉が何を意味するかを知っていた。もしコロンバがおとなしくしなければ、ポールが薪小屋での彼女の音をはっきりと聞いて到着するかもしれない。

カリーナは過去の経験から、最後の就寝前お尻叩きに何が待っているかある程度予想していた。パパは夕食後すぐにパジャマに着替えるよう彼女に送った。就寝前お尻叩きは十分に一般的なものだったが、最後の就寝前お尻叩き

は常にクライマックスであり、薪小屋行きに匹敵するものだった。長く続く教訓として、少なくとも数年は続くことを願って！

以前の就寝前お尻叩きでは、運命の瞬間が来るまで待って自分を占有することが許されていたのとは異なり、カリーナはパジャマのズボンを下ろし、腰の下に枕を入れて素っ裸のお尻を提示し、両親が到着するのを待つよう指示された。

これは事実上、カリーナが必要なだけこの姿勢で待ち、自分の現在の状況と過去の経験を振り返ることを意味した。

彼女が寝室に入って最初に気づいたのは、三つの物がドレッサーの上に置かれていることだった。パドル、かみそりのストラップ、そして祖母カリーナの杖が、すべて彼女を迎えるために待っていた。

カリーナは、薪小屋でそれらを辛うじて免れた後、少なくともそのうちの一つに再び会うかもしれないと予感していた。彼女がパジャマのズボンを下ろし、枕の上にうつ伏せになると、三つの道具の厳しい警告が彼女の上に立ちはだかった。視界にはないが、確かに心にはあった！

以前経験したすべてのお尻叩きを何度も頭の中で再生した後、カリーナは恐れてはいないことに気づいた。しかし、これは間違いなく、あの恐ろしい薪小屋行き以来、彼女が直面する最も厳しい罰のセッションになるだろう。ついに彼女は祈ることに決め、主の祈りから始め、自分を愛する両親を送ってくれた神に感謝し、最後に勇気を請うた。

ママとパパはカリーナが最後の祈りを終えるのを目撃するために到着した。黒い素っ裸のお尻がまだ二人の間で明らかに空中に突き出ている中、三人は最初からすべてについて話し合った。彼女が火のついたタバコを受け入れたときに頭の中で何が起こっていたかから、薪小屋での苦しい経験、就寝前お尻叩きの屈辱、そして現在の瞬間まで。

「学びました、パパ。最後のお尻叩きが終わるのが嬉しいけど、これが必要だとわかっています。もう二度と自分の信念を曲げないと決して忘れません。」

パパは微笑んだ。「誇りに思うよ。罰を終わらせよう。」

パパとママはカリーナの両側に座り、彼女のお尻を静かに間に挟み、それぞれ片手を彼女の腰の下に置いて慰めた。二人は一緒に、手形が彼女の後ろ側と太もも全体を覆うまで叩いた。

それからパパは立ち上がってパドルを取り、それをママに差し出してから、誤った道を歩んだ、完全に悔い改めた娘の世話をした。

カリーナはつま先立ちで立たされ、頭を下げ、お尻を上げてパドルを受けた。ママから六回、パパからさらに六回のパドルの平手打ちの後、カリーナは自分のお尻が永久に平らになるのではないかと思った。

その頃には、彼女のパジャマのズボンは足首のあたりにだらりと垂れていた。カリーナがそれらを引き上げようと手を伸ばすと、パパが遮った。「その必要はない。邪魔になるだけだ。脱ぎなさい。」

心の片隅に反抗心を抱えながら、カリーナは片方の足をパジャマのズボンの片方の脚から解放したが、もう片方の足にぶら下げたままにした。たとえお尻が丸出しでも、パジャマのズボンが少なくとも手の届くところにあれば、裸の感じが少なかった。

もしパパが彼女が完全にパジャマのズボンを脱いでいないことに気づいていても、彼は何も言わなかった。しかしママはカリーナに何かを知っているという目を向け、彼女の手を持ってベッドの上に導き、彼女の手を固定した。

カリーナは密かな反抗を即座に悔いた。彼女は裸の脚をしっかりと閉じ、今その代償を払うことになると決心した。パパはかみそりのストラップを彼女の豊満なお尻に当てた。そこはすでに均一な赤みを帯びていた。

彼がストラップで最初の三回の鞭打ちを加えると、それぞれが三インチ以上の幅のミミズ腫れを浮き上がらせ、カリーナはその場で揺れ、のたうち回ったが、ママが彼女の手をしっかりと握っていた。

四回目の打撃の後、カリーナは脚を閉じておくことを忘れ、自由にのたうち回り、激しく泣き叫んだ。彼女はママが手を離してパパと入れ替わるのに気づかなかった。パパが彼女の手を取り、ママが二度目のストラップを加えるまで。

ママはパパほど強くなかったが、カリーナはパパのストラップの跡に新たな衝撃を感じ、彼女の下半身は水ぶくれで覆われていると確信した。

泣き叫びながら、カリーナはベッドから導き上げられ、自分のパジャマのズボンがとっくに部屋の向こうに飛んで行っていることに気づいた。

「ママがお前に杖を与える。もう祖母の杖を紹介した以上、これから薪小屋に連れて行くたびにそれを感じることを覚悟しなさい。もしまた薪小屋行きが必要になればの話だが。」

カリーナはうなずき、むせび泣き、「はい、パパ」とすら言えなかった。

「できるだけ前かがみになりなさい。つま先に手が届くように。」

カリーナは前に伸び、恥ずかしいことにふくらはぎまでしか届かないことに気づいた。「ちょっと届かないです、パパ。」彼女はパジャマのシャツが頭の周りで自由に垂れ下がり、胸の下側が露出しているのを感じた。

ママは試しに杖をカリーナの臀部にトントンと当てた後、娘の苦境に気づいて止まった。「それはずっと厄介なことになるわね、あなた。」

パパは娘のみだれた状態から礼儀正しく目をそらした。「じゃあ、もし彼女が… 持ち上げれば？」

シャツが頭の周りで垂れ下がるのを感じて、カリーナは無駄だとわかった。「大丈夫です、パパ！」彼女はきれいな動作でシャツを脱ぎ、ベッドの上に投げた。完全に裸になった

カリーナは再び体勢を整え、ふくらはぎの後ろで手を組み、完璧なハート型の標的を提示した。

ママは試しに力を込めて杖をトントンと叩き、その衝撃が娘の差し出した臀部に優しく波打つのを確認した。

「体勢を保ち、一打ごとに数を数えなさい。もしもがいたり、体勢を崩したり、数え間違えたりしたら、その打撃はカウントしない。私は決して、決してあなたにまたタバコを吸ってほしくないの、カリーナ。もしあなたがパパだけがあなたのお尻を火傷させられると思っているなら、今夜はその考えを改めさせてあげるわ。」

カリーナはうなずき、逆さまからママの真剣な表情を一瞥した。「はい、ママ！」

杖の最初の一撃は、すでに水ぶくれになったお尻に、震えるような正確さで焼きついたので、カリーナは水ぶくれが破れないかと思った。口笛を吹き、つま先で揺れながら、彼女は間一髪で数を数えることを思い出した。「一回、ママ！」

それから彼女は「二回、ママ！」「三回、ママ！」と体勢を崩さずに数えたが、三回目の打撃の後、彼女の足が無意識に蹴り上がるのを感じた。彼女は四回目の打撃が口笛を吹くのを聞き、両方の座る部分に不意打ちで当たり、ウサギのように前方に跳ね、背筋を伸ばして猛烈な戦闘ダンスを行いながら敏感な部分を揉んだ。「ふぅっ——四回、ママ！」

ママは危うくFワードに聞こえる音に眉を上げたが、無視することにした。「違うわ、カリーナ。それはカウントしない。もう一度体勢を戻しなさい。四から数え始めて。」

「はい、ママ！ … ごめんなさい、ママ！」カリーナは自分を呪ったが、再び前かがみになると体が柔らかくなっていることに気づいた。パパはカリーナを固定する必要があるかどうか確認するためにちらりと見たが、彼女は勇敢にその視線に応え、杖でのお尻叩きをうまく受け入れていないと非難されないように決意した。カリーナは今や足首まで完全に届くようになり、しっかりとそれらを握った。

五回目の打撃は、技術的には彼女の数え方では四回目だったが、彼女の上腿に当たった。カリーナの頭は驚いて跳ね上がり、縮れた髪は激しく揺れたが、彼女は体勢を保ち、数え間違えないことを思い出した。「ふぁい… えっと！ 四回、ママ！」

カリーナの決意に密かに満足しながら、ママは五回目の打撃を彼女の上側の頬に当て、前の四回に対して斜めの線を描くように角度をつけた。まるで整った線を追加して五という数字を示すかのようだった！ カリーナの腕と脚は震え、彼女は息を切らした。「五回、ママ！」

目をこじ開け、重力が自由に流れる涙を逆さまに額やこめかみに沿って流すのを感じながら、カリーナは左後ろを振り返ってママが消えているのを見つけた。何かが彼女の視野の端で動き、彼女は右を見ると、ちょうど杖が彼女の臀部に突き刺さるのを目撃した。

ママは体勢を調整し、前の打撃に合わせてバックハンドで打ち、カリーナのかわいそうなお尻にきれいな「×」印を刻んだ。

カリーナはほとんど叫ぶように「六回、ママ！」と言い、体を起こし始め、手が反射的に脚を上ってお尻に向かったが、自分を制して膝の上に手を戻した。「ごめんなさい、ママ！」

「何が？」

「私… 体勢を崩しそうになりました！」

「あら？ そう言ってくれてありがとう。そのためだけに追加の打撃は必要ないと思うわ。キーワードは『そうになりました』ね！ 満足よ！」

カリーナは安堵で膝がガクガクするのを感じた。「ありがとう、ママ！」彼女はパパの方を見た。彼はまだ礼儀正しく天井を研究していた。「パパ？ 今度はあなたが杖をくれる番ですか？」

「うん？ ああ！ 私は薪小屋行きのときにすでにお前に杖を与えたよ、カリーナ。今週はもう十分以上にお尻を叩かれたと思うけどね？」

カリーナはあまりに喜びすぎて、立ち上がるのを忘れた。

ママはそれに気づき、まだカリーナを見ないようにしているパパを肘でつついた。

その合図で、パパは現実に戻り、カリーナの試練の終わりを公式に宣言した。「カリーナ、もう体勢を解いていいよ。休め！」

ゆっくりと、カリーナは背中を起こし、杖の跡が伸びて折りたたまれ、水ぶくれが脈打つのを感じた。ママは彼女が失くしたパジャマを再び着るのを手伝い、カリーナがうつ伏せになってパジャマのズボンを引き上げることさえできないとき、ママは小さな軟膏の瓶を取り出し、彼女の焦げた戦争で荒廃した地形を表す二つの丘、すなわち彼女の臀部に優しく塗った。

ローションを塗り終えると、ママは許された娘の額にキスをした。「愛してるよ、カリーナ！」

「愛してるよ、ママ！」と彼女は夢見心地に答えた。彼女のまぶたは突然重くなったが、彼女はひじをついてママのおやすみのキスに応えようと奮起した。

彼女はパパが慰めるように彼女の肩に手を置くのを感じた。「とても勇敢だったよ。誇りに思う、カリーナ！」

カリーナはパパの胸に頭を沈め、彼のキスを額の上に感じた。「私はいつまでもあなたの大切な真珠ですか？」と彼女は眠そうにつぶやいた。

「いつまでもだ！」

カリーナはパパを驚かせて素早くキスをし、唇に直接当ててから、ベッドの上に崩れ落ちた。

彼女は隣の部屋からのコロンバのおやすみお尻叩きの音をかろうじて認識し、半睡状態から目覚めた。深く絶え間ない痛みを和らげようと無駄に彼女のお尻を揉みながら、カリーナは妹が勇敢でいられるように祈りを捧げた。

「これも、いつかは過ぎ去る…」とカリーナは考え、眠りに落ちた。

***

次の日、カリーナはコロンバを除くすべての兄弟姉妹から祝福された。コロンバはぶつぶつ言いながら自分を哀れむのに忙しかった。彼らは早く雑用を終え、コロンバは昼食後すぐに薪小屋でパパに会うように言われた。

カリーナは彼女に、励ましになることを願って「頑張って！」と言った。

コロンバはうつむき、ついに答えた。「ありがとう！ 必要だよ！ さっきまで君に意地悪してごめん。」

パパはコロンバに自分で小枝を切りに行かせるという手順を省き、彼が切った小枝を彼女に手渡した。ポールが到着する前に罰を早く終わらせるためだ。コロンバはおとなしく彼に従い、もはや自分にさらなる怒りを招くことを望まなかった。カリーナは反抗的な妹が現在の試練を乗り切るように導いてくれるよう、黙って祈った。

幸いにも、パパとコロンバは父娘での薪小屋行きを記録的な速さで終え、ポールの夕食の到着に備える十分な時間が残された。

非公式のデートの間中、ポールは完全に魅力的で、パパの「私の娘に対する君の意向は？」というルーチンにも動じていないようだった。

家族の伝統として、カリーナは最後の就寝前お尻叩きを耐え抜いたことを祝って枕を渡された。

彼女はポールがその枕をじろじろ見るのに激しく赤面したが、彼は優雅に明らかな質問を避けた。

コロンバは枕の上には座らなかったが、それが薪小屋での彼女の振る舞いのために提供されなかったのか、それとも叩かれたお尻に座っていることがあまり明らかにならないように選択したのか、カリーナにはわからなかった。

ママがコロンバの顔を洗って、ゲストに滲んだマスカラや明らかな涙の跡を隠すのを手伝ったが、カリーナはそれでもやはり明らかだと思った。

ポールがコロンバの好きな本のシリーズについて冗談を言うと、彼女はくすくす笑い、気分が良くなったようだった。カリーナはポールが皿洗いに立つとき、コロンバが自分の腕をつねるのを感じた。「彼、すごくいいね！」

「そうね、まさか私と一緒にダブルウェディングを計画してるわけじゃないよね？ だって私は全然乗り気だよ！」とカシルダが婚約指輪を優雅に揺らしながら付け加えた。

カリーナはデザートでむせそうになった。「やめてよ、みんな！」

彼らが落ち着いて家族でボードゲームをするためにチームを組むと、カリーナはポールのすぐそばに寄り添い、うっかり彼の脚が自分の脚に触れるのを感じ、震えが走った。

パパの声が、カリーナの温かくふわふわした蝶々の群れを中断した。「それで、ポール、卒業論文は何について書くつもりだ？」

「ああ？ 聖書的な子育ての問題について考えています。だって、将来クリスチャンの家族カウンセラーになるつもりですから。関係があると思います。」

「そうか？ 聖書的な子育てのどんな問題だ？」

「ええと… 聖書的な育成、ルール、構造。ええと… しつけですね。」

クリスが疑わしそうに口を挟んだ。「しつけ？ お尻叩きみたいな？」

カリーナとコロンバの頭が同時に上がった。

ポールはカリーナの目をまっすぐに見た。カリーナはママが言う女性の直感の閃きを感じた。「彼は今、私をお尻叩きにすることを考えている！」

ポールは咳払いをしてパパに話しかけた。「はい、実はそうです。お尻叩きの倫理は、私にとって主要な関心事です。」

ママは優雅に両手を組み、人差し指を合わせた。「その件についてのあなたの見解は？ お尻叩き賛成、それとも反対？」

ポールはママに答えたが、カリーナは彼の膝が自分の太ももに、彼女だけにわかるように優しく当たるのを感じた。「ああ、私は断然お尻叩き賛成です。もちろん、それが公正である限り。『父たちよ、あなたがたの子供を怒らせてはいけない』でしょう？ 値するものでなければなりませんよね。」

パパはうなずいた。「とてもいいね。まったく同感だ。」

彼らがゲームをするために落ち着くとき、カリーナは自分の裸でポールの膝の上にうつ伏せになり、自分に値するお尻叩きを正確に受けているという心象を決して完全に払拭できなかった。ポールの膝を見下ろし、彼女は考え込むように舌を口の中で転がした。

もしかしたら、もしかしたら、その夢はすぐに実現するかもしれない！

終わり

ベニ・バッククック：ウィロー・クリークを行く、パドルなしで

第1章：砂漠の花

アリゾナ州ウィロー・クリークの小さな町では、太陽はいつもより明るく輝き、空気はより甘く香るように感じられた。そこにはベニータ・バッククックという名の元気な18歳の少女が住んでいたが、彼女はベニとだけ呼ばれていた。彼女は心を包み隠さず表現するタイプで、足元には泥だらけのスニーカーを履いていた。彼女の両親、ベティとバーソロミュー・バッククックは、娘の絶え間ない悪ふざけについていくのにいつも気を張っていた。

ある晴れた午後、ベニはいたずらをまったく新しいレベルに引き上げることにした。彼女は町のすぐ外に新しい建設現場があると聞き、探検したいという誘惑に抗えなかった。いたずらっぽい笑みを浮かべて、彼女はバックパックを肩に掛け、生意気な色の髪の上に野球帽をかぶり、冒険に出発した。

隣人の家を通り過ぎると、クラスメートの一人がゲームボーイを持って玄関ポーチに座っているのが見えた。「ねえ、ブレイク！ 新しい建設現場を見に行くんだ。あなたも一緒に来て！」

ブレイクはゲームから顔を上げた。「おや、俺が来るのか？」

ベニははっきりと、ゲームオーバーを示すカリカリとした叫び声の効果音を聞いた。「そうよ、あなたは来るの。どうせもう死んでるしね！」

建設現場に近づくと、ベニの目は興奮で見開かれた。クレーンやブルドーザーがあちこちにあり、新しいショッピングモールと思われるものがゆっくりと形を成しつつあった。ためらうことなく、ベニは金網フェンスを乗り越えた。

背後で、ブレイクがフェンスを揺らし、激しくささやくのが聞こえた。「おい、ただ見るだけだって言っただろ。不法侵入なんて言ってなかったぞ！」

ベニは首をかしげ、ブレイクの反応を喜んだ。「不法侵入？不法侵入って書いてある看板なんて見当たらないけど。」

「じゃあ、このフェンスは何のためにあると思うんだ？ 捕まったら何て言うつもりだ？」

ベニは困った乙女のふりをした。「あら、おまわりさん！ ああ、よかった！ 道に迷ってしまったんです！ 学校の男の子が一緒に散歩しようって言うから、ついて行ったら、彼が走って逃げて私を置き去りにしたんです！ 彼を探してうろうろしていたら、こんなところに来てしまって！ もう、どうやって家に帰ればいいのかわかりません！ ああ、どうしたらいいんでしょう？ 私を守ってくれる男の人もいないのに！」

ブレイクは目を回し、それからフェンスを飛び越え、警備員がいないか肩越しに見回した。「君は手に負えないな、ベ

ニ・バッククック… よし！ 今、俺がここにいる。だからその言い訳はもう使えないぞ。じゃあ、君の計画は？」

ベニは両腕をブレイクの首に巻きつけ、相変わらず不運な乙女の皮肉な真似を続けた。「あら、おまわりさん！ 彼から逃げ出そうとしたんですけど、彼は私を追いかけてこの廃墟の建設現場に追い詰めたんです！ もしあなたが現れなかったら、彼が何をしていたかわかりません！ きっと彼は私を手籠めにしようとしていたに違いありません！」

ブレイクは彼女の腕を持ち上げ、彼女の掴みから身をひねって彼女の周りを軽やかに踊った。「おい、やめろ。そんな冗談はやめてくれ。」

笑いながら、ベニは役柄をやめ、いつもの自己主張の強い自分に戻った。バスケットボールの女子チームでポイントガードを務めることに慣れていたベニは、ブレイクの後を追って彼をチョークホールドに引き込もうとした。「さもないとどうする？ もし私と戦ったら、ますます疑わしく見えるだけよ！」

ベニがブレイクに突進すると、彼が彼女の掴みから身をひねるのを感じ、振り返った瞬間、彼が鋭く彼女の後ろを平手打ちしたのを見た。彼女は前に跳ねながら震えが走ったが、苛立ちはすぐに消えた。ベニは彼女のお尻を叩く直前のブレイクの困惑した表情を一瞥し、それが愛らしいと思った。「あら！ この乱暴者！ 私の無防備なお尻を… 後ろから襲うなんて！」

ブレイクは顔を赤らめ、まるで自分の意志でさらに他のお尻を叩いてしまうのを恐れるかのように両手をポケットに

突っ込んだ。「反射だ！ もうやめろ、そして… おとなしくしろ。」

ベニはまるで祈る修道女のように両手を前に組んだ。「はい、パパ。悪い子でごめんなさい。さあ、一緒にこの場所を調べるのか、それともしないのか？」

ベニは答えを待たず、すぐに空の建設現場に歩き入った。ブレイクはうーんと唸りながら、早足でベニに追いつき、彼女の隣を歩いた。

彼らは現場をあちこち歩き回り、あらゆる光景と音を楽しんだ。ベニは未来の建物のコンクリートの骨組みの一つにこっそり入り込み、最上階まで案内した。そこからは町全体が広がって見えた。

ベニは味気ないコンクリートの手すりに肘をかけ、足のつま先で前後に揺れながらアリゾナの景色を眺めた。「ここはいいわね、そう思わない？ まるで世界を二人だけで所有しているみたい。」

ブレイクが彼女の隣に来て、彼の手は彼女の手から数インチ離れたところに置かれた。「ああ… 一緒に来てよかったよ。子供の頃、建設現場が大好きだったのを忘れてた…」

日が沈み始めると、ベニは何時間も外出していたことに気づいた。「しまった、時間を忘れてた。ママとパパがすごく心配するだろうな。」

「家まで送るよ。」

「いや、それじゃますます心配させるだけだ。フェンスまで競争だ！」

ブレイクの抗議を無視して、ベニは建設現場からの競争に勝った。彼女はようやくブレイクに自分を隣人地区まで送らせた。もしほとんどを全力疾走していなければ、とてもロマンチックだっただろう。

ブレイクの家で別れた後、ベニは彼を息を切らしたまま後に残した。彼女は手を振り、肩越しに叫んだ。「ありがとう、楽しかったよ！ また今度やろうね！」

彼女が家に到着すると、両親がポーチで待っていた。彼らは心配そうな表情を浮かべており、ベニは自分が叱られることを知った。

「どこに行ってたんだ、お嬢さん？」と父親が厳しく尋ねた。

ベニは足元を見下ろし、言い訳を考えようとした。「私… えっと… 新しい建設現場を見てただけだよ」と彼女はつぶやいた。

母親はため息をついた。「ベニ、もう小さな女の子じゃないけど、夜遅くに出かけるときは電話をしなきゃだめよ。私たちはすごく心配したんだから！」

ベニはうなずき、両親を心配させたことで罪悪感を感じた。「… ごめん」と彼女は静かに言った。

父親は彼女の肩に手を置いた。「ただ君に安全でいてほしいだけだ、ベニ。だが、これからは八時までには家に帰らな

ければならない。それが門限だ。これからはもっと注意することを約束してくれ。」

ベニは両親を見上げ、目には決意の表情があった。「約束する。」

しかし約束をしたその瞬間でさえ、ベニは自分の冒険心がそう簡単には抑えられないことを知っていた。彼女は完全なお転婆娘であり、未来にはもっと多くの冒険が待っていることを知っていた——できればブレイクを相棒として！

ママとパパは視線を交わし、それからパパがうなずいてベニを自分の部屋へと続く階段に導いた。「信じてるよ、ベニ。だが、次に門限を破ったら…」

パパは親指で居間の壁にある装飾的なラックを指した。「… 俺はパドルでお前を叩くぞ。」

ママとパパの大学時代の写真や記念品の隣に掛けられていたのは、珍しい木製のパドルだった。「 アティテュード・アジャスター」（態度矯正器）と書かれていた。

ベニは大笑いした。「あらら！ パドルだって！」

ベニが二歳のとき、彼女は一度ママがパパと口論で熱くなっているのを聞きつけ、「手強い」ママを「 アティテュード・アジャスター」でパパが叩くのを手伝おうと申し出たことがあった。それは、ママかパパかベニが口が立つたびに、誰かが誰かに「 アティテュード・アジャスター」で脅すという、家で一番古いジョークになっていた。ベニの両親は体罰を

信じていたが、実際にそのパドルを使ったことは一度もなかった。

パパは階段のふもとでベニを止め、彼女の目を見た。「今回は本気だぞ、ベニ。さあ、まっすぐベッドに行け！」

そう言って、彼は彼女のジーンズの尻の部分にしっかりとした一発を加え、ベニは驚きの悲鳴をあげながら階段を飛び上がった。何か本能が、彼女にこれ以上父親をからかってはいけないと告げた。「はい、パパ！」

しかしベニが部屋に入ると、窓から建設現場が見えた。「八時までに家にいるって約束したけど、八時以降に何をするかは約束してない！」と彼女は思った。

そして夜が更け、星が空で輝き始めると、ベニは微笑みを浮かべてベッドに入り、すでに次の冒険を計画していた。何しろ、パパのパドルの話は冗談に違いないのだから！

第1章 終わり

第11章：現行犯逮捕

何事もなく一週間が過ぎた。しかしベニは自分を抑えられなかった。建設現場は磁石のように、何度も何度も彼女を引き寄せた。彼女は学校からの帰り道にそれを通り過ぎ、その施設の忘れがたい一瞥を目にした。新しいモールには遊園地の乗り物やアトラクションができる予定だった。

運命の金曜日の夜、ベニは寝室の窓から禁断の建設現場を覗き込んだ。日は沈んだが、アリゾナの夏の空気は依然として灼熱だったので、ベニはアリゾナ・ワイルドキャッツのパジャマを脱ぎ、だぶだぶのタンクトップとデニムのショートパンツを履いた。

彼女はガラケーを取り出してブレイクにテキストを送った。絵文字をたくさん追加できるアプリを使って：
「ねえ、B。
建設現場に変な新しいものが追加されてた。
見に行くよ！ そこで会おう。
(˶•̀ᴗ-˶)
–B」

ベニが通知音を聞くと、喜びの笑顔を浮かべてガラケーを開き、ブレイクの返信を見つけた：

「やだ。今夜は課題をやるんだ。」

「金曜日だよ！ 宿題は後でいいよ。迎えに行くから！ ൭(ᐛ
)൭」

「建設現場には行かないよ。一緒に勉強しない？ ホットチョコレートを作ってあげる。」

「(¬､¬) …つまんない！ 前回は楽しかったって言ったじゃん！」

「うん、一度やるのは楽しかったよ。でも何度も戻って行ったら、トラブルを招くだけだ。子供たちが現場に落書きしてるって問題があったって聞いたよ。」

「じゃあ、一緒に来て見張っててよ！」

「やだよ。俺は行かないし、君も行くべきじゃない。」

腹が立って、ベニは絵文字アプリを起動し、お気に入りの中指の絵文字を送ろうとした:
「命令しないで！ 凸(•̀_•́)凸」

しかし送信する前に、ベニは下書きのテキストを削除し、代わりに次のように入力した:
「わかったよ、どうせ門限過ぎてるしね。またいつか会おう。」

「じゃあ、現場には行かないんだな？」

「(˘ ^˘)
そういう気分じゃない。」

「よし。明日の朝までには終わるよ。映画を見ないか？『メガマインド』がいいって聞いたよ。」

しかしベニは最後のテキスト通知を無視した。ブレイクがもう彼女に構わなくなった今、彼女は決断を下していた。ブレイクなしで建設現場に行く気はしなかったが、行かないと約束したわけではなかった。彼女は午後8時の門限が厳格なルールであることを十分に承知しており、おそらく外出禁止になるだろうが、それが何だというのか。アリゾナで何をすればいいというのだ？

ベニはこれらすべてに憤慨しながら、寝室の窓からこっそり抜け出し、懐中電灯を手に現場へと歩いて行った。

夜は静かで物音もなく、ベニはフェンスを乗り越えるときに興奮が駆け巡るのを感じた。彼女は現場をあちこち歩き回り、光景と音を楽しんだ。奇妙な漫画のキャラクターのプラスチック製のディスプレイが、不気味で遊び心のある雰囲気を与え、彼女は鏡の回廊を歩き回った。

しかし彼女の勝利の瞬間は長くは続かなかった。彼女が立ち去ろうと振り返ると、警備員と正面から鉢合わせした。

「おい、君！ ここで何をしているんだ？」と警備員が叫んだ。

ベニは固まり、心臓がドキドキしていた。彼女は自分が厄介なことになったとわかっていた。

警備員は彼女を現場から連れ出し、警察に通報した。ベニは警察が到着するのを待つ間、恐怖に震えていた。彼女は両親が何が起こったかを知ったら激怒するだろうとわかっていた。

警備員はコンクリートの壁に描かれた卑猥なスプレーアートを指さした。「この落書きはお前の仕業だな？」

ベニの唇は震えた。「い、いいえ、違います！」

「じゃあ、お前の友達の一人だな！ 警察が来たぞ！」

ありがたいことに、警察が到着すると、警官の一人が教会で彼女を知っており、彼女の身元を保証した。警備員は鼻を鳴らし、彼女の不法侵入の件は不問にすることにした。

警官たちはベニを車で家まで送ったが、その冗談は彼女の心に棘のように突き刺さった。

「ご両親とちょっとお話ししなきゃいけないね、ベニ」と、警備員から彼女を救出したオヘイン巡査が言った。

「彼女のご両親も、お嬢さんと『ちょっとお話し』したいだろうね」と、オヘイン巡査の相棒で、黒い短い髪の女性警官が笑った。

家では、ベニのパパが二人の警官と握手をし、ママはキッチンのテーブルで泣きじゃくっていた。「ありがとうございます、オヘイン巡査。約束します、ベニはもう二度とご迷惑をおかけしません…」

オヘイン巡査は壁に掛かっている何かを物知りに一瞥した。「まあ、あまり厳しくしないでください。彼女は我々が探していた落書き犯じゃありませんから。」

ベニは彼の視線を追った。オヘイン巡査は分厚い木製のパドルを見ていた。そこには泣いている少年と少女がお尻を押さえている漫画の絵が描かれていた。表面には「アティテュード・アジャスター」（態度矯正器）という言葉が彫られ、中心に十二個の小さな穴が二列にきれいに開けられていた。ベニは背筋に戦慄が走るのを感じた。そのパドルは両親が大学時代に一緒に持っていた古いノベルティグッズだった。彼らは一度もそれを彼女に使ったことはなかった… ただし、彼女が幼い頃には何度か膝の上での昔ながらのお尻叩きをしたことはあった。しかし彼女が十二歳になってからは一度もお尻を叩かれていなかった！

「ご心配なく、巡査。あまり厳しくはしませんが、ベニは不法侵入について厳しい教訓を学ぶ必要があります！」

パパはベニの方に向き直り、眉をひそめた。「ベニ、自分の部屋に行きなさい。話し合う必要がある。」

ベニはうなずき、罪悪感と恥ずかしさを感じた。彼女は両親をがっかりさせたことを知っており、彼らが何を言うか怖かった。確実に外出禁止になるだろう！

しかし、彼女が部屋への階段を上るとき、ベニは将来何が待っているのか考えずにはいられなかった。両親はもう彼女を信頼してくれるだろうか？

「私は彼らの信頼に値しない」とベニは思った。そして木製のパドルを最後にこっそり一瞥して、ベニはごくりと飲み込み、自分に言い聞かせた。「… それが私にふさわしいんだ！ それでも、ただ怒鳴られて、外出禁止になるだけで済んでほしい！」

時が経てばわかることだが、今のところベニは真剣に謝らなければならないことを知っていた。彼女はベッドに座り、謝罪の言葉を練習しながら、パドルが何度も何度も自分のお尻に当たる心象を無視しようとした。その同じ謝罪の言葉をすべて口にしながら。

第II章 終わり

第III章：態度修飾語

ベニはベッドに座り、深呼吸をしていた。しかしドアをノックする音を聞いた瞬間、心臓がドキドキするのを感じた。
「入って。」

ママとパパがドアを開けるとすぐに、ベニは自分の運命を悟った。パパは木製のパドルを持っていた。「 アティテュード・アジャスター」（態度矯正器）だ。

彼女は何が起こっているのか信じられなかった。両親が実際に彼女をパドルで叩こうとしているのだ。そのノベルティグッズはいつも家族の中で冗談の種で、笑い話にはなるが実際に使われることはなかった。

パドルに描かれた泣いている小さな女の子の漫画の絵を見つめながら、ベニは自分の未来を見た。「もう大人だ」というベニの錯覚はすべて、その同じパドルによって打ち砕かれようとしていた。

「ベニ、君と話し合ったり、外出禁止にしたりしてみたが、何も効果がないようだ。君はいつもトラブルを起こし続ける。だから別の方法を取る時が来た」と父親は、厳しいが思いやりのない口調ではない声で言った。

ベニは母親を見て、何か支援を、これがすべてただの悪い夢だという兆候を求めた。しかし母親の顔は決然とした表情を浮かべていた。「自分で招いたことよ、ベニ。責任を学ぶ必要がある。そして今夜からそれを学び始めるのよ。」

ベニは膝を握りしめ、緊張の震えが脚に広がるのを感じた。彼女は自分が失敗したことを知っていたが、まさかこんなことになるとは思わなかった。

「お願い、ママ、パパにそんなことさせないで」とベニは懇願した。

母親は首を振った。「私たち二人とも交代でお前をパドルで叩くんだ、ベニ。それを責められるのは自分だけだ。」

父親が近づき、ベニはすぐに叩き始めるのかと怖がって身をすくめた。しかし父親は安心させるように彼女を見た。「このパドルをよく見ろ、ベニ。」

ベニはごくりと飲み込み、父親の手にある木製のパドルに目を釘付けにした。真ん中に開けられた小さな穴が見えた。その目的は風の抵抗を減らし、一打ごとの衝撃を増すことだと彼女は知っていた。

父親はため息をついた。「ベニ、お前の母親と私は何年も前にお前をお尻叩きにするのをやめた。十二歳でお尻叩きには年を取りすぎたと思ったからだ。それは間違いだった。ここでいくつか変更を加える。これからは、故意の不服従は即座にお尻叩きを意味する。」

ベニはその意味を考えて頭がフル回転した。たった一度のお尻叩きの見通しでさえ十分に悪いのに！「で、でも… もうすぐ大学に行くんだよ！」

母親は動じずにうなずいた。「そしてその態度を改めない限り、大学に行っても痛くて真っ赤なお尻に座ることになるわよ。」

ベニは両手を合わせ、抵抗しても無駄だろうと半分は思いつつ、自分に値するとわかっているパドルを半分は切望した。「お願い、パパ！ 自分が悪かったってわかってる！ ごめんなさい！ もっとうまくやるって約束する！ がっかりさせないから！」

ベニは父親の目に一瞬の同情が閃くのを見たが、すぐに彼は顔を引き締めた。「信じたいよ、ベニ。しかし確実にする方法は一つしかない。お前を愛しているからこそ、お前を叩くつもりだ。もし本当に後悔しているなら、勇敢な女の子になって、お前の罰を受け入れなさい。自ら進んで従えば、手加減する。従う準備はできているか？」

ベニは泣きたかった。父親の腕に顔を埋めて慈悲を乞い、恐ろしいパドルから逃げて母親のスカートの後ろに隠れたいと思った。道化師としてサーカスに逃げ込めるかどうかも考えた！

しかしベニはどんな代償を払っても許されたかった。そのためにはお尻を叩かれる必要があるとわかっていた。重い心で、ベニは決断した。「… はい、パパ。お尻叩きを受け入れます… 少なくとも、最善を尽くします。」

母親が安堵のため息をつくのが聞こえたが、父親が心配していたとしても、それを完璧に隠した。「よく言った、ベニ。それなら、立ち上がって振り返り、ベッドに上がりなさい… 肘と膝に体重をかけなさい。そうだ。お尻を上げて！」

ベニは足を震わせながらゆっくりと指示に従った。彼女は突然、自分が古い切り捨てたデニムのショートパンツを履いていることを思い出し、服装の選択を後悔した。なぜ、なぜ彼女はそれを自分の頬のすぐ下まで切ってしまったのか？ 父親が新聞の後ろから彼女を一瞥し、馬鹿げているとコメントしたのを何度無視してきたことか？ そのたびに彼女は冗談で彼の心配をかわしてきた。「もう十八歳だよ、パパ！」

ベニが幼児のようにベッドに這い上がると、彼女は突然もう十八歳には感じられなくなった。

彼女は、自分の服装が両親の検査を招いたときに使った他の冗談を思い出した。「宣伝しなければ、どうやって夫を見つけられるっていうの？」

ベニが腰を空中に持ち上げると、デニムの布地が上がってくるのを感じた。今、彼女は自分がいかに馬鹿げて見えるかを想像した。彼女は誰を騙していたのか、自分以外にいない。彼女は自分のお尻を露出させていたが、今になってその馬鹿げた行為を感じていた。もしもっと早く聞いていれば！ パドルの最初の一撃すらまだ加えられていないのに、ベニはすでに自分の愚かさという耐え難い感覚によって十分に罰せられていると感じていた。

「まさか私にずっとここに住んでほしいわけじゃないでしょ？」と彼女はかつて、ママが彼女の慎みのないショートパンツについて騒いだときに冗談を言った。今、ベニが両親の屋根の下に永遠に住むという見通しを考えると、それらの言葉は新たな意味を持った。彼女は白髪の苦い老嬢

となり、それでもママやパパの膝の上でお尻を叩かれている自分を想像した。「永遠に、永遠に…」とベニは思った。

これからは、もし悪い行いをすれば、ベニのお尻はお尻叩きの危険にさらされることを知った。まるでここ六年間の成長がなかったかのようだった。彼女は十二歳のときにお尻叩きの時間だと言われたときの興奮をはっきりと覚えていた。まるで数分前に起こったかのように。その瞬間、ベニは自分が決してお尻叩きに年を取りすぎることはないと知った。

この感情の嵐はすべて、ベニがベッドに上がって体勢をとるのに要した数秒の間に彼女の心の中で展開された。父親が試しに彼女のお尻を数回軽く叩き、励ました。「いい子だ。さあ、その体勢を保つことに集中しなさい。」

父親の言葉を聞いて、ベニは突然「目を覚まし」、再び父親に「いい子」と呼ばれて奇妙に安心した。それは彼女が父親に背負ってもらったり、ポニーガールごっこをしたりするほど小さかった日々を思い出させた。

ベニはその日々を懐かしく思ったが、今は父親の言葉に同じ愛を感じた。彼女はまだ彼の小さな娘だった。

「ベニ、お前の母親と私は交代でお前をパドルで叩く。まず、パドルの一打ごとに声に出して数えてほしい。できるか？」

ベニはうなずいた。「はい、パパ。何回数えればいいんですか？」

ベニはパドルの表面が自分の頬に軽く押し付けられ、まるで生地のように平らになるのを感じた。父親の声は同情の混じった答えを返したが、悔恨の色は微塵もなかった。「それは俺に任せなさい。数を数えることに集中しろ。」

ベニはわずかに前へ揺れ、この体勢でバランスを保つことに集中しなければならないことに気づいた。「はい、パパ。」

彼女は父親が自分の腰の位置を調整し、前方に十分なスペースがあるのを感じた。たとえパドルの一打で彼女が前方に飛ばされても、柔らかい枕に着地するだけだった。ベニはその仕草に奇妙に安心感を覚えた。今でも父親は彼女の安全を確認しているのだ。彼女の子供の頃のぬいぐるみ、ちび顔のダース・ベイダーのぬいぐるみが、励ますように彼女を見つめていた。

ベニは次に来るものに備えた。痛いとわかっていたが、それ以上に、決して忘れない教訓になることもわかっていた。

「では、始めよう、ベニ。歯を食いしばれ！」父親が最後にパドルで彼女の後ろを軽く叩くと、彼女は神経を落ち着かせようと深く息を吸った。

バシッ！

最初は、音の方が痛みよりも彼女を驚かせた。それは厚くて重い一撃で、手のお尻叩きの時に彼女の背後から聞こえてきた鋭い音とはまったく違っていた。木製の表面が、彼女の慎みのないショートパンツから生意気に覗く無防備な下側の頬に直接当たると、ベニは粗いパドルが衝撃をお尻全体に波打たせ、それからショートパンツの上を滑り上

がって持ち上げるのを感じた。彼女は自分に食い込みが生じているのを感じ、肘で体を支えると、恐怖で二つの異なる痛みを今や痛感していることに気づいた。

「ああ、くそ！」とベニは思った。

四歳になるまで、ベニのお尻叩きのほとんどはスカートの上から行われていた。五歳のとき、彼女は二度とドレスを着たくないと決め、その後はたいていジーンズの上からお尻を叩かれるようになり、それが十二歳まで続いた。しかし数回、ベニの悪ふざけと頑固さのために、道具を使っても素っ裸のお尻を叩かれることを経験したことがあった。

一度、五歳のベニが故意にゴムのパドルボールをママの目に向けて二度も狙ったとき、ママはボールを紐から切り離し、そのプラスチックのパドルを即席の武器としてベニの尻を叩いた。薄いプラスチックは鋭い刺痛をもたらしたが、手でさえも重い道具のようなドスンという感覚はなかった。それでもママは、プラスチックのパドルを一定に適用し続けて数分後には刺痛を灼熱の燃え上がりにまで高めることに成功した。

何年も前、十二歳のベニがまだお尻叩きには年を取りすぎているという誤った印象を持っていた頃、彼女は両親がベニの祖父母が昔彼らを罰するのに使ったさまざまな道具の利点について議論しているのを立ち聞きした。その議論はかなり技術的で、「刺すような」道具と「ドスンとくる」道具の区別にまで及んでいたのを思い出した。ママのプラスチックのパドルは典型的な刺すような道具であり、対照的にパパが好んだ祖母の「ドスンとくる」木製の服ブラシとは対照的だった。

ベニがその議論を立ち聞きして間もなく、パパはベニに祖母自身の頼りになる服ブラシを紹介した。その時、十二歳のベニは、PG-13の映画を見る年齢ならR指定の映画を見る年齢でもあると判断し、ブロックバスターでR指定の映画を入手してスリーパー・パーティーで成功させた。部屋中にいる女友達全員をトラウマにしたところを捕まり、ベニは「ドスンとくる」の意味を身をもって知った。

長柄のブラシはプラスチックのパドルのような耐え難いゆっくりとした灼熱感はなかったが、わずか二十四回の打撃の後、十二歳のベニはかなり長い間、最善の態度でいることを確信させられた。ベニのスリーパー・パーティーの友達全員が彼女がどのように罰せられたかを容易に推測したという事実は、その経験にさらなる屈辱を加えた。彼女は十二歳でどれほど大人になったかを証明しようとしたが、ただお尻を叩かれて泣きながらベッドに送られただけだった。

そのトラウマ的な経験の後、ベニはお尻叩きに値するルールを破ることを六年間注意深く避けてきた。ついに彼女は自分がお尻叩きの脅威を克服したと信じるようになった。

壁に掛かった馬鹿げたパドルは彼女にとって破滅の意味を持たなかった。彼女はそれを笑い飛ばしていた。

しかし、うまく配置された一撃で、その「馬鹿げた」パドルはベニの宇宙を変えた。ついに、繊細な十八歳の年齢で、ベニはそれが冗談ではないことを学んだ。「態度矯正器」はその名に恥じないものだった。

パドルの一撃の後、ベニはママのプラスチックのパドルのすべての刺痛と、祖母の服ブラシのすべてのドスンという衝撃を感じた。父親は腕と手首の使い方を完全にマスターしており、パドルの一撃を弧を描かせて完璧な第一印象を与えた。

繰り返すが、この感情の混乱はすべて、パドルの最初の一撃の波紋がベニの後ろを伝い終わる前に、一秒にも満たない間に起こった。

ベニは余波を感じて息を呑み、口を開けたままだった。最も奇妙なことに、ベニはその瞬間あまり怖がっていなかった。彼女はその新しい感覚にあまりにも感銘を受けていた。これがお尻叩きというものだった。これまでに受けたお尻叩きはすべて、これに比べればピクニックだった！ ベニはほとんど光栄にさえ感じた。「これは大人のお尻叩きだ！ 今度こそ、本当にやられる！」とベニは思った。

父親は眉を上げ、ベニがすでに数を忘れたのか、それともわざと頑固になっているのかと思った。「一を数えろ、ベニ。」

ベニは顔を赤らめ、相反する感覚をまだ処理しながら、お尻を再び空中に持ち上げた。彼女は臀部を引き締め、デニムのショートパンツが頬の上でピンと張っている線を痛感した。「一回、パパ！」

父親はすぐにパドルを振り下ろさなかった。ベニは「待って、あれは痛かったのか？ あんなに痛いはずがない！」と考えるのにちょうど十分な時間があり、それから二回目の打撃を感じた。それは彼女のお尻の中心に直接狙った鋭

いパチンという音とともに加えられ、今回は父親が以前使ったような上向きの角度はなかった。ベニは顎を食いしばって唸り、信じられないような二回の打撃の痛みで考えるのが難しくなった。「二回」と彼女はなんとか言った。

三回目のパドルの打撃の前の貴重な数秒間、ベニは自分の状況を考える時間があった。より直接的な打撃はすべて「ドスン」という感触で、ベニは自分が枕とちびダース・ベイダーに向かって突進するのを防ぐのに努力が必要だったことに気づいた。彼女は突然、『帝国の逆襲』の一場面そのままの自分自身の馬鹿げたビジョンを抱いた。

***

ちびダース・ベイダーがライトセーバーのパドルを掲げて。「ベニ！ 私がお前の父親だ！ そしてお前は良いお尻叩きに値する！」

ベニ・スカイウォーカーは奈落の淵の上で必死にしがみつきながら泣き叫ぶ。「そんな！ そんなはずない！ そんなのありえない！」

「自分の感情を探るんだ。それが真実だとわかるだろう。」

ベニ・スカイウォーカーは下の奈落に身を投げるが、ちびベイダーがフォースで彼女を持ち上げ、彼女を自分の膝の上にうつ伏せに乗せる。「いたずら、いたずら、パパがお尻を叩くぞ！」

***

ベニの想像の中で繰り広げられる馬鹿げた寸劇にリアリティを加えるかのように、パドルの三回目の打撃は父親が二回目を加えた場所の真上に直接加えられた。

ベニは再び痛みの叫びを抑えようとしたが、低く喉から絞り出すようなうめき声しか出せなかった。ダース・ベイダーにお尻を叩かれるという考えはすべて彼女の心から追い払われ、一打ごとに数を数えろという指示も消え去った。

父親はゆっくりとパドルを上げ、それから止まり、ベニが三回目の打撃を数えるのを待った。「ベニ？ 数を数えろ！ 三だ！」

ベニはごくりと飲み込み、愚かに感じた。食い込みが少し緩んだ。「三回、パパ！」

彼女はあえて後ろを見たが、見なければよかったと思った。

父親の顔は本気だった。「追加が欲しいか？」

ベニは首を振った。「いいえ、パパ。」

父親は彼女のお尻を軽く叩き、再開しようとしていることを示した。「なら、数を数えることに集中しろ。警告はもうない。」

ベニは冷たいパドルの木が、デニムのショートパンツの下に閉じ込められた上昇する熱とは対照的に、露出した下側の頬と太ももに当たるのを感じた。「はい、パパ。」

父親がパドルを上げると、ベニはそれが落ちるのを見たくなくて顔をそらした。前方を見ると、母親が同情と苛立ちが混ざった表情で自分を見ているのが一瞥できた。

ベニは父親を愛していたが、お尻叩きに関してはダース・ベイダーでもバーソロミュー・バッククックには敵わなかった。

両親が部屋に入ってきた瞬間から、ベニは自分が大変な目に遭うことをすでに知っていた。しかし今、彼女はそれを感じていた。胃の奥深くで… そして頬の奥深くで。

彼女のお尻は三回のパドルの打撃で二つの異なる場所が平らにされた。すでに両方の場所が痛み始めていたが、パドルが二度連続で当たった場所ではより深い灼熱感を感じた。まるでそれぞれの衝撃の痛みが彼女をからかう小さな小鬼のようだった。

***

「そう、それが俺だ！ 痛いか？」と、左の頬の中央に座る小鬼がきゃっきゃと鳴いた。

「おい、俺が先にいたんだぞ！」と、右の頬の反対側に座る二番目の小鬼が言い返した。

「それに俺のことも忘れるなよ！」と、最初の一撃が当たった彼女の敏感な座る部分を軽く叩く三番目がくすくす笑った。

***

ベニは体勢を保って数を数える努力をしなければならないとわかっていたが、自分の勇気は遅かれ早かれ尽きるだろうと予感していた。ベニは父親への恐れを歓迎し、それがパドルへの恐怖に対抗して、自分をその場に留まらせ耐え忍ばせてくれることを願った。

おそらくまだ少し苛立っていたためか、バッククック氏はパドルの四回目の打撃により多くの腕の力を込め、低い位置に当てた。パドルの半分は彼女の座る部分を覆い、半分は彼女の上腿を覆った。ベニは叫び声を上げて前に揺れ、顔が枕に倒れ込んだが、すぐに体勢を戻し、完全な服従を示そうと必死に「四回、パパ」と数えた。

痛みが太ももと座る部分に広がるにつれ、ベニの意識は痛み自体の特異な質に戻った。大殿筋に広がる痛み、皮膚の表面に蓄積される刺痛。今、彼女は初めて何か他のことに気づいた。きついショートパンツの下の痛みは、素肌とは異なるものだった。彼女は、お尻を「保護している」ショートパンツが実質的に彼女の頬をパドルのためにしっかりと固定し、上昇する熱をぴったりとした毛布のように肌に閉じ込めていることに気づいた。

小鬼たちは今、二つの小さな焚き火の上でマシュマロを焼いており、上昇する熱は彼女のショートパンツの後ろポケットの下に閉じ込められていた。

最初の四回の打撃はすでに彼女の後部と上腿の表面積のほぼ全体を覆っていた。彼女のお尻全体が痛んだが、お尻の各部分が異なる方法で痛んだ。

ベニの息が震え始めた。自分自身の驚きに、彼女の目はまったく涙で濡れていなかった。彼女は泣き始めるにはあまりにも清醒していた。

彼女たちがベニをタフな子に育てたことを知っているので、ママとパパは少しも驚かなかった。
父親は母親を見て、二人とも安心させるようにうなき合った。父親はベニにお尻叩きの体勢を離れたことで最初からやり直させようかと考えたが、それは公平ではないと判断した。「かわいそうな子は最善を尽くしている」とママもパパも考え、自分たちもこの体勢にいた日々を思い出した。

父親は徐々にペースを上げることにした。最初の四回の打撃がまさに望んだ効果を生み出しているとわかったからだ。ベニの頑固な精神は今やしっかりと飼いならされていた。彼女はいい子になり、罰を受け入れたいと思っていた。だから今はそれを与えるのが彼の役目だった。五回目の打撃が彼女のお尻の中心、最も痛い場所に当たるのを感じると、ベニは叫び声を上げ、顔を布団に押し付け、膝で足を跳ね上げた。彼女はかろうじて体勢を保ち、その努力で震えていた。

父親はベニが「五回、パパ」と数えるのにちょうど十分な時間を与え、それから六回目のパドルの打撃を迅速に続けて加え、上向きに狙って、今やベニの尻の割れ目に食い込んでいるデニムのショートパンツを引っ張った。

「いった！ … うぅ、ああ！」ベニの叫びはうめき声に変わり、彼女は枕の上に崩れ落ちた。今や本格的な食い込みを軽減するために粗く切られたショートパンツを引っ張ると、彼女は数を数えるのを忘れた。

「お尻から手を離しなさい、お嬢さん！ それはカウントしないぞ」と父親が吠えた。

「やだあああ！」とベニは泣き言を言い、デニムの布地が指の間を滑り抜けて元の位置にパチンと戻るのを感じた。

「ああ、なんてこった！ 俺のケツがこのショートパンツを食べてるみたいだ」と彼女は愚かに考え、それから誰かが手首で彼女の手をお尻から引き離すのを感じた。

「最後の警告だ、ベニ。体勢を戻し、手はマットレスの上に置け。六から数え始めろ。」

ここでベニは致命的な過ちを犯した。これまでは泣き崩れる衝動に抵抗してきたが、座る部分の熱は彼女を苛立たせるのに十分だった。食い込みの屈辱と不快感が、最後の藁となった。「嫌だ！ ズボンを直すんだ！」

ベニは父親の握りから手首を解放し、空いた手で食い込みを軽減しようと英雄的な努力をした。それから彼女は自分が空中に持ち上げられ、部屋が自分の周りを回っているのを感じた。

父親はベニを胴体と脚で持ち上げ、彼女が小さかった時と同じくらい簡単に、彼女をくるりと回し、ベッドに腰掛けて自分の膝の上に優しく乗せた。「もう議論は無用だ。追加のお尻叩きを稼いだな、お嬢さん！」

ベニはのたうち回り、両方の肩越しに後ろを見て、自分の位置を確認しようとした。前方で、ベニは母親が目を合わせ、失望して首を振るのを見た。そして後方で…

パチン！

父親の開いた手のひらが彼女の両方の頬の下側中央に叩きつけられた。ショートパンツが彼女の割れ目にさらに食い込むと、ベニはショートパンツの布地が自分の握りから離れていくのを感じた。彼女はショートパンツをめぐる綱引きに負けたばかりで、父親はわざわざ努力さえしていなかった。

彼女の手は慌ててショートパンツへの掴みを取り戻そうとした。「でも！ 食い込みが！ お願い！」

バシッ！

二回目の平手打ちはまったく同じ場所に加えられたが、今回は食い込みが彼女の下側の頬を無防備にした。古いパドルの痛みが再燃し、ベニはその上に父親の大きな手の新しい跡を感じることができた。

「ショートパンツが不快でも構わない。そんな馬鹿げた服装をしたのが当然の報いだ。」

ベニは父親が自分の腕を慎重に、しかし抗いがたくひねり、腕を腰の後ろに固定するのを感じて、手がショートパンツから離れた。父親の仕草の力強さと優しさが組み合わさって、彼女の闘志をそぎ落とすのに十分だった。三回目と四回目の平手打ちが迅速に続けて彼女の左と右の頬に

交互に加えられた。ベニの食い込みは平手打ちのたびに悪化した。

「で、でも――」

「『でも』はなしだ！」父親は最後の言葉を強調するためにベニのお尻の中心を叩き、それから一定のリズムで平手打ちを始めた。ベニは小さな「うっ！」や「ひゃっ！」という不快感の声でテンポを保った。

「いつ従う準備ができたら、パドルでのお尻叩きを続ける。」

父親はベニの完全な注意を引いた今、平手打ちの強さを意図的に調整し、彼女が背後からの「パチン、パチン、パチン！」という軽快な音の上に彼の声を聞けるようにした。

「痛い！ いった！ わ、わかった！ 痛い！ は、はい！ ひゃああ！ はい、パパ！！！」陸上とバスケットボールの経験から、ベニは自分の精神力の強さを誇りに思っていた。先ほどのパドルでのお尻叩きは確かに威圧的だったが、彼女は涙が出そうになることさえなかった。しかし今、蓄積する痛みとパパの膝の上にうつ伏せにされる屈辱が組み合わさって、彼女に影響を与え始めていた。彼女は二つの涙が溜まるのを感じ、鼻から鋭い息を吸い込み、それらをこらえようとした。

父親はベニが肯定的に答えるのを聞いてうなずいた。彼は遊び心のある一発を加え、膝の上でのお尻叩きを止めた。「よし。パドルでのお尻叩きの準備ができたなら、もう一度やり直そう。一から数え始めろ。」

ベニの目が見開かれた。肩をすくめて、彼女は首を伸ばして後ろを見て、聞き間違いではないかと願った。「え？一？ で、でも、六まで行ってたのに？」

父親の手は空中に停止した。「遅すぎた、ベニ。従う準備ができたなら、パドルでのお尻叩きを最初からやり直すぞ！」

「嫌だ！ でも——」

父親はベニが抗議する前に素早く一発を加えた。「『でも』は… もう… なしだ！」

父親はそれぞれの言葉を順に、最初は彼女の左太ももに響く一発、次に右太ももに別の一発で強調した。最後の一発は彼女の両方の座る部分に加えられ、効果的な締めくくりの主張となった。ベニはもはやその点について父親と議論する気にはなれなかった！

「ああ！ あっほ！！！ いったい！ いったあああ！！！」

「さて、従う準備はできたか？」

「はい！ はい、パパ！ … ああ！ … はぁ、ふぅ！」ベニが息を整えると、二つの涙が戻ってきて、彼女はそれらと戦えなかった。それらはまつげの先端にある二つの重りのように感じられ、彼女が諦めると、溢れ出した。それは奇妙に安堵感をもたらした。今や彼女が心配すべきは痛む後ろ側だけだった！

彼女は父親が自分の肩に手を置き、立ち上がるために自分を膝の上から持ち上げるのを感じた。「いい子だ、ではもう一度やってみよう。母さん？ 手伝ってくれ。」

涙に気を取られて、ベニはママとパパが自分の罰について交わしたコメントに気づかなかった。彼女がパドルを見ると、自分のお尻叩きを最初からもう一度経験しようとしているという厳しい現実が彼女の頭に押し寄せた。泣いている漫画の子供たちの絵を見て、ベニは頬を引き締め、食い込みがきつくなるのを感じた。彼女の罰はまだ始まっていないのに、彼女はすでに、「 アティテュード・アジャスター」に描かれた漫画の少年少女のように、濡れただらしない涙を流して泣いていた。

ベニは誰かが自分のデニムのショートパンツのボタンを外すのを感じて、突然意識を戻した。反射的に、ベニはウエストバンドを掴み、ママがショートパンツを引き下ろそうとしているのに気づいた。「ま、ママ？ 何してるの？」

母親は首を振り、微笑みを隠しながらズボンをベニの腰の下まで滑らせた。「この古いジーンズを片付けるのよ。」

ベニは食い込みが消えるのを感じて、安堵のため息をつき、ズボンへの弱々しい握りを放した。しかめっ面をしながら、ベニは自分のパンティーがまだ股間に食い込んでいることに気づき、直そうとした。それから彼女は母親が自分の下着を調べていることに気づいた。

母と娘は二人とも、彼女のガールボクサーの背面に印刷された言葉を読んだ。「イット・エイント・ゴナ・スパンク・イットセルフ！」（自分でお尻を叩いてくれないよ！）

ゆっくりと、母と娘は顔を上げて目を合わせた。母親は眉を上げた。「それ、何なの、ベニ？ 私はそんな生意気なものは買ってないわよ！」

これを聞いて、父親はベニのベッドを整えるのをやめ、その生意気なスローガンを目にした。「ベニ、なぜそんなものを身につけてるんだ？」

無意味に、ベニは手でスローガンを覆った。「ただの冗談だよ！ 店で見かけて、思いつきで買ったんだ！ ただ面白いと思っただけで…」

母親はベニの手を引き離し、彼女の手を握った。ベニは自分の後ろ側が注目の的になることに緊張し、同じ後ろ側をさらなる危険にさらしたのではないかと思った。しかし母親が彼女の手を握ると、ベニは少しリラックスした。

父親は尋問を続けた。「もしそれが冗談なら、その冗談は誰に向けてのものだ？ あの学校の男の子じゃないだろうな？ タナー家の息子か？」

母親は穏やかに微笑んだ。「ブレイク・タナー？ 彼の両親を知ってるわ。いい子よ。」

「私の娘のパンティーに書かれたものを読むのに十分なほどいい子じゃないぞ！」

ベニは顔を赤らめた。「違う！ そういうんじゃない！ 彼は彼氏とかじゃない！ ただの… 男の子の友達だよ！ 何か

を見せ合ったりしてない！ これは彼のためじゃない、自分のためのものだ！」

ベニは父親の鋼鉄のような視線の下で萎縮したが、ついに彼は折れた。「信じてるよ、ベニ。君が家の中に男の子を入れるという我々のルールを破ったことは一度も知らない。そのパンティーは… 今のところは、持っていていい。冗談で買ったのなら、かなり皮肉なファッション選択だったと言えるな。」

ベニは安堵の息を吐き、その不吉な言葉「今のところは」を反芻した。

父親はパドルの握りを固め、ベッドを指さした。「さあ、始めたことを終わらせよう、ベニ。覚えておけ、俺が終わらせた後も、ママからのパドルでのお尻叩きが待っているぞ。」

ベニは喉の奥の塊を飲み込んだ。「はい、パパ。ごめんなさい！ … お願い、パパ、中断したところから続けられない？ もうお尻がすごく痛いんだ！」

意識的に、ベニは禁断の言葉「でも」を避けた。反論するのは危険だとわかっていたが、バスケットボールが彼女に教えたことがあるとすれば、それはシュートを打てということだった！

しかし父親が再び目を細めると、彼女は萎縮した。「ベニ、私はお前にパドルでのお尻叩きを約束した、そしてその約束を守るつもりだ。お前はまず故意の不服従でそれを稼ぎ、追加分は純粋な頑固さで稼いだ。それがお前の報いだ。」

父親はパドルをベニが調べられるように掲げ、それから彼女の手に置いた。「お前をパドルで叩いて喜びを感じるわけではないが、この経験から学んでほしい。お前は服従を練習している。不服従がお前をこの窮地に陥れた。服従がお前をそこから救い出す。来るべきものに立ち向かう準備はできているか？」

父親の声に怒りはなかった。ベニは手にパドルの重みを感じ、「態度矯正器」という言葉について考えた。新たな決意とともに、ベニはパドルを父親に返した。「はい、パパ。まだ怖いけど… 勇敢になりたい… どうか、パドルで叩いてください。」

父親の不満げな視線は微笑みに変わった。「それが俺の小さな火の玉だ！」

彼は彼女の肩の後ろに安心させる手を置き、ベニをベッドに導き、そこで彼女はおとなしく再び体勢をとった。彼女が試練に備えて精神的に準備しようとしていると、金属的な音が聞こえた。首をひねって後ろを見ると、ベニは母親が自分の切り捨てたショートパンツをゴミ箱に投げ入れているのを一瞥した。「ああ！ でもあのショートパンツ、大好きだったのに！」

「でも」という言葉に、父親は遊び心でパドルで彼女の後ろを軽く叩いた。ベニは冷たい木が熱くなった頬に押し付けられるのを感じて固まった。

母親は娘の窮状を見て可愛らしく微笑んだ。「あら？ 戻してほしい？ 今すぐ履けるわよ！」

自分の後ろを一瞥し、ベニは先ほどの食い込みの不快感を思い出した。「… 大丈夫！ もう小さくなりすぎてたしね！」

「賢明な選択だ、ベニ。一打ごとに数を数えるのを忘れるな」と父親は答え、ベニのお尻を軽く叩いて次に来るものの準備をさせた。

答えられるほど緊張していなかったので、ベニはうなずき、肘と膝に体重をかけ、すでに痛むお尻を高く空中に持ち上げるときのチクチクする感覚について考えた。ベニは啓示を受けた。最初のパドルでのお尻叩きの間、彼女は心をあらゆる馬鹿げた場所にさまよわせていた。しかし両親に安心させられた後、彼女は新たな集中力を感じた。まるでバスケットボールコートで時計が切れる前にスリーポイントシュートを打とうとしているかのように。ベニは二つの単純なことをしなければならないとわかっていた。その場に留まることと、数を数えることだ。

第III章 終わり

第IV章：タッグチーム・ペアレンティング

彼女がパンティーを履いたお尻を空中に持ち上げると、ベニは先のパドルでのお尻叩きの怒れるミミズ腫れが抗議の叫びを上げるのを感じた。締め付けるショートパンツがないと、彼女は部屋の冷たい空気が燃えるような炎の肉に触れるのを感じた。

バシッ！

「んんっ！ … 一回、パパ！」

ベニは落ち着くために息を吸った。彼女のお尻はまだひどく痛んだが、少なくとも火の上でゆっくり焼かれているようには感じられなかった。その小さな安堵が、彼女が感じる無防備さに耐える助けとなった。

パシッ！

「痛っ！ 二回！ … ありがとうございます、パパ！」

ベニは「ありがとうございます」を考えずに付け加え、心の底から話した。彼女はパドルの一撃の刺痛が広がり、残る痛みに消えていくのを感じた。

カチッ！

「あっほ！ 三回！ ありがとうございます、パパ！」

ベニは心もお尻も麻痺し始めているのを感じた。彼女はまだ新しい刺痛を感じたが、それはかすかで遠いものだった。

バシッ！

「痛い！ 四回！ ありがとうございます、パパ！」
今回は、ベニはパドルの刺痛をかろうじて認識し、打撃を受け入れて体勢を保つにつれて、自分の体の揺れる動きをより意識した。

バシッ！

「ひぃ！ 五回！ ありがとうございます、パパ！」
ベニは自分自身を、自分自身の外側から認識するようになった。まるで守護天使のように天井に浮かび、下の光景を満足げに見下ろしているかのようだった。下には、小さな悪い女の子が、まさに必要なもの、すなわち正義を手にしているのが見えた。

バシッ！

「痛い痛い痛い！」ベニが震える息を整えると、従順に数を数えなければならないという必要性が痛みを彼女の心から追い払った。「ふぅ！ 六回！ ありがとうございます、パパ！」

父親は、震えるベニの臀部の上にパドルを掲げながら、同情を感じた。彼は最初はベニに十二回の打撃を与えるつもりだっただけで、彼女はすでに合計十二回受けていた。し

かし彼は、ベニが先の反抗の罰として少なくとも六回の打撃を必要としていることを知っていた。

パシッ！

ベニは息を吸い込みながら鼻水を感じた。「ぐっ！ 七回！ ありがとうございます、パパ！」

バシッ！

「あああ！ 八回！ 八回、パパ！」彼女の決意が弱まり、ベニの顔はベッドに垂れ、彼女は足を蹴り、無駄に気をそらそうと足をこすり合わせた。「ああ、痛い！ ああ、パパ！ やめて！ … お願い、パパ！」

バシッ！

ベニは一度跳ね、それから両手を頭の上に置き、物理的に体勢を保とうとした。「ひゃああ！！ … 九回！ ありがとうございます、パパ！ 本当にごめんなさい！ ごめんなさああい！！」

バシッ！

脚が緊張で痛み、ベニはベッドに沈み込み、涙が今や自由に溢れ、鼻水も出ていた。しかし彼女はお尻を守ろうとする衝動を抑え、震えながら体勢に戻ろうとした。「うわあ！ 十回！ ありがとうございます、パパ！ うわああん！！！」

父親はパドルを高く掲げ、それから手を緩めた。母親にうなずきながら、父親はパドルをベニのベッドの上に置いた。

彼が与えようとした十二回のパドルの打撃のうち、十回で十分だと判断した。結局、ベニにはまだ母親からのパドルでのお尻叩きが残っているのだ。「十分だ。よくやった、ベニ。体勢を保っていた。」

ベニが自分のすすり泣きの上に彼の声が聞こえたかどうか確かでないが、父親は彼女のそばに座り、彼女の肩の後ろを撫でた。「いい子だ... 勇敢な子だ！」

息を整えて、ベニの注意は父親の目を捉えるために跳ね上がった。それから彼女はベッドから体を起こして膝の上に体重をかけ、彼を抱きしめ、頭を彼の肩に押し付けて新しい涙を流した。「すすり泣き！ お尻を叩いてくれてありがとう、パパ！ ... ああ、なんてこった！ 痛かった！ 耐えられると思わなかった！」

父親は、自分の小さな娘がどれほど背が高くなっているかに驚いて微笑み、彼女の頭のてっぺんを軽く叩き、彼女の真鍮色の髪を乱した。「まあ、もうすぐ終わりだ。ママがまだお前を叩かなければならないのを覚えているか？ しっかり泣いて、息を整える時間を取りなさい。」

涙の話が出ると、ベニは抱擁から離れ、愚かにも自分の顔を拭き、それから諦めて再び父親を抱きしめ、第二波の涙を無視した。「うん、覚えてるよ。すすり泣き！ ... ママ、本当にまた私をお尻叩きするの？」

母親は、夫が娘を慰める光景に感動して微笑んだ。「もちろんお尻を叩くわよ、ベニ。気の毒に思うけど、パパだけがちゃんとお前のお尻をパドルで叩けると思わせたくないのよ！」

ベニの唇は震え、彼女は自分の横に置かれた「 アティテュード・アジャスター」をこっそりと一瞥した。それから彼女は首を振り、決意の「勝負の顔」をして、母親の方を向き、激しくうなずいた。「はい、ママ！ えっと、今すぐ始めてもいいですか？ … 緊張に耐えられません。」

母親はベニの横に置かれたパドルを指さした。「よろしい！ ベニータ・ボニー・バッククック、「 アティテュード・アジャスター」を私に渡しなさい。」

ベニは母親が自分の正式なフルネームを口にするのを聞いて緊張した。彼女はパドルを拾い上げるために前かがみになると、お尻叩きのミミズ腫れが怒りに叫ぶのを感じ、両手でそれを母親に差し出した。「これは最悪だ！」とベニは思った。

しかしベニの驚きに、母親は「 アティテュード・アジャスター」を手に取り、壁のジャックフックに掛けた。「今夜はこれでお前を叩く必要はないわ。お父さんがすでに「 アティテュード・アジャスター」を紹介してくれたからね。でももし私に面倒をかけたら、完全な処置をする権利を留保するわ！ わかったわね、ベニータ？」

ベニは隠しようのない安堵で黙ってうなずき、それから「はい、ママ！」と付け加えるのを思い出した。

母親は後ろポケットから白い瓶のアルニカクリームを取り出した。「私の膝の上にうつ伏せになりなさい。パパのパドルでのお尻叩きのダメージを確認したいの。」

長年にわたってママが彼女の痛みや悩みを癒やしてくれた軟膏を認識して、ベニは喜んで抗議せずに母親の膝の上に体を乗せた。彼女が何かが自分のパンティーをつまんで引っ張るのを感じると、ベニは反射的にそれらを引き上げようと手を伸ばし、顔を赤らめた。

母親はベニの下着の「イット・エイント・ゴナ・スパンク・イットセルフ！」という言葉の上に遊び心のある一発を加えた。「本当にね、ベニ！ これが邪魔でどうやってローションを塗るっていうの？ 手を離して、ぐずぐずしないの。」

幼稚に感じながら、ベニの目は必死に自分のお尻からママへ、パパへ、そして再び自分のお尻へと向けられた。「でも…」

母親は正確に同じ場所にしっかりとした一発を加えた。「今すぐ！」

ベニの手は前に飛び、彼女は本能的に腰を持ち上げて母親が彼女の臀部を裸にできるようにした。母親はその光景に口笛を吹いた。「うわ、ネリー！ しっかりやったわね、バート！ もう一度あなたの娘を叩かなきゃならないのがかわいそうなくらいよ！」

ベニの顔は恥ずかしさで熱く燃えた。彼女の全身は、前と後ろの両方の赤い頬から放射される熱とは対照的に、冷たく感じられた。しかし母親が冷たくて心地よいローションを塗ると、ベニは安堵のため息をついた。

パシッ！

ベニは母親が自分の左の尻の半分に手のひらを叩きつけると、驚いて跳ね上がった。そこは塗りたてのローションで滑らかで輝いていた。以前は、パドルでのお尻叩きの痛みが彼女の痛覚を麻痺させ、それぞれの平手打ちの感覚はほとんど混濁していた。しかし今、ベニは最初の平手打ちの新しい刺痛を、先ほど父親が彼女に与えた最初の一撃と同じくらいはっきりと感じることができた。母親の手のひらの感覚は、軟膏が軽減しているパドルが彼女の筋肉に残したより深い痛みとは対照的だった。お尻叩きが始まっている間でさえ。

パチッ！

二回目の平手打ちが彼女の右の頬に加えられると、ベニは予想通りお尻の表面にチクチクする熱が広がるのを感じたが、何かがおかしかった。まるで冷却感覚が蒸発しているかのようで、彼女はアリゾナの太陽の下で焼かれていた燃えるコンクリートの上に自分の後ろを座らせたばかりのようだった。「ああ、そうだ、ベニ、今日は特にあなたのためにこのクリームを作ったのよ。特別な成分が入っているの。何が入っているか当ててみる？」と母親は歌うような声で言いながら、瓶をベニの目の前に置いて簡単に調べられるようにした。

チクチクする熱がベニの後ろ側に広がるにつれ、ベニは母親がこれ以上平手打ちを加えていないことに気づいた。それはクリームのせいだった！「あーに… アルニカ？」とベニは愚かに尋ね、目の前の瓶を調べながら頭がぼんやりし始めた。

母親は蓋を開け、利き手にクリームをもう一盛り塗った。
「それが主成分よ。パドルでのお尻叩きはお尻を水ぶくれにするから、アルニカはあなたのかわいそうな臀部を和らげるのに役立つわ… でも私は生姜とカプサイシンも少し混ぜたの。何か変わったことに気づいた？」

パチッ！

母親は三回目の平手打ちをベニの割れ目に加え、同じ仕草でローションをさらにたっぷり塗り、それからお尻叩きを止めてベニの頬を生地のように揉み、軟膏がすでに深紅の肉にさらに浸透するのを助けた。

ベニは刺痛がそれ自体で強まり始めるにつれて、つま先を丸めたり伸ばしたりした。今やそれはお尻叩きそのものとは明らかに区別されていた。「熱い！」とベニは叫んだ。痛みというより驚きだった。それはまったく不快ではないことさえあった。ローションは心地よかったが、一秒ごとに皮膚の表面の熱いチクチク感は一定のうなり声にまで高まっていた。

「おお！ その通りよ、ベニ！ もう私の手のひらにも感じられるわ。さて、十分使ったことがわかったわ。あなたの故意の不服従には満足していないけど、気の毒にも思っているの。だから、二度目のお尻叩きを与える代わりに、少し燃えるクリームを使って二度目のお尻叩きをすることにしたの！ あざのリスクはないわ！」

ベニはクリームが魔法をかけ始めるのを感じて唸った。それは目がくらむような痛みではなかったが、お尻全体に、お尻叩きの一撃が加えられた瞬間が時間を止めたかのよ

うだった。「それで… まだ私をお尻叩きするの？ これが——ひゃっ！ これがパドルでのお尻叩きの代わりなの？」

母親は首を振った。「私はお尻叩きを約束したし、それを実行するつもりよ！ でも心配しないで、「 アティテュード・アジャスター」は使わないわ。これ、覚えてる？」母親は父親に手を振り、彼からおもちゃのプラスチックのパドルを受け取った。それは何年も前にベニが覚えているのと同じものだった。「これからは、ベニ、この家のルールは、門限を過ぎて帰宅したら、門限を過ぎた十分ごとに、プラスチックのパドルで一分間のお尻叩きを受けることよ。もちろん、今夜は門限を何時間も過ぎて帰宅したわね。」

ベニの唇は震え、頭の中で必要な計算をしようとした。もしそうなら、ベニは今夜少なくとも二十分間のしっかりとしたパドルでのお尻叩きを簡単に稼いでいたことになる。

母親はプラスチックのパドルでベニのお尻を軽く叩きながら、励ますように微笑んだ。「でも今夜は十分間だけのパドルでのお尻叩きにするわ。将来何を期待すべきかのアイデアを与えるためにね。これは、故意の不服従に対して常に「 アティテュード・アジャスター」が適用されるという、別の罰とは完全に別のものよ。わかった？」

ベニは、軽い愛の一撃が頬のチクチク感を広げるのを感じて顔をしかめた。彼女は何年も前に初めてママの膝の上とプラスチックのパドルとのデートを経験した時を想像した。彼女の闘志はとっくに叩き出されていた。ベニの唯一の希望は、良い小さな女の子になって、慈悲を乞うことだった。「はい… ママ…」

母親の微笑みは愛に満ちていた。どうして彼女は自分の小さな天使に怒っていられようか？「では、始めましょう！」

母親はプラスチックのパドルでしっかりとした打撃を加えた。最初はゆっくりと、それから軽快なリズムに移行した。「アティテュード・アジャスター」のように、一打ごとに肉に焼き印のような焼け跡を残すのとは異なり、プラスチックのパドルはスロークッカーのようだった。ベニは個々の平手打ちについて考える時間はなかったが、それらの累積的な効果について考える時間は十分にあった。目尻で母親の電話の十分間のタイマーを見ながら、ベニは毎分毎秒が引き伸ばされるのを感じた。待つほどに時間は長く感じられるものだ！

アルニカの初期の鎮静効果は、ベニが一時的に涙を抑えるのに役立っていた。ゆっくりだが一定のお尻叩きが一分経過しただけで、クリームの冷たい心地よさは消え去り、彼女の涙は戻ってきた！ ベニは顔を埋め、布団に涙を拭こうとした。彼女は本当にまた赤ん坊のように泣くつもりなのか？ 何年も心配していなかったこの馬鹿げた玩具のパドルで叩かれただけで？

五分の時点で、母親は再びお尻叩きのテンポを徐々に上げた。ベニは時計を確認するために何度も頭を上げ、十分間が終わったことを期待したが、実際にはほんの数秒の苦痛が経過しただけだった！

六分の時点で、ベニの決意は崩れ、彼女は静かに泣き始め、時折「本当にごめんなさい！」や「お願い、ママ！」と鳴いた。七分の時点で、ベニは自由に泣き叫び、一文も話せなくなった。

八分後、ベニは叫び声の合間に深く息を吸い込んだ。

涙の霧の背後で時計が見えず、ベニは自分の試練の最後の一分間のカウントダウンが始まったことに気づかなかったが、しゃっくりが出始めたことには気づいた。彼女のお尻全体の怒れる刺痛は、ベニが実際に「 アティテュード・アジャスター」の麻痺させるような打撃を懐かしく感じるほどにまで高まっていた。彼女の意識が戻り始めると、ベニの最初の具体的な考えはこうだった。「これはいつ終わるの？ 私は永遠に、永遠にお尻を叩かれ続けるの？」

タイマーが鳴り、母親は念のためにプラスチックのパドルの最後の一発を加えた。「時間切れ！ あなたのお尻はミディアムレアね、私が好む焼き加減と同じよ！」

ベニは母親が自分を膝の上から導き上げるのを感じ、ベニが激しい戦闘ダンスを始め、お尻を徹底的に揉み始めたちょうどその時、彼女は両親の前で気をつけの姿勢を命じられた。まだお尻を裸にしたまま、ベニは慎みの最後の一片を保つために両手をきちんと前に組み、刺痛を揉み消そうとする衝動を抑えた。

すすり泣きながら、ベニは母親がプラスチックのパドルを「アティテュード・アジャスター」の左側のフックに掛けるのを見た。それから父親は祖母の長柄の服ブラシを右側のフックに掛けた。ベニはそのブラシを見て背筋に戦慄が走り、今「 アティテュード・アジャスター」に抱くのとほとんど同じ恐怖でそれを思い出した。

父親が彼女の目を見ると、ベニはうつむいたが、彼は彼女のあごを優しく持ち上げ、もう彼女に怒っていないことを彼女が見えるようにした。「よくやった、ベニ。十分に罰せられた。お前の母親と私は満足している。しかし、もしお前が一線を越えたら、いつでもこれを繰り返せることを忘れるな。今日は祖母のブラシは使わなかったが、もしあの建設現場に再び不法侵入したら、あれを使ってさらに十分間のお尻叩きを与える。おもちゃのパドルではないぞ。わかったな？」

ベニのしゃっくりが彼女の言葉を遮った。「はい、パパ… ヒック 二度と ヒック しません… ヒック... あなたは… ヒック！... あなたはそんなことをしなくて済みます、ヒック 約束します！」

「そう願っている。」

母親はベニに悪名高い「イット・エイント・ゴナ・スパンク・イットセルフ！」のパンティーを手渡した。ベニはそれを信じられない様子で見つめ、それから安堵してそれらを履いた（布地がお尻にパチンと当たると、彼女の臀部からの抗議の叫びにもかかわらず）。「これ ヒック 捨てないの？」

「少し生意気だけど、私は反対じゃないわ。もし態度を改めたら、持っていてもいいわよ。もし改めなかったら、色んな意味で失うことになるわよ！」

ベニはママとパパを抱きしめ、彼らは皆、涙ながらのキス、愛情の約束、優しい言葉を交わした。一人になった瞬間、ベニは両手でお尻を握りしめた。刺痛を完全に和らげることはできなかったが、それが役立つことがわかった。彼女

がうつ伏せになってベッドに飛び込むと、彼女の目に携帯電話が映り、彼女は謝らなければならない別の人がいることを思い出した。

第IV章 終わり

第V章：告白と赦し

ベニはブレイクにテキストを送った：「… ねえ、B。さっき書いたことごめんね (｡•́︿•̀｡)」

「ねえ、B。建設現場に行ったの？」

「行ったよ。どうしてわかったの？」

「君のママとパパが君がここにいるかって電話してきて、俺が当てたんだ。」

「どこに行ったか教えたの？」

「教えたよ。告げ口してごめん、でもまあ明らかだったし。」

「謝らないで。どうせ捕まったしね。君は正しいことをしたよ。
… 謝るべきは俺の方だ (≥╭╮≤)」

「じゃあ、後悔してるのか？」

「してるよ！ 信じてくれないの？」

「君は建設現場に行かないって言っただろ？ 覚えてる？ 君の両親から電話が来たとき、俺は自分がバカみたいに感じたよ。」

うめきながら、ベニは自分の以前のテキストを振り返り、確かにブレイクの言う通りだった。彼女は言い訳をしたり、「行

かない」とは言わずに「そういう気分じゃない」と言っただけだとか、そんなことはどうでもいいのに、と言い訳したくなった。「それもごめんね。今日は本当に最悪だった！ (´•̥̥̥ ╭╮ •̥̥̥`)
」

ベニは一分間、携帯電話を見つめた。諦めて寝ようとしたちょうどその時、ブレイクから返信があった：「許すよ。」

「（◎ 。◎）そんな簡単に？」

「こうしよう、明日直接謝ってくれたら、その場で許すって言うよ。君が本当に後悔してるって感じる。このテキストは事前の許しの借用書だと思ってくれ。」

ベニはくすくす笑い、アプリからお気に入りの絵文字をコピーした：
「1(ง ̂ ง)ม
わかった。
このテキストは事前の謝罪の借用書だと思って。」

ベニがブレイクからのもう一言を期待して待っていると、悪賢い考えが浮かんだ。「今夜、お尻叩きされたんだ。」

「本当に値するよ。」

「本当にされたよ 🍑👏」

「まさか。」

「(⁄ ⁄ ⁄ㅅ⁄ ⁄ ⁄)
今、お尻が真っ赤だよ！

ママとパパが交代で叩いたんだ。」

「写真がなければ信じないよ ꒰ʅ(¬ᴗ¬")」

ベニはベッドから飛び出し、鏡で自分の尻を調べた。彼女は中指を立てた満月の写真をブレイクに送って黙らせてやろうかと思った。しかし最後の瞬間、彼女はパンティーを引き上げた。

「(,,¬﹏¬,,)
写真はなし、変態。
赤い跡は明日まで残ってるよ。
(づ ᴗ _ᴗ)づ♡
謝るときに見せてあげる。」

「待って、冗談じゃないの？ 本当にお尻叩きされたの？」

「冗談じゃないよ。
… 明日話そう！
-B
(„• ֊ •„)੭」

「行かないで！ そんな爆弾を投げつけておやすみなんて言わないでよ。」

「(๑>؂•̀๑)
じゃあ、何が知りたいの？」

「… 大丈夫？ ごめん、からかってると思ったよ。」

「(⁄ ⁄ ⁄>﹏<⁄ ⁄ ⁄)

お尻が痛い！
… でも大丈夫だよ (⁄ ⁄•⁄ω⁄•⁄ ⁄)」

「でも君はもうお尻叩きはやめたって言ってなかった？
… 12歳の時だろ！
君はお尻叩きに年を取りすぎてるよ！」

「｡°(°.◜ロ◝°)°｡もうそんなことないよ！

… とにかく、君の言う通りだった。
(つ- ‸ - ς)
私が値したんだ。」

「君がトラブルに巻き込まれてごめん。
また起きないといいね。」

「私もそう思う。もう建設現場には行かないって約束する。」

「信じてるよ。
もう教訓を学んだみたいだね。」

「そう思うけど、まだ気分が悪い。
(｡•́︿•̀｡)(╥﹏╥)
ママとパパとの約束を破ってお尻叩きされたけど、君にも
嘘をついたんだ。」

ベニは唇を舐めながら、自分の運命を左右するであろう言葉を入力した：「それもお尻叩きに値すると思う？」

重い沈黙が流れた。ベニは唇をすぼめ、先ほど泣きすぎて喉と目が乾いて擦り切れていることに気づいた。「ああ！ なんて質問だよ！ 彼はきっと俺を変態だと思うだろうな！」

ベニはベッドにうつ伏せになり、自分の輝く赤い尻を見返した。誰を騙しているんだ？ ブレイクは彼女の年齢でまだお尻叩きされてるなんて、自分は甘やかされた赤ちゃんだと思うだろう、そして実際その通りだ！ 今日彼女が成し遂げたことは、両親に彼女を40代後半までお尻叩きさせるように説得し、ブレイクの信頼と尊敬、そして自己尊敬の感覚を永遠に失ったことだけだ。テキストの着信音がベニを自己憐憫から目覚めさせた。

「明日、君の謝罪を受け入れるときに話そう。愛してるよ、ベニ。
—B」

「ヽ(｡>ᴗ<)ﾉ♡
明日ね！
—B」

ベニはベッドから起き上がり、暗闇をよろめきながら、今や寝室の壁に掛かっている三つのお尻叩き道具を見つけた。「アティテュード・アジャスター」を手に取り、ベッドに持ち帰り、指で彫られた文字や絵をなぞり、苦しむ小さな女の子の漫画の絵を見つけた。

「… 良い、素っ裸のお尻叩き」とベニは自分にささやき、自分を懲らしめるために使われた道具の表面にそっとキスをした。

彼女はそれが役に立つだろうと感じていた… 明日から。

終わり

ビーカ・ザ・ブラット：お尻叩きの主

プロローグ：あの場所へ、そしてまた膝の上へ

爽やかなニューハンプシャーの盛夏のそよ風がカレッジパークを吹き抜けていた。学生のほとんどは夏休みで帰省していたが、一人の若いカップルがキャンパスを散歩していた。

レベッカ「ビーカ」オキャラハンは、目が輝く赤毛の娘で、妖精のような微笑みを浮かべていた。しかし、彼女の彼氏であるジャックは、型破りなハンサムなブロンドだったが、笑ってはいなかった。ビーカが後頭部をはじいて鴨の嘴帽子を斜めにするのをやめなかったことが、事態を悪化させていた。

帽子を直しながら、ジャックは悔しそうに微笑んだ。「ビーカ、君は本当に時々お転婆だな。それでも君を愛しているから、君はラッキーだよ。」

レベッカは笑い、彼に舌を出した。「あなたがそうしてくれるってわかってるから、私がうまくやれるのよ！」

ジャックは公園の左右を見回した。「それなら、それを正そうじゃないか。君には少し態度を改めることが必要だと思うよ！」

突然、ジャックはレベッカの腕を掴み、公園のベンチへと導いた。彼女を自分の膝の上に引き寄せると、彼は彼女のお尻を叩き始めた。しかし、それは遊び心のあるものだった。

レベッカは驚いて悲鳴を上げ、笑い声が空気に満ち、彼女は逃れようと身をもがいた。

彼女は喜びの声を上げ、息を切らせた。「ジャック、やめてよ！」

ジャックはからかうように微笑みながら、優しくお尻を叩き続けた。「ビーカ・オキャラハン嬢、君はもう十分お転婆だった。君もわかっているはずだ、これが君にふさわしいって！」

レベッカはくすくす笑い、身をよじった。興奮と恥ずかしさで顔を赤らめながら。「わかった、わかった、降参よ！」

努力して、ビーカはついにジャックの掴みから逃れ、立ち上がった。

彼女が逃げる前に、ジャックは彼女をしっかりと抱きしめ、目を輝かせた。「君を愛しているよ、ビーカ。君がお転婆な時でもね。」

それから彼は彼女の額にそっとキスをした。

レベッカは微笑み、自分も彼をどれだけ愛しているかに気づき、胸に温かい輝きを感じた。しかし、お尻の温かいチクチク感を感じると、「お転婆ビーカ」は考えずにはいられなかった。

もし… もう一度お転婆をしてみたら？

ビーカがジャックのキスに応えながら、彼女は決心した。近いうちに、彼女はそれを確かめてみようと心に決めたのだった。

プロローグ終わり

第I章：お尻叩きの仲間たち

ジャックが彼女をアパートまで送りながら、ビーカはショートパンツの下に柔らかな振動を感じた。それは晴れた午後の温かい輝きと調和していた。手をつないで歩きながら、ビーカはあの軽いお尻叩きの記憶を頭から離せなかった。

彼女のアパートの前に着くと、ビーカは鍵を弄った。「ねえ、公園で私をお尻叩きしたことで、あなたは火の粉をかぶってるわよ。公共の場でどうやって女性を扱うかについて、真剣に話し合う必要があると思うわ！」

彼女はふんと鼻を鳴らして怒ったふりをした。しかしジャックがいつものポーカーフェイスを崩さないので、ビーカはついにわざとらしくウインクし、ジャックは彼女の微笑みに応えた。「真剣な話し合い、ね？ 公共の場で淑女らしく振る舞わないお転婆な女の子には何が起こるか、真剣に話し合う必要があるかもしれないな。」

彼が「真剣な話し合い」に言及したとき、彼は強調するように彼女のお尻を軽く叩いた。

心臓をドキドキさせながら、ビーカは大げさに鼻を高く上げ、ジャックを自分のアパートに招き入れた。「よくも私をお転婆だなんて！ 私がお尻叩きに値するわけないわ！」

「自分を過小評価しないでくれ。いい娘もお尻叩きに値すると思うんだ。特に君がそんなに楽しんでいるようだからね。」

ビーカの怒ったふりの決意が揺らぎ、彼女は鼻を鳴らした。「そんなことないわ！」

ジャックの肩を掴み、ビーカは彼をソファに向かって押し倒そうとした。彼女は厳しい母親のように彼の上に立とうとしたが、ジャックはすぐに彼女を自分の膝の上に引きずり下ろした。「ああ、君は楽しんでたと思うよ。笑って、のたうち回って、すごく楽しい時間を過ごしてたじゃないか」と彼は言いながら、彼女の脇腹をくすぐった。

ビーカはくすくす笑い、彼の掴みから逃れようと奮闘した。「わかった、わかった、ちょっとだけ楽しんだかもしれないわ。」

ジャックは微笑み、彼女のお尻を軽く叩いた。「じゃあ、もしまたお尻叩きが必要なら、知らせてくれ。」

ビーカは目を回すふりをしたが、ジャックにすり寄ると、抵抗の演技を放棄した。「… 知ってる？ 良いお尻叩きなら嫌いじゃないかも… でも本当にお転婆してる時だけにしてね。特権を乱用しないで！」

満足げなため息ひとつで、ジャックはついに堅苦しい軍人のような姿勢を緩めたように見えた。「わかった。」

ソファでジャックに寄り添いながら、ビーカは「お転婆」であることがそれほど悪いことではないかもしれないと考えずにはいられなかった。

数分間のキスの後、ジャックの手が彼女の背中を抱きしめ、それからゆっくりと彼女のお尻の方へと滑り落ちていっ

た。ビーカは、ジャックが何をしようとしているのかと胸を躍らせた。初めてのデート以来、二人とも結婚まで性行為は控えたいと同意していたが、最近ビーカはジャックと抱き合う以上のことをする夢を見ていた。

キスをしているときにジャックが初めてうっかり彼女の臀部を撫でたとき、彼は自分を恥じて、テキストで謝罪の手紙を書いたが、彼女は「知ってる？ 全然気にしなかったよ」と返信しただけだった。

お尻叩きは、二人が正式に交際を始めて以来、ジャックが試みた中で最も大胆な行為だった。ビーカはジャックの手が自分のお尻から1センチのところで止まっているのを感じ、その瞬間、彼女は自分自身を彼に、体も魂も差し出そうと想像した。キスをやめて、ビーカはテレビの前に歩いていき、DVDトレイを開けた。「私のかわいそうな無防備な後ろ側に加えた野蛮な攻撃の埋め合わせに、映画ナイトはどう？ ロマコレを一発、あなたの借りがあると思うわ！」

少し不機嫌そうに、ジャックは眉を上げた。「さっき君は今日は『ロード・オブ・ザ・リング』を見たいって言ってたよ。マシュー・マコノヒーから一休みするって約束してくれただろ。」

ビーカは『10日で男を落とす方法』のDVDケースを掲げた。「そうだっけ？」

「確かにそう言った。」

ビーカは悪魔のように笑った。「わかんないけど、それって戦争の恐怖と無益さについての6時間の哲学みたいなものじゃない？ 陰気な気分じゃないのよ。」

「そんなんじゃないよ。希望と冒険と目的に満ちてるんだ… ちょっと待って、君はもう見たって言っただろ。君がそれを大切な思い出だって言ったのをはっきり覚えてるよ。」

「子供の頃、パパと一緒にね。十歳かそこら以来見てないよ。覚えてるのは… パパと映画館に行ったこと。ポップコーンとか、いろいろ。ある場面で怖くなって、パパが膝の上に座らせてくれたこと。でも実際の筋書きとかは何も覚えてない。」

「それでいいんだ。新しく見るようなものだよ！ 一緒に見よう。俺がポップコーンを作る。」

ビーカはDVDケースを唇に押し当て、まるで表紙のマシュー・マコノヒーの顔にキスをするかのようだった。実を言うと、彼女は『ロード・オブ・ザ・リング』をもう一度見たくてたまらなかった。確かに筋書きは忘れていたが、映画館で見た経験は決して忘れていなかった。

しかし、彼女がジャックに話した物語には、一つ決定的な詳細が欠けていた…

ビーカは今夜の映画ナイトのために、自分が置き去りにした場所に父親のコレクターズエディションの『ロード・オブ・ザ・リング：完全版』を見つけた。これは彼女の11歳の誕生日以来、初めて再訪する機会だった。その瞬間、彼女が何よりも望んでいたのはジャックと一緒にそれを見ることだっ

た。「私は馬鹿げたものが見たい気分なの。『10日で男を落とす方法』は私の癒やしの映画なのよ。」

「知ってるよ。君に4回も見せられた。」

ビーカは傷ついたふりをした。「無理やり一緒に見させたわけじゃないわ。マルチタスクしながら見てただけよ。一緒に見たくなかったの？」

「もちろん、君と一緒に映画を見たいよ。でも、マルチタスクなしで君と一緒に映画を見たいんだ。君はもうあれを覚えちゃってるだろ。」

ビーカの驚きに、ジャックは『ロード・オブ・ザ・リング』をケースから取り出し、自分でDVDトレイを開けた。「さあ、『ロード・オブ・ザ・リング』を見よう。一週間分の映画ナイトになるよ。」

ビーカはリモコンを手に取り、ジャックがDVDを挿入しようとしているところでトレイを閉じた。彼女はからかうようにリモコンを振り、背後に隠した。「もし私が『イヤ』って言ったらどうする？ お尻叩きしてくれるの？ 爆破シーンとカーチェイスと巨乳の女優ばかりの80年代アクション映画を無理やり見せるの？ カーチェイスの最中に爆破される巨乳の女優とか？」

ジャックは立ち上がり、表情は読み取れなかった。「ビーカ、もちろん映画のことで君をお尻叩きしたりしないよ。でも君は『ロード・オブ・ザ・リング』をもう一度見たくてたまらないって言ってたじゃないか。見たいのか、見たくないのか？」

ビーカは背中の後ろでリモコンを弄り、もし『10日で男を落とす方法』の再鑑賞を主張したらジャックが折れるかどうか考えた。彼女の一部は彼の虚勢を試してみたくてたまらなかったが、ジャックの言う通りだった。彼女は彼と一緒にLOTRを見ると約束しており、それが彼女の内なる葛藤でより良い自分が決着をつけるのを助けた。「わかったわ、ホビットでいいよ。」

彼女はDVDトレイのボタンを押し、ジャックがポーカーフェイスを崩して微笑むのを見て喜んだ。

***

11歳のレベッカ・オキャラハンはついに父親にPG-13映画を初めて見るのに十分な年齢だと納得させた。『ホビット』の古いアニメ版は、怖いゴブリンにもかかわらず、あるいはむしろそのために、彼女の幼い頃からのお気に入りの映画だった。彼女が『ロード・オブ・ザ・リング』の本全体を読み終えることに成功した後、父親は誕生日プレゼントとして映画に連れて行くことに同意した。彼女が予告編の間中絶え間なく質問をささやくと、父親はついに身をかがめて彼女の耳元でささやいた。「ビーカ、ここには他の家族もいるんだ。映画の最中は話してはいけないよ。」

ビーカはうなずき、喜ばせたいと思った。「はい、パパ。」

最初は従うのは簡単だった。映画館に静寂が訪れ、忘れがたいオープニングシーンがすぐに彼女の注意を引きつけた。鋭い鎧を着た奇妙な男（彼の名前は何だったっけ？）は彼女を怖がらせたが、それでも彼女は目を離せなかっ

た。ビルボ・バギンズが登場すると、彼女はすぐに彼を古い友人として認識した。アニメでは見た目がどれほど違っていても。

「あれがビルボ？」彼女はささやきの失敗で口を滑らせた。

父親は静かにする合図をした。「そうだ。あれがビルボだ。さあ、静かに。」

ビーカはガンダルフとフロドが登場するまで静かにしていることを覚えていた。今回は彼女はささやくのを忘れた。「あれがガンダルフ？ 見た目が違う。」

背後で男性が咳払いをするのが聞こえ、彼女は迷惑そうな大人の顔を一瞥した。

今回、父親は優しく指を彼女の唇に当てた。「しーっ！」

ビーカは恥ずかしさの戦慄を感じた。彼女は大人たちが父親を承認するように見ているのを見て、自分が赤ん坊のように叱られたことを喜んでいることに気づいた。顔を赤らめて、ビーカは静かになり、映画を楽しもうとした。しかしメリーとピピンが花火のことで言い争っていると、彼女は途方に暮れた。「なぜあんなことをしているの？ 本にはこんなシーンはなかったよ。」

「ビーカ、やめなさい。さもないと映画館から連れ出すよ。」

緊張して、ビーカは父親をにらみつけた。なぜ怒っているのか言葉にできなかったが、自分がカッカと怒っていることは

わかっていた。「でもおかしいよ？ 彼らはバカなの？ 花火で遊んじゃだめだよ。彼らは巻き込まれる——」

突然、ビーカは立ち上がり、父親が手を引いて出口へと連れて行くのを感じた。花火が爆発し、ホビット庄のホビットたちがパニックに陥ると、ビーカのかん高い声が映画館の中で彼らの叫び声に加わった。「ねえ！ 何してるの？」

彼女は父親が自分を持ち上げ、物理的に映画館から運び出すのを感じて身をよじった。彼は彼女を腕に抱え、彼女が赤ん坊の時と同じくらい簡単に抱えていた。

スクリーンでは、ガンダルフがメリーとピピンの耳をつまんでいた。まるで二人の行儀の悪い子供たちのように。「メリアドク・ブランディバックとペレグリン・トゥック… そうだろうと思ったよ！」

父親はビーカを映画館のドアの外に立たせ、彼女の目を見た。「ビーカ、ここは家じゃない。他の人たちが映画を聞こうとしているんだ。君がずっと質問しているのを聞きたがってはいない。」

ビーカは顔が赤くなるのを感じた。「映画を逃してるよ！ 誕生日プレゼントだよ！ 俺はこれに値するんだ！」

父親はしゃがみ込み、ビーカの目をまっすぐに見た。「お嬢さん、この映画に行くことは権利ではなく特権だ。さあ、静かにして邪魔せずに映画を聞くのか、それとも家に連れて帰らなければならないのか？」

涙が目に溢れ、ビーカは足を踏み鳴らし、ナズグルのように甲高い声で叫んだ。「不公平だ！ これは… 俺の… 映画なんだ！」

突然、彼女は空中に持ち上げられ、下の赤いカーペットにポップコーンが散らばっているのが見えた。自分が父親の肩に担がれていることに気づき、ビーカは無駄に彼の背中を蹴り、拳で叩いた。「こんなことしていいと思ってるの！ 映画を見たいんだ！」

彼女はドアが開くのを見て、水しぶきの音を聞き、洗剤の匂いを嗅いだ。父親が彼女を家族用トイレに連れて行ったことに気づいたときには、彼女は再び足を地面に着けられ、父親がトイレに座る前に立っていた。ビーカは固まり、何が起ころうとしているかに気づいたとき、それが始まった。父親は彼女のピンクのショートパンツのボタンに手を伸ばし、それを外し、一つの滑らかな動きで簡単に引き下ろした。パニックになって、ビーカは前と後ろを覆い、ハローキティのパンツを視界から隠そうとしたが、それから父親の膝の上に前かがみになり、自分の後ろに手を伸ばして、来るであろうお尻叩きを防ごうとした。「できないよ！ 誕生日だよ！ 俺はお尻叩きには大きすぎるんだ！ やめて、やめて、やめて、やめ——」

最初の一発は彼女の振り回す手の下の低い位置に加えられ、彼女の無駄な抗議を遮り、最後の「やめえええ！」は長く震える叫びに変わった。

彼女は父親の声を、何マイルも離れたかのように聞いた。

"1つ。"

ビーカは手をお尻から引き離され、すぐに二回目の平手打ちが続いた。それは彼女の両方の尻の半分を簡単に覆った。

"二。"

「ああああ！」彼女は激しく蹴り、自分のテニスシューズの底が後ろのトイレのタイル壁に叩きつけられるのを感じた。三回目の平手打ちは彼女の左下の頬、パンティーのラインの下の露出した座る部分に狙われた。

"三つ。"

「がおおお！」唸り声をあげて、ビーカはトイレットペーパーに手を伸ばし、それを引き裂いた。手の届くものを壊して破壊したかった。四回目の平手打ちは右下の座る部分に狙われ、あまりにも響き渡って、実際にビーカを癇癪から覚まさせた。

「4。」

「ぐっ！」目を見開いて、ビーカは戦意とともに怒りも叩き出されたのを感じた。

五回目の平手打ちは、すでに刺すような左下の尻の半分に加えられ、ビーカは新しい刺すような痛みが、古いズキズキする痛みの上に波のように押し寄せるのを感じた。

"五。"

「お願いいいい！」

六回目の平手打ちは右下の尻の半分に同じ結果で加えられた。

"六。"

「ああっ！」息を必死に吸い込みながら、ビーカは自分のお尻に父親の指と手のひらがまだあると確信したが、七回目の平手打ちが加えられた。そしてそれが加えられると、ビーカは突然、自分のお尻が奇妙に... でこぼこしていることに気づいた？ 彼女は知らなかったが、人生で初めて、ビーカは手形の形をした隆起したミミズ腫れの感覚を経験していた。

"セブン。"

ビーカは大声で叫び、肺が胸の中で燃えるのを感じた。
「あああ！ 痛い！」

八回目の平手打ちが加えられると、ビーカは潜在意識の中に手形の完璧な心像を形成した。まるでゼウスが天からの神の稲妻で彼女のかわいそうな無防備な尻を撃っているかのようだった。

"八。"

「やめて！」

九回目の平手打ちは左上の太ももに狙われた。音は以前より鋭く、より高く、新鮮な刺痛が彼女の下臀部全体を覆うズキズキする感覚とひどく対照的だった。

"九。"

その感覚の奇妙さが、ビーカに自分の状況を理性的に処理する時間をギリギリ与えた。必死に、彼女は肩越しに振り返り、涙で潤んだ目で哀れみを得ようと祈った。「お願い、パパ！」

彼女は十回目の平手打ちがぼやけたように叩きつけられるのを見て、右上の太ももに広がる刺痛を感じた。「ああああああ！ お願い！」

「10」

靴がトイレの滑りやすいタイルから滑り落ちるのを感じて、ビーカは再び足場を取り戻そうとし、立ち上がろうとした。もし父親の膝から離れられれば、お尻叩きは終わる！ しかし彼女ができたのは腰を突き上げることで、彼女の臀部の中心を狙った別の全体を包み込むような平手打ちに完璧な標的を提供しただけだった。

「11！」

涙が目から溢れ、ビーカはすべての懇願と議論が喉で死ぬのを感じ、単に「痛い！」とだけ言った。

彼女は体重を父親の膝の上に再び預けると、奇妙な寒気が背中を這い上がるのを感じた。父親が彼女の後ろで手を

上げる空気の動きを感知したのだ。ハローキティのパンティーが彼女の割れ目に食い込むと、ビーカは反射的にお尻を締めたり緩めたり締めたりして、さらなるお尻叩きを予感した。しかし彼女が安堵の息を吐き、臀部をリラックスさせたちょうどその時…

「… そして成長のために一発。」

バシッ！

「ああああ！」

「それで十二回だ。誕生日の女の子への誕生日お尻叩きには十分だろう。」

しかしビーカはすでにすすり泣きに溶けており、父親の彼女の窮状に関する皮肉なコメントには気づいていなかった。「ごめんなさい！ ごめんなさああい！ うわああん！」

ビーカが震える足で立たされると、彼女はお尻を押さえ、父親の胸に顔を埋め、鼻水とよだれが自由にあごを伝うのを感じた。彼女は父親を見上げ、怒りと失望を期待したが、彼は愛情と同情を込めて彼女を見返した。「お尻叩きは終わりだ。」

彼のシャツを握りしめ、ビーカは彼の膝の上に登り、座る部分が彼の足の粗いデニムに押し付けられるのを感じて顔をしかめ、彼に溶け込み、彼の抱擁の中で前後に揺れた。

一、二分後、ビーカは瞬きし、「ごめん… ごめん… ごめん…」と静かに息のように繰り返し始めた。

「家に帰りたいか？」

ビーカは新鮮な輝く涙がまつげに付着するのを感じた。「映画が見たい… 映画が見たい…」

「よしよし、可愛い子。涙を拭こう。」父親は新しいトイレットペーパーを探し出し、二枚を千切ってビーカの涙を拭いた。

洗面台で顔を洗った後、ビーカは突然、お尻の奥深くに残る痛みに気づいた。まるで夢から突然覚めたかのようだった。自分が癇癪を起こし、映画館の人々がおそらく彼女の叫び声とお尻叩きの両方を聞いたであろうことに気づき、11歳のビーカ・オキャラハンは地球が自分を飲み込んでくれればと思った。しかし彼女はまた、真の悔恨も感じた。「本当に、本当にごめんなさい、パパ。」

「許すよ。今日はもうお尻叩きは十分だと思った？」

ビーカの唇は震えた。「もう家に連れて帰るの？」

「まだ映画を見たいか？ 座っていられるか？」

ビーカは自分のお尻を振り返り、ショートパンツが今や足首のあたりに垂れ下がっているのに気づいた。顔を赤らめて、彼女はそれらを引き上げ、ボタンを直した。「えっと… まだ見られる？ 映画も失わないよね？」

「まあ、数分は逃したけど、チケットはまだある。映画館で静かにすることを約束してくれるなら、君の言葉を信じるよ。」

ビーカは父親の腰に抱きつき、頬を彼のお腹に押し付けた。「... またパパの膝の上に座ってもいい？」

父親はそのアイデアを考えているようで、それからビーカを腕に抱き上げた。「おとなしくするならね。」

ビーカは座る部分が父親の硬い腕の袖に押し付けられるのを感じて身をすくめ、それから頭を彼の肩に預けた。彼女は少し幼く感じたが、十歳になって正式にティーンエイジャーになってから、もう父親に抱き上げてもらうには大きすぎるのではないかとずっと考えていた。「おとなしくするよ... 約束する。」

映画館に戻る頃には、フロド、サムワイズ、そして仲間たちは黒い騎手から隠れていた。すぐにビーカは本の同じ緊張した場面を思い出し、物語に引き込まれるのを感じた。その怪物のような生き物を見て新たな恐怖を感じると、ビーカは父親の心臓が自分の耳に当たって鼓動しているのを感じ、自分は安全だと知った。

第I章 終わり

第II章:二つのお尻叩き

ビーカはソファに座り、編み物の毛布に包まり、足をジャックの膝の上に乗せていた。冒頭のナレーションに合わせて忘れがたい旋律が流れると、まるで父親と初めて銀幕で見ていた時と同じだった。サウロンが最後の同盟のエルフと人間の兵士たちをまるで雑巾のように振り回し始めると、ビーカは考え込むように言った。「でも、サウロンって精神的な邪悪な力ってわけじゃないの？ 自分より下の存在だと思って、わざわざ戦場を闊歩して自らケツを蹴飛ばしたりしないと思うんだけど。」

ジャックはため息をついた。「この映画のほとんどを忘れたんじゃなかったのか。」

「そうなんだけど、YouTubeがずっと設定資料の動画をおすすめしてくるのよ。ある人がジャクソンが本から変更したすべての点をリストアップしてて、すごく細かくて、十二時間くらいあって、めっちゃ面白かったんだ——」

毛布の下で、ジャックはビーカの下臀部と上腿の間の子犬の脂肪のひだを繊細につまんだ。公園での遊びのお尻叩きの温かい残響を思い出させるように。「ビーカ、ピーター・ジャクソンが映画のために変更を加えたことは知ってるよ。もしYouTubeの動画を見たかったら、見るよ。ただ、一緒に映画を見てくれ。」

「全部は覚えてないよ。あなたが補足してくれればいいじゃない。」

「それか、注意して、映画をそのまま楽しむかだ。何か聞き逃したと思ったら、後で話そう。」

ビーカは腕を組み、苛立ちが明らかだった。「質問した方がよくわかるのよ。」

オークの弓兵がイシルドゥルを暗殺するシーンで、ビーカの注意は画面に戻った。「待って、彼が死ぬわけないでしょ。あれはヴィゴ・モーテンセンだよ。」

ジャックはうめき声をあげ、リモコンを手に取って巻き戻そうとした。「違う、あれはヴィゴ・モーテンセンじゃないし、アラゴルンでもない。あれはイシルドゥルだ。ちゃんと注意して見ていればわかることだ。よし、もう一度やり直そう。さあ… おとなしくしろ！」

ふんと鼻を鳴らして、ビーカは注意を画面に戻した。「おとなしく」という言葉を聞いて、父親からの最後のお尻叩きの記憶が津波のように彼女を襲った。命令されることに苛立ったが、彼女は考えずにはいられなかった…もし彼女がジャックのボタンを押したら、彼は本当に彼女を叩く勇気があるのだろうか？ 本当にお尻を叩かれるという考えが、興奮の震えを彼女の背筋に送った。「おとなしくするわ… 約束する。」

ビーカは努力した。本当に努力した。ホビット庄での冒頭の部分は静かにしていた。しかし農夫マゴットがフロドたちを農場から追い出すシーンで、ビーカはくすくす笑った。「知ってる？ 本では、農夫マゴットが子供の頃のフロドを不法侵入で実際にお尻叩きにしたんだよ。フロドが明らかにトラウ

マになっているシーンがあって、サムワイズがすごく守りに入るんだ。誰も自分のフロドに手を出すのは嫌だって…」

「ビーカ。」

「… でもその後、フロドと農夫マゴットはその記憶を通じて絆を深めるんだ。農夫マゴットが実はかなり立派な人間だとわかって、彼は端役だけど、ホビット庄の人々の最後の姿みたいなものなんだ。ジャクソンが彼をカットしたのは残念だよ。」

映画が止まり、ビーカが振り返ると、彼がリモコンを持っているのがわかった。「ねえ、何してるの？」

「ビーカ、またやってるよ。映画を中断してただおしゃべりしたいのか？ そういうこともできるよ。」

ビーカは子供のように口をとがらせた。「映画を最後まで見たいの。」

「わかった、それなら、YouTubeの豆知識抜きで映画を見よう。」

「ちょっと待って、それは本から覚えてるだけだよ。私の言うことに関心ないの？」

「君が可愛いオタク的な興味について、映画を含めて情報をダンプするのを聞くのは大好きだよ。でも、君と一緒に映画を実際に見ようとしている間はね。もし僕が『10日で男を落とす方法』を止めて、十分ごとに歴史的軍事戦略について延々と話し始めたら、君はどう思う？」

「それは違うよ。私はただの趣味の話をしてるんじゃない。本の話をしてるんだ。」

「わかってるよ。ピーター・ジャクソンが本から省いたものがあるのも知ってる。ファット・ボルジャーも省いたし、トム・ボンバディルも省いた。彼が加えた変更のすべてを好きなわけじゃないが、どこかで削らなければならなかったんだ。さもなければ六十時間の映画シリーズになっていただろう。君と一緒に映画を最後まで見たい。でも、君が絶え間なく中断しないように努力してくれるなら、の話だけど。」

鹿のように緊張して、ビーカはお尻をジャックの上腿に押し付けた。「それは最後通牒？ 立ち去って、私を寒くて孤独なまま置いていくつもり？」

ジャックはリモコンをビーカの膝の上に置いた。「この映画を見るかどうか、君自身に決めてほしい。そしてその選択を貫いてほしい。君の選択だ。」

退屈そうなふりをして、ビーカはリモコンを危うく指先でバランスさせた。「もしあなたの好きなようにしなかったら、お尻を叩かれるの？」

ビーカは毛布が自分の顔に向かって飛んでくるのを見て、ジャックがそれを軽く投げのけた。ビーカが鼻をくすぐる毛布の房を払いのけようともがくと、彼女は自分の足が持ち上げられるのを感じた。ジャックは片手でビーカの両方の足首を簡単に押さえ、驚いたビーカをおむつ替えの体勢にし、お尻を上向きにした。

ショートパンツが割れ目に食い込むと、ビーカは露出した座る部分に冷たさを感じた。ジャックが彼女の両方の尻の半分に三回ずつ遊び心のある愛の一撃を加える前に。「もう一度お尻叩きが欲しいのか？ だって俺はできるんだぞ。」

ビーカはリモコンで口を覆った。心の中では、彼女はお尻叩きをとても欲していたが、声に出して言うことはできなかった。「下ろして！」

いたずらっぽく笑いながら、ジャックは彼女をさらに数インチ持ち上げた。ビーカは彼が逆さまの自分の後ろを調べるときの彼の目の輝きを見ることができた。「いい子になって映画を見る準備はできたか？ それとも先に悪い子だったことでお尻を叩かれる必要があるか？」

ビーカの心臓はドキドキした。これだ！ ついにお尻を叩かれるかもしれない。本当のお尻叩き。彼女がしなければならないのは頼むことだけだった。「嫌。お尻叩きは嫌。映画を最後まで見たいの！」

すぐに、ジャックは彼女の足を下ろした。「今度は本当に見ることを約束してくれるか？ もう解説はなしだ？」

ビーカは安堵と失望が入り混じった気持ちを感じた。「… 約束する。」

ジャックはクッションを叩いて、隣に座るように合図した。ビーカが席に戻ると、彼女はお尻叩きの幻影を頭から追い払えなかった。ジャックはビーカが中断した地点に戻るため

に巻き戻しボタンを押したが、早すぎた。「ねえ、行き過ぎだよ。」

ジャックは再生ボタンを三回押した。「ボタンが固まった。」

映画はガンダルフとサルマンの議論の最中から再生された。ビーカはうめき声をあげ、リモコンに手を伸ばした。「これはもう見たよ！ ちょっと早送りして。」

ジャックはリモコンをソファの反対側の手の届かないところに置いた。「農夫マゴットのシーンから一分か二分しか戻ってないよ。正確な地点を見つけるより、この地点から見た方が早い。」

にらみつけながら、ビーカはリモコンを取ろうとジャックの膝の上に這い上がったが、彼はそれを反対の手に持ち替え、彼女を優しく片手で膝の上に押さえつけた。ビーカは自分がお尻を上にして彼の膝の上にうつ伏せになっていることに気づいて、胸を高鳴らせた。

ビーカはテレビを一瞥し、白のサルマンが灰色のガンダルフを軽々と投げ飛ばしているのを見た。「私は喜んで汝に協力を求める機会を与えたが、汝は苦痛の道を選んだ！」

ガンダルフが天井に激突した瞬間、ビーカは首を伸ばして、わざとらしく肩越しに振り返った。「… わかった、あの白い奴がサウロンだよね？」

ジャックは再び映画を止めた。「ビーカ、サルマンが誰かは君がよく知っているはずだ。もしお尻叩きが欲しいなら、た

だ欲しいからってわざとお転婆なふりをするべきじゃない。」

「私… わざとお転婆なふりなんてしてないよ！」ビーカの頬は恥ずかしさで火照ったが、反論しようとしたちょうどその時、彼女は自分が完璧なお尻叩きの体勢になっていることに気づいた。そこまで明白にするつもりはなかったし、ジャックがそれを見抜いていたという事実が彼女をさらに馬鹿らしく感じさせた。

ビーカはジャックの膝の上で少し身をよじったが、彼の腕は彼女をしっかりと押さえつけ、彼の好きにさせていた。ジャックは彼女を見下ろし、表情は中立だった。「君はそんな子じゃない。君は賢い子だし、自分が何をしているかよくわかっている。」

ビーカはお尻をくねらせた。「じゃあ、どうするの？ 叩くの？」

「君に挑発されてやるつもりはない。君は大人だ、ビーカ。もしお尻叩きが欲しいなら、頼むべきだ。」

ビーカはごくりと飲み込んだ。なぜビーカがただ「叩いてよ、ジャック！」と言って、この小さな茶番を終わらせなかったのか、不思議に思うかもしれない。しかし、お尻叩きを望んでいることを認めることは、おそらく自分自身について暴露できる最も恥ずかしいことの一つであることを理解しなければならない。特に好きな人に対しては。

また、なぜジャックが最初からビーカを叩き始めなかったのか不思議に思うかもしれないが、「男性は女性を叩かない」

という考えは彼の育ちの基本だった。彼は何ヶ月も前からビーカが密かにお尻叩きを切望していると疑い、その勇気を振り絞って公園での遊びのお尻叩きを試みたのだった。

ジャックが彼女の答えを待つ間、ビーカは自分のお尻の運命が天秤にかかっていることを知っていた。「ごめん… ジャック。ただ… あなたが本当に実行するかどうか気になってただけなの。」

ビーカはジャックが彼女のお尻を軽く叩くのを感じて、胸を高鳴らせた。「ああ、君をお尻叩きにするつもりだよ、ビーカ。問題は、君が遊びのお尻叩きをもらうのか、それとも本当の罰をもらうのかだけだ。どっちにする？」

ビーカの息は震えていた。「本当の… 本当のお尻叩きが欲しい。」

ジャックはためらわずにしっかりとした一発を加えた。その音は痛みよりもビーカを驚かせた。彼女は小さく息を呑み、デニムのショートパンツが刺痛のほとんどを吸収したと確信した。しかし、保護の層を通して彼女がまだジャックの手のひらを感じられたという事実は… 不吉だった。

ジャックは再び彼女のお尻を軽く叩いた。「魔法の言葉は？」

ビーカはその質問の意味を理解して胃がかき回されるのを感じ、それが彼女をさらに子供じみた気分にさせた。「… お願い。」

ジャックは柔らかい円を描くようにビーカのお尻を撫で、手のひらがデニムに優しくこすれた。「君はちゃんとしたお尻叩きに値すると思う。これは公園での遊びのお尻叩きよりずっと強いから、セーフワードが必要だ。何かあるか？」

正しく聞こえたか確信が持てず、ビーカは振り返ってジャックを見た。「セーフワード？ それって何？」

「お尻叩きを止めるための緊急用の言葉みたいなものだ。休憩が必要だったり、もう耐えられなくなった場合に。」

「え？ つまり、好きな時にいつでもお尻叩きを止められるの？ いつ終わるかを自分で決めるのなら、どうして罰になるの？」

「だって君は大人で、これを望んだんだから。セーフワードは君を守るためのものだ、ビーカ。もし呼吸が苦しくなったり、途中で気が変わったりしたらどうする？」

「これは本当のお尻叩きのはずだよ。セーフワードなんていらない。」

ジャックは腕を組み、ビーカの背中への押さえを解いた。「なら、お尻叩きはしない。」

ビーカは唸り声をあげ、指を髪に絡めた。「わからないよ！ 同意するよ、いい？ これじゃあ本当の罰じゃないみたいじゃないか。」

「もし本当に罰せられたいなら、心配するな。罰せられるだろう。セーフワードでお尻叩きを一時停止することは許す

が、君のいたずらなお尻を火の粉から逃がすためにそれを乱用させるつもりはない。セーフワードは譲れない。君を傷つけたくないんだ、ビーカ。」

心の中で、ビーカは「いたずらなお尻」という言葉に胸を高鳴らせた。ジャックが彼女の好みを理解しているのか、それとも自然に言っただけなのか確信が持てなかった。外では、ビーカはふくれっ面の顔を組んだ腕の上に乗せた。「わかったよ。何でも。セーフワードをやるよ。多分忘れちゃうけど。」

「忘れないさ。セーフワードは短くて覚えやすいものにするべきだ。『レッド』はどうだ？ もし君が危険を感じて続けられないと思ったら、『レッド』と言ってタイムアウトを呼べばいい。」

ビーカはわざと皮肉を込めて答えた。「おお、三文字も？私の愚かな女の子の頭じゃ覚えられないって自信あるの？」

「セーフワードを繰り返して。」

ビーカは顔からはみ出た髪をふっと吹き飛ばした。「レッド！」

すぐに、ジャックはビーカをしっかりと自分の膝の上に固定するために押さえを調整した。「よし。君の愚かな女の子の頭が『レッド』という言葉を忘れないことを確信してるよ。覚えておけ、それが君のお尻の色になる。俺が終わらせる前に。」

ビーカはうめいたが、彼女がもっと皮肉で彼を挑発して先に進ませようとする前に、ジャックは彼女に二回目の平手打ちを加えて驚かせた。最初の一撃の余韻がショートパンツの下に柔らかな灼熱感を上げ始めたばかりだったが、二回目の打撃がその火を再燃させた。

ビーカは叫び声を飲み込み、セーフワードをめぐる意志の対決で負けた後、ジャックに一寸の隙も与えたくなかった。もしこれがショートパンツの上でのお尻叩きの感覚なら、彼女が素っ裸だったらジャックはどんな損傷を与えられるのだろうか？

それ以上の説教もなく、ジャックはゆっくりと一定のリズムに乗り、数秒ごとに別の平手打ちを加えた。沈黙がビーカを包み込んだ。彼女はジャックが何か言ってほしかったが、厳しい沈黙は鋭い平手打ちの音に対する彼女の意識を高めるだけだった。

突然、ビーカはその音が隣人のアパートに響くのではないかと考えた？ 彼女は少し身をよじったが、自分がジャックの頑丈な腕の下に無力に押さえつけられていることに気づいた。

ジャックはビーカの下臀部の中心に掠るような一撃を加え、手首にもう少しひねりを加えて手のひらを上に向けた。最初の平手打ちのような轟音の衝撃はなかったが、ショートパンツの下の無防備な肌を撫でるときに、その背後には十分な力があった。ジャックの「遊び心のある」平手打ちがそれほど刺すという事実は、ビーカの募る恐怖を増した。
「ぐるるるる！」

本能的に彼女は唸り声をあげ、「レッド」という言葉を考えた。

ジャックは止まらなかったが、彼女は彼のリズムにわずかな間を感じた。セーフワードを口にするのを止めて、ビーカはその唸り声を雌ライオンの咆哮にまで高めた。「がおおお！」

これはヘレン・レディのフェミニスト賛歌『アイ・アム・ウーマン、ヒア・ミー・ロア』を流すのに完璧な瞬間だった。ただ、ジャックがビーカの力強い女性的な咆哮に、別の全力の平手打ちで答えたことを除いては。

ビーカは内なるフェミニストが泣くのを感じた… しかしそれはなんて気持ちいいんだ！

ジャックはビーカの臀部を握りしめ、彼女の肉をまるで生の生地のように指でひねった。「立ちなさい、ビーカ。手を頭の後ろに。」

オートパイロットで、ビーカは従った。彼女は自分が気をつけの姿勢で立ち、指を頭の後ろで組み合わせ、まるで犯罪者のようであることに驚いた。ジャックが立ち上がって彼女と向き合うと、ビーカは膝が震えないように自分に言い聞かせた。

ジャックは腕を組んだ。「何を間違えたんだ、ビーカ？」

ビーカは股間にチクチクする感覚を感じ、それがただの食い込みであることを祈った。「私… 映画を遮ったの。」

目線をそらさずに、ジャックは彼女のショートパンツのボタンを外し、彼女の代わりにジッパーを下ろした。「続けて。」

ビーカはごくりと飲み込み、バラ色のピンクのパンティーを一瞥してから、再び顔を上げてジャックと向き合った。「バカなことを… してた？」

ジャックは親指を彼女のショートパンツのウエストバンドに押し込んだ。彼女は彼の指が自分の腰の側面を撫でるのを感じ、彼に自分を脱がせてほしいと切望した。彼がそうしなかったという事実が、それをさらに魅惑的にした。その代わりに、ジャックは探るような視線で彼女を見た。「君はバカじゃない、ビーカ。もう一度。」

「私は… バカな振る舞いをしていた。わざとわざとらしく鈍いふりをして、あなたを困らせようとしてた。」

彼が座り直すと、ジャックはショートパンツを彼女の膝の下まで滑らせた。彼女は彼の目が自分の股間に向けられているのを感じ、恐怖とともに、今日たまたま履いていたパンティーに気づいた。ピンクのスペックス（体型補整下着）のノベルティセットで、モリアの門のデザインと「友と語れ、しかして入れ」というエルフ語の言葉がカスタム刺繍されていた。彼女は今年初めのコミコンでそれを購入し、ジャックに見せて笑おうと思っていたが、今朝考えずに履いてしまったのだった。

ジャックは鼻を鳴らした。「君が『ロード・オブ・ザ・リング』の筋書きを忘れたと言ったとき、それは嘘だったのか？」

その非難に傷つき、ビーカは目に涙を感じた。「違う！ 嘘じゃない！ パパが誕生日に連れて行ってくれて以来、一度も見直してないんだよ。」

「なぜだ？」

ビーカは臀部を引き締めた。冷たい空気が今やパンティーのラインの下のバラ色のピンクの下臀部の肉をくすぐっていた。「それは… ちょっと痛い思い出なんだ。」

ジャックは彼女の震える腰の両側に手を押し当てた。「なぜ？」

「だって… だってパパが映画館で私をお尻叩きにしなきゃならなかったから。」

「お尻叩きにしなきゃならなかった？ 君が何をしたんだ？」

ビーカは頬が熱くなり、熱があるように感じた。「質問ばかりして、映画を遮り続けたんだ。」

「なるほど… そんなことがあったなんて、残念だ。」

ビーカは首を振った。「違うの。私はそれに値したんだ！ 私がそうさせたんだ！ そして振り返ってみると… それが私の成長に役立ったと思う。あれ以来、二度とお尻叩きをされなかった。もう一度も。」

「今日まで、公園で、か？」

ビーカは黙ってうなずき、ジャックは立ち上がって彼女を自分に引き寄せた。「そして今日の君の行動には、もう一度お尻叩きに値すると思うか？」

彼らの腰が触れ合うと、ビーカはジャックのジーンズの下に特徴的な膨らみを感じ、それが彼女に優しく押し付けられた。彼女は彼に体重を預けた。「うん、ジャック。このお尻叩きに値するよ… 君をからかったこと… わざとお転婆なふりをしたこと。」

ジャックは彼女のパンティーを優雅に滑り落とし、それが彼女のお尻のすぐ下で完璧な逆三角形の位置に留まるようにした。両手が使えず、ビーカは太ももを押し合わせ、必死にもう少しだけその下着にしがみつこうとしたかのようだった。

ジャックは一歩下がり、ソファとテレビの間の開いたスペースを指さした。「それなら、部屋の中央で脚を広げて立ち、前かがみになりなさい。」

ビーカはテレビの方を向き、パンティーが落ちないようにゆっくりと赤ちゃんのような歩き方をし、ショートパンツは今や片方の足首にぶら下がっていた。彼女が体勢をとり、ジャックに調べられるようにお尻を突き出すと、ビーカはこれが自分がジャックにどんな形であれ裸を見せた初めての瞬間であることに気づいた。彼女は何度かモールで、際どい服装や水着をからかうように「モデル」したことがあった。一度は冗談で下着姿で歩き出し、服を忘れたふりをしたこともあった。「あら、私ったら！」

しかし裸は一度もなかった。ジャックの目が彼女の素っ裸のお尻に注がれているのを感じると、ビーカは叫びたくなった。彼女は自分の後ろ側、自分の臀部がもはや完全に自分自身のものではないという、重い感覚を持った。彼女のお尻は今やジャックのものだった。そして彼女の驚きに、彼女はそれを望んでいた。

大学では、彼女は女性学で「男性の視線」について次々とエッセイを書いたが、今その男性の視線を自分に感じて、彼女はもっとそれを欲しがった。しかし同時に、パンティーを失うという考えは彼女を怖がらせた。

まだ一平方インチの布地が彼女の肛門と股間を覆い、彼女の尊厳の最後の防御として機能しており、彼女はそれを放棄する準備ができていなかった。

パンティーが完全に落ちるのを防ぐために、ビーカは不器用に体を揺らしながら脚を広げ、外腿を使ってゴムのウエストバンドでパンティーを支えようとした。彼女のパンティーが重力に逆らっているのを感じて、ビーカは安堵のため息をついた。

それからジャックは彼女の腰と太ももを撫で、同じ仕草でパンティーを彼女の膝の下まで引き下ろした。一瞬、ビーカの頭は恐ろしい可能性で駆け巡った。最後にトイレに行ったのはいつだったか？ もし彼女がしっかりお尻を拭くのを忘れていたら？ もし彼女がちょうどこの瞬間に生理が始まったら？ 彼女は裸に感じた。寒くて無防備に。

ジャックは口笛を吹き、それから彼女の腰に手を回して、腕の下で彼女の体重を支えた。「おや！ ウォームアップのお

尻叩きがもう痕跡を残しているようだ。勇敢でいなければならないぞ。次の部分はしっかりと立っていなければならない。蹴ったり、もがいたりしないこと。本当のお尻叩きが始まる。準備はいいか？」

彼の声に賞賛を聞いて、ビーカの神経は落ち着いた。人生で初めて、彼女は裸ではなく、真の意味でヌードであることを知った。服を脱いで、彼女は自分が嘲笑の対象ではなく、賞賛の対象であることに気づいた。彼女は温かく、安全だった。「... はい、先生。」

ジャックが最初の平手打ちを彼女の素肌に加えると、ビーカは頭を上げ、初めてテレビに気づいた。それはフロドとサムワイズがホビット庄を離れるショットで一時停止されていた。

彼女は、インフルエンザで家にいたときに父親が声を出して本を読んでくれたのを思い出した。

彼女は、父親が癌と診断され、化学療法のために病院に閉じ込められている間、彼女が同じ本の章を声を出して読んであげたのを思い出した。

彼女は、父親が三部作の最初の映画に連れて行ったときに映画館でお尻を叩いたことに感じた怒りを思い出した。

彼女は、父親がついに健康を回復して家に帰り、二作目に連れて行く約束をしてくれたのを思い出した。

彼女は、高校時代に書いた愚かな二次創作小説を思い出した。例えば、自分がサムワイズ・ギャムジーとの結婚初

夜にお尻を叩かれることを想像し、自分をロージー・ギャムジーとして描いたものだ。

そしてジャックの手が彼女の肉に深く沈むとき、ビーカは痛みと快楽で叫び、悲しみと喜びの涙を流した。

第II章 終わり

第III章：お尻叩き王の帰還

二度目のお尻叩きを立って受けるのは、ビーカの忍耐力の試金石だった。それがどれくらい続いたのかは定かでなかった。時間の感覚は、今や彼女の座る部分を覆う炎のような熱によって鈍っていた。しかし、自分のお尻が真っ赤になっていることだけは確信していた。

後ろからジャックの柔らかい声が聞こえた。「いい子だ。勇敢な子！　よくお尻叩きを受け止めたな… でも、本当に教訓を染み込ませるには、もう一回必要だと思う。君のお尻は耐えられると思うか？」

鼻から滴り落ちてカーペットに落ちる涙を見て、ビーカはセーフワードを思い出し、舌の上で転がした。「レ… レディ… お尻叩きを最後まで受ける準備はできてる！」

「その意気だ！　それなら、腰から下を脱ぎなさい。」

ビーカが下を見ると、パンティーは足首までずり落ち、ショートパンツは完全に消えていた。蹴らないように最善を尽くしたつもりだったが、腕の下での長いお尻叩きの最中に、反射的に飛ばしてしまったに違いなかった。ビーカは裸になり、再び気をつけの姿勢で立ち、本能的に前を覆った。

ジャックは首を振った。「手を頭の後ろに、ビーカ。」

そっと下を一瞥して、ビーカは従った。三角形の茂みは剃っていなかったが、少なくとも最近は手入れしていた。

カーテンは確かにドレープと合っていた。彼女の巻き毛の陰毛は輝くストロベリーブロンドだった。

ジャックは再び厳しい顔になった。「ビーカ、正直に言え。このお尻叩きは罰として適切だと思うか？」

ビーカはごくりと飲み込んだ。「公園であなたがしてくれたお尻叩きよりずっとキツかったよ。」

「それは意図的だ。でも、まだ楽しんでいるのか？」

ビーカはモナ・リザのような微笑みを浮かべた。「たぶん。」

「ここまでは楽しんでくれてよかった。でも、私たちはこれが本当の罰になることで合意したんだ。はっきりさせておこう。二度と本当のお尻叩きをさせるために、俺を騙そうとするな。わかったか？」

ビーカは口の中で舌を転がし、ベッドルームの目でジャックを見た。「あなた、つまらないわ。あなたをからかうのが好きなの！」

ジャックは両手を回して彼女の両方の尻の半分を鋭く叩き、神経を新たに呼び覚ます新鮮な刺痛を与えた。「これは違う。もし軽いお尻叩きが欲しいなら、ただの楽しみのためなら、それをやる。もっとキツいお尻叩きが欲しいなら、あるいは偽の罰をロールプレイしたいなら、それをやる。お尻叩きが欲しいなら、君が耐えられる限り何度でもやる。からかいなんて気にしない。君がちょっとしたからかい好きなのは好きだよ…

「でも、お尻叩きのために、間違っていることや、バカなことや、危険なことをするとわかっていながらやるのを、君がしないと信頼している。火事もないのに火災報知器を引くな。ただ俺を罰させるために、人前で我慢ならない奴になるな。わかったか？」

ビーカはうなずいた。「わかった。」

「とてもいい。さて、映画を遮ったことで、俺はまだ君に腹を立てている。そのために、俺がちゃんとしたお尻叩きだと考えるものを与えるつもりだ。君が楽しんでいるかどうかなんてどうでもいい。まだ終わっていない。ついて来い。」

手を下ろして、ビーカはシャツの前を引き下ろして身を隠し、つま先立ちでジャックの後を追った。彼が彼女の寝室のドアを開けると、彼女は彼が何を考えているのか気にせずにはいられなかった。彼女の心を読んだように、ジャックは首を振った。「心配するな。ソファよりいいお尻叩きの場所が必要なだけだ。ヘアブラシはあるか？　なければ、スリッパでもいいが？」

「両方あるよ！　それぞれ一つずつ…　まあ、それぞれ一つ以上あるのは当たり前だけど。スリッパを一つだけ持っていても意味ないから。」

「それなら、ヘアブラシとスリッパのペアを持って来い。」

ジャックが彼女のベッドに腰を下ろすと、ビーカは部屋をうろつき、タンスの引き出しやクローゼットを漁って任務を果たした。ドレッサーの最上段の引き出しで安っぽいプラスチックのヘアブラシを見つけると、鏡に映る自分を一瞥し、

腰をひねって素っ裸のお尻を調べた。「全体が真っ赤だわ！」

ジャックは顎を引き締めた。「真っ赤なんてものじゃないな。せいぜい『インディアンレッド』くらいだ。でも、本当のクリムゾンを達成できると思う。」

か弱いプラスチックのヘアブラシを持ったまま、ビーカは自分の口が勝手に動くのを聞いた。「これよりいいヘアブラシがバスルームにあると思う。本物の木製。取って来ようか？」
「ああ、取って来い。許可する。」

突然、自分が漏らした機密情報に気づき、ビーカは怒りながら木製のヘアブラシを取りに歩き、ヒリヒリする臀部を握りしめた。状況はどんどん悪化している！

彼女は「レッド」という言葉を思い出し、その狡猾さを感じた。この三度目のお尻叩きを本当に楽しみにはしていなかった。体験の快楽は、とっくに対照的な痛みに飲み込まれていた。でも、今セーフワードを使うのは、お尻を叩かれてもいないのに、チートみたいに感じた。
意志の対決が彼女をこの窮地に追い込んだ。今でさえ、ジャックに敗北を認めたくなかった。ビーカは木製のブラシをジャックの隣のベッドに、意図したより少し強く放り投げた。「さあ、早く済ませちゃおう！」

彼女はジャックがベッドから立ち上がるのを見た瞬間に皮肉を後悔し、自分の虚勢が誰も騙していないことを知った。ジャックはその瞬間を引き延ばした。「両手を頭の上に挙げろ。天井に届くように。」

ビーカが従い、降伏の戯画のように腕を上げると、Tシャツの裾が上に滑り、ヒリヒリする臀部をくすぐるのを感じた。ジャックは彼女の目をまっすぐ見つめながら、シャツの両側をつまみ、シャツを頭の上から持ち上げ始めた。

ビーカの目が大きく見開かれた。「…でも、なんで？　私のお尻はもう裸だよ！」

自分の声が意図せずに泣き言っぽくひび割れるのを聞いた後、ジャックはシャツを頭の上から持ち上げて放り投げた。それからビーカの背中に手を回し、驚くほど簡単にブラの留め具を外した。「だって君は謙虚さの教訓を学んでいるんだ。君は悪い子で、今や本当の罰に値する。自分をコントロールしなかったから、もう自分に何が起こるかコントロールできないんだ。」
ビーカはブラが落ちないように両腕を前で組んだ。「ううん！　セーフワードを使えばいいんだから、もしそうしたかったら！」

「もちろん使えるよ。もしお尻叩きが耐えきれなくなったら。でも、君はビビって逃げるタイプじゃないと思う。」

ビーカは鼻をすすった。定番の逆心理だ。それが何なのか完全にわかっているのに、それでも効いているという事実が憎らしかった。自分のブラを放り投げて、ビーカは目をむいた。「ついでにピルエットでも回ってほしいの？」

しかし皮肉にもかかわらず、彼女は本能的に踵で回り、からかいながらもジャックに自分のくるりとした姿を見せたかった。ピルエットを終えたちょうどその時、ジャックは彼女

のお尻を叩き、一つの動作で彼女を自分の胸に引き寄せた。「素晴らしい、これでお尻叩きの準備は万端だ。勇敢な子になって、もがかないでくれ。そうすればベルトを使う必要はない。」

何気なく、ジャックは座り、簡単にビーカの脚を自分の脚の間に挟み、優雅に彼女を膝の上に引き下ろした。彼女はマットレスに柔らかくぶつかり、ジャックが彼女の腰を自分の脚の間にしっかりと固定すると、背筋がぞくぞくした。

彼女は無力で、どんな力比べでもジャックには絶望的に敵わなかった。ベッドの上に二つのヘアブラシと二つのスリッパが置いてあるのを見て、ジャックのベルトについてのコメントを思い出すと、ビーカはジャックがセーフワードを強制してくれたことに突然感謝した。

ジャックがプラスチックのヘアブラシを手に取るのを見て、ビーカはすすり泣いた。「うわあ、うわあ、うわあ！」

ジャックがヘアブラシの滑らかな裏側を、彼女の痛む臀部に遊び心たっぷりに軽く叩くと、ビーカは心の奥底から「レッド」という言葉が無言の叫びのように聞こえた。これは最悪になる！　初めて、彼女は父親の膝の上に無力に閉じ込められた感覚を再体験していた。
「レッド！　レッド！　レッド！　レッド！　レッド！」と彼女は思った。

ジャックはヘアブラシをそれぞれの尻の半分に円を描くようにこすり、麻痺した肉を呼び覚ました。「準備はいいか？」

ビーカは掛け布団を握りしめた。「レ・レディ！」

最初の一撃が落ちると、ビーカは背中を反らせて遠吠えし、ストロベリーブロンドの髪が飛んだ。

二回目の平手打ちの後、彼女の涙が戻ってきた。前回のお尻叩きの間中、彼女は自由に泣くのを何とか抑えていた。

三回目の打撃の後、ビーカは崩れ落ち、泣き叫び、涙を解放すると、ただ一つのことだけを意識した。自分がお転婆で、受けるべきお尻叩きを受けているということ。

***

完全に裸のビーカはジャックに寄り添い、わずかな動きで自分の体温が毛布の下から逃げていくのを感じていた。冷たい空気は、薄暗い部屋でほのかに輝くテレビの光だけに照らされた、クリムゾン色の臀部に不思議と心地よかった。

画面では、フロド が川を下りながら肩越しに呼びかけていた。「戻れ、サム。僕は一人でモルドールへ行く。」

サムワイズ・ギャムジーは水を跳ね返しながら咆哮で答えた。「もちろんさ… そして僕も一緒に行く！」

自分の後ろ側が疼くのを感じて、ビーカは涙ぐんだが、それは残る痛みからではなかった。注意を映画からそらすどころか、よくお尻を叩かれた尻に座らされることで、不思議と『指輪の仲間』の残りを一気に見やすくなっていた。エンドロールが流れると、彼女は涙ぐんだ目でジャックを見上げ

た。「素晴らしかった… 覚えていた通り、本当に素晴らしかったよ。」

ジャックは優しく彼女を撫で、抱擁を解きたくない様子だった。「お尻叩きの後でも？」

ビーカは抱擁を返してからジャックから離れ、毛布が優雅に背中から滑り落ちるままに、得意げに歩き去った。「ふん！　セーフワードを使わせるどころか、遠く及ばなかったわ。」

「木製のヘアブラシで終わった後、君があまりに涙ぐんで後悔していたから、俺の心が痛んだんだ。もうこれ以上叩くなんて耐えられなかった。」

「スリッパすら使わなかったし、ましてやベルトなんて！　尻すぼみもいいところだわ。」
ジャックはベルトの端をループから引き抜いた。「もしお転婆を続けるつもりなら、今すぐ直してやるが…」

ビーカはベルトを見て唇をなめ、ジャックの言葉の複数の可能な意味を考えた。それからキッチンのキャビネットを開け、「コックにキスを」というノベルティエプロンを取り出した。「結構よ！　お転婆であることについて、教訓は学んだわ… 少なくとも今日は。いい子になって、映画の夜のお礼に、一から美味しい夕食を作ってあげることにしたの。パンケーキとベーコンと卵はどう？　夕食の『第二の朝食』！」

「ビーカ、結婚するまでセックスはしないって、お互い合意したよな？」

ビーカはパンケーキのバッターを取り出しながら鼻を鳴らした。「もちろん覚えてるわ。そして今の服装で変な考えを起こさないで。お尻叩きが必要だったのは認めるけど、それ以外は、私のお尻は——を見るまでは立ち入り禁止よ——」

振り返ると、ジャックが片膝をついて小さな箱を持っていた。「ビーカ、結婚してくれ。」
ビーカはパンケーキ粉の袋を丸ごと落とした。「うわあ！　はい！　はい、します——げほっ　ごほっ！」

パンケーキ粉の袋が爆発し、白い粉の雲を作った。「ああ、もう！　げほっ！」

「捕まえたぞ！」彼女が何が起こっているのかわかる前に、ジャックは彼女を粉塵の嵐から抱き上げ、自分も咳き込んでいた。

咳き込みの合間にくすくす笑いながら、ビーカはジャックが薄い白い粉のコートをまとっているのを見て、自分を調べて泣き始めた。まだ「コックにキスを」のエプロン以外は裸だった。「今？　今プロポーズするの？　もっと最悪なタイミングを選べなかったの？」

ジャックは彼女から目を離さなかった。「ごめん！　考えてなかった——待って、君は『はい』って言ったのか？」

「もちろん『はい』って言ったわ。はい！　はい！　はい！　でも…　モーセの赤ちゃんよ、ジャック？　くすっ　その…　そのタイミング！　あははは！」

ビーカは笑いの涙が目に染みるのを感じたが、ジャックが彼女の手を握ると、彼は彼女がからかうのが好きな、あの変わらぬ、冷静で、厳しい表情で彼女を見た。「本当にそう思ってるのか？　俺をからかってるんじゃないのか？」

ビーカはエプロンの端を軽く持ち上げて、真似のキュルシーをした。「どうして？　プロポーズを断ったらお尻を叩くつもり？」

しかしジャックの真剣で誠実な顔を見ると、ビーカのお転婆を演じたい欲求は溶け去った。「… はい、ジャック。本当にそう思ってる。結婚して。」

黙って、ジャックはビーカを抱きしめた。彼の緊張の唯一の兆候は、震える安堵のため息だった。

ビーカは抱擁に溶け込み、ジャックの中に自分を見失った。それからエプロンの紐の一つが真っ赤なお尻をくすぐり、彼女を目覚めさせた。くすくす笑いながら、彼女はジャックの首を軽く噛んで注意を引き、愛に満ちた目で彼を見た。「もちろん、これからは、映画の夜におとなしくするために、たくさんお尻叩きが必要になるでしょうね。」

終わり

いたずらで意地悪なナンシー

居間は、隅の柱時計のかすかなチクタクという音を除けば静まり返っていた。ナンシー・ネザーズはソファの端に硬く座り、腕を胸の前でしっかりと組んでいた。母親のクラリスは暖炉のそばに立ち、その表情は失望と決意が入り混じっていた。父親のエドガーは戸口にもたれかかり、腕を組んでその光景を見守っていた。

「ナンシー」とクラリスが始めた。声は落ち着いていたが、しっかりとしていた。「なぜ私たちがこういう話をしているのか、わかっているの？」

ナンシーは目を回した。追い詰められたときの彼女の得意技だった。「ゴミ出しを忘れたから？ それとも宿題を終わらせなかったから？ ああ、待って――夕食のときに変な呼吸をしたからかもね。正直、何がなんだか覚えてらんないわ。」

エドガーはため息をつき、鼻筋を摘んだ。「これはゴミのことじゃない。お前もわかっているはずだ。お前が人に対してとっている態度のことだ――先生に、友達に、俺たちにさえも。あの態度が手に負えなくなってきている。」

「手に負えない？」ナンシーは皮肉たっぷりに言い返した。「あら、お願い。私はただ自分の考えを言ってるだけよ。それって、いつもあなたたちが私に言ってることじゃない？『正直に生きなさい、ナンシー。自分のために立ち上がりな

さい、ナンシー。』それがどうした？ まさに私がやってることよ。」

クラリスは一歩前に出て、その視線は和らいだが、それでも揺るがなかった。「自分のために立ち上がることと、無礼であることには違いがあるのよ、あなた。最近あなたはその線をよく越えているわ。許されることじゃない。」

ナンシーは唇をパクパクさせ、鳴く子猫の真似をした。
「にゃーにゃーにゃー！ もういいわ！ あなたたちは私のボスじゃない！」

クラリスは言葉を失くして立ち尽くしたが、ナンシーがさらに侮辱の言葉を続ける前に、父親が立ち上がり、にらみつけた。彼が部屋全体を満たすかのようなその様子に、ナンシーはたじろいだ。「ナンシー、この家に住み続けたいと思うなら、母親にそんな口の利き方は許さない。これまで何度も話し合ってきたが、話し合いでは通じないことがはっきりした。私たちにとって簡単なことではないが、このままの態度を続けさせるわけにはいかないほど、お前を愛している。その言動でお前はお尻叩きを自ら招いた。」

ナンシーの虚勢は一瞬揺らぎだが、すぐに笑みを浮かべて隠した。「あら、それで『厳しい愛』の時間ってわけ？ すごくいいわね。まさに私が必要としていたものだわ。」

「そうだ、ナンシー、厳しい愛だ。私たちはお前を罰することを楽しんではいない。お前が最高の自分に成長してほしいと思っている。それは、お前が失敗したときに責任を負わせることを意味するんだ。」

ナンシーの反抗心は再び揺らぎだが、すぐに立ち直った。
「わかったわ。どうせやるなら、さっさと終わらせましょう。」

ナンシーが子供の頃から、クラリスとエドガーは、体罰が必要だと判断したまれな機会には、似たような方針を取っていた。クラリスが常に最初にナンシーを叩き、続いてエドガーが二度目のお尻叩きを加えるのだった。その目的は、ママとパパは二人で一致団結しているという明確なメッセージをナンシーに伝えることだった。

クラリスはエドガーと目を合わせ、うなずいた。「わかったわ。行きましょう。」

ナンシーの心臓はドキドキと打ち、彼女はしぶしぶ立ち上がり、母親がソファの中央に座るのを許した。

母親の膝を見て、ナンシーはためらった。恥ずかしさと反抗心が入り混じって頬を赤らめながら。「真面目に？ これって時代錯誤すぎるわ」と彼女は息のようにつぶやいた。

「ナンシー」とクラリスは、反論の余地を残さない口調で言った。「おいで。」

大げさなため息をついて、ナンシーは前に進み、胃がかき回されるのを感じながら母親の膝の上に体を乗せた。ナンシーが完全に落ち着く前に、最初の一発が彼女のスカートの座面に鋭いパチンという音とともに加えられた。ナンシーは身をすくめ、指で肘掛けを握りしめた。刺痛は即座に感じられ、彼女は叫び声を上げまいと唇を噛んだ。

「痛い！ わかった、わかった、わかったわ！」ナンシーは叫び、その声には苛立ちが混じっていた。

「本当にわかったの？」クラリスはもう一方の手をナンシーの背中に置き、利き手でさらにしっかりとした平手打ちを加えた。「だって、最近のあなたの行動はそうは思えないもの。」

ナンシーは身をよじり、そのプライドと増していく不快感が戦っていた。「はいはい、敬意だのなんだの。もっと早く済ませてくれない？」

クラリスは特に力強い一発を加え、ナンシーが悲鳴をあげるほどだった。それからクラリスは強調するようにナンシーのお尻を軽く叩いた。「その態度は状況を良くしてないわよ、お嬢さん。」

ナンシーはうめき声をあげ、顔を火照らせた。「ああ、もう。ただ雰囲気を和らげようとしてるだけよ！」

これまで黙って立っていたエドガーが前に出た。「ナンシー、これは冗談じゃない。お前の行動には結果が伴う。それを理解する時だ。」

クラリスは再開し、平手打ちが一定のリズムで続いた。ナンシーは歯を食いしばり、頭の中は混乱していた。どうして彼らはいつも何でも大げさにしなきゃいけないの？ と彼女は思ったが、頭の奥の小さな声が、もしかしたら、もしかしたら彼らは正しいのかもしれないとささやいた。

刺痛は今や蓄積され、ナンシーの足は無意識に蹴り上がった。「わかった、わかった、ごめんなさい！ もうやめてくれない？」

クラリスは再び止まり、その声は優しくも断固としていた。「何に対して謝っているの、ナンシー？」

ナンシーはためらった。プライドは増す痛みに負けそうになっていた。「… 無礼だったことで」と彼女はつぶやいた。

クラリスはうなずき、さらに数回の計られたような平手打ちを加えた。「よく言えたわ。そして？」

「… そして、お転婆だったことで」とナンシーはため息をついた。彼女は自分の声をできるだけ無関心で平然と聞こえさせようとしたが、顔が恥ずかしさで火照るのを感じて、自分が誰も騙せていないことを知った。

クラリスはさらに十二回の鋭い平手打ちを加え、ついにナンシーが抗議の叫び声をあげ、おとなしく足を蹴るのを聞いて止めた。

苦笑いしながら、クラリスはナンシーを立たせた。ナンシーは立ち上がり、顔をしかめてお尻を押さえようと手を伸ばしたが、自分は冷静で無頓着を装おうとしているのを思い出した。しかめっ面をしながら、ナンシーは気まずそうに腕を揉むことにし、目を合わせるのを避けた。「わかったわ、ごめんなさい。満足した？」

父親が前に出て、彼女の肩に手を置くと、ナンシーは萎縮した。「いや、ナンシー。お前を叩かなければならないことに、俺は満足していない。」

彼女が謝ったとき、彼女の半分は無関心を装いたかっただけだったが、もう半分は本当にそう思っていた。ナンシーが父親を見上げると、もう一度お尻叩きが待っていることをよく知っており、自分の中の二つの半分が葛藤しているのを感じた。彼女はお尻叩きを同様に恐れ、そして望んでいた。彼女は父親を同様に憎み、そして尊敬していた。複雑な感情が戦い合うのを感じながら、ナンシーは涙を浮かべた。無関心を装うことは裏目に出た今、彼女は本能的に再び「パパの小さな女の子」に戻った。「パパ？ ごめんなさい！ 本当にごめんなさい！」

まるでダンスのように、クラリスは立ち上がって夫が座れるようにし、エドガーは優雅にソファに座り、ナンシーを自分の膝の上に導き、空いている脚で彼女の脚をしっかりと固定した。「まだ本当じゃないな。」

脚を固定され、ソファのクッションが視界を満たすのを感じて、ナンシーは硬直した。今や閉じ込められた今、お尻叩きは彼女が無視できる外部の「何か」ではなくなり、「すべて」に変わったかのようだった。彼女の現実のすべてが今や、お尻叩きだった！

「やめて、パパ、やめて！ お願い、お願い、お願い、私は——」

最初の一発が彼女のお尻に波紋を広げた。薄い綿のスカートはまったく意味のあるクッションにはならなかった。
「うわあああ！」

それでナンシーのワニの涙は止まった。彼女の目を満たした涙はあまりに本物で、彼女が最初の長く大きな叫び声を終えたちょうどその時、二回目の平手打ちが完璧なタイミングで加えられた。

「ぐっ！ うっ！」ナンシーは全力で蹴りを入れて逃れようとしたが、自分の脚が膝のあたりで固定され、びくともしないことに気づいた。三回目の平手打ちが加えられると、彼女は100メートル走のスタートラインに立つスプリンターのように上半身を前方に突き出したが、スタートの合図とともにうつ伏せに倒れた。

ナンシーの臀部が彼の膝の上で激しく上下に跳ねるが、無駄だった。エドガーは首を振り、体勢を調整し、ナンシーの脚のロックを解除して彼女を片膝の上でバランスをとった。
「ナンシー、じっとしなさい。」

説得に応じる気分ではなかったナンシーは、足を激しく蹴った。「やあああ——お！」

四回目の平手打ちが彼女の最後の抗議の叫びを遮った。今度はナンシーが跳ねると、彼女の脚は膝のあたりで真っ直ぐにロックされ、数秒間空中にぶら下がった後、重力が彼女に影響を及ぼし始めた。まるで彼女がやはり100ヤード走を走ったかのようだった。震える息を吸い込むと、ナンシーは冷たい風が自分の下側の頬を撫でるのを感じた。スカートが腰の後ろに折りたたまれているのを感じて、ナン

シーは見なくても何が待っているかわかっていたが、それでも肩越しに振り返った。「… ああ… やだあ…」

目尻で、ナンシーは自分のチャコールグレーのパンティーのウエストバンドをかろうじて確認できた。クラリスは優しくくすくす笑った。「まあまあ、それをあげたのを覚えてるわよ。あなたが中学生の時だったわね！ まだ持ってるなんて驚きだわ！」

見えなくても、ナンシーは恐怖とともに、今日は古いキム・ポッシブル柄のパンティーを履いていることを思い出した。ママは数年前にそれを捨てようとしたが、ナンシーがゴミ箱から救い出し、お守りだと言い張ったのだった。そこには「で、どんな状況？」というスローガンが書かれていた。

パパの手のひらがナンシーの臀部の中心にまっすぐに加えられ、スローガンの表面全体を覆った。ナンシーの涙が戻り、彼女は自由に泣きじゃくった。以前の抵抗でエネルギーを使い果たしたナンシーは、静かにとは言わないまでも、従順に父親の太ももの上に横たわった。十回のゆっくりとした平手打ちの後、彼女の叫び声は醜い途切れ途切れのすすり泣きに変わった。

さらに二十回の素早い平手打ちの後、彼女のすすり泣きはむせび泣き、空気を求めて息を飲む音に変わった。さらに三十回の電光石火の平手打ちの後、ナンシーはついに最後の哀れな絶望の叫び声をあげ、背中を反らせてから、再び体勢に崩れ落ちた。今や自分は100メートル走ではなくマラソンを走ったように感じて、ナンシーはおとなしくパパの膝の上に横たわった。それに応じて彼はわずかにペースを落とし、まるで着陸態勢に入るかのようだった。

さらに二十回の鋭い平手打ちの後、ナンシーは再び静かに泣いていたが、以前のようなパニックの質はなかった。最後の十回のゆっくりとした、計算された平手打ちの後、ナンシーの叫び声は静まった。彼女は最後の数回の平手打ちの間に泣き言を言い、すすり泣き、ついにしゃっくりをした。エドガーは忘れがたいフィナーレとして最後の響き渡る一発を加えた。

彼はナンシーに息を整えさせ、それから彼女を支えて自分の膝の上に座らせた。しゃっくりの合間に、ナンシーは謝罪の言葉をどもりながら、もう一度お尻叩きのラウンドが来ないことを祈った。「ごめん… ごめんなさい… ヒック… 本当にごめんなさい、パパ。」

ナンシーが抱擁を返すと、エドガーは娘の肩甲骨の間を優しく軽く叩いた。「わかってるよ。さて、お母さんに何て言うんだ？」

涙の最後の残りを瞬きで拭い、ナンシーはまだパパにしがみつきながら母親の方を向いた。「ごめんなさい、ママ。私… あなたにひどいことをしたわ！」

エドガーは笑った。「それを認めたことは誇りに思うよ、ナン。自分の過ちを認めるのは簡単なことじゃないが、大切な一歩だ。」

ナンシーはうなずき、喉が詰まった。お尻叩きが終わった今、彼女の恥ずかしさは倍返しで戻ってきていた。「… そうだね、そう思う。」

エドガーは彼女に小さな微笑みを浮かべた。「愛してるよ、ガキ。これはお前を惨めにさせるためじゃない——成長を助けるためだ。」

ナンシーは彼を見上げ、先ほど流した涙でまだ目が潤んでいた。「わかってる。ただ… 自分が失敗したって感じるのは嫌なの。」

クラリスは彼らの隣に座り、ナンシーを抱きしめ、その声は優しかった。「誰だって嫌なものよ、あなた。でも大事なのは次に何をするかってこと。これを教訓にして、もっと良くなりなさい。それが私たちのただ一つの願いよ。」

ナンシーは母親の肩に顔を埋め、最後の反抗心は溶け去った。「頑張る」と彼女はささやいた。

何時間も経ったかのように感じられた後、ナンシーは体を離して階段へ向かった。安堵、罪悪感、そしてもっと良くなろうという静かな決意が入り混じった奇妙な感情を抱えながら。彼女は途中で立ち止まり、振り返って、彼女のトレードマークである生意気な笑みを一瞬浮かべた。「でも、言っておくけど、エイプリルフールにこれの仕返しは絶対にするからね！」

エドガーは今度こそ声を出して笑った。ナンシーが子供の頃から、エイプリルフールは次第に家庭内の壮大な知恵比べへと発展していた。「それなら、かかってこい。」

ナンシーが二階に消えると、クラリスとエドガーは視線を交わした——困惑と愛情が入り混じった表情で。気性が強く

機知に富んだ十代の少女を育てるのは簡単なことではなかったが、彼らはそれを他のどのようでも望まなかった。

終わり

大切なものを追いかけて

老農家は外の嵐の重みできしみ、木製の梁は雨が窓を打つたびにうめき声をあげていた。家の中は緊張で満ちていた。言ってしまった言葉が取り戻せないときに漂うあの張り詰めた空気だ。チェイスは部屋の中央に立ち、両手を脇にぎゅっと握りしめ、涙をこらえる努力で胸を上下させていた。彼女の父親、トーマスが彼女の前に立ちはだかり、その顔は失望と苛立ちの仮面だった。

「チェイス」と彼は低く、しかししっかりとした声で始めた。「なぜ私が怒っているか、わかっているな？」

彼女はうなずき、視線は足元の擦り切れた敷物に固定された。彼女は理由を知っていた。嵐の最中に馬を連れ出した瞬間からわかっていたのだ。自分の安全だけでなく、動物の命までも危険にさらしたことを。それは無謀で衝動的で、完全に彼女のせいだった。しかし声に出して認めることは、ガラスを飲み込むように辛かった。

「質問したんだ」とトーマスは言い、その口調は今やより鋭くなっていた。「わかっているのか？」

「はい、パパ」と彼女はささやき、その声は雨の音にかろうじて聞こえる程度だった。

トーマスはため息をつき、白髪交じりの髪に手を撫でつけた。彼は無口な男だったが、話すときにはその言葉に重みがあった。「お前はもう子供じゃない、チェイス。十六歳だ。

分別がある年齢だ。自分の行動の結果に直面する年齢だ。」

チェイスの胃はかき回された。彼女は何が来るかわかっていた。境界線を越えたのは初めてではなかったが、彼を本当に怖がらせたのは初めてだった。彼の目にそれが見えた——彼女が納屋でびしょ濡れで震えているのを見つけたとき、彼の目に一瞬宿った恐怖。馬も彼女の隣で震えていた。

「おいで」と彼は言い、声は今や柔らかくなっていたが、命令的であることに変わりはなかった。

彼女はためらった。足がその場に根を下ろしたように動かなかった。部屋が突然狭くなり、壁が彼女を取り囲むように感じられた。しかし彼女は従わない方がいいことを知っていた。ゆっくりと、彼女は前に進み、心臓が胸の中でドキドキと打った。

トーマスは暖炉のそばの木製の椅子の端に座り、その表情は読み取れなかった。「私にとって簡単なことではない」と彼は後悔の色を帯びた声で言った。「しかし、行動には結果が伴うことを理解させる必要がある。ルールが自分には適用されないと振る舞い続けるわけにはいかない。」

チェイスは唇を噛み、涙が目に溜まって痛んだ。彼女は反論したかった。怖がらせるつもりではなかったと、嵐に対処できることを証明したかっただけだと伝えたかった。しかし言葉は喉に詰まった。彼女が父親の膝の上にうつ伏せになると、オーバーオールのデニムが突き出した後ろ側にぴんと張るのを感じた。彼女は経験から知っていた。それら

はお尻叩きの衝撃を十分に和らげてはくれず、遅かれ早かれ彼女は泣くことになる。時間の問題だった。

その時が来ると、それは迅速かつ計画的だった。トーマスの手が鋭いパチンという音を立てて加えられ、その音が静かな部屋に響き渡った。チェイスは身をすくめ、息が詰まった。最も刺さったのは痛みではなかった――彼の失望の重み、彼女が彼をがっかりさせたという認識だった。

最初の一撃が加えられた――しっかりと、計画的に――そしてチェイスは後ろ側に広がる突然の熱さに息を呑んだ。彼女は目をぎゅっと閉じ、指は木製の椅子の脚に絡まった。最も刺さったのは痛みではなかった――彼の失望の重み、彼女が彼をがっかりさせたという認識だった。

さらに一発、さらに一発と加えられ、それぞれが計画的で急ぐことはなかった。手のひらが布地に当たる規則正しい音が静かな部屋に響き、チェイスの震える息遣いだけがその合間を縫った。温かさは広がり、より深い刺痛へと鋭くなり、彼女は叫び声を上げまいと唇を噛んだ。

「お前はわかっているはずだ」トーマスの声は低く、落ち着いていた。「あの嵐はお前たち二人を奪いかねなかった。」

チェイスはごくりと飲み込んだ。確かにわかっていたはずだった。しかし風が髪をなぶる荒々しいスリル、稲妻が空を裂く中で馬が彼女の下で勢いよく走った感覚――そのすべてがリスクに見合う価値があると感じられた。今までは。

別の一撃が加えられた。今度はより強く、彼女は柔らかな泣き声をあげて前方に飛び上がった。彼女の頬は熱く、お

尻叩きだけのせいではなかった。恥ずかしさが胸の奥で熱く渦巻いた。

「お前を信頼していた」とトーマスは言い、手を止めた。彼の手は彼女の背中に軽く置かれ、彼がまだそこにいるという静かな合図だった。「お前はこんなことをするほど愚かじゃない、チェイス。」

「ご、ごめんなさい」と彼女は絞り出すように言い、その言葉は溢れ出しそうな涙で重かった。

お尻叩きは再開され、一打ごとに彼女が招いた危険のしっかりとした警告となった。暖炉の火がパチパチと燃え、その温かさはまだ窓を揺らす嵐とは対照的だった。雨に濡れた羊毛と薪の煙の香りが空気に満ち、彼女の考えがぐるぐる回る中でも彼女を落ち着かせた。

涙が目を刺し、そして溢れ出した。それが最悪の部分だった——彼は怒鳴っていなかった。怒ってもいなかった、本当は。ただ… 失望していた。そしてそれはどんな罰よりも深く突き刺さった。

チェイスは泣き叫び、涙と鼻水が自由に顔を伝った。「ああ！ パパ、本当に、本当にごめんなさい！ あああ！ うわあああ！ ぐっ！ ふぅ… ふぅ…」

トーマスは止まった。長い間、外の雨音とチェイスの途切れ途切れのすすり泣きだけが聞こえていた。それから彼の手は優しく彼女の肩に置かれ、彼女を少し回して自分の方を向かせた。彼の表情は厳しかったが、不親切ではなかった。

「わかっているよ」と彼は静かに言った。「しかし後悔だけでは足りない。そこから学ばなければ。もしまた同じことが起きたら、同じようにお尻叩きをする。そしてそのまた次も、同じようにしっかりと。」

チェイスはうなずき、手の甲で目を拭った。刺痛はまだ残っていたが、胸の中の重い罪悪感はさらにひどかった。彼女は彼を怖がらせた。彼女は無謀だった。そしてその認識はどんな罰よりも痛かった。

トーマスは息を吐き、彼女を雑に抱きしめた。彼女は最初硬直した。その仕草に驚いて。しかしそれから彼女はそれに溶け込み、彼の肩に顔を埋め、馴染みのある干し草の匂いを吸い込んだ。

一瞬、外の世界は問題ではなかった。ただ二人だけ、父親と娘、共に嵐を乗り切っていた。彼の腕が彼女をしっかりと包み込み、確かで安全だった。「お前を傷つけるためにやっているわけじゃない。愛しているからだ。お前の安全を願っているからだ。もう無謀な危険はやめろ。」

彼は彼女の髪にささやいた。「わかったな？」

「わかった」と彼女はささやいた。

外では嵐が依然として荒れ狂っていた。しかし内側では、チェイスはついに涙を流すことを許した。涙と戦うことなく——痛みからではなく、許しの安堵から、そしてもっと良くなろうという静かな約束から。

彼がついに体を離すと、彼は彼女の顔を両手で包み、その目を探るように見つめた。「次に行動する前に考えると約束してくれ」と彼は言った。「もっと注意すると約束してくれ。」

「約束する」と彼女はささやき、声は震えていた。

満足して、トーマスは彼女のお尻を軽く叩いた——彼女を自分の部屋に送るという無言の合図だった。「よし。さあ、体を拭いて休みなさい。明日の朝、また話そう。」

チェイスはうなずき、涙を拭いながら部屋を出て行った。彼女が二階の自分の寝室に上がると、奇妙な安堵感を感じずにはいられなかった。外の嵐はまだ荒れ狂っていたが、内側の緊張は解けていた。彼女は自分の行動の結果に直面し、そうすることで、いくらかの平穏を見出していた。

チェイスは寝室のドアを柔らかなカチッという音とともに閉めた。夕方の重みがまだ彼女の肩にのしかかっていた。外の嵐は一定の小雨に静まり、時折聞こえる遠くの雷のとどろきだけが、先ほどの激しさを思い出させた。

彼女は部屋を横切って壁にもたせかけた古い楕円形の鏡へと向かった——母のものだった、欠けた木製のフレームの鏡だ。一瞬ためらってから、彼女は背を向けて肩越しに振り返り、デニムのオーバーオールを下ろしてその跡を確認した。

その光景を見て彼女の頬は赤くなった。薄い白いパンティーを通しても、父親の懲罰の証拠は明らかだった——温かみのあるバラ色の色合いで、しばらくは残るだろう。彼女は慎重にその敏感な皮膚に触れ、その接触にわずかに

顔をしかめた。耐えられないほどではなかったが、座ることを不快にするには十分だった。

ため息が彼女の唇から漏れ、彼女は振り返ってベッドの端に座った。顔をしかめて体を持ち上げ、慎重に、それから回転してうつ伏せになり、顔を枕に沈めた。その日の出来事が、教訓的な物語の場面のように彼女の頭の中で再生された。嵐の中、馬を連れ出した無謀なスリル、彼女を見つけたときの父親の目に浮かんだ恐怖、厳しい説教、そして最後に——結果。

彼女は愚かだった。もっと分別があったはずなのに。

彼女の視線はベッドの上に掛けられた小さな木製の十字架に漂った。その磨かれた表面が石油ランプの薄明かりを捉えていた。クララは両手を合わせ、うつむいた。

「親愛なる主よ」と彼女はささやいた。「今日、私が賢明でなかったときでも、私を見守ってくださりありがとうございます。そして... お尻叩きをしてくれるほど気にかけてくれるパパをありがとうございます。」

彼女の喉は詰まった。彼女はいつも彼の厳しい手に感謝していたわけではなかった——彼のルール、説教、罰について不平を言ったことも何度もあった。しかし今夜、初めて彼女は真に理解した。彼は怒りから彼女を懲らしめたわけではなかった。彼がそうしたのは彼女を愛していたからだ。彼女の安全を願っていたからだ。

「もっと賢明でいられますように」と彼女は柔らかに続けた。「そして、どれだけ愛されているかを忘れないでいられますように。」

ドアを優しくノックする音が彼女を驚かせた。

「チェイス？」父親の声は静かで、ためらいがちだった。「入ってもいいか？」

彼女は急いで目を拭った。「は、はい、パパ。」

ドアがきしみながら開き、トーマスが中に入ってきた。彼の大きな体格が戸口を埋めていた。彼は片手に小さなブリキの缶を持っていた——鞍擦れや軽い火傷用に彼が常備している軟膏だ。

「これが必要だろうと思ってな」と彼は言い、それを彼女のベッドサイドテーブルに置いた。彼の目は優しく、先ほどの厳しさはより温かいものに和らいでいた。「大丈夫か？」

チェイスはうなずき、彼に小さな、揺れるような微笑みを浮かべた。「うん。ただ… 考えてただけ。」

トーマスは彼女の隣に座り、彼の体重でマットレスがわずかに沈んだ。彼はすぐには話さず、ただ手を彼女の肩に置き、その節くれだった指が安心させるように軽く握った。

「お前はいい娘だ、チェイス」と彼はついに言った。「しかし、いい娘でも時には思い出させる必要がある。」

彼女は彼に寄り添い、頭を彼の腕に預けた。「わかってる。そして… あなたがそうしてくれて嬉しい。」

彼は柔らかく笑い、彼女の頭のてっぺんにキスをした。「休め。明日は新しい日だ。」

彼が立ち去り、そっと後ろのドアを閉めると、チェイスは軟膏に手を伸ばした。その心は夕方の間よりも軽くなっていた。嵐は過ぎ去っていた——外も、そして彼女の内側も。

そして久しぶりに、彼女は真に、深く安全だと感じた。

終わり

リリーの学んだ教訓

むかしむかし、花が咲き乱れ、高い木々が生い茂る活気あふれる近所に、リリーという名の明るく元気な十歳の女の子が住んでいました。彼女は自分の周りの世界を探検するのが大好きで、いつも新しいことを発見して楽しむことに夢中でした。

ある晴れた午後、リリーの両親は友達と遊びに行く前に宿題を終わらせるように言いました。興奮でいっぱいのリリーは、待つのが難しく感じられ、こっそり抜け出して公園で友達と遊ぶことにしました。「外で遊ぶのが待ちきれない！ ちょっと寄るくらいなら大丈夫だろう。」

しばらくの間、リリーは友達と遊んで楽しい時間を過ごしました。しかし日が沈み始めると、彼女は時間を忘れていたことに気づきました。心配の念が湧き上がり、彼女は急いで家に帰りました。「ああ、遅くなりすぎた！ ママとパパに気づかれる前に戻れるといいな。」

家に走って帰りながら、リリーは先週、宿題をせずにポケモンのフィギュアで遊んでいたときに受けた警告のことを考えました。「リリー、もしまた言うことを聞かなかったら、お尻を叩くからね！」とママは言い、警告の一発をリリーのズボンの尻の部分に加えていました。

リリーはうつむき、さらに速く走りました。小麦色の髪とライラック色のスカートが風になびいていました。超高速で家に走って帰れば、大丈夫のはず！

家に着くと、リリーは玄関のドアを静かに開けて忍び足で入ろうとしましたが、ママが玄関で待っていて、電話で激しく話しているのを見つけました。「ああ、よかった！ マーク？ 彼女が帰ってきたわ！ そう！ あなたの言う通りだった！ さっき玄関に入ってきたところよ。」

ママはリリーを抱きしめ、それから娘の目を見つめました。「リリー、どうして私たちの言うことを聞かなかったの？ すごく心配したんだから！」

リリーはごくりと飲み込み、少なくとも部分的には本当の嘘を考えようとしました。「ただ…外で遊んでただけ？」

ママはリリーを抱擁から解放し、立ち上がってスカートを整えました。「そんな言い訳は通じないわ！ 外で遊んでる、だって？ 裏庭でもなければ、家の声の届く範囲でもない。さもなければ私が呼ぶ声が聞こえたはずよ。パパはあなたが一人で公園に逃げ出したって言い当てたわ。そうだったんでしょ？ パパが帰ってくるまで待ちなさい！」

***

リリーのパパが帰宅すると、彼は腕を組みながら彼女の上にそびえ立ちました。「私たちはお前の安全のためにルールを決めている。こんなに遅くまで外にいることは許されない。」

恥ずかしくて罪悪感を感じながら、リリーは祈るように手を合わせて懇願しました。「本当にごめんなさい、ママ、パ

パ。心配させるつもりじゃなかったんです。これからはちゃんと聞くって約束します。」

ママとパパは視線を交わし、二人とも順にうなずきました。リリーには二人が何かを決めていることがわかり、それが何を意味するのか気になりました。

ママは今にも泣き出しそうでした。「リリー、私たちはあなたを愛しているけど、この行動を罰しないわけにはいかないわ。自分の過ちから学ぶ必要があるのよ。」

パパは階段を指さしました。「真剣に話し合う時だ、お嬢さん。自分の部屋に行きなさい。」

***

リリーがディズニープリンセスをテーマにしたベッドに座ると、彼女は足をぶらぶらさせ、うつむきました。パパはベッドの端に座り、ママは近くに立ち、その表情は真剣でありながらも愛に満ちていました。

パパは指を彼女のあごの下に置き、彼女の目を自分の方に向けさせました。「リリー、許可なくこっそり抜け出すのは危険なことだ。自分の行動には結果が伴うことを理解させる必要がある。」彼女は彼の厳しい表情から目を離せず、小さな手は緊張と期待でそわそわしていました。部屋が彼女の周りで縮んでいくようで、彼女の呼吸は速くなりました。

パパは自分の膝を軽く叩きました。「リリー、お前のしたことは間違っている。それを確実に理解させる必要がある。おいで。お尻を叩かなければならない。」

リリーは何が起ころうとしているのか気づいて、心が沈みました。彼女が彼の膝の上に這っていくと、恐怖と後悔が混ざった胃の痛みを感じました。パパは優しく彼女を自分の膝の上に導きました。

それから何か柔らかいものが彼女の背中にパタリと落ちました。振り返って見ると、リリーはパパが彼女のスカートをめくっていたことに気づき、ショックを受けました。彼女の愛用の、幸運のパワーパフガールズ柄のパンティーが露わになっていました。

リリーがお尻を引き締めると、ブロッサム、バブルス、バターカップの絵の一つが彼女の尻の割れ目に消えていきました。まるでパワーパフガールズ自身がお尻叩きから隠れているかのようでした。

パパの手がリリーの背中に置かれ、スカートと少女の両方をしっかりと固定しました。「リリー、お前に十回のお尻叩きを与える。ルールの大切さを忘れないようにするためだ。」彼の声はしっかりしていたが、震えていました。

リリーはパパのズボンの布地がお腹に擦れるのを感じ、それが自分の運命への意識を高めました。

彼女が身構えると、手のひらはシーツで湿り気を帯び、頭の中は様々な考えで駆け巡りました。「言うことを聞かなけ

ればよかった。どうして聞かなかったんだろう？ 私は本当に悪い子だ。」

最初の平手打ちがリリーのスカートの上に響くようなパチンという音とともに加えられ、彼女の体は飛び上がり、鋭い刺痛が彼女に響き渡りました。彼女は顔をしかめ、お尻を覆いました。「痛い！ 痛いよ。」

パパはリリーの手をスカートの座面から優しく導き、ママに手伝うように合図しました。「痛いのはわかってる。お尻叩きは痛いものだ。でも約束する、これは君に感じるよりも私の方が痛い。」

ママは黙ってリリーの前のベッドに座り、娘の手を握りました。リリーはかつて、トゲが刺さったときに、ママがピンセットで木片を抜く間、自分の手をぎゅっと握るように言われたことを思い出しました。二回目の平手打ちがパチンと音を立てて加えられると、リリーは悲鳴をあげ、ママの手をしっかりと握りしめました。

たった五回の平手打ちの後で、リリーのお尻は温かく敏感になり、パパの手と彼女のお尻が接触するたびに痛みは強くなりました。彼女は蹴らずにはいられず、涙と戦いながら息を呑みました。「ごめんなさい、パパ。いい子になるって約束するよ。どうか、もうすぐ終わらせて。」

パパは手と前腕をリリーのばたつく脚の後ろに当てました。「リリー、蹴るのはやめなさい。もう大きい女の子だろ。勇敢に、脚をじっとしていなさい。」

もう涙をこらえきれずに、リリーは息を呑みました。「頑張るよ。」

彼女が脚をマットレスの上に置くと、リリーはつま先を丸めたり伸ばしたりしながら、お尻叩きが終わることを望み、次の平手打ちが決して来ないことを願いました。

リリーが従う準備ができていることを確認して、パパは六回目の平手打ちを加えました。リリーの足は反射的に数インチ跳ね上がりましたが、彼女はそれらをお尻から遠くに保ちました。

七回目の平手打ちをパパが加えると、リリーの目に新しい涙が溢れました。どの一発も前よりひどかったのです！ 涙が自由に頬を流れると、リリーは泣き叫びました。「痛いよ！ ごめんなさい、パパ！ もう二度としないよ！」

彼女は自分の鼻が湿って垂れていることに気づいたちょうどその時、八回目の平手打ちが加えられました。リリーは跳ね上がり叫び、頭の中の考えはすべて真っ白になりました。

九回目の平手打ちの後、リリーの金切り声は抑えのきかないすすり泣きに変わり、鼻水と涙が飛び散りました。

十回目の平手打ちが加えられた後、パパは彼女が震え、泣き叫ぶ間、優しく彼女のお尻に手を置きました。「それで十回だ。終わりだ、リリー。もうお尻叩きはない。」

その言葉をぼんやりと認識すると、安堵の波がリリーを襲いました。ひどい痛みは徐々に治まり、代わりに残る温か

さと痛みだけが残りました。まるで皮膚がきつく張っているかのようでした。彼女はじっと横たわり、感情の入り混じった震えを体に感じながら、両手で体を起こそうとしました。

パパの強い腕が彼女を包み込み、温かい抱擁へと引き寄せました。「リリー、お前を愛している。でも、お前の安全を願っていることを忘れないでほしい。」

リリーはパパにしっかりと抱きつき、その抱擁に埋もれて決して離れたくないと思いました。ママがグループハグに加わると、リリーはパパの右足に寄り添ってママにもっとスペースを空けました。「私たちはあなたを許すわ、リリー。自分の過ちから学び、より良い選択をすることが大切なのよ。」

リリーの頬は涙で濡れていましたが、決意の芽生えが彼女の中で花開きました。彼女はお尻叩きに恥ずかしさを感じましたが、その恥ずかしさは今や理解と混ざり合っていました。それは謙虚さをもたらす屈辱でした。「ごめんなさい、ママ、パパ。私が値したことだとわかっています。もう二度と家をこっそり抜け出したりしません。」

ママはリリーの頬にキスをしました。「私たちはあなたを愛しているわ、リリー。あなたのためになることを願っているから罰するのよ。」

パパは優しくママを自分の膝の上に導き、二人の特別な小さな女性たちがそれぞれ彼の片方の脚に座れるようにしました。「覚えておけ、私たちはいつもお前のそばにいる。そしてお前が責任ある若者に成長することを願っている。」

リリーはその日、貴重な教訓を学びました。彼女は、両親の言うことを聞き、そのルールに従うことが自分の幸福と安全にとって重要であることを理解しました。その日以来、彼女は良い子で従順な子になろうと意識的に努力しました。

終わり

フラッパーをぶっ叩く

第I章：敬意の教訓

日が街に沈みかけ、賑やかな通りの上に温かな光を投げかけていた。目的地へと急ぐ人々の群れの中で、一人の若い女性が夜空に輝く星のように際立っていた。彼女の名はモリー、フラッパーだった。

ボブカットの髪、赤い口紅、短いフリンジのドレス。彼女はまさにモダンウーマンの象徴だった。彼女は奔放な娘であり、反抗者であり、何よりも街で一番人気のスピークイージーで夜明けまで踊り明かすことを何よりも愛していた。

お気に入りのクラブへ向かう途中、モリーは内側から湧き上がる興奮を感じずにはいられなかった。街はエネルギーに満ち溢れ、彼女はそれを受け入れる準備ができていた。

「おい、モリー！」後ろから声がかかった。

振り返ると、同じフラッパーの友達、クララが彼女に追いつこうと急いでいた。

クララはモリーを遊び心で小突いた。「今夜はすごくいい感じじゃない。」

モリーはいたずらっぽく目を輝かせて笑った。「そりゃそうさ。私はいつも印象を残すのが好きなんだ。」

二人の少女は笑いながらクラブへ向かい、スムースなジャズの音色に乗って夜遅くまで踊った。

夜が更けるにつれ、モリーは音楽と群衆の熱気に我を忘れた。ハンサムな男たちと浮気をし、友人たちをからかい、自分の行動の結果について考えることは一度もなかった。

ついに、街に日が昇り始めたとき、モリーは帰る時が来たとわかった。クララに別れを告げ、駅へ向かい、両親の農場へ帰る始発電車に乗った。

農場に着くと、厳しい顔つきの髭面の父親が出迎えた。「どこに行っていたんだ？」

モリーは肩をすくめ、軽薄に目を回した。「もちろん、踊りに決まってるでしょ。」

父親の顔はビートのように真っ赤になった。「もう十分だ」と彼は震える声で言った。「お前は長い間、好き放題に走り回ってきた。そろそろ教訓を学ぶ時だ。お尻を叩いてやる！」

モリーの父親は彼女の手首を掴んだ。その掴みは固かったが、痛くはなかった。彼は彼女をソファへ連れて行き、腰を下ろすと、何も言わずにモリーを自分の膝の上に引き寄せた。彼女は信じられなかった。まさか、こんなことが起きるなんて。しかし、それは現実だった。

父親は彼女のお尻を叩き始め、モリーは驚いて言葉を失った。彼女はまだ、こんなことが自分に起きているとは信じら

れなかった。ついに彼女は母親に助けを求めたが、母親はただそこに立ち、うなずいて承認するだけだった。

「お前には当然のことだよ、モリー」と母親は落ち着いた声で言った。「お前は生意気になりすぎているんだ、はっきり言って。」

モリーは怒りが込み上げるのを感じ、顔は熱くなったお尻と同じくらい真っ赤に染まった。「ふざけるな！ 俺はもうお尻叩きされる年じゃない！ 十八歳だぞ、現代女性だ、選挙権もあるし、好きな時にいつでも出かけて踊る権利もある。お前たちはパパと一緒に家に閉じこもって、まるでパンクしたタイヤみたいに動けなくなってるのが妬ましいんだろ！」

しかし、彼女の言葉は父親の決意をより強固にするだけだった。パパはモリーの尻に激しい一発を加えて、彼女の口を封じた。

それから彼は彼女を立たせ、まっすぐに目を見つめた。「お前は敬意を学ぶのに年を取りすぎることは決してない、モリー。そして、何があってもそれを学ぶことになる。」

モリーはお尻叩きが終わったと思い、ほくそ笑んだ。「もう教訓は学んだよ！ とにかく、酒場に行くから。何か…酒を持って帰ってきてほしいか？」

モリーにとって不運なことに、父親はまだ彼女を許してはいなかった。彼は彼女のスカートを持ち上げ、一気にパンティーを引き下ろした。「二回目の違反だ。このお尻叩きを最初からやり直す。今回は、決して母親を侮辱してはならないことを学ぶんだ。」

モリーの抗議は唇で止まり、彼女はまるで雑巾のように、再び父親の膝の上に強制的に乗せられた。かつて彼女の誇りであり喜びだったお尻は、今や恥ずべき晒しものとなった。敬意という教訓はまだ始まったばかりだった。

第1章 終わり

第II章：慎みの教訓

モリーの叫び声が家にこだました。父親の荒れた手が彼女の素っ裸のお尻を打ち、その痛みが彼女の全身を焼き尽くした。彼女はこれまでにないほどの刺痛を感じ、服の保護がないことがどれほど無防備かを思い知った。

「お願い、パパ！」と彼女は懇願した。その声は痛みと必死さが入り混じって震えていた。「もっと雑用をします！ もう二度と無礼なことはしません！ どうか、やめてください！」

父親は一瞬間を置き、赤くなった彼女のお尻に手を置いた。「モリー、これからはお前がいい子になるとわかっている。なぜなら、お前がフラッパーみたいに振る舞うたびに、私はお前を叩くからだ。さあ、母親に謝れ。それからパドルで叩き終えるぞ。」

モリーの心は沈んだ。こんな罰を定期的に耐え続けるなんて想像できなかった。彼女は母親を見上げ、涙を顔中に流した。「ママ、どうかパパにやめるように言って。ごめんなさい、本当にごめんなさい！」

しかし母親は首を振り、その表情は揺るがなかった。「謝るには遅すぎるわ、モリー。自分で招いたことよ。」

母親の言葉を聞きながら、モリーは雷雲が頭上に落ちてくるような不吉な運命を感じた。その雲は、モリーの父親がお尻叩きを再開すると消え去ったかのように思えた。彼の手が彼女の敏感なお尻に激しく振り下ろされた。モリーは

叫び声をあげ、痛みでのたうち回ったが、逃げ場はなかった。

ついに、永遠にも思える時間が過ぎた後、父親は止まった。モリーは彼の膝の上にうつ伏せになり、息を荒げながらこの試練からの回復を試みていた。

彼女は父親を見上げ、涙で潤んだ目で尋ねた。「終わりましたか？」と彼女はささやいた。

父親は首を振った。「いや、モリー。まだ終わりには程遠い。少なくとも、まだだ。それは次第による。」

モリーは歯を食いしばり、目を鋭く光らせた。「何に次第なんですか？」

パパはモリーの無礼な口調に報いるように、しっかりとした一発を加えた。「まずは、お前の舌の利き方次第だ。さあ、あの羽根のついた馬鹿げた服を脱いで、隅に立っていなさい。お母さんと話がある。」

モリーはさらなる平手打ちを避けるために父親の膝の上から前へと飛びのき、素早く服を脱いだ。彼女が足首からパンティーを引き上げようと屈んだちょうどその時、後ろから母親の鋭い声が聞こえた。「待ちなさい、モリー。その下着は下げたままにしなさい。町中で脚やお尻を見せびらかすのがそんなに好きなの？ よろしい！ 隅に立っている間もそれを見せびらかしなさい。」

それでもパンティーを引き上げて、モリーは振り返って反論しようとしたが、パパの一瞥で彼女は口を閉ざした。

パパはベルトに手を置いた。「お母さんの言う通りだ、お嬢さん。」

「はい、パパ！」とモリーはネズミのように甲高い声できゅうきゅうきゅうと鳴いた。完全に降参することを拒んで、モリーはパンティーをお尻のすぐ下まで下げ、布地を太ももの間に挟んで持ち上げ、隅へとすり寄った。

彼女は両親の目が自分の後頭部に注がれているのを感じ、振り返って、完全に脱がなかったことで三度目のお尻叩きを稼いだのではないかと考えた。彼女はパパの目を追い、彼が彼女の格好を調べるのを見て、それから彼はうなずいた。「まあまあだな。さあ、両手を頭の後ろに組み、鼻を壁につけて、一言も喋るな。」

モリーは従った。手は震え、膝はがくがくし、唇は震えていた。

彼女はこの隅から解放されたときに何が起こるかを恐れた。自分はもう二度と自由になれないのではないかと思った。

第II章 終わり

第III章：従順の教訓

数分が過ぎた。モリーはボタンのような鼻を壁にしっかりと押し付けながら、背後での両親の話し合いに耳を傾けていた。

ついに、パパのため息が聞こえた。「ママ、モリーを叩いてみるか？」

モリーは母親がうなるような声を発し、足音がするのを聞いた。モリーは勇気を出して目尻で覗き込むと、ママが革製のスリッパの片方を脱いでいるところだった。「ああ、そうさせてもらうわ！ スリッパでモリーを叩いたら、きっと気分が良くなるわ！」

モリーは振り返って後ろを見た。「お願い！ スリッパはやめて、ママ！ もう十分叩かれたんじゃないの？」

答えとして、ママは空いている手でモリーの左の頬の下側に素早い平手打ちを加えた。「おとなしくしなさい。パパに言われた通り、鼻を壁につけて！ … そうこなくちゃ。呼ぶまでそこにいなさい。」

モリーの膝は震え、両親が居間の家具を配置し直す音が聞こえた。「ありがとう、パパ。それで十分よ。モリー？ 隅から出てきて、ママのところにおいで、いたずらな小さなヤマネコさん！」

顔を火照らせて、モリーは前を覆った。振り返ると、ママが部屋の中央に移動されたソファの後ろに立っていた。最後

の成長スパートでモリーがママより数インチ背が高くなったことは問題ではなかった。モリーはまだ二歳の時と同じくらい、革のスリッパの姿を見て無力に感じた。モリーは慎ましく行進して母親と向き合い、もし従順であればまだ慈悲が示されるかもしれないと願った。

ママはスリッパを何度か手のひらで叩き、革の底の感触を確かめた。「さあ、自分について何か言い分はあるの？」

これが自分のチャンスだと気づいて、モリーは哀れな表情を装った。「ママ？ もう… もう私のこと、愛してくれないの？」と彼女は声を震わせて尋ねた。

ママの顔は一切の感情を表さなかった。「もちろん愛してるわよ、モリー。だからこそ、これをしなければならないの。」

モリーの哀れな子犬のような目は、瞬時に老いた地獄の猫のそれになった。「でも…」

パパは親指をひと振りして、ベルトの端をズボンの一つのループから緩めた。「お母さんの言うことを聞け。あのソファに前かがみになれ。さもないとベルトを叩き込むぞ！」

怒りの新しい涙が目に溢れ、モリーはおとなしく従い、顔を座布団の上に預けてお尻を高く上げた。

ママがスリッパで彼女のお尻を軽く叩くと、モリーはこれが本当に愛という感覚なのかと考えずにはいられなかった。

ママは鋭いバシッという音とともにスリッパを振り下ろした。その音が小さな部屋に響き渡った。モリーは叫び声をあ

げ、素早い平手打ちの猛烈な連打を感じる覚悟を心の中で固めた。その代わりに、ママは再びスリッパでモリーのお尻を優しく叩くだけだった。「いいわね、モリー。今日は何があってもしっかりスリッパで叩くけど、もし態度を改めるなら... パパにベルトでのお尻叩きを免じてくれるよう頼んであげてもいいわ。さて、何を間違えた？」

モリーは唇を噛みしめ、お尻をスリッパから救うために何か言おうと必死だった。「私... 私、口が滑ったの？」

ママはスリッパでモリーを鋭く叩いた。「そんな馬鹿な話はやめなさい。はっきり言いなさい。」

モリーは誤って唇を強く噛みしめ、血がにじむのを感じて驚きの悲鳴をあげた。ママは数秒待ってから、再びモリーのお尻を軽く叩いた。次の一発が来ることを知って、モリーは唇を舐め、正解であろう答えを叫んだ。「パパとママに無礼だったんです！」

モリーはスリッパの底が自分の臀部に当たる柔らかく一定のトントンという音を感じた。「その通りよ。それで？」

モリーは自分の言葉で答えを考えたが、ママに合った正しい言い方を思い出すために自分を疑わなければならなかった。「私は... ああ、酒を飲みに行ったの？」

トントントントン。「何を飲んだの、モリー？」

モリーはむせた。一時間も前にパパに酒を持って帰ると自慢したばかりだったことを思い出した。ママはもう答えを

知っており、二人ともそれを知っていた。「アルコールを飲んでました、ママ。」

ママはスリッパを通常より強い力で振り、ほとんどモリーの露出した臀部の表面を引き裂くように叩いた。モリーは金切り声をあげ、頭を左右に振った。しかし今回は柔らかく一定のトントンに戻る代わりに、ママは二発目の平手打ちを加え、下向きの角度でモリーの左の尻の半分に垂直な赤い跡を残した。これでモリーは最初の一撃を忘れてしまうほど驚いた。

幸い、息を吸った後、モリーはソファの上で体勢を保つことを思い出した。その赤い跡は、モリーがお尻を鋭く蹴られたかのような錯覚を作り出した。ママは再び一定のトントンを始めた。「それは法律違反よ、モリー。もし捕まったらどうするの？」

「警察… 警察は禁酒法なんて気にしてないよ。ほとんどはパディー（アイルランド系）だ。みんな酒を飲んでる。」

ママは全力に届かない程度の素早い平手打ちを加えた。ひどく刺すが、モリーは叫びを抑えることができた。ママはスリッパを高く掲げた。「警察が何をしようと言おうと関係ないわ。それは悪魔の飲み物よ、モリー。」

モリーは鼻から鋭い息を吸い、顎を食いしばった（と同時にお尻も引き締めた）。「聖書にも… 聖書にもワインは出てくるよ！」

ママはモリーの引き締まったお尻に全力の平手打ちを四発加えた。「罪！ の！ 巣！ 窟！ で！ は！ な！ い！」

それぞれの平手打ちにわずかに跳ねながら、モリーは沈黙を守り、スリッパの底が引き締まったお尻で跳ね返るのを感じて心の中で微笑んだ。もしこれがパドルや杖だったら、お尻を引き締めることであざができたかもしれないが、モリーはスリッパなら耐えられると知っていた… 少なくともしばらくは。

「その… 酒場では踊りだの、評判の悪い男たちだのがあるんでしょ？」

モリーは無理に目を開け、涙をこらえて瞬きをした。「聖書にも踊りは出てくるよ。」

ママは別の下向きの一撃を加え、最初のものに合わせてモリーの右の尻の半分に垂直な赤い靴跡を残した。「聖書には姦淫も出てくるけど、それは依然として罪よ。そんな男たちのうち何人と寝たの、モリー？」

モリーは唸った。「ゼロよ！ 誰とも寝てない！」

別の一撃がモリーのお尻の中心に狙って加えられた。「どうして私にそれがわかるの、モリー？ あなたが婚外で妊娠して帰ってきたら？」

モリーは頭をクッションに沈め、悲鳴を和らげようとして失敗した。「絶対にそんなことしてないって誓うよ！」

ママはモリーの左下の座る部分、臀部と上腿がつながる場所に上向きの一撃を加えた。「あなたは前に私たちに嘘をついたことがあるわ、モリー。」

「嘘なんかついてない！」

モリーは右下の座る部分に同じ上向きの一撃を感じた。
「あああ！ お願い、ママ！ 本当のことを言ってるんだ！」

二回の素早い一撃。一回はモリーの左太ももに、次は右に、お尻よりかなり下に。衝撃の音は先の平手打ちよりも鋭くパチンと鳴った。モリーは蹴り、自分の足がスリッパに当たるのを感じた。

ママはモリーの足を払いのけ、左手をモリーの腰の下に押し付け、できる限り速く強く叩き始め、モリーの下臀部に集中した。「蹴る！ の！ を！ やめ！ なさい！ じっと！ しなさい！ さも！ ない！ と！ ベルト！ よ！」

パニックになって、モリーは蹴り始め、より多くの体重を肘にかけた。「嫌だ！ お願い！」

ママはこれまでで最も強い二発を加えた。「じっと！ しなさい！」

モリーは声を裏返して金切り声をあげ、二つの涙が目からこぼれ落ちた。

「もうたくさんだ！ パパ？ 彼女を叩いて！」

モリーの目が見開かれ、彼女は無理に足を床に戻した。
「やめて、パパ！ やめて！ ベルトは嫌だ！ じっとする！ お願い！ ただ怖かっただけなんだ！」

「静かに！」パパが吠えた。

モリーもママも口を閉ざした。

パパはカチッという音とともにベルトの留め金を外し、ループから引き抜いた。モリーは彼がそれを折りたたみ、両手でしっかりと握るのを見て唇を震わせた。「ママ、ずっと叩き続けてたら、彼女がじっとできるわけがないだろ。ペースを落として、従う機会を与えろ。」

ママはスリッパをモリーの突き出したお尻に向けて振った。「あなたは彼女の味方をするの？ 彼女は頑固で意地悪な――」

パパはベルトをパチンと鳴らした。「お前にもベルトを叩き込む必要があるのか、女？」

ママは固まった。「… いいえ、パパ。」

パパはうなずいた。「なら、いつ私が娘にベルトを叩き込む必要があるか、私に指図するな。さて、お前は…」

モリーは硬直し、パパが結局彼女にベルトを叩き込む必要があると判断したのではないかと考えた。「… もしもう一度ママを蹴ったら、ベルトを叩き込むぞ。おいで！」

モリーはパパが自分の腰を掴むのを感じて緊張したが、驚くほどの優しさで彼は彼女をソファから引き戻し、立たせ、彼女の手をソファの背もたれに置いた。「よし、これで足をしっかり地面に付けておけるはずだ。ママ？ モリーのお尻叩きを終わらせて、自分の感情を抑えろ。」

ママの声は明らかに熱が冷めていた。「はい、パパ。」

今回はママは深く息を吸い、左手をモリーの左手に置き、再びスリッパでモリーの後ろを優しく叩いた。「さて、モリー、あなたはああいう酒場で男と寝回ったりしてないと言うのね？」

モリーはママの目を見て、奇妙な静けさを感じた。「いいえ、ママ。」

ママは一定のトントンを続けた。「信じるわ… でも、もし誰かがあなたの飲み物に毒を盛ったらどうするの？」

モリーはごくりと飲み込んだ。他のフラッパーたちが、たとえ飲み物を鷹のように見張っていても、男が簡単に女に睡眠薬を仕込めるという警告を聞いたことがあった。バーテンダーに金を払って代わりにやらせてくれるような安酒場もあるのだった。「… 私は… 気をつけてたんだ！」

モリーはママがスリッパを上げるのを見て緊張した。しかしママはたじろいだ。「もし連中が集団でお前を襲ったら？ お前がどこにこっそり抜け出したかもわからずに、パパはお前を守れない。」

モリーはしかめ面をし、ママから目をそらした。「… 俺は… 考えてなかった——」

「いいえ、モリー、言い訳はないわ。一度お尻を叩いたのに、また出て行くの… もうしないって言った後で！ あなた

は溝の中で死んでいるかもしれないのに、どうやって私がそれを知るの？ 新聞で読むの？」

モリーはうつむいた。ママはスリッパをモリーのお尻にパチンと当て、それを一定に保ち、モリーの痛む下臀部に軽く押し付けた。「さあ？ 自分について何か言い分はあるの？」

モリーの肩は震えた。「いいえ、ママ。」

ママはモリーのお尻を二回軽く叩いた。「私の目を見て、モリー。」

モリーはこっそりと肩越しに横目で見た。ママはスリッパの底でモリーの頬に柔らかい円を描き始めた。「このお尻叩きを終わらせるわ。それから、二度とこんなふうに逃げ出さないって約束してね。」

モリーは顔をしかめた。「でも、もし行けなかったらどうやって男に出会えるの——」

ママはスリッパで素早く一発加えた。「違うわ！『でも』はなし。ああいうスピークイージーでどんな男に出会えると思ってるの？ 小さな子羊を探す狼よ。そしてもしそのうちの一人が妊娠したって、何だっていうの？ 彼らは町を出て行けばいいだけよ。誰が知る？ それがあなたの望みなの？」

顔をしかめて、モリーは首を振った。「そんなの望んでない——教会には同年代の男の子がいなくて——」

ママは狙いを定めた一発でモリーを遮り、より多くのフォロースルーのために腕全体を使った。衝撃でモリーは前に揺れたが、この姿勢では体勢を保つのがより簡単だとわかった。「教会の男の子なんて関係ないわ！ 前回、もう二度とこっそり抜け出さないって言ったわね。今度は約束を守るの？ イエスかノーかで答えなさい。」

モリーは鼻から鋭く息を吸い、ついに振り返ってママの目をまっすぐに見た。「もし『ノー』って言ったらどうする？ それが何か意味あるの？ もう一度嘘をついたんだ、そうじゃない？」

モリーの驚きに、彼女はママの目に涙を見た。「たとえ前回嘘をついても、今度は本当のことを言ってると信じたいの…」

ママは袖の裏で目を拭った。「お願い… 約束を守ると言って、モリー。」

モリーは突然寒くなった。唯一の音は外の鶏舎から遠くに聞こえる鶏の鳴き声だけだった。「… はい、ママ。約束するよ。」

ママは鼻をすすり、スリッパでモリーのお尻を軽く叩きながら、モリーの手を優しく握った。「そしてその約束を守らせるために叩く必要があるかしら？」

そして突然、モリーは何かに気づいた。もし反抗するつもりなら、どんなに鞭打たれても従わせることはできないのだ。「いいえ、ママ。もう叩かなくていいよ… 覚えてるから。」

ママは震える息を吸い、モリーの手への握りを放した。「なら、満足よ。さあ、立ちなさい！ まだパパに直面しなきゃいけないわ…」

モリーは体を起こしながら前を隠そうとしたが、ママはスリッパで彼女のお尻を軽く叩いた。「… 違うわ、モリー、手は頭の後ろよ。」

モリーは喉に何かが詰まったのを感じた。彼女はすぐには従わなかった。もちろん、子供の頃に鞭打ちを受けた後は手を頭の後ろに上げるように教えられたのを覚えていたが、モリーがこの命令を受けたのは何年もぶりだった。

両手で陰部を覆いながら、モリーは今や自分が十八歳であり、お尻叩きに関しては年齢がまったく問題にならないことを痛感した。彼女はまだ子供だった。

しかしモリーが後ろ側に怒りの痛みを感じると、心は決まった。背筋を伸ばして立ち、彼女は手を上げて頭の後ろに組み、ママとパパ以外の家の中の何かを見つめようとした。

彼女はパパの声を聞いた。優しいハンマーのように。「目を上げなさい、モリー。」

震えながら、モリーはついに顔を上げ、両親が彼女に向き合い、落ち着いた表情を浮かべているのを見つけた。「必要なければもう一度鞭打ちたくない。約束を守れば、ベルトはもらわない。しかしもしまたこっそり抜け出したら… 本物の鞭打ちが何かを見せてやる。わかったな？」

「… はい、パパ。」

パパはしかめ面をした。「もう一つある… 近所の人たちはお前が逃げ出したことを知っている。ムートン牧師の一番年上の息子が、市の伝道所から帰ってくる途中に、お前が駅にこっそり向かうのを見かけたんだ。お前は一週間中、町の噂だった。だから… 今度の日曜日、教会の前と後に、お前を小枝で叩くつもりだ。」

モリーは後頭部を握りしめた。「な、なんで日曜日なの？ お願い、今すぐ終わらせてくれない？」

「なぜなら、人々はお前が間違ったことを知っているからだ。今度はお前が後悔していることを彼らが知る必要がある。彼らの子供たちは、もし父と母を敬わなければ何が起こるかを見る必要がある。」

モリーは手のひらと首に冷たく湿った汗を感じた。「… 見るって——パパ、まさか——家に帰ってから小枝で叩くんだよね？」

パパはモリーに一歩近づいた。「日曜日の朝一番に、ここでお前を小枝で叩く。お前が自ら恥をさらしたことへの罰として。それから、いつものように教会に行く。ムートン牧師は罪の報いについて説教する。酩酊の罪。不服従の罪。お前の罪だ。それから、彼はお前を立ち上がらせ、会衆の前で罪を告白するよう求める。そして許しを求めた後、お前は会衆に、礼拝直後の自分の懲罰を目撃するよう招くのだ。」

モリーは膝ががくがくするのを感じた。「パパ、お願い——」

パパは手を回してモリーの後ろに素早い一発を加えたが、それでさえママのスリッパの最悪の一撃と同じくらい重く恐ろしいものに感じられた。「反論は無用だ。お前が甘やかされているという噂を町中に流すつもりはない。辛いだろう。しかしそれが終われば、ここの人々はお前が正され、許されたことを知るだろう… しかし、それはしっかりとしたお尻叩きでなければならない。」

モリーはその一撃を感じて脚を緊張させ、新しい涙が目に溢れた。瞬きすると、涙が頬を伝うのを感じ、ぼやけた視界で父親を見た。「私… ごめんなさい、パパ！」

モリーの決意が崩れると、彼女は自由に泣き始め、パパが彼女を抱きしめ、続いてママも抱きしめるのを感じた。モリーが抱擁を返すと、彼女はむせび泣いた。「… お願い、お願い、許して！」

パパは彼女の背中を軽く叩いた。「もちろん許すよ、モリー… しかしそれでも代償は払わなければならない。」

うなずきながら、モリーは泣き崩れ、父親の胸に顔を埋め、彼とママにキスをした。彼女を罰から救うものは何もなかった。彼女はそれを恐れ、そして受け入れた。

終わり

サドルソア：兄弟姉妹の対決

第I章：姉としての責務

著：ユー・メイ および ドクター・クリーゲ

［著者注：これは『サドルソア』の世界観とキャラクターに触発された「もしも？」の物語です。正史であるとは限りませんが、キャラクターと世界観の精神によく合致しています。可能な「番外編」のようなものだと考えてください。］

ジェイミ・シュミットはベッドに横たわりながらうめいた。彼女は一日中ひどい頭痛に悩まされていて、実際に今朝の雑用を免除されていた（ただしママは彼女が仮病ではないことを確認するために体温を測ったのだが）。ジェイミは隣の部屋からこもった物音が聞こえて瞬きし、兄弟たちが朝の日課を終えたのだろうと推測した。しかし廊下の向こうからの物音には何か奇妙なものがあった。ジェイミはFワードを聞いたと確信した。それだけで彼女は枕から飛び起きるのに十分だった。

ジェイミはベッドから飛び降りようとしたが、バランスがまだ不安定であることに気づき、もっとゆっくり行動することにした。ドアからこっそり出ると、こもった物音がわずかに大きくなった。それは一つのFワードだけではなかった。それは一連のFワードが続いていた。彼女が知らない高い声の男性の声だった。「ああ、くそ、俺は——」

最後の言葉は途切れ、こもった物音は消えた。ジェイミは疑い深く廊下の下の兄弟たちの部屋を見渡した。一つが目

立った。ジョアンのドアは、華麗なゴシック様式のステンシルと逆さまの銀色の十字架（聖ペテロの殉教を象徴する）、そしてジェイミには読めないいくつかの乱雑な言葉（おそらくラテン語か何か）で装飾されていた。

兄弟がいることの良い点とそうでもない点の一つは、探偵ごっこをするときに憲法上の権利を心配する必要がないことだ。自分を名乗ることなく、ジェイミはジョアンのドアを押し開け、ジョアンがベッドに座ってiPadを弄っているのを見つけた。ジョアンはきゅうきゅうと鳴き、イヤホンのコードに頭を引っかけながら、その端末を紫色の毛布の下に押し込んだ。「ジェイミ？ 何してるの？ 告げ口するからね。お尻叩きの——」

ジェイミはジョアンのベッドに向かって歩き、ジョアンの繊細な手首への掴みを無視して毛布を引きはがした。「——一生ものよ？」

ジェイミはイヤホンジャックを抜きながらiPadを見つめた。アニメーションの漫画が再生されており、奇妙で怪物のようなキャラクターでいっぱいだった。鋭い黄色い歯を持つ毛むくじゃらの白い鼻のない生き物が、文章の途中だった。「——自分自身を、だって？ こういうのはどうだ？ 俺は吸うのが大好き——」

ジョアンがiPadを奪い返そうと手を伸ばすと、ジェイミはそれを高く掲げ、ジョアンの手の届かないところに置いた。奇妙な翼のあるネコ科のキャラクターが画面に現れた。「くそ、もしお前がチンポって言ったら——」

毛むくじゃらの白いキャラクターが答えた。「――アイスキャンディーだよ、変態め！ 頭の中をきれいにしろ！ … でも、チンポもな！」

ジェイミは恐怖で凝視し、すぐに音量を下げた。「ジョアン、このゴミは何？」

ジョアンは一歩下がり、自分の寝室のドアを神経質に見た。「ゴミじゃないよ！ これは… えっと… ただの面白いキャラクタードラマだよ。」

画面にロゴが点滅し、ジェイミはそれをじっと見つめた。「… ヘイズビンホテル？ ちょっと待って、それ聞いたことある。あれはあの悪魔のアニメじゃないの？」

ジョアンは手を振った。「違う違う違う！ それは誤解だよ。ほら、物語は天使と悪魔を中心に展開するんだ。」

「悪魔？ それで、この変な痩せた連中が悪魔ってわけ？ … なんでみんなそんなに尖ってるの？」

「それがアートスタイルなんだよ。ちょっと古風なブロードウェイミュージカルみたいなものだ。ヘイズビンホテルはリハビリプログラムのようなもので、罪人が更生するのを助けるんだ。考えてみれば、クリスチャンの贖罪の物語みたいなものだよ。」

ジョアンを無視して、ジェイミはiPadの音量を上げた。次のエピソードが自動的に再生され始めた。アニメの悪役が吠えた。「… どうやらお前から情報を引き出すしかなさそうだな。」

先ほどの毛むくじゃらの白いキャラクターが色っぽく微笑んだ。「やってみなよ… パパ！」

それから悪役が毛むくじゃらの白いキャラクターをお尻叩きし始め、彼は喜びのうめき声をあげた。ジェイミはiPadを落とした。「何だよ、ジョアン！ これってポルノなの？」

ジョアンはiPadをキャッチし、すぐに電源を切った。「えっと… あれはおそらく文脈の中で意味をなすものだと思うよ。」

ジェイミは腰に手を当てた。「ジョアン、恥を知りなさい！ そんなのクリスチャンが見る番組じゃないよ！」

ジョアンは唇を噛みながら無理に笑った。「だって、パパは見ちゃいけないって言わなかったよ！」

ジェイミはジョアンの目をまっすぐに見た。「じゃあ、パパは見ていいって言ったの？」

ジョアンは肩をすくめた。「私は… 黙秘権を行使するよ？」

「おい、ジョアン。ママとパパがこんな卑猥なものを見るのを認めるわけないってわかってるだろ！」

「ねえ！ 卑猥じゃないよ！ 独立アニメーション史上最大のヒット作の一つなんだよ。とにかく、近いうちにママとパパに聞こうと思ってたんだ。ただ… まずはどんなものか感触を掴みたかっただけ。」

ジェイミはiPadを奪い返し、ジョアンの手の届かない高くにぶら下げた。「ああ、そう？ じゃあ、今すぐ見せに行こう！」

ジョアンは硬直した。「やめて！ そんなことしたら、僕は…僕は…」

ジョアンが言葉を失うと、ジェイミはドアのところで止まり、振り返った。「続けて。」

ジョアンはうつむいた。「… 僕はお尻叩きされるよ。」

ジェイミはうなずいた。「その通りだ。自分が何をしているかわかっていたんだな——待って——どうやってiPadのペアレンタルロックを突破したんだ？」

ジョアンは突然誇らしげに見えた。「ああ、ママが君のためにロックを解除するときに『子供を育てる』っていう箴言を唱えてるのを聞いたんだ。彼女がパスワードを自分に思い出させているんだと思って、聖書の参照箇所を調べたんだ。パスワードは226だ。箴言22:6だからね。」

「そしてその時点で、ちょっと待って、宿題に使うiPadに聖書の知識を使ってハッキングして、悪魔のアニメを見るのはよくないんじゃないかって、一度も考えなかったの？」

「それはハッキングじゃないよ、ジェイミ。」

ジェイミが頭の痛みを感じると、彼女はため息をつき、iPadをジョアンに返した。「わかったよ。告げ口はしない。」

ジョアンは顔を輝かせ、iPadを胸にしっかりと抱きしめた。「しないの？」

ジェイミはしかめ面をし、頭を押さえながら振り返ろうとした。「しないよ。君が自分で言うんだ。僕はベッドに戻る。」

ジェイミが立ち去ろうとしたとき、ジョアンが彼女を止めた。「でも言えないよ、ジェイミ。二人とも出かけているんだ。今日は君が家を見てるんだろ、覚えてる？」

ジェイミは瞬きし、集中しようともがいた。ズキズキする頭痛のせいで部屋が彼女の周りで泳いでいるようだった。「ああ… 何？ それなら、二人が戻ってくるまで待つしかないね。」

ジョアンは首を振った。「違うよ、今日は君が僕の責任者だよ。いいか、ジェイミ、僕は薄氷の上を歩いてるんだ。もし君が僕にパパに話させるなら… 確実に薪小屋行きだよ。君が代わりにお尻叩きをして、早く終わらせてくれない？」

ジェイミはこめかみを揉み、頭の中のズキズキがわずかに収まった。「お、お前を叩くのか？ 僕が？ でも、もうお前をお尻叩きにするのは許されてないんだ。前回の後はね。」

ジョアンは指を一本立てた。「前回君がトラブルになったのは、僕が騒いだからだよ。でも今回は、君は僕の不利益になる証拠を掴んでる。有罪を認めるよ。君が僕がお尻叩きを必要とするって認めて、僕がお尻叩きを必要とするって認めて、君が僕の責任者なら、何が問題なの？」

「問題は許可が必要なんだよ。」

「でも僕は君に許可を与えてるよ、ジェイミ。」

「ママとパパの許可のことだよ、ジョアン。」

ジョアンは神秘的に微笑んだ。「ああ、来いよ、ジェイミ… 君は僕たちが小さかった頃から僕をお尻叩きにしたかったんだろ。」

ジェイミは瞬きし、部屋がついに回転を止めると、彼女はジョアンをしっかりと見た。彼女は今夜家でくつろぐためにゴシック調の黒と紫のパジャマを着ていた。ジェイミはしかめ面をした。「お前がずっとその値段をしてきたからだよ。」

ジョアンはうつむき、恥ずかしそうに見えた。突然、ジェイミは長年にわたってジョアンと交わしたあらゆる兄弟喧嘩と、そのために互いが稼いだお尻叩きのすべてを思い出した。きびきびとした動作で、ジェイミはジョアンの手首を掴み、驚いた妹をベッドへと導いた。

***

一方、漫画版の地獄では、ヘイズビンホテルの寄せ集めのメンバーが激しい議論をしていたが、突然テレビが静電気のバーストで爆発し、画面にアメリカの農場の少女たちが映し出された。

「は？ サドルソア？ そんな馬鹿げた番組名、ありえなくない？」と猫の悪魔ハスクが言った。

アンジェルダストは、数分前にジェイミがiPadで見たのと同じ白い毛むくじゃらのクモの悪魔だったが、手を合わせた。「ああ！ これ大好きなんだ！『大草原の小さな家』みたいな感じで、でも変態的だよ。あるエピソードはお尻叩きシーンで埋め尽くされてるんだ。それに、新しいお尻叩きシーンがちょうど始まろうとしてるみたいだ…」

王女チャーリー・モーニングスターは口をとがらせた。「お尻叩き？ ああ、可哀想な女の子たち！ 彼女たちの可愛い小さなお尻が気の毒だよ。」

アンジェルダストは画面を指さした。「ちょっと待って！ あれがジョアン？ みんな黙れ、これは見なきゃ！ 彼女がついに値するお尻叩きをされるのを、ずっとシーズン待ってたんだ！」

ヴァギーは受動的に画面を見つめ、声は単調だった。「つまり、ジョアンがゴシックっぽい女の子か？ ふーん、お尻を叩かれようとしている女の子にしては、彼女は奇妙に… 冷静だね。気に入ったよ。」

***

ジェイミはジョアンのベッドに座った。座っていても、ジェイミは小柄な妹とほぼ目線が同じだった。ジョアンの黒い前髪が彼女の目に垂れ下がり、彼女は下を向いた。「待って、今始めるの？ 僕たちは——」

ジェイミはジョアンのパジャマのウサギの耳の結び目を解き、一気にそれを引き下ろした。ジョアンの目は大きく見開

かれ、前髪でさえ彼女の表情を隠せなかった。「——待って？」

ジェイミはジョアンのパンティーの装飾に気づいて眉を上げた。それはティーン・タイタンズをテーマにしたもので、アニメのロゴと暗いマントを着たヒロイン、レイヴンの絵があった。「悪よ警戒せよ、我々にはワッフルあり」という言葉がゴシック文字で背面に刻まれていた。ジョアンはすぐに自分のパンティーを視界から隠そうとしたが、ジェイミは妹の手を奪い取り、彼女を前に引き寄せた。「何の意味があるの？ お前がお尻叩きを受けることはわかってるだろ。始めよう。」

ジョアンはジェイミの左足の上にうつ伏せになり、ジェイミは右足でジョアンをしっかりと固定した。脚ロックのお尻叩きの体勢だ。ジョアンのお尻が高く突き上げられると、レイヴンの装飾的な絵とスローガンがぴんと張った。「おっと！ …えっと、先に詳細を話し合えない？ つまり、確かに僕はお尻叩きに値するけど、ちょっとお説教してくれるとか？」

ジェイミは突然、自分がこのお尻叩きの体勢を取るときにどんな感じかはよく知っているが、これまでこの視点から見たことがなかったことに気づいた。ジェイミがジョアンの小柄な後ろを軽く叩くと、彼女が考えられるのは、ジョアンのお尻が射撃場の素晴らしく広い的のように見えることだけだった。ジェイミはジョアンの尻の半分に円を描くように撫で、パンティーのしわを伸ばした。ジェイミは、優しいマッサージがジョアンの下臀部の神経終末を目覚めさせることも考慮して微笑んだ。そこはパンティーのラインの下でわずかに露出していた。「これがお説教だよ。君自身が言った通りだ、ジョー：君が本当に値するのは、生涯最高の鞭打

ちのための薪小屋行きだ。でも、僕が責任者だから、簡単に済ませてやる：厳しいお説教でね。」

ジェイミは腕を高く上げ、最後の文を強調するためにジョアンの右の尻の半分にしっかりとした一発を加えた。ジョアンは叫んだが、痛みよりも驚きのようだった。ジェイミは柔らかなピンクの跡がジョアンの後ろに広がり、すぐに消えていくのを見た。注意深く見つめながら、ジェイミは同様の力でジョアンの左の尻の半分にもう一発を加えた。

今回はジョアンは「ひゃっ！」と小さく息を呑み、それから唇をしっかりと結んだ。

ジェイミは長年にわたって受けてきたすべてのお尻叩きを振り返り、嬉しい気づきを得た。彼女はそれらの二発がどんな感じだったかを正確に知っていた。警告射撃だ。ママがジェイミに、本物のお尻叩きまであと一歩だと警告するために与えるようなものだ。

最初の二発の平手打ちには弱々しいところは何もなかった。ジェイミは無意識に力を加減していたわけではなかった。しかし今、彼女は意識的に力を加減する必要がまったくないことを知った。

ジェイミは両方の平手打ちが十分に刺したと確信していたが、ジョアンに実際に印象を与えるには… もっと活力を込めなければならなかった。

ジョアンは鋭く息を吐き、自動的にべらべらと話し始めた。「わかった、しっかりした最初の一投だ。もう教訓は学んだと思うよ。ああいうのを十回くらいやれば——」

ジェイミは野球のピッチャーが速球を投げる準備をするように腕を振りかぶり、ジョアンの右の尻の半分に響き渡る一発を加え、しっかりとフォロースルーするようにした。ジョアンは叫んだ。「いった！ わかった、確かに十分強い。ママのお尻叩きと同じくらい強い。君は――」

ジェイミは異なる振り方を試し、肘をしっかりと曲げてから手を前方に突き出し、開いた手のひらでジョアンの左の尻の半分に打撃を与えた。ジェイミは、自分の二度目の平手打ちが最初の野球のピッチの平手打ちというよりは格闘家のジャブのようなものだったことに気づいた。彼女は、その力がジョアンの驚くほど固い大殿筋を通して反響するのを感じて、奇妙な感覚を味わった。ジェイミがこのお尻叩きをどうやって行うかを考えると、楽しい考えが彼女の心を満たした。「… たくさんの可能性がある！」

ジョアンは叫び、呼吸を一定に保とうとした。「ふぅー！ わかった！ 要点はわかった！ 君はママより強く叩く！ もう十分強い！ 全部――」

次の平手打ちが加えられると、ジョアンは最後の言葉を叫び、それから一発ごとに制御不能に叫び始めた。「痛い！ ああ！ いった！ いったあ！」

ジョアンは何かをつぶやこうとした。おそらくは絞首刑のユーモアを利かした賢い試みか、あるいは慈悲を求める必死の合理的な議論かもしれないが、ジェイミは気にしなかった。ジェイミに聞こえたのは、パチン… パチン… パチンという美味しい音楽的な音だけだった。

ジェイミがお尻叩きのテンポを上げると、彼女は単純な本能で一定のリズムを保つ方法を発見した。長年にわたって自分の後ろ側を叩かれる側で過ごしてきた後——時には反抗的に抵抗し、時には従順に横たわり、しかし常に無力で、素っ裸のお尻がママやパパが与えるすべてを受け止めるだけだった——ジェイミは今、お尻叩きを与えることがどれほど楽しいかを実感していた。

そしてその瞬間、ジェイミは奇妙な感謝の気持ちを感じた。彼女は長年にわたって受けてきたすべてのお尻叩きに感謝し、ついに自分がその番であることに感謝していた。

そしてジェイミが妹のお尻が容赦ない平手打ちの下で跳ねたりピクピクしたりするのを見ると、それが徐々に柔らかなバラ色に染まり、黒いパンティーと鋭く対照的になるのを見た。息を呑んで、ジェイミは静かな祈りを捧げた。「神様、ありがとうございます。私をお尻叩きしてくれるほど愛してくれる両親をありがとうございます。私が受けてきたあらゆるお尻叩きをありがとうございます。今、何をすべきかがわかるからです。そして、ジョアンを妹として与えてくださりありがとうございます。そしてジョアンにこの可愛い、いたずらなお尻を与え、この可愛い、いたずらなお尻を赤く生々しく叩く機会を与えてくださりありがとうございます。どうか神様、今この瞬間、私が正しく彼女を叩くのを助けてください！」

ジェイミが最後の一撃をジョアンのお尻の中心に鋭いパチンという音とともに加えると、ジョアンは跳ね上がり、前髪が激しく舞い、首を振った。「ああ！ わかった、わかった！ ごめん！ もう二度としない！」

ジェイミは鼻歌を歌い、可愛らしい満足げな微笑みを浮かべ、ジョアンのお尻を軽く叩き、そこから放射される熱を味わった。「うーん… 信じるよ。よし、ウォームアップはこれで十分だろう。」

ジェイミはジョアンを立たせ、ジョアンが素早く二つの小さな涙を目から拭い去るのを見て、小さな光の輝きを見つけた。ジョアンが硬直すると、彼女の目は理解が広がるにつれて大きく見開かれた。「え？ ウォームアップ？ あれが本番じゃなかったの？」

ジェイミは心が膨らむのを感じた。彼女は突然、ジョアンに対する新鮮な愛と同情の波を感じた。彼女は妹が何を経験しているかを正確に知っていた。恐怖、恥ずかしさ、不快感。しかしジェイミは自分の責務も知っており、それはまるで宇宙が突然彼女にとってより理にかなったものになったかのようだった。もちろん！ これがママとパパがいつも彼女をお尻叩きにする理由だった。お尻叩きが必要ないたずらなお尻があり、それが適切に叩かれるのを確認することが自分の喜びに満ちた責務であると知ることは、あまりにも正しいと感じられた。「もちろん違うよ、バカ。慈悲を示しているからって、愛の一撃で済ませるわけにはいかないだろ。私たちの誰かが寝室のプライバシーの中でお尻叩きを受けるときに何が起こるか、君は正確に知ってるだろ…」

ジェイミはジョアンのティーン・タイタンズのパンティーの両側をつまみ、それを引き下ろした。「… 私たちは素っ裸のお尻に直接お尻叩きを受けるんだ——値する通りに——父と母を敬わなかったことで。」

ジョアンはきゅうきゅうと鳴き、片手でシャツの前を引き下ろし、もう一方の手で露出した後ろを覆った。「待って！ これはやりすぎ——」

反射的に、ジェイミは片手でジョアンの手首を掴み、もう一方の手を回して彼女の下臀部にしっかりとした一発を加えた。ジョアンは子犬のようにきゃんと鳴き、それから狂犬のように唸り、腕をひねってジェイミの掴みから逃れようとした。「——ああ、痛い！ おい、離せ！」

ジェイミは硬直し、自分が小柄なジョアンよりそれほど強くないことに気づいた。二人が一緒にテコンドーのクラスを受けたとき、彼らはいつもスパーリングでほぼ完璧な互角だった（ジェイミが51勝、ジョアンが49勝でリードしていた）。理由はわからないが、ジェイミはジョアンを脇の下で抱え上げ、彼女を床から数インチのところにぶら下げた。「もう十分だ。ジョアン、お前がこれを望んだんだ。」

ジョアンは硬直し、拳を脇にぎゅっと握った。ジェイミは妹の顔を見ただけで、ジョアンが自分を殴る誘惑に抵抗しているのがわかった。ジェイミは顔を平静に保った。もしジョアンが喧嘩を始めたいなら、今それを止めることは何もできないとわかっていたからだ。

ジョアンは歯を食いしばった。「でも… そんなつもりじゃ…」

「『でも』はなし。そして『お尻』を手で覆うのもなし。手順はわかってるだろ。俺が話している間、手は頭の後ろに。」

優しく、ジェイミはジョアンを再び床に立たせた。彼女の安堵に、その小さな母性的なジェスチャーは効果があったよ

うだった。ジョアンはそわそわし、それからゆっくりと手を上げ、指を頭蓋骨の後ろで組み合わせた。はっとして、ジョアンは膝を揃え、わずかに前かがみになってパジャマのシャツの前が少なくとも彼女の慎みの一片を保てるようにし、それから赤らんだ顔を高く上げてジェイミの目を見た。

ジェイミはその光景を見て一瞬笑いを誘われた。ジョアンの姿勢は、トイレに行きたくてたまらない小さな女の子がトイレダンスをしているのを思い出させた。しかしジェイミはジョアンの窮状に同情の念を感じた。自分もあまりにも頻繁にまったく同じ立場に立たされたことがあるので、ジェイミはジョアンの屈辱を必要以上に悪化させないことに決めた。
「そうこなくちゃ。さて、ジョアン、ママやパパが真剣な話し合いをしなければならないとき、私たちが普通に受けるお尻叩きは何だったっけ？」

ジョアンの言葉は喉に詰まり、彼女は自分に答えることを強制した。「えっと… 私たちは普通、道具でお尻を叩かれるよね。ハンドパドルとか、ヘアブラシとか。」

「そうだ。そして打撃の回数は通常、年齢の二倍だ。」

ジョアンは肩をすくめた。「いつもそうとは限らないよ？」

「そうだ。反抗を示せばそれ以上になることもある。でも君は十四歳だから、最低でも二十八回のしっかりとした打撃だ。そうだろ、ジョアン？」

ジョアンは緊張した笑みを浮かべた。「そうだね。でも、もし君の腕が疲れたなら、十四回にして終わりにしてもいいよ？」

「俺の腕は大丈夫だ。そして『終わりにする』つもりはない。ママかパパが君に与える最低限のお尻叩きを与えるつもりだ。そして二人が帰ってきたら、状況を全部説明する。君はなぜ今日俺が君をお尻叩きにしなければならなかったかを正確に話すんだ。」

ジョアンは二度瞬きし、新しい恐怖の表情が彼女の顔に広がった。「な、なんで… 言うの？」

ジェイミはぶっきらぼうにうなずいた。「そうだよ。全てを告白した後、もしかしたら、パパが君の後ろ側を見て、今日はもう十分叩いたと判断するかもしれない。」

ジョアンの恐怖の表情は大きくなったが、今は憤りと混ざっていた。「でも… ずるいよ！ 君がお尻叩きをしてくれるなら、この件はもう持ち出さないって約束しただろ。」

ジェイミは腕を組んだ。「そんな約束はしてない。君はパパとの薪小屋行きに値すると言った。そして私の謙虚な意見では、それが君に値するものだ。でもそれは私が決めることじゃない。もしパパがもう十分叩かれたと判断したら、それでいい。もしもう一度お尻叩きに値すると判断したら、それでいい。どちらにしても、父さんが公平な罰だと思うものを正確に受けることになる。」

目を細めて、ジョアンは口をとがらせた。「そんなつもりだって知ってたら、君にお尻叩きさせるなんて絶対に承諾しなかったよ。」

ジェイミは一本の人差し指を立てた。「それが問題だ。今でも、君は責任を取ることを逃れようとしている。お尻叩きは刑務所からの逃亡カードじゃない。それは正義の罰であるべきだ。私たちはただ… 自分の罪を永遠に秘密にして、捕まらないことを願うわけにはいかない。」

ジェイミはごくりと飲み込み、夜遅くに自分自身をお尻叩きにしようとするすべての秘密の試みと、すべての危うい瞬間を思い出した。努力して、ジェイミはA.W.A.N.A.クリスチャンスカウトプログラムのメンバーとして暗記した聖句の一つを唱えた。「あなたの罪は必ずあなたを見つけるだろう。」

ジョアンは姿勢を正し、誇らしげに顎を上げた。「つまり、君は僕を売るつもりなんだな。」

それは質問ではなく、宣言だった。

ジェイミは首を振った。「違う、僕はしない。君がパパとママに自分のしたことを話すんだ。彼らは真実を知るに値するからね。彼らがいつも公平であることを信頼できるってわかってるだろ、ジョー？」

ジョアンはため息をつき、初めて、少なくとも少しは悔い改めたように見えた。「わかってるよ… でも、どうせ自分から申し出なきゃいけないなら、ここでお尻叩きをやめないか？どうせ薪小屋行きになるんだろ、それってやりすぎじゃない？」

ジェイミは微笑んだ。「それも考えたよ。君が薪小屋に値すると思うけど、ジョアン、そんな運命を君に望んではいな

い。もしパパに、もう君をしっかりと叩いたって言ったら、十分に罰せられたと言う可能性が高くなるって考えなかったのか？」

ジョアンは再び口をとがらせたが、今回は反抗的というより遊び心があった。「君の論理には反論できないよ… でも気に入ったふりはしない。」

ジェイミは背筋を伸ばしてジョアンの上にそびえ立った。「もう一度、口答えなしでやってみよう。君のドレッサーにヘアブラシはあるか？」

ジョアンはジェイミをにらみつけ、それからうつむいた。「あるよ、ジェイミ。」

ジェイミはドレッサーを指さし、ジョアンが手を下ろしてお尻を覆う前に彼女の腕を軽く押した。「取ってきなさい。そして言うまで手はそのままにしておくんだ。」

ジョアンは見下ろして自分の衣服の乱れを確認した。パジャマのシャツの裾は前をかろうじて覆っていたが、降伏の姿勢のおかげで、シャツの後ろは持ち上がり、危うくお尻の上に乗っていた。レイヴンをテーマにしたパンティーは、ジェイミが残した場所、お尻のすぐ下に逆三角形に垂れ下がっていた。ジョアンは間違いなく、十代の不安に満ちた表情でジェイミをじっと見つめた。「せめてシャツを直してもいいですか、ママ？」

ジェイミは腕に指をトントンと叩き、すぐにジョアンを掴んでお尻叩きの第二ラウンドを始めたい衝動を抑えた。「ダメだ。手はそのままだ。」

ジョアンは唇をすぼめて自分の窮状を考え、それからゆっくりと振り返った。振り返り終えたちょうどその時、ジョアンは肩をすぼめ、シャツの後ろが垂れ下がって、露出した明るいピンクの満月を部分的に覆った。ジョアンは肩越しに小悪魔のような表情を浮かべた。「おっと。手を下ろして、シャツを戻してあげましょうか、ママ？」

ジェイミは鼻から口笛のような息を吸い、より強調して言葉を繰り返した。「ダメだ。手はそのままだ。」

ジョアンの微笑みは消え、彼女が前に進もうとすると、パンティーが滑り落ち始め、パジャマのズボンが足首のあたりにたまっていることに気づいた。必死に、ジョアンは太ももを押し合わせ、短くよちよちとした歩きで前に進んだ。

三歩の後、ジョアンのパンティーは垂れ始め、太ももの半分まで滑り落ちた。ジョアンは止まり、パジャマのズボンを脱ぎ出そうとした。彼女は片方の脚をほとんど引き抜いたが、足首が引っかかり、数歩よろめいた。「おっと！」

ジェイミは手を伸ばしてジョアンの腰を支えた。「おい。大丈夫か？」

ジョアンは唇を噛んだ。「大丈夫だよ。ただ——」

ジェイミはジョアンを直立させ、彼女の手を再び降伏の体勢に導いた。「よし。手は頭の後ろに。」

ジョアンは体をひねり、脅すようにジェイミをにらみつけた。「せめてズボンを直してもいい？ こんな格好じゃ歩けないよ。」

今度はジェイミが微笑む番だった。「ちゃんと歩けるよ。お前のケツをちらりと見るのを心配するな。すぐにたくさん見ることになるんだから。いい子にして、まっすぐドレッサーに歩いていけ。」

歯を食いしばりながら、ジョアンはまっすぐにドレッサーに向かった。片方の裏返しになったパジャマの脚が後ろで引きずられているのを感じた。ジョアンがドレッサーの前で止まると、パンティーが膝のあたりに引っかかっているのを感じ、自分がジェイミの愉快な視線にどんな馬鹿げた姿を晒しているかを知った。「ようやく手を下ろしてもいいですか、ママ？」

ジェイミはベッドに再び座り、その声は蜜のように甘かった。「もちろん。どうやって、お前のケツをぶっ叩くために使うヘアブラシを取るつもりなんだ？」

ジョアンは引き出しを勢いよく開け、黒いエボニーのヘアブラシを掴んだ。彼女は兵士のように振り返り、ジェイミに立ち向かうように行進した。パジャマのズボンはついに彼女の足から外れ、古いアニメの囚人の足首に巻かれた玉鎖のように引きずられていた。ジェイミはジョアンの唇が震えているのを見て、その瞬間を置いた。

ついに、ジェイミは手を差し出した。「ヘアブラシを渡せ、ジョアン。」

ジョアンはそれを前に突き出した。それは明確に彼女が激怒していることを示すのに十分な荒さだったが、公然の反抗にまでは至らなかった。ジェイミはヘアブラシを受け取った。「さあ、ズボンとパンティーを脱ぎなさい。蹴り始めたら絡まりたくないだろう。ベッドの脇にきちんと畳みなさい。」

「ああ！ もう終わりにできないの？」

ジェイミはヘアブラシの滑らかな表面を手のひらに叩きつけ、鋭いパチンという音を立てた。「それで追加の二発だ。早く終わらせたいなら、ためらわずに従え。」

ジョアンはうなずき、パジャマのズボンを脱ぐために前かがみになった。「わかった、ちょっと待って。」

"三つ。"

ジョアンは混乱して顔を上げ、ジェイミが三本の指を立てているのを見た。それからジェイミは四本目の指を立てた。「四。」

すぐに、ジョアンは理解した。ママはシュミット家の誰かが避けられないお尻叩きを遅らせようとしたとき、いつもこの手を使っていた。一秒ごとに追加の一発を意味した。ジョアンは裸の足をパジャマの脚から振り抜き、それから座ってパンティーを脱いだ。

ジェイミは瞬きもせずに五本目の指を立てた。「五。」

ジョアンはパンティーを投げのけ、立ち上がろうとよろめき始めた。「わかった！ 行くよ、行くよ！」

ジェイミは鋭いパチンと手を鳴らし、一本の指を立て、それから二本目を立てた。「六… 七」

ジョアンは突然、ズボンとパンティーを畳む命令を思い出し、捨てた衣服を掴み返し、きちんと畳んだ。

ジェイミは二本の指を脅すように揺らし、それから三、四と数えた。「八… 九…」

ジョアンは畳み終え、背筋を伸ばして立った。「わかった、わかった！ 終わったよ！」

ゆっくりと、意図的に、ジェイミは四本目の指を掲げ、それから五本目を掲げた。「十… そして十一。違う、『わかった、わかった』じゃない。言われたらすぐに、ためらわずに言われたことをするんだ。ママやパパの前であんな真似をしたら何が起きるか、お前はよく知っている。遅い服従は不服従だ。薪小屋行きが欲しいか？」

ジョアンは首を振った。「嫌だ！ パパに言わないでくれ！」

「もうとっくにその時点を過ぎている。もし態度を改めなければ、自分でお前を薪小屋に連れて行ってから、お前がずっと手強いやつだったとパパに言うぞ。態度を改める準備はできたか？」

ジョアンはうなずき、反射的に手を頭の後ろに上げた。「はい、ジェイミ！」

「このお尻叩きの残りの間は、『はい、ママ』と『いいえ、ママ』で通すぞ。そして『いいえ、ママ』を使おうとする前に、それが本当に正しい答えかどうかよく考えろ。お前が受けるべきお尻叩きを受け入れる準備はできたか、ジョアン？」

ジョアンの目は涙で潤んだ。「はい、ママ。」

ジェイミはヘアブラシで合図し、それをジョアンの腰に沿って滑らせた。「では、後ろのシャツを持ち上げて、全部上げて、私の膝の上に来なさい。」

ためらわずに、ジョアンはシャツを持ち上げ、ジェイミの引き締まった左太ももの上に体を乗せた。ジョアンの脚はジェイミの膝の両側に無力に広がり、ジェイミは自分が最後にまさにこの体勢をとって木製のヘアブラシを味わったときに感じた露出と無防備さを痛感した。ジェイミは、自分が何かのビデオゲームのキャラクターだとぼんやり認識した悲しげな漫画の猫のぬいぐるみを見つけ、それをジョアンに手渡すために手に取った。「これをしっかり抱きしめなさい。お尻を覆おうとするより、これにしがみつくものができるよ。」

ジョアンは惨めにそのぬいぐるみを見たが、それでもそれにしがみついた。「お願い… ごめん…」

ジェイミは腕をジョアンの腰に巻き付け、彼女を自分の腰に引き寄せた。「今はそう言うけどね、ジョアン、君は罪を犯した。故意に罪を犯したんだ、それが罪だと知りながら、そしてそれを隠そうとした…」

ジェイミは自分の秘密の罪を思い出して止まり、震える息を吸い、エボニーのヘアブラシの滑らかな背をジョアンの震

える臀部に沿って撫で始めた。「... でも、最初にこのお尻叩きを頼んだのは、心の奥底で君がそれを必要としていると知っているからだと思う。そうだろう？」

すすり泣きながら、ジョアンは泣き言ではなく、悲しみに満ちた声で答えた。「はい、ママ。」

ジェイミはうなずき、ジョアンのお尻の中心を軽く叩いた。まだ先のお尻叩きの陽気なピンク色をしていた。「でも、それは簡単に済ませられるという意味じゃない。最初は二十八回の打撃だった。足を引きずったおかげで、今は三十九回だ。聖書では、犯罪者の最大刑罰は四十回の鞭打ちから一回引いたものだというのを知ってるか？ つまり、もしこれ以上打撃を稼いだら...」

ジェイミはヘアブラシを素早く二回、交互にそれぞれの尻の半分に叩きつけた。「... このお尻叩きを止めて、お尻を休ませなければならない。それから中断したところから再開し、最初からやり直しだ。もう一度手のお尻叩き、そしてもう三十九回の鞭打ち。ただし今回は、薪小屋に連れて行ってパパのかみそりのストラップを使う。それが望みか？」

ジョアンはおとなしく首を振り、ジェイミを見なかった。「いいえ、ママ。」

ジェイミがヘアブラシを高く掲げると、ジョアンの臀部が震えているのに気づき、ためらってヘアブラシを置いた。「震えてるね。一緒に祈りの言葉を唱えよう。」

ジョアンは小さな泣き言のような声を出した。「そ、それって… 何？」

ジェイミはジョアンの後ろ側を優しく撫で、産毛が逆立っているのを感じた。先のお尻叩きの温かさにもかかわらず、ジョアンのお尻はまだ鳥肌が立っていた。「祈願だ。神様に、君がこれを乗り切れるように助けてくださいと祈るんだ。私が始める… 親愛なるイエス様、どうか妹のジョアンを助けてください。彼女が罪を犯し、足りなかったことを知っていますが、彼女はもっと良くなりたいと思っています。このお尻叩きが、両親に従わなかったことの永続的な教訓となり、彼女が勇敢にそれに耐えられるよう助けてください。そして、ママとパパが私にしてくれるように、私が彼女をうまく叩けるよう助けてください。」

ジョアンはすすり泣き、長く震える泣き言で答えた。ジェイミはジョアンのお尻を撫でた。「何か付け加えたいことはあるか、ジョー？」

「ごめん、わかった？ ただのアニメだったんだ！」

ジェイミは注意を引くために優しい愛の一撃を加えた。「まだ言い訳をしているなら、本当に後悔してるわけじゃないな。」

ジョアンは足を蹴ったが、明らかに逃げられる見込みはなかった。それはむしろ絶望のジェスチャーだった。「叩かないでくれ… お願い…」

しかめ面をして、ジェイミはエボニーのヘアブラシを手に取り、冷たい木の表面をジョアンの緊張した臀部に擦りつけ

た。「ダメだ。もうとっくにその時点を過ぎている。何があってもお前は値するお尻叩きを受けるんだ。だから、神様に心にあることを話してみたらどうだ？」

ジョアンは木製のヘアブラシを感じてピクッと動き、それから足を下ろした。「私… 許可なくアニメを見たのは間違いだったとわかってる… それが罪だったとわかってる… 本当にごめん、ジェイミ。僕はただの失敗作だ。家族の厄介者だ。」

ジェイミはヘアブラシをジョアンのお尻に二回、柔らかなチクチク感を起こすのに十分な力でポンと叩いた。「自分を責めるな。お前は失敗作でも厄介者でもない… たとえ少し厄介者だったとしても、それでも愛してるよ。イエス様はまだお前を愛してるからね。聖書には、良い羊飼いが一匹の小さな子羊を失ったら、群れを離れて迷い子を探し、無事に連れ戻すと書いてある。それが私たちだ、ジョアン。私はいつもお尻叩きをされるけど、イエス様はいつも私を許し、もう一度やり直すのを助けてくれると知っている。」

ジョアンは腕に鼻を拭い、声は少しひび割れていたが、よりはっきりと落ち着いていた。「わかってるよ… ただ、あまりにも忘れてしまうのが嫌なんだ…」

ジェイミはジョアンの全身が硬直するのを感じた。しかしジェイミがヘアブラシの平らな面をジョアンの緊張した臀部に押し当て、優しく小さな円を描くように擦ると、ジェイミはジョアンがようやくリラックスし始めるのを感じた。「神様に話してみたら？ 聖書には『あなたの重荷を主にゆだねよ。主はあなたを支えてくださる』とある。何と言いたい？」

ジョアンはぬいぐるみを抱きしめ、それに顔を埋めた。「従わなくてごめんなさい！ 隠そうとしてごめんなさい！ ごめんなさい、神様！ ごめんなさああい… お、お願い、イエス様、お、お尻を叩かれるときにじっとしていられるように助けてください！」

ジェイミはヘアブラシを高く掲げ、標的に集中し、次の一撃を視覚化し、深く制御された息を吸った。「アーメン。」

ジェイミはヘアブラシを振り下ろし、ジョアンの左の尻の半分の中心に響き渡る大きなバシッという音を轟かせた。ジョアンが自分の本当の罰が始まり、簡単には済まされないと気づくと、不運なゴス少女は轟音をあげた。彼女が姉の腕に必死に抵抗すると、彼女の黒い前髪が彼女の顔の周りで激しく舞った。「ああああ！」

しかし、乗馬牧場で何年も鍛えてきたおかげで、ジェイミはジョアンを鉄の握りで押さえつけた。

二回目のヘアブラシの一撃がジョアンの右の尻の半分の中心に轟音を立てて振り下ろされると、彼女は同じくらい大声で叫んだが、驚きというよりは憂鬱からだった。「うわああ！」

ジョアンは最後にもう一度のたうち回り、それからうつ伏せになり、頭と脚はリラックスした休息に沈むかのようだった。まさにその時、ジェイミは三回目の一撃をジョアンの下臀部の真ん中にパチンと音を立てて狙った。ジョアンは甲高く金切り声をあげたが、もがくことはなかった。

ジェイミは自分が担当する少女から戦意のほとんどを叩き出したことに満足し、左と右の臀部を交互に打つ一・二・一・二の一定のパターンに切り替えた。ジェイミの第一の目標はお尻叩きをできるだけ不快にすることだったが、第二の目標はこれ以上遅らせることなく終わらせることだった。

ジョアンがペースの変化を感じると、彼女は長く震えるような泣き声をあげ、ついにそれが大声のすすり泣きに変わった。ジェイミは次の十八回の打撃をすべてジョアンの下臀部に加え、黙って数を数えた。

間を置かずに、ジェイミは次の二回の打撃をジョアンの左上と右上の太もも、お尻のすぐ下に狙った。ジョアンはすぐに気づき、わずかに身をよじった。成功した闘いの望みはないほど疲れ果てていた。

合図のように、ジェイミはちょうどジョアンがお尻を上げたときに膝を持ち上げ、ジョアンの腰への押さえを確実にした。今やジョアンのお尻はより高く持ち上がり、より鋭い角度がつけられていたため、彼女の座る部分——臀部と太ももの間に隠れた柔らかく敏感な皮膚——はもはや保護されていなかった。

ぼんやりと、ジェイミは自分が誤ってお尻叩きの大団円のためにジョアンの姿勢を修正する方法を発見したことに気づいたが、自分の成果を祝うために立ち止まる時間はなかった。ジェイミはジョアンの青白い座る部分に四回の鋭い打撃を加え、それから止まった。それらが柔らかなバラ色に染まるのを見るのに十分な時間だけ。

容赦ないテンポからの短い休息は、ジョアンに何かが違うことに気づき、彼女を制御不能な泣き叫びから覚ますのに十分な時間を与えた。新鮮な、未だマークのない肉にチクチクする感覚が広がり始めるのを感じると、ジョアンは息を呑んだ。

ジェイミはさらに二回の打撃をジョアンの上腿に狙い、再び止まって、ジョアンに何が待っているかを処理させる時間を与えた。ジェイミは微笑んだ。ジョアンはいつも生意気だったが、彼女が賢いことも否定できなかった。ジェイミは、たとえ痛みの真っ最中でも、妹がそのパターンを掴んでいると確信した。上腿に二回の打撃… 続いて繊細な座る部分に四回の打撃。

ジェイミが次の四回の打撃を加えると、ジョアンの悲鳴が新生児の子犬の鳴き声に似ていることに気づいた。それからジェイミはさらに二回の打撃をジョアンの上腿に加え、目の前の光景を眺めた。ジョアンは臀部を引き締めようとしたが、ジェイミの膝の上にしっかりと押さえつけられているおかげで、悲しげで苦しむジョアンはそれさえもできなかった。ジョアンはシューッと息を吐き、うめき声をあげ、敗北のうちに頭を下げると、彼女はお尻を高く持ち上げ、まるで犠牲の捧げ物として捧げるかのようだった。

ジェイミは自分の前に横たわる、真っ赤でしっかり叩かれたジョアンの素っ裸の後ろ姿を眺めて満足したが、予想通り、ジョアンの座る部分は他の部分と同じ深いイチゴ色ではなかったことに気づいた。微笑みながら、ジェイミは最後の四回の打撃を加え、ジョアンの座る部分がついに後ろ側の残りと一致するようにした。ジョアンの叫び声はクレッシェンド

に達し、三十九回目にして最後の一撃が加えられると、彼女は新しい波の支離滅裂な涙に崩れた。

本能的に、ジェイミはヘアブラシを脇に置き、ジョアンが震える息を吸うのに十分な長さ泣かせてから、彼女を持ち上げて自分の方を向かせた。まだ彼女の膝にまたがったままで。「よしよし。もう終わりだ。よく耐えたよ、ジョー。」

ジョアンは輝く涙で濡れた頬でジェイミを見上げ、それからジェイミの胸に顔を埋め、静かに泣いた。「しぃ… しいいい――」

ジェイミは緊張し、手を回してジョアンの露出した臀部を鋭い警告の愛の一撃で軽く叩いた。「おい！ Sワードは禁止だ！」

ジョアンはひるみ、抱擁から後退した。「ご、ごめん！ も、もう叩かないよね？」

ジェイミはため息をつき、それから腕をジョアンに巻き付けた。「言い終わってないみたいだけどね。でも運試しはするなよ。」

ジョアンは首を振った。「冗談でしょ？ 君はママより強く叩くよ。くそ、ほとんどパパのお尻叩きと同じくらいひどかった。」

「あら？ もっと練習すればパパの記録を破れるかもしれないね… でも、それはしたくないな。お尻叩きを与えるのがこんなに疲れるなんて知らなかった。」

ジョアンはしかめ面をした。「文句言ってるの？ 何、叩かれる側の方が好きなの？」

ジェイミは答え始めたが、言葉が喉に詰まった。「好きなわけない——咳！ ——そういえば…」

ジェイミはジョアンを持ち上げ、彼女の前に立たせた。「手を高く上げて、頭の上に。」

困惑したしかめ面で、ジョアンはゆっくりと手を上げた。ジェイミがジョアンのパジャマのシャツを持ち上げて頭の上に脱がせ、彼女を完全に裸にすると、ジョアンの目が見開かれた。「え？ 今度は何？」

ジェイミは立ち上がってパジャマのシャツを引き抜き、ジョアンのベッドの上に畳んだ。「もちろんタイムアウトにするんだよ… 違う、自分を隠すな。まだ『逮捕中』だから、手は頭の後ろに。」

ジョアンの表情は激怒していたが、それでも彼女は手を頭の後ろで組んだ。「本当に必要なの？ 何の意味が——」

ジェイミは指を一本立てて、小柄な妹を黙らせた。「意味は、何かを反省する時間を与えることだ。君と私は、エデンの園のイヴと同じなんだ。イヴが禁断の果実を、神に従わないことを知りながら、故意に食べたように、今日君は父と母に、自分が何をしているかを正確に知りながら、故意に従わなかったんだ。」

ジョアンは口をとがらせ、ジェイミの指をよけて話そうとした。「ごめんなさいって言ったよ。」

ジェイミはジョアンをにらみ、お尻叩きの時にママがいつも使っている厳しい口調を真似ようとした。「今は後悔してるってわかってるよ、ジョアン。でも次はどうする？ 明日、お尻がそれほど痛くなくなったら、まだ後悔してると思う？」

ジョアンは肩をすくめた。「たぶん？」

「そう願うよ。でも今日は、アダムとイヴのように、私たちが罪を犯したことを考えてほしい。そしてアダムとイヴが善悪の知識を得た後、彼らはついに自分たちが裸であることに気づき、初めて恥を感じた。」

ジェイミは指を離してジョアンが答えられるようにし、その瞬間を置いた。

ついに、ジョアンの目は潤んだ。「つまり… 君は僕に恥を感じてほしい… そして完全に裸でいることを？」

「その通りだ。恥ずかしいことをしたら、自分を恥ずかしく思うべきだ。だから今のままでタイムアウトにする。隅に行って立って、鼻を壁につけるんだ、ジョー。」

ジョアンは壁に並ぶ装飾的なポスターを一瞥し、うめき声をあげて隅に歩いていった。ついに彼女はため息をついた。「… タイムアウトはどのくらい？」

満足して、ジェイミは振り返り、ジョアンのベッドのそばのデジタル目覚まし時計を調べ、ボタンを弄ってセットした。「君がすべてを考えるのに必要なだけの時間だ。タイマーをセットして、後で様子を見に来る。よく考えるんだ、ジョー。

その答えで、教訓がしっかりと身についたかどうかがわかる。」

ジョアンはごくりと飲み込み、舌を抑えた。ジェイミの言葉の強調は、もしその時点で教訓が身についていなければ、ジョアンがさらに深いトラブルに陥ることを明らかにしていた。

ジョアンはすすり泣き、泣きすぎて目が赤く荒れていることに気づいた。それから彼女は背後からジェイミの声が鞭のようにパチンと鳴るのを聞いた。「ああ、それとジョー？ タイムアウトの間にもう一つよく考えてほしいことがあるんだ。」

ジョアンはひるみ、肩越しに振り返り、ジェイミが冷たい裁きで自分を見下ろすのを期待した。しかし代わりに、彼女はジェイミの顔が穏やかなのを見た。「今、自分をどれほど恥じているかに関わらず、私も同じ過ちを何度も犯したことを覚えていてほしい。でもイエス様は私たちの罪の代価を全額支払ってくださった。彼は十字架で大きな恥と苦痛に耐えられた。だから私たちは罪の恥と苦痛から自由になれるんだ。」

ジョアンは自分のお尻を見下ろした。「まるで… 彼が僕の来るべきお尻叩きを引き受けてくれたみたいだね？」

ジェイミは手を組み、聖書の歴史の授業を思い出そうとした。彼女は許可なくパパの銃器庫に触れたことでお尻叩きをされた後、地獄で永遠にお尻叩きをされるのかとパパに尋ね、彼に慰められたのを覚えていた。「そんな感じかな？それとも——私たちがたくさんのスピード違反の罰金を、一

生かけても払いきれないほど抱えていて——彼がその借金を払ってくれた、とか？」

ジョアンはうなずいた。「そうだね… でも、罪を犯しても、許されても、やっぱりお尻叩きはされるんだよね？ 例えば、誤解しないでほしいんだけど、イエス様が罰を引き受けてくれたことは本当に感謝してる。でも、もし彼がすでに私たちの罪の代価を払ったのなら… それでも罪に対してお尻叩きをされるのは変じゃない？」

ジェイミはうなずき始めた。「うーん、それは現世の罰と永遠の罰の区別って呼ばれるものだと思う。パパがここにいれば、もっとうまく説明できたのに。」

ジョアンは微笑んだ。「わかった気がするよ。最近、イエス様が私のために死んでくれたことについてよく考えるようになったんだ。昔はいつも怒ってたんだ。中学生の子たちはもうお尻叩きされないのに、私はティーンエイジャーになってもたくさんお尻叩きされるって。でも最近は、特に… 公立学校のパーティーの件の後は、少し違う見方をするようになったんだ。なぜママとパパが私たちをお尻叩きにしなければならないのか、ようやくわかってきた気がする…」

ジェイミはジョアンの言葉を引き継いだ。「… 私たちを愛しているから？」

ジョアンはすすり泣き、それから燃えるような赤いお尻を見下ろした。「そうだよ… もし正しい理由のためなら、お尻叩きはそんなに悪いことじゃないかもしれない。だから… お尻叩きをしてくれてありがとう、ジェイミ。」

ジェイミは胸に奇妙な膨らみを感じ、目から涙をぬぐった。
「どういたしまして、ジョアン。」

ジェイミが安堵のため息をつくと、彼女は静かな感謝の祈りを捧げた。確かに、お尻叩きは決して楽しいものではないが、ジェイミが耐えてきた何千ものお尻叩きを振り返ると、それらはすべて当然のものであり、両親が彼女に必要なお尻叩きを与えてくれたことに感謝せずにはいられず、それを耐え抜いた自分自身に少し誇りを感じた。

その時、ジョアンの寝室のドアが勢いよく開き、ママが現れた。「お嬢さんたち？ 車を止めたときに騒ぎ声が聞こえたと思ったんだけど。誰か… 怪我をしたの？」

ジョアン、ジェイミ、ママの全員が固まり、部屋中の目がジョアンの真っ赤な素っ裸のお尻に注がれた。ママは眉をひそめた。「ジェイミ、妹に何をしたの？」

第I章 終わり

第II章：私たちの仲直りシャツ

ジェイミはどもりながら、意味の通る言葉の組み合わせを必死に探した。

最初に口を開いたのはジョアンだった。「私のせいです。ルールを破ったから、ジェイミがお尻を叩いたんです。」

ママは腕を鋭く振って、隅のジョアンを指さした。「ジェイミに聞いているの。鼻を隅につけて、一言も喋らないで、ジョアン。」

おそらく、ヒリヒリする叩かれたばかりのお尻と関係があるのだろうが、ジョアンは即座に従った。

ママは腕を組み、ジェイミと向き合った。「さあ、ジェイミ？」

ジェイミは歯を食いしばった。「えっと、ジョアンがやってるのを見つけたんです——あの——やってはいけないことを。」

ママは目を細めた。「それは何？」

ジェイミは助けを求めてジョアンを見たが、妹のカラスのような黒い髪の後ろ姿しか見えなかった。ついに、ジェイミは落ち着くために息を吸い、背筋を伸ばして母親の上に一フィートもそびえ立った。「帰ってきたら、ジョアンにあなたとパパに話させるのを待つと約束しました。」

ママはぶっきらぼうにうなずいた。「それで結構よ。では、パパが帰ってきたときに彼女の話を聞くのを待ちましょう。でも、なぜ自分から彼女をお尻叩きにしたのかは説明されていないわね。」

ジェイミは喉の奥の塊を飲み込んだ。「えっと、ジョーが言ったんです。私が責任者だから、彼女に値するお尻叩きを与えて、それで終わりにすればいいって。」

ジョアンは隅でうなずいた。「そう！ 大丈夫だって言ったんだ！」

ママはジョアンに指を鳴らし、彼女はきゅうきゅうと鳴きながら鼻を壁に押し付けた。ママは数秒間ジョアンを観察し、それからジェイミに戻った。「この家の家長は誰？ あなたの妹？ それともあなたの父親？」

ジェイミは額に冷や汗を感じ、手のひらは湿っていた。「パパがこの家の家長です。」

「では、前回私たちが帰ってきて、あなたがベビーシッターをしている間にジョアンをお尻叩きにしたと知ったとき、パパがあなたに言ったルールは何だったかしら？」

ジェイミはうつむいた。「ルールは… あなたかパパの許可なしに、二度とジョアンをお尻叩きにしてはいけないということでした。でも、もしあなたが知っていたら、許可してくれると思ったんです…」

「もし私たちが、ジョアンが故意に家のルールを破ったことを知っていたら、パパと私は間違いなく彼女を叩いたでしょ

う。もしあなたが電話で状況を尋ねてきたら、おそらく私たちはその件について話し合い、パパが即座のお尻叩きが必要かどうか、そしてあなたに私たちの代理として行動する許可を与えるかどうかを決めたでしょう。でも代わりに、あなたは自分で事を進めた。なぜ電話しなかったの、ジェイミ？」

ジェイミがママの目を見ると、言い訳が喉で死ぬのを感じた。「なぜなら… 私は愚かだったからです。」

ママはベッドの上にあるジョアンの黒いエボニーのヘアブラシを見つけ、それを手に取った。ママがジョアンのベッドに腰掛けると、強調するようにヘアブラシで合図した。「愚かさは子供の心に結びついている…」

ジェイミは木製のヘアブラシから目を離さず、親指をパジャマのズボンのウエストバンドに引っかけて、記憶から箴言を暗唱し終えた。「… しかし、懲らしめるむちはこれを遠ざける。」

一つの優雅な動作で、ジェイミはパジャマのズボンを足首まで下ろし、それを脱ぎ捨て、従順に母親の膝の上にうつ伏せになり、お尻を上げた。ジェイミは、子供の頃から着ている古いオレンジ色のパンティーで、まだ完全には着られなくなっていないものに気づいた。そこにはマイリトルポニーのキャラクター、アップルジャックの絵が描かれていた。

ママはジェイミの漫画のパンティーの上から手のお尻叩きのウォームアップを始めた。手のひらがお尻に当たる一定

のパチンという音以外には、ママからの説教の言葉も、ジェイミからの抗議のささやきもなかった。

数分間、娘の引き締まった後ろ側を平手打ちした後、ママは優雅に下着を滑り落とし、ヘアブラシでジェイミを叩き続けた。その時点から、ジェイミが自分の静かな決意を維持することは不可能になった。ジェイミはロデオにいるときのように叫び声を上げ始めたが、蹴りたい衝動を抑えることはできた。ジェイミの驚くべき自制心のおかげで、彼女のアップルジャックのパンティーはお尻のすぐ下に留まり、慎みの一片以外には何の保護も与えなかった。

専門的な照準で三十二回の猛烈な平手打ちを加えた後、ママは試練を止めた。「ジェイミ、ジョアンにヘアブラシで何回叩いたの？」

息を切らして、ジェイミは涙を拭った。「三十九回叩きました、ママ。」

「そして、ジョアンと同じになるように、あと七回の打撃に値すると思う？」

ジェイミはうなずいた。「はい、ママ。そして、あなたが与えることに決めた追加の罰なら何でも値します。」

ママはブラシの背でジェイミの後ろ側を軽く叩いた。「いい子ね。ではあと七回だ。じっとしていなさい。そうすればすぐに罰の第一段階は終わるから。」

これが罰の第一段階に過ぎないという言葉にジェイミの目は潤んだが、彼女はできる限りじっとしていた。ジェイミは

最後の七回の一撃の後に腰をひねり、脚をそわそわさせたが、ママは説教もせず、動きすぎたことで追加の打撃も加えなかった。シュミット家は子供たちがお尻叩きの最中に従順であることを期待していたが、彼らが人間であることも理解していた。

ついに、ママはため息をついた。「それで十分よ。立ちなさい、ジェイミ。手は頭の後ろに。」

ジェイミは立ち上がり、幼い頃からのお気に入りの幸運のパンティーが太ももの間に挟まっているのを感じると、パンティーを部屋の向こうに蹴り飛ばすまで蹴ったり身をよじったりしなかったことを少し誇りに思った。

それからママは、隅に裸で立っているジョアンを見て、手を伸ばしてジェイミのパンティーを足首まで完全に引き下ろした。「手は頭の上に。あなたがジョアンを生まれたままの姿にしたのだから、お揃いの服装にしましょう。鵞鳥に良いものは… もう一羽の鵞鳥にも良いものよ。」

ジェイミはママが自分のパジャマのシャツをおへその上まで持ち上げるのを感じて赤面した。何が求められているかを知って、ジェイミは腰を曲げて、はるかに背の低い母親が自分のパジャマのシャツを頭の上に脱がせるのを許した。裸にされた瞬間、ジェイミは手を頭の後ろで組んだ。

ママはジェイミの服をきちんと畳んでベッドの上に置いた。「ジョアン、タイムアウトから出てきて、ジェイミの隣に立ちなさい。パパに告白しなければならない前に、あなたたち二人に一言言っておきたいことがあるの。」

ジョアンは隅からよろよろと出てきて、ジェイミと並んで立った。二人の姉妹は降伏の姿勢を鏡のように映し、裸のおかげでそれは彼女たちの体格の違いを際立たせるだけだった。ジョアンの小さなぷっくりしたお尻は普通は吸血鬼のように青白いのに対し、ジェイミのお尻は運動で引き締まり、ショートパンツを履く場所にははっきりとした日焼けの跡が見られた。今はどちらも等しくまだらな赤色だった。彼女たちの皮は文字通り徹底的に焼かれていたのだ。

ママはジョアンのクローゼットの中で何かを探し、だぶだぶの特大の白いTシャツを持って現れた。「あった！ 私が置いた場所にそのままあるわ。よし、お嬢さんたち、通常は家のルールを破っただけでヘアブラシでのお尻叩きで十分でしょう。しかし故意の不服従は深刻な問題です。この件はパパと話し合わなければなりません。彼はあなたたち二人とも薪小屋に行く必要があると判断するかもしれません。それは彼の決断であり、私はあなたたちが彼の判断に従うことを期待しています。わかった？」

二人の少女はおとなしくうなずき、「はい、ママ」とつぶやいた。

ママは巨大なTシャツを掲げ、マーカーで前面に書かれたスローガンを明らかにした。「『仲直りシャツ』を覚えているかしら？ 前回ジェイミに家を任せたとき、私たちが帰ってきたらあなたたちが喧嘩しているのを見つけたわ。つまりこれは再犯ということね。」

ジョアンの口は恐怖で垂れ下がった。彼女は間違いなくそれを覚えているようだった。「またあれを着させられるの？」

「ジョアン・アガサ・シュミット、また言うことを聞かないで。もちろん着なければならないわ。完全に裸で夕食を食べさせるわけにはいかないでしょう。さあ、お互いに着るのを手伝いなさい。」

ジェイミとジョアンは同情を込めて互いを見つめた。ジェイミはとっくに自分に待ち受ける運命に諦めていた。ジョアンは自分の惨めさを顔にありありと表していた。だぶだぶのシャツは二人ともまだ簡単に着られたが、恥ずかしいほど短いミニスカートのようにお尻を覆うのに十分な長さしかなかった。ジェイミの左手は片側で自由になり、ジョアンの右手は反対側で自由になり、まるで滑稽なほど不揃いな結合双生児のような錯覚を生み出した。

ママは舌打ちした。「さて、あなたたち二人とも薪小屋に値すると心から思っているけれど、どちらにもそんな運命を望んでいないわ… そう、ジョアン？ 手を挙げてくれてありがとう。話していいわよ。」

ジョアンの腕は巨大なTシャツの袖の中で泳いでいるようで、彼女の手は空中でためらった。「えっと、もし『パパが帰ってきたらすぐにお尻叩きをするだろう』って言うつもりなら、ジェイミがもうお尻叩きをしたときに全部説明してくれたよ。だから、もし私たちをもう一度叩いて、うまくいけば彼が許してくれるかどうか尋ねるなら、今あなたに叩いてもらうのがいいと思う。」

ママは首を振った。「投票を求めているわけじゃないし、お尻叩きの許可を求めているわけでもないわ。パパが帰ってくる前に、あなたたち二人をちゃんと叩くつもりだと説明しているだけよ。そう、ジェイミ、質問？」

ジェイミは手を挙げながら萎縮した。「でも… 私たち二人とも最大回数のお尻叩きを受けたんじゃないですか？ 聖書では犯罪者は四十回の鞭打ちから一回引いたものを受けるとあったと思うんですが。」

「ありがとう、ジェイミ。それはまったくもって公平な質問ね。あなたのパパと私は聖書の原則に従うことを信じているの。神の律法は、一回の犯罪に対して犯罪者が受けることのできる打撃の回数に上限を明確に定めているのよ。しかし契約法の下では、体罰に使われる道具は三本の紐の革鞭だった。実際には、それは聖書の律法の下では、一回の犯罪に対して鞭打ちの総数が百十七回であったことを意味するわ。

もちろん、あなたたちが年を重ねても、私たちは子供たちにそんなに厳しい罰を必要と感じていないわ。しかし、神の言葉は体罰にとって公平と見なされる上限を提供する一方で、子供が若いうちに罪を犯さないように十分に厳しい体罰を要求していることを覚えておくことが大切なの。

つまり、聖書的な鞭打ちのための薪小屋行き以外のものについては、あなたの父親と私は常識を使って、あなたたち子供たちそれぞれに、その罪に応じて公平な罰を決定しているの。『子を懲らしめることを惜しむな。彼をむちで打っても、彼は死ぬことはない。あなたは彼をむちで打ち、彼の魂を地獄から救い出すであろう。』わかったかしら？」

ジェイミの手は空中で震えた。彼女の背後で、彼女は反射的に巨大なTシャツの下に隠したもう一方の手でお尻に手を伸ばした。「つまり… 律法の下では、百十七回の鞭打ち

まで受けられるわけで、私たちにヘアブラシで三十九回とかを与えるのは、あなたが手加減しているってことですか？」

「その通りよ。あなたたちがまだ若いうちに、私たちは慈悲と正義の両方の意味を示したいの。」

ジョアンは乾いた単調な口調で話した。「すごいな、完全な四十回の鞭打ちから一回引いたものを稼ぐのは嫌だな。」

ママはジョアンをにらんだ。「もともとパパに立ち向かうための正しい心構えにするために十回の打撃を与えるつもりだったけれど、それは二度目の言うことを聞かない発言よ、ジョアン。だから、そうね、あなたたち二人とも、皮肉な態度に対してさらに四十回の打撃から一回引いたものをもらうことになるわ。ジェイミはその無責任さに対してね。でもあなたたちのかわいそうなお尻にとって幸運なことに、私は三本の紐の鞭ではなく、パドルを使うだけよ。」

ジェイミはうつむいた。「でも、百十七回の打撃は必要ないと確信していいんですか？ 何しろ私はジョアンより年上です… もっと分別がある年齢ですから。」

ママはジェイミの頬を撫でた。「悔い改めにおけるあなたの謙虚さは称賛に値するわ、ジェイミ。でも、簡単なパドルでのお尻叩きでメッセージがしっかりと刻まれるには十分以上だと思うわ。あなたは私とパパがあなたを公平に罰するのを信頼してくれる？」

ジェイミは鼻をすすり、先の涙で鼻が詰まっているのを感じた。「はい、ママ。」

ママはジョアンのベッドを指さした。「では、お尻をきれいに見せるために、シャツの後ろを高く上げておきなさい。一緒に協力してその位置を保つのよ。それからベッドの前に立って、適当な大きさのパドルを取ってくるまで待っていなさい。私が戻ってきたときに最初に見たいのは、次のお尻叩きの準備ができて待っているあなたたちの素っ裸のお尻よ。」

ママが部屋を出た後、ジェイミはベッドに向かって一歩踏み出したが、ジョアンが後ろで引きずっているのを感じた。「さあ、ジョー。ママは私たちが体勢を整えて罰を受け入れる準備ができているのを見たがってるよ。」

ジョアンは半分よろめき、シャツのおかげでなんとか体勢を立て直した。「ちょっと待って、君の長い脚のコウノトリ歩きにはついていけないよ。」

いくらか交渉の末、ジェイミとジョアンはベッドの上に体を固定し、後ろのシャツを持ち上げた。最初、ジェイミは不器用に長い脚のせいで膝ががくつき、マットレスにもっとしっかりと体重をかけようと体勢を変えた。ジョアンはむせた。「おい！ 気をつけてよ！ 襟で引きずられてるんだ！」

「おっと！ でもこんなふうにはじっとしていられないよ。スクワットをしてるみたいだ。もしかしたら…」

ジョアンは立ち上がり、ジェイミに従って新しい体勢に移り、ベッドのさらに向こう側に移動した。ジェイミはジョアンの足が後ろで蹴っているのを感じた。「ジェイミ、これじゃダメだ

よ。もし足を床に着けられなかったら、ママがパドルを始めたときにじっとしていられないよ！」

「追加の打撃が欲しくなければ、そうするべきだよ。」

「もし僕が追加の打撃を稼いだら、君のお尻が安全だと思うの？ 僕たちは一緒なんだよ。」

「わかった、わかった、体重を支えるのに十分なスペースをくれ… ここなら、これでいけるかも。」

一緒に、彼らは二人を収容する体勢を取った。ジョアンはつま先で床に触れ、ジェイミは膝をわずかに曲げた馬の構えで自分を支えることができた。ジョアンは口をとがらせた。「ああ。ハイヒールを履いてるみたいだ。もう一回背が伸びないでくれる？」

二人はドアが回る音を聞いて緊張し、ママが十六インチの木製パドルを抱えて部屋に入ってきた。「完璧ね。これ以上議論せずに、準備ができて待っている二つの素っ裸のお尻。それが私たちが必要としているチームワークよ。さて、お嬢さんたち、パドルを始める前に、なぜ罰せられるのかわかってる？ ジョアン、あなたから。」

ジョアンはうめいた。「生意気な口をきいた…」

ママは手のパドルで二人のお尻の両方を軽く叩き、簡単に両方を覆い、ジョアンは硬直した。「… えっと、つまり無礼だったんです、ママ。」

ママは木製パドルを彼女たちの敏感な臀部に沿わせ、新鮮なチクチクする感覚を呼び覚ました。「それでいいわ。そしてジェイミ、あなたはなぜこのお尻叩きを受けるの？」

ジェイミはすすり泣いた。「あなたとパパに従わず、許可なくジョアンをお尻叩きにしました。」

ママは手のパドルを二人のお尻に沿って撫で、彼女たちの頬を少し持ち上げた。「その通りよ。でも、悪い仕事ではなかったわね。適切なお尻叩きの技術を練習する機会をもっと見つけることについて話し合わなければね。それは便利な生活のスキルよ。さて、不服従に対してあなたたち二人にさらに四十回の打撃を約束したけど… 前に『仲直りシャツ』を使わなければならなかったとき、あなたたち二人は喧嘩をやめることを学ぶまで、どんな罪でも一緒にお尻を叩かれたのを覚えているかしら？」

ジェイミとジョアンは互いに顔を見合わせ、その完全な意味を理解した。前回彼らが巨大なシャツを着ることを強制されたとき、彼女たちはどちらかが行儀が悪いと一緒にお尻を叩かれた。つまり、喧嘩の行為ごとに二人とも二回分のお尻叩きに相当するものを得たのだった。二人の姉妹はごくりと飲み込み、「はい、ママ？」と答えた。

ママは再び彼女たちのお尻を軽く叩いた。ジェイミは、ママがジョアンの右側に位置していることに気づいた。つまり、パドルが両方のお尻に当たるとはいえ、ジェイミの左の尻の半分がパドルの最も遠い先端からの打撃の大部分を吸収することになる。ママはため息をついた。「そうね、普通ならそれはあなたたち二人がそれぞれ四十回の打撃から一回引いたものをもらうことを意味するわ… もしまだあの

古いルールに従っていたならね。でも、あなたたちがこんなにうまく協力しているので、代わりにそれぞれ二十回の打撃から一回引いたものを与えるわ。もし体勢を保って、いい子のようにお尻叩きを受け入れられたらね。」

ジェイミとジョアンは二人ともはっきりと息を吐いた。

「ありがとう…」とジェイミが感謝のささやきをした。

「ママ！」とジョアンが急いで付け加えた。

ママはパドルで彼女たちのお尻をよりしっかりと叩き、本物のパドルが始まろうとしていることを知らせた。「二人とも愛してるわ。さあ、強さを求めて短い祈りを唱えて、歯を食いしばりなさい…」

ジェイミが顔を上げると、ジョアンの壁に飾られた額縁の写真が目に入った。それはジョアンがアニメ風のゴシック衣装でイエスの肩にもたれかかっている古い自画像だとわかった。ジェイミは突然、妹を叩いたことに対する新たな罪悪感を覚えた。「罪のない者が、まず石を投げよ…」とジェイミは歯を食いしばりながら考えた。

それからパドルの最初の一撃が加えられ、ジェイミの左の尻の半分全体に広がる鮮やかな赤い長方形の跡を残した。

***

長年にわたって従順にお尻叩きに耐える技術を実践してきたジェイミとジョアンは、追加の打撃を稼がないように決意

していた。しかし、もしママが気の毒に思って少し手加減したとしても、彼女はお尻叩きが痛くなくなるほど気の毒には思っていなかった。十二回のしっかりとした打撃の後、ジェイミは蹴り始めたいという決意が崩れ始めるのを感じ、ジョアンがどうしているか気になった。まるで答えるかのように、ジェイミはシャツの下でジョアンの手が自分の手を握るのを感じ、ジェイミも握り返した。彼女たちは最後の七回の打撃を耐え抜くために互いに手を握り合い、ママは止まってジェイミの左側に歩み寄り、パドルの握りを切り替えた。「それがジェイミの分の四十回から一回引いたものよ。ジョアン、次の半分はあなたにとってより厳しくなるわ。少し息を整えて、準備ができたら教えて。そうすればパパが帰ってくる前にこれを終わらせられるから。」

顔をしかめながら、ジョアンは食いしばった歯の間からシューーッと息を吐き、ゆっくりと息を整えるのに時間をかけた。ジェイミはスリッパの足がトントンと床を叩く音を聞き、肩越しに振り返った。ジェイミがママの顔の表情を見ると、彼女たちはこれ以上遅らせないほうがいいと判断した。シャツの下で、ジェイミは肘でジョアンをそっと小突いた。「準備できました、ママ！」とジェイミがささやいた。

涙をこらえて瞬きしながら、ジョアンはうなずき、空いている右手で紫色の毛布をしっかりと握った。「準備できた」とジョアンはすすり泣いた。

ママはすぐにパドルを始め、ジョアンはその完全な衝撃を感じて悲鳴を上げ、ジェイミは特にジョアンの右の尻の半分がおそらくもうズキズキしているだろうとわかった。

ジェイミはジョアンの手をしっかりと握り、自分をじっとさせ、どうにかしてジョアンが自分の決意の一部を受け取るように願った。どういうわけか、それは効果があった。十五回の打撃の後、ジョアンは自由に泣き叫び、ジェイミは彼女の体が自分の体に震えているのを感じた。しかしジョアンは、十九回目にして最後の打撃が加えられるまで、蹴ったりマットレスを放したりする衝動を抑えた。

ジェイミはため息をつき、二人の前のマットレスに点在する涙の跡を見た。良いお尻叩きはいつも涙で終わる。そしてママは決してそれを与えるのを怠らなかった。

背後で、ママは鋭い息を吐いた。「ふぅ！ よし、お嬢さんたち、満足よ。もちろん、十分に罰せられたか、それともまだ薪小屋に行く必要があるかは、パパが決めることよ。立ち上がってみて。クリップを持ってきたわ。」

ジェイミの目が見開かれた。「クリップ？」

ジェイミの言葉にならない質問に答えるかのように、ママの手はシャツの後ろを持ち上げ、後ろで留めた。「確かに、これはしっかり叩かれた、真っ赤なお尻だわ。間違いない。」

ジョアンの声は泣き言を言うように震えた。「でも… 素っ裸のお尻を叩かれるのはプライベートな時だけって決まりじゃないの？」

ママはパドルを置き、開いた手で彼女たちのお尻を遊び心で叩き、優しく撫でた。「普通はそうね。でもそもそも私たちがあのルールを作ったのは、素っ裸のお尻を叩かれたことでジェイミをからかうのを止めるためだったのよ。状況を考

えれば… その危険はほとんどないと思うわ。さあ、まっすぐ食卓に行きなさい。もう泣き言はなしよ。」

ジョアンの唇は震えたが、彼女はうまく不平を言う衝動を抑えた。食堂では、彼女たちはいつもの椅子を木製のピアノベンチに交換するよう指示され、それを不器用にテーブルの自分の場所まで一緒に運ばなければならなかった。

台所から、ママはドア枠から顔を出して、彼女たちに承認の表情を送り、木のスプーンでスープを一口するところだった。「そうこなくちゃ。座って、夕食の準備を終えるまでパパが帰ってくるのを待っていなさい。今日はミネストローネよ。」

ジェイミが木製のベンチに座ると、燃えるようなお尻の半分が硬い表面に押しつぶされるのを感じ、うめいた。ジョアンはかすかに息を呑むことを選んだ。

ジェイミは最初の不快感の鋭い痛みが治まり、代わりにあのあまりにもおなじみの特徴的な鈍い痛みに変わるのを感じて息を整えた。シュミット家の兄弟たちは皆、それを「お尻の痛み」と呼んでいた。

ジェイミはジョアンに微笑もうとした。「少なくとも、ここまでは来たね。」

ジョアンはスプーンを手に取りながらしかめ面をした。「俺にスープをスプーンで食べさせなきゃいけないってわけじゃないよな？」

ジェイミは自分の前のボウルと二本目のスプーンを見下ろし、それがすでにスープでいっぱいであることに驚いた。それは変だった。ママは普通、みんなが座るまで彼女たちに給仕しない。試しに、ジェイミは自分のスプーンを手に取った。「左手でもいけると思うよ。右手の方が得意だけど、自分が両利きかどうかずっと気になってたんだ。」

台所からママの声が甘く響いた。「それは私から受け継いだのかもしれないわね。私は両利きよ。一度に二つのいたずらなお尻を叩かなきゃいけないときに非常に便利なのよ。」

ジェイミは試しにスープを一口食べながらうなずいた。「ありがとう、ママ。うまくいけば、パパが私たちを可哀想に思ってくれるといいね。もしかしたら薪小屋に行かなくて済むかもしれない。」

ジョアンはスープに息を吹きかけた。「どうかな、ジェイミ。何か全部が... 変じゃない？」

ジェイミは瞬きした。「例えば？」

ジョアンは台所を神経質に見て、ジェイミの耳元でささやいた。「例えば、あのお尻叩きは普通もらうよりずっと厳しかったと思わない？ 部屋に連れて行かれて厳しいお説教を受けるに値する不服従でさえも。それに、なぜママはパパよりずっと早く帰ってきてるの？ そして、ママがまだ台所で作っているのに、なぜ私たちはスープを食べてるの？ 何か怪しいことが起きてるよ！」

ジェイミはうっかりスープをスプーン一杯こぼした。「何を言ってるの？」

ジョアンはジェイミをにらんだ。「つまり… 僕はまるで、誰かの深い潜在意識のお尻叩きへの執着によって作り出された、何か鮮明な夢に閉じ込められているみたいだってことだよ！」

その時、玄関のドアが勢いよく開き、パパが闊歩して入ってきた。彼のカウボーイブーツが一歩ごとに不気味にカチカチと音を立てた。「ただいま！ おやおやおや、これは何だ？ 私の大好きな二人の放蕩娘が何かトラブルに巻き込まれているようだな。」

ママが台所から現れた。エプロン以外は完全に裸で、ミネストローネスープの入った鍋を前に抱えていた。「あら、どうやら二人ともお尻を叩かなければばならなかったわ。お嬢さんたち、今日何を間違えたかパパに話してあげなさい。」

パパは手を挙げ、なめし革のベルトのバックルを外した。「説明は必要ない。あの赤い後ろ姿を見れば、私の小さな花火玉と大好きな小さなひかりの娘が今日はとてもいたずらだったことがわかる… つまり…」

パパはベルトをループから振り抜き、折りたたんで両手でパチンと鳴らした。「… あなたたち二人は薪小屋行きがずっと待ち遠しかったということだ！」

ジェイミは胸が締め付けられ、世界が彼女の周りを回っているのを感じ、頭痛が倍返しで戻ってきた。「え？ でも、私たちの話を聞かずにお尻叩きをしたことなんて一度もない

じゃない！ いつも有罪が証明されるまでは無実だって言うのに！」

「そして明らかに、それは間違いだった。さもなければ、お前はこんなに悪い、いたずらな、罪深い小さな女の子にはならなかっただろう、ジェイミ・シュミット。明らかに、お前は秘密で何か悪いことを企んでいる。だからこれからは、安全のために一日一回お尻を叩くことにする。」

ママはパパのそばに現れ、まだ裸のまま、オーブンミットをはめた手を豊満な腰に当てた。「まあ、本当に聖書の完全な四十回の鞭打ちから一回引いたものが必要だと思うの、パパ？ もう彼女たちのかわいそうなお尻が気の毒で仕方ないわ！」

パパは感情のない顔でうなずいた。「残念ながらな… もちろん、二人とも『仲直り』シャツを着ているから、聖書の完全な四十回の鞭打ちを… 二回ずつ与えなければならない。」

ジェイミは失神し、後ろに倒れてジョアンを一緒に引きずった。「僕は… 悪い… 女の子…」

彼女たちは床に激突したが、その時奇妙なことが起こった。彼女たちはまるで床がふわふわの毛布であるかのように沈み、深く永遠の暗闇に落ちていった。

***

ジェイミはベッドからはっと目を覚まし、頭が割れるように痛かった。「… 悪い… 女の子？」

ジェイミは見回して自分の寝室を認識した。お尻全体に耐え難い痛みをまだ感じながら、ジェイミはパジャマのズボンの中に手を入れ、お尻の半分を握ったが、それらは冷たく感じられた。彼女は全然お尻を叩かれていなかった！ …少なくとも最近は。

ジェイミは笑った。「全部… ただの夢だったの？ ああ、なんて安心だ！ 一瞬、死んだと思ったよ！」

それから、寝室のドアの外からママのこもった声が響いた。「ジェイミ？ 起きてる？ 気分は良くなった？」

ジェイミは額を触った。「えっと、少し良くなったと思う？」

「よかった。じゃあ、お尻を叩かなきゃならなくなる前に、台所に来なさい！」

ジェイミは緊張した。「やめて！ お尻を叩かないで！」

ジェイミの寝室のドアは、考え込むように止まったようだった。「ジェイミ、冗談よ。ミネストローネを作ったの。気分が悪いときには何よりいいわ… 夕食まで十分よ。ゆっくりしていいわよ… でも遅れないでね！」

ジェイミの声はひび割れた。「遅れたらお尻を叩かれるの？」

ママがドアを開けて中を覗いた。「ジェイミ、ハニー、気分が悪いときにあなたをお尻叩きにしたくはないけど、家のルールは依然として適用されるわ。それを試そうとしないで。わかった？」

無言で、ジェイミはうなずいた。ママは優しく微笑んだ。「いい子ね。」

終わり

お尻が熱くなる春休み

著：ドクター・クリーゲ

「まったく不適切だったわよ、ジョアン！」ジェイミはホテルのドアが勢いよく開くと叱りつけ、長い脚で数歩で部屋の中を横切った。彼女の手足は露出して日焼けしており、白と青のストライプの水着の上に履いたデニムのショートパンツから覗いていた。彼女が振り返って妹に向き合い、腰に手を当てて厳しい姿勢をとると、その姿は母親の完璧な肖像画のようだった。その直後、彼女がかぶっていた幅広のカウボーイハットがベッドの上に飛んでいった。

彼女の後ろで、十六歳のジョアンが腕を組んで姉について部屋に入ってきた。彼女もまた水着を着ており、濃い紫色で、レースの黒い薄手の綿のシャツとスカートで覆われていた。お揃いの日よけ帽子が髪を覆い、サングラスもまだかけていた。

「大げさに言わないでよ。勝ったんだろ？ それに、そのお金でどんな休暇が過ごせるか考えてみてよ」ジョアンは自分の帽子もベッドに投げ、折りたたんだサングラスをウエストバンドに挟みながら答えた。

「私の休暇なんだよ、ジョアン」ジェイミは言い返した。「あなたが春休みにここに一緒に来たいってせがんだから、ママとパパがどれだけ厳しいか知ってるし、息抜きが必要だろうと思って許可したのよ。でも節度はある範囲でよ。くそっ、ジョアン、あれは私たちの休暇資金全部だったんだよ。もし負けてたらホテルの代金さえ払えなかったんだから。」ジェ

イミの顔はフロリダの暑さ以上のもので赤くなっていた。実際、彼女の怒りが増すにつれて、それはピンクから深紅へと、麦わら色の髪とは対照的に変わっていった。

ジョアンは腕を組み、自分の顔にも怒りが浮かんだ。「ママが厳しいって？ 最近鏡を見たことあるの、ジェイミ？」彼女は嘲るように言った。

ジェイミは立ち止まり、自分がまだ母親によく叱られたあの腰に手を当てた姿勢をとっていることに気づいた。恥ずかしくなって腕を下ろし、それから自分を奮い立たせた。

「私が責任者よ、ジョアン。それが取り決めだった。春休みの週末に一緒に来るのはいいけど、私が責任者。あなたは私に相談せずに行動して、休暇資金全部を危険にさらした。もしママがここにいたらどうするかわかってるでしょ。」

ジョアンは鼻を鳴らした。「そうだね、もし私にあなたがお尻を叩かせると思ってるなら、忘れたほうがいいよ！」

長い間、二人の姉妹が十代前半を特徴づけた対抗心を再燃させそうに見えた。ジェイミは前に踏み出して膠着状態を破ったが、ジョアンは小柄にもかかわらず素早く、バスルームに素早く飛び込み、ドアをバタンと閉めて体重をかけて押さえながら鍵を弄った。

「ジョアン・アガサ・シュミット、今すぐ戻ってきなさい！」ジェイミは叫び、突然自分が母親にそっくりに聞こえることに気づいた。驚いて彼女は一歩下がり、頭の中は混乱していた。彼女は母親になろうとしているのか？ ママはいつも彼女たちを愛していたが、ああ、よく彼女たちをお尻叩きにし

たものだ。彼女たちとすべての兄弟たちを。ジュニパーでさえ最近はそれなりの頻度で痛いお尻を経験していたが、ジェイミとジョアンは残りの家族全員を合わせたよりも多くの時間を母親の膝の上で過ごしてきた。彼女はかつてのお尻叩きに熱心な十代の頃に戻ろうとしているのか？ それとも母親になろうとしているのか？ それは悪いことなのか？

部屋が彼女の周りで渦巻いているようで、ジェイミはよろめき、頭がぐらつくのでベッドの一つにすぐに座った。彼女は何をしているんだ？ 本当にジョアンをお尻叩きにしたいわけじゃない。彼女たちはもうお転婆な十代じゃない。彼女は大学生だ。そもそもジョアンをお尻叩きから解放するためにここに連れてきたんだ。

それなのに……

それなのにジェイミは責任者だった。彼女は長姉であり、先月十八歳になった大人だった。もっと重要なことは、ママが彼女を責任者にしたことだ。鬼になりたいわけじゃない。でもジョアンは失敗した。いつものように、彼女は少しの自由を大きく拡大解釈した。でもそれはジェイミが彼女をお尻叩きにする権利があるという意味なのか？

ベッドの端に座って、彼女は深く息を吸った。「よし、ジェイミ、論理的に考えよう」と彼女は声に出して言った。「ジョアンは失敗した。彼女はやってはいけないとよくわかっていたことをやった。休暇資金全部を愚かな競技に賭けた。確かに勝ったから悪い結果は出なかった。でもたくさんの悪い結果が出る可能性があった。そしてお尻叩きは単なる罰以

上のもので、将来愚かな過ちを犯さないための警告でもある。だから、そうだ、彼女はお尻叩きに値する。」

それでも彼女の胃はその考えにねじれた。

「じゃあ、なぜそれが間違っていると感じるんだ？」彼女はつぶやいた。「子供の頃、ジョアンにお尻叩きをしたいと思ったことは何度もあった。なのに今はなぜそんなに気が進まないんだ？」ジェイミはこめかみを揉み、顔がどれほど熱く赤くなっているかを感じた。彼女は冷たい手のひらを頬に当て、赤みが引いて考えるのに役立つのを感じた。

それは彼女が怒られるからだろうか？ いや、両親が彼女を責任者にしたのだから、彼らは間違いなくジョアンがお尻叩きに値することに同意するだろう（しかもしっかりとしたお尻叩きを）。くそ、もし家であんな真似をしていたら、ジョアンはおそらく薪小屋行きだっただろう。ではなぜ罰を与えるという考えが彼女の胃をねじるのだろう？

そしてついに彼女に思い当たった。すべてを理解させる一文：「これはあなたに感じる痛みよりも、私の方が痛いのよ。」

彼女が両親の膝の上やベッドの端にうつ伏せになってこの言葉を聞いた回数は、彼女の記憶に刻まれている。しかしもちろん、どんな子供でもそうであるように、彼女は決してそれを理解したことがなかった。今日まで。しかしそれは完全に理にかなっていた。彼女はジョアンをお尻叩きにしたくなかった。彼女は友達でありたい、姉でありたい、すべてから逃れる休暇に連れて行くかっこいい姉でありたい。しかしジョアンは自分の行動に対して罰せられる必要があり、彼

女が責任者だった。「大いなる力には大いなる責任が伴う」と彼女は言った。両親が聖書を引用するように漫画を引用して。

ジェイミは深く息を吸い込み、それから吐き出した。落ち着きを取り戻して立ち上がり、バスルームのドアに向かい、落ち着いてノックした。

***

バスルームの中で、ジョアンはドアに鍵をかけ、離れた。一瞬、ジェイミがあまりに怒っていたのでドアを壊して追いかけてくるのではないかと怖かった。しかし一度ノックした後、不気味な静寂が訪れた。混乱して少し怖くなり、ジョアンは便座の蓋を下ろし、トイレの上に座った。

「一体何が起こったんだ？」彼女はささやき、人差し指と親指で鼻筋を摘んだ。そこに馴染みのある圧力がかかっていて、ジョアンはそれが何を意味するのか好きではなかった。

彼女は泣きそうだった。

何が問題なんだ？ ジェイミが勝つとわかっていた。海辺のアーケードにある自動のブロンコマシン。ジェイミは本物のロデオで勝ったことがある。そして周りにたむろしていた連中は皆、北部からの金持ちの子供たちだった。彼らがジェイミに勝てるはずがなかった。そしてそれは罪ではなかった。本当は。彼らはジョアンの「お姉ちゃん」と勝負したがっていた。それがもう一人の黒髪の小柄なゴス少女だと思って。たとえジェイミを見ても、長身で長い手足の彼女を見

て、誰も手を引かなかった。彼らは明らかに負けるべくして負けたのだ。

しかしギャンブルは罪だった。そして彼女が賭けていたのは自分自身のお金でさえなかった。

ジョアンの胃の中で不安な吐き気が湧き上がっていた。彼女はその感覚も知っていた。それは罪悪感だった。

今、涙が流れ、その瞬間の怒りに取って代わり、彼女の頬を伝った。記憶が頭の中で何度も何度も再生され、彼女はすべてを傍らから見ることができた。傲慢、傲慢さ、貪欲。くそ、彼女は吐きそうだったか？ 確かに吐き気がしたが、それは治まるだろう。

いいや、と彼女は気づいた。もっと涙が流れるにつれて。それは治まらない。それは消えるだろうが、彼女が許されるまでだけだ。彼女は姉に謝り、両親に電話してもらい、そして…

しかしそうすれば彼女たちの休暇は終わってしまう。パパは彼女に最初の汽車で戻るよう要求し、ジェイミはおそらくそれが起こったことで叱られるだろう。くそ、彼らはジェイミも休暇から呼び戻すかもしれない。ジョアンを抑えられなかったことでお尻叩きをするために。

嫌だ！ ジョアンは立ち上がった。彼女はジェイミの休暇を台無しにしたくなかった。ジェイミは彼女を連れて行くのに十分親切だったのに、そもそも春休みに十六歳の妹のベビーシッターをするより他にやるべきことがあったはずだ。

どれだけの信頼を裏切ったかという考えだけで、彼女の腸にナイフを突き刺すようだった。心の奥底で、ジョアンはただ一つの解決策しかないことを知っていた。彼女が気分良くなるための唯一の方法。落ち着くために息を吸って、彼女はドアに向かい、ジェイミが再びノックしたちょうどその時にボルトをスライドさせた。

慎重にドアを開けると、二人の姉妹は敷居を挟んで向かい合った。

「あなたはお尻を叩かれる必要がある」とジェイミが言った。

「僕はお尻を叩かれる必要がある」とジョアンが同時に言った。

不気味な沈黙が二人の間に落ちた。

「私、本当はやりたくないんだ」とジェイミは告白した。

「必要だよ」とジョアンは答えた。「値するし、僕は… 僕はそれを望んでる。早く終わらせて許されたい。」

「あなたを許してるってわかってるよね？」とジェイミは尋ねた。「時々すごくうるさいけど、あなたは私の妹だし、いつも心は正しい場所にある。」

新しい涙がジョアンの頬を伝った。そして彼女はジェイミの目も潤んでいることに気づいた。

「ただあなたが許すだけじゃないんだ。僕が許されたと感じることなんだ。今、すごく気分が悪い。あなたも十分に失敗してきたから、僕が何を言ってるかわかるだろ、ジェイミ。そして何が僕を気分良くさせるかもわかってるはずだ。」

「お尻叩き？」とジェイミが尋ねた。

「お尻叩きだ！」とジョアンが確認した。

二人の姉妹はしばらく抱き合い、ジョアンは吐き気がすぐに和らぎ始めるのを感じた。

ついにジェイミが抱擁を解いた。「何をすべきかわかってる？」と彼女は尋ねた。

ジョアンは唇を噛み、緊張してうなずいた。それから、ジェイミが離れると、彼女は服を脱ぎ始め、すべての衣類を慎重に取り除き、忘れて床に落ちたサングラスを拾い上げ、姉の前に立った。イヴのように裸で。

その間ジェイミはスーツケースからヘアブラシを取り出し、ベッドの端に座った。

若い頃、彼女は何度これを夢見たことか。妹に本当に教訓を教えることを。そして今、彼女はここにいて、心からこれをしなくて済むように願っていた。

「ウォームアップの警告射撃よ。三十回の平手打ち、ジョアン。素っ裸のお尻にね。それからベルトを使うわ。わかった？」

「わかったよ、ジェイミ。」ジョアンは鼻をすすり、それから前に進み、ジェイミの膝の上に前かがみになり、体勢を整えた。二人の少女はこの体勢に十分な時間を費やしてきたので、快適にする方法を知っており、すぐに落ち着いた。ジョアンは前かがみになり、広げた指を床につけ、足は自由にぶら下げていた。

「いくわよ」とジェイミは言い、最初の一発をジョアンの露出した後ろに加えた。

シュミット家の娘たちは皆、定期的にお尻を叩かれ、彼女たちのお尻は常にわずかに敏感な状態にあった。それでもジョアンが叫ぶには一回以上のしっかりとした平手打ちが必要だった。幸いなことに、彼女に与えられたのはそれ以上のものだった。

「バシッ、バシッ、バシッ！」とヘアブラシが鳴った。

ジェイミは集中しながら歯の間に舌を出した。これは思っていたより難しかった。罰を実行する意志力だけでなく、単純な行為そのものもだ。彼女はジョアンの後ろを均等に叩く必要があり、すべての注意を一箇所に集中させるわけにはいかなかった。彼女はスイングを均等に保つ必要があり、もちろん数も失ってはいけなかった。一瞬、彼女はママがよく彼女たちにお尻叩きを数えさせたのはこのためだったのかと考え、そして恐怖で数を見失ったことに気づいた。頭を混乱させながら、ジェイミはごくりと飲み込み、「今のは何回だった？」と自信に満ちて指揮を執っているように聞こえるよう努めて尋ねた。

「十一回だよ、ジェイミ」とジョアンが答えた。彼女の声は床近くの体勢のせいで奇妙にこもっていた。

「よし」とジェイミは答え、正しいことを願いながら、今度は打撃を分散させながら心の中で数を数えるように注意してお尻叩きを再開した。最初は十分な強さで叩けているか心配だったが、十五回までにジョアンはきゅうきゅうと鳴き始め、十九回で堰が切れてジョアンは一発ごとに叫び始めた。彼女の体はジェイミの膝の上で跳ね、足は一発ごとに蹴り始めた。自分の言いたいことが伝わっていると確信して、ジェイミは二十五回までお尻叩きを続けた。

彼女の膝の上にうつ伏せになって、ジョアンはすすり泣き始めた。彼女はこらえようとしていたことに気づいた。自分のお尻叩きを物憂げに耐え、おそらく姉の前で弱さを見せまいと。しかし厳しい刺すような平手打ちが彼女の後ろに確かな灼熱感として蓄積されるにつれて、ジョアンはすべての見せかけのプライドを捨てざるを得なくなり、叫び始めた。今、彼女はジェイミの膝の上で泣き崩れ、燃える後ろの思考の中で混乱がゆっくりと広がりながら、ジェイミが六回早く止めたことに気づいた。

「気づいたんだけど、ギャンブルという罪自体に対する別の罰が必要だと思うの。でも三度もお尻叩きはしたくないから、ちょっとした考えがあるの。」ジェイミの声は高みから降りてくるようだった。

ジョアンは何が起こるか見ようと体をひねった。それから彼女はブラシが自分の素っ裸の後ろに叩きつけられるのを感じ、恐怖でジェイミがブラシを裏返したことに気づいた。

「毛の方じゃない！」彼女は叫んだが、それがまさにジェイミの考えだった。

次の一撃は百本の小さな火の針をジョアンの後ろに送り込み、彼女は問題の中心にあるブロンコマシンのように跳ね上がった。ジェイミはそれが奇妙に適切だと思った。「罰は罪にふさわしいってところかな」と彼女はささやき、別の一撃をジョアンの後ろに加えた。

ジョアンは叫び、叫び続けた！ 一打ごとに彼女は跳ね上がり叫んだ。最後の六回の打撃が終わる頃には、ジョアンはジェイミの膝の上にうつ伏せになり、赤ん坊のように泣き叫んでいた。ジェイミは彼女を少し休ませてから、立ち上がるように命じた。立って、ジェイミは妹が裸で赤くなった顔、涙で腫れた目をしているのを見て、抱きしめずにはいられなかった。

「もうすぐ終わるよ、ジョー」と彼女はささやいた。「隅に行って十分間立っていなさい。それから呼んだらベッドの上に前かがみになりなさい。」

泣きながら、ジョアンはうなずき、離れた。彼女の手は頭の上に上がった。慣れた手際で、彼女は隅に移動し、鼻をしっかりと壁につけ、燃える後ろを揉んで毛の刺痛を和らげたい衝動を抑えた。

耐え難い十分間の後、ジェイミが呼びかけた。「よし、ジョアン。手順は二人ともわかってるね。」

しぶしぶジョアンはベッドのそばに這い寄り、脚を真っ直ぐに保ちながら前かがみになってお尻を高く突き上げた。

「い、何回もらうの？」彼女はどもりながら、ジェイミが荷物から取り出した長い白いベルトを見た。

「あなたが値するだけよ、ジョアン」と彼女は答え、それから打撃を和らげた。「十回だけよ。ちゃんと悔い改めた様子を見せたから、二つの罪に対して最低限の回数にするわ。」

ジョアンは鼻をすすり、心から感謝した。彼女は脚を少し広げ、身構えた。

「準備は？」とジェイミが尋ねた。

「準備できた」とジョアンが答えた。

「パシッ！」とベルトが会話に参加し、ジョアンの「ああ！いった！ わあああ！ おおっ！ うわあ！」という叫び声に合わせてそのラインを数回繰り返した。

十回の打撃が加えられる頃には、ジョアンは再び自由に泣き叫び、彼女の後ろは赤と深紅の惨状になっていた。

ジェイミは開いた手のひらで妹のお尻に一発を加えた。「パシッ！」

「そしてこれは、お姉ちゃんの言うことを聞かなかった罰よ」と彼女は笑いながら付け加えた。

ジョアンはベッドに崩れ落ち、ジェイミの笑い声で罰がついに終わったことに気づいた。ジェイミは時間を無駄にせず、彼女の隣に身を寄せてジョアンを抱きしめた。

「こんなことをしなきゃならなくてごめん」と彼女は正直に言った。

「僕も同じくらいごめんだよ」とジョアンが答え、二人の少女は笑い始めた。

***

しばらくして、ジョアンは裸でベッドに横たわっていた。彼女は枕を下に挟んでお尻を空中に持ち上げていた。ジェイミは彼女の隣に座り、機械から取り出した氷嚢をジョアンの熱く赤くなった後ろに優しく押し当てていた。

「勝ったお金はどうするの？」ジョアンは枕から頭を持ち上げ、姉の方に向き直って尋ねた。

「明日、地元のバプテスト教会を探すの。何があったか牧師に話して、それを慈善活動に使ってもらうように頼むわ。」

ジョアンはうなずいた。

「まあ、ほとんどはね。」ジェイミは微笑んだ。「ちょっとだけルームサービスに使ってもいいと思うわ。アイスクリームはいかが？」

「僕の後ろにも何かもらえる？」とジョアンが尋ね、姉妹は再び笑った。

終わり